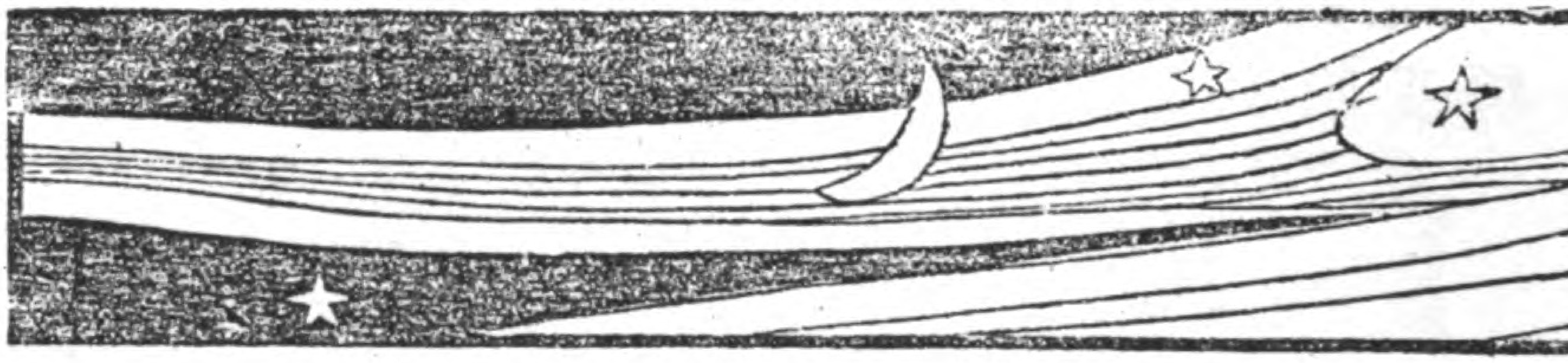
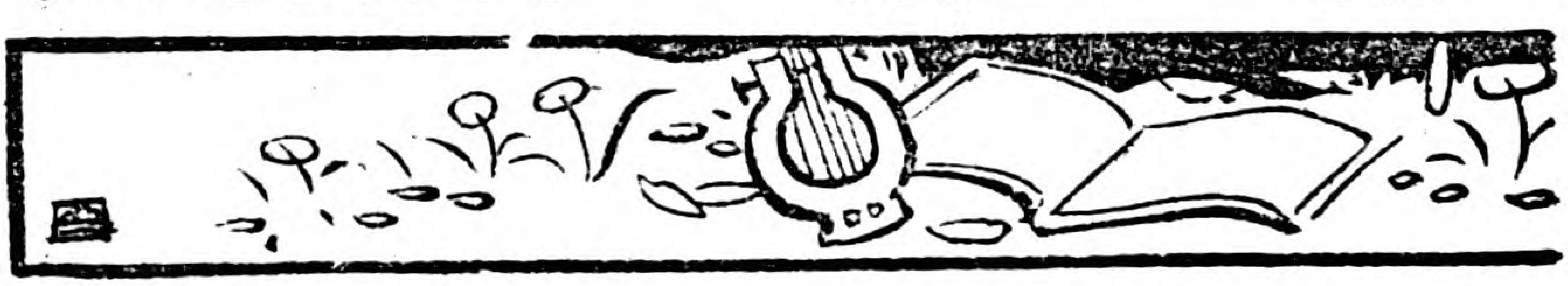


女子文壇
三月一日発行
六年第四號
明治四十三年二月廿六日印刷納本（毎月一回廿六日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可（印刷納本

女子文壇 三月號（六年四號）目次

【本欄】（一―四四）





女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第五回内國勸業博覧會賞牌及褒状受領



登録商標

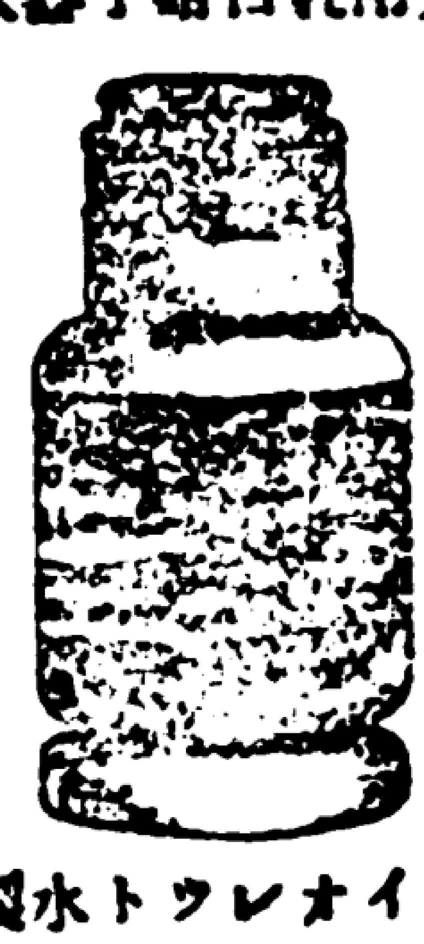


五二會品評會
功牌賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴアイオレツト煉製
錫栓附乳白硝子器入



壽美禮おしろい

ヴアイオレツト水製

ねり製　大壜二十錢　小壜十二錢
水製　大壜二十五錢　中壜十五錢　小壜十錢
玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子器入

◎壽美禮白粉

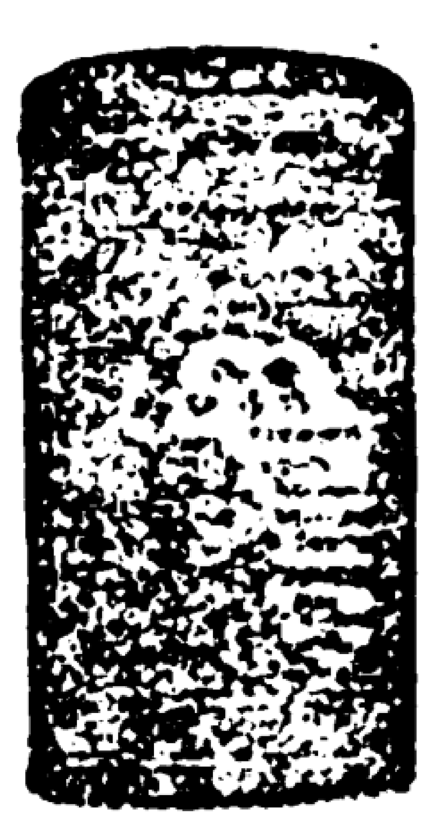
は欧米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績鉛等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の為にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保激するが故宴會、劇席、雑踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

紫、茜、紅彩鑵詰入　錢　別製鑵詰五拾錢　大袋二錢　小袋一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に貴發する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗に御用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろしく水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登録商標
西洋白色くなるあらひ粉
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらひ粉



製造本舗　東京両國元町（両國橋際）　壽美禮堂謹製
（電話浪花二七六五番）

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

（第ノ四）

若き自然



（大江原色版製版印刷）

婦人世界

三月號　一日發行　五卷三號　一冊十五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共一圓五錢　一年分郵税共三圓[illegible]

世には斯くの如き言行不一致の婦人あり……山脇房子

▼荷車の後押して三十年良人を助けし成功談……瀧澤樂子

勤王の志士を助けし男まさりの老女村岡の話……川村文芽

◎子供が寒い時に罹りやすき恐ろしき病……醫學博士加藤照麿

◎貞節なる主婦として一生を終りし私の妻……その良人　高橋義雄

私が痔疾に苦しみたる經驗　村井弦齋

世界に誇るべきは我國の人情美なり

◎母の狂氣の全快を祈りて寒中水行した婦人……吉川ゆう子

◎五十四年間主家に仕へし女中……七十四歳　老川せき子

易者を訪うて男女の身の上判斷を傍聽するの記……婦人記者

▼六人の妻を離別したる工學士の家庭……その姑　鈴木悦子

四人の愛兒が溺死した當時……[illegible]　徳田錦子

東京京橋南紺屋町十二　實業之日本社　（郵便貯金口座參六番）　賣捌全國書店

四月一日より

現代大家 半切書展覽會（當店新美術部に於て）

第十九回新柄陳列會

懸賞裾模樣圖案陳列

寄せ切れ見切り反物大賣出し

懸賞少年選書及繪畫陳列

第二回兒童博覽會（新奇なる餘興有之申候）

內外玩具參考品分類陳列

懸賞寫眞優等印畫陳列（當店寫眞部に於て）

日本橋駿河町

三越吳服店

泉岳寺







營業品目概要

○內外各種時計類
○同金銀附屬品類
○プリズム双眼鏡
○測量用諸器械類
○製圖器及繪具類
○氣象觀測用器械
○貴金屬美術品類
○ダイヤモンド及寶石指環類

東京銀座四丁目
服部時計店
電話新橋 七一三 一〇七一四 一一三〇〇

村井弦齋先生御證明最良髮油
みやけ油及みやけ香油

みやけ油



東京人形町通三宅堂本舗

定價表

特大	八拾五錢
大	四拾五錢
中	貳拾五錢
小	拾五錢

右送料各拾二錢

代理店 女子文壇社用達部

精良品にして舶來品に優る。僞物四方に顯はれたり東京發賣本舖名と商標に御注意。近時大阪みやけと稱し劣等の僞物を販賣する者あり欺るゝ勿れ

販賣所 化粧品商、小間物屋、薬屋、等到る處にあり

●新案特許 一〇三六二號 衛生的なる改良かもし發賣●

一丸髷 十五錢より七十五錢迄
一島田髷 三十錢より壹圓五拾錢迄
一銀杏髷 廿錢より六十錢迄
一送料各八錢



本品の特長

一 根元にコロップな装置せるにより普式のもの、如く硬からず頭ざわり軟かなり
二 皮膚を摩擦すること少なきゆゑ頭のはげる憂なし
三 頭痛ある婦人に用ひて爽快を覺えしむ
四 二百度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髪の傳染病を媒介するの憂なし

東京市神田區豊島町十七番地
●諸かもし製造販賣(振替口座東京一八一八八番)田中金三郎

特約 京橋大西白牡丹・本郷[illegible]・淺草[illegible]・淺草駒形紅葉・神田須田町三井呉・日本橋通二[illegible]屋・外到處の小間物化粧品店に有

▲定價表の明細書は御申越次第無代にて進呈す

春の巻四版

夢二畫集

紅絹裏の君が袂に見出せしわが處女作とダリヤの花と

——夢路——

夢二畫集がいかに愛讀せられつゝあるかを見よ。

定價五十錢　送料八錢

東京麹町二丁目九

洛陽堂



(五ノ八)

久邇宮邦彦王妃俔子殿下



殿下は紀元節の佳辰に當り勳一等に叙せられ寶冠章を授けられたり

遞信大臣後藤新平男の家庭



（令息市藏君）（後藤男爵）（令嬢愛子）

（男爵姉君）（男爵母堂）（男爵夫人和子）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新進作家紹介

本誌曩に『處女作號』を出して、新作家を紹介し、些か文壇に貢献する處ありしが、今また茲に陽春四月を期して『陽春號』を發行し、普く文壇の諸方面より實力ある新作家を撰抜し、各自その自信ある新作を發表して、文壇に問はんとす。本年は或は都市に或は地方に、多年蘊蓄修養怠らざりし、實力ある新作家が一擧して中央文壇に迫らんとするの歳なり。本誌は特に是等作家の爲めに悉く全紙を開放して吝むことなからんとす。願くば、本誌が紹介する新作家をして現文壇に飛躍せしめよ。

東京神田區旅籠町一　文光堂　發行

秀才文壇（四月八日發行）春期大増刊

陽春號

例號倍頁　正價金貳拾錢　郵税一錢五厘

庚戌文壇偉觀

小説

佐藤綠葉
平栗猪山
加藤冬海
尾知山靜波
板橋卓一

小品　詩歌　繪畫

佐藤銀螢、金室紫村、松島煙汀、重山紫翠、高山玄嶺、大眼愁人、惣津白汀、矢野峯人、本間五丈原、關本梁村、池田永治、萬代みどり、玉川卯雄、

賣捌　東京堂○東海堂〻至誠堂
北隆館〻上田屋〻良明堂

[illegible]

梅毒根治新藥

本劑（藥名ドクトール）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新治療の藥物なれば現世紀に於ける唯一の **ばい毒** 根治特効

新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばい。[illegible]ろいれき。骨がらみ。こんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製[illegible] **誓って根治** するを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡し[illegible]全治の効なくして困難せる患者は速に[illegible]其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せしめ[illegible]藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九拾錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スヒーゲル氏の發見に係る

男女の **生殖機不能** 即ち **陰萎病。腎虚。神經衰弱。** 遺精。夢精。早漏。過度。元氣衰弱。老衰無力。生殖虚弱。生殖機能衰弱。青年早老。精液精蟲缺乏。不妊娠。冷症。發育不全等に用ひ天下無比 **可驚奇効** ある最新發見藥也 **精力を増進** し生殖器を強健ならしめんと望む者は早く試みよ峻烈偉大 **如電光** 世にありふれたる無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に於て特効眞に承合せば明白也

奏効確證 美容新劑 やせる藥

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢 特別製分九圓拾錢 着金即刻送藥す

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等從て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

▲世界唯一 麻病消渇の根治新藥

麻滅（りんめつ）

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治療藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑と **麻病消渇** の因たるゴノコッケンを忽ち **滅殺** する處方に基き製したる是を内服して輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず根底より **根治** 確證す但し彼の普通洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者は之を諒せよ藥價壹劑分壹圓拾錢特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

腋臭 わきが 全治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても **病菌を滅殺** 全治し決して他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ 價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

特別製分 金五圓三拾錢 大瓶貳圓卅錢 中瓶壹圓廿錢

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共頭髮の薄き人、はつぼうはげの痕、やけどの痕、其他眉毛及はえぎわの薄き人、陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他種々の毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮若々しく發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はえ藥とは其効力勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉石混同視すること勿れ

以上六藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新舘藥房**（電話下谷五四六番）

（はノ二）

貴族院議長徳川家達公の家庭



（令息家正君）　（同夫人正子）　（家達公）　（公爵夫人泰子）

徳川公令息家正君が令夫人正子と新婚紀念の爲に残されたる最近の撮影にして家正君は過般外交官補として海外赴任の途に就かれたり

衆議院議長長谷場純孝氏令嬢純子



長谷場衆議院議長の愛嬢純子の君は長谷場敦氏の夫人にして、此寫眞は良人敦氏と共に上海に滞在中撮影せられしものなり

●らい病根治新劑

▲藥名……レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介によ
る傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎と
し幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發
明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底
他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に
調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へら
れたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌
を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症
は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑分五圓拾錢特別製分拾圓拾錢

●美(うつく)き聲(こゑ)の出(で)る新藥(しんやく)

發聲藥は古來甚だ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし
獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に
美聲を發する方法を自得せ發聲藥として千古未曾有世界唯一
り本劑は實に無上の靈劑也何程音聲惡しき方
又聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美
は聲を發することを確證す

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を增進する靈劑

滋養回春記臆增進丸

本劑は獨逸大學教授ダリーヴァアト氏の新記臆力に關する醫學的元理に基き多
年研究實驗の上其奇効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑
なり故に本劑は腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記
を服すれば記臆力大に增進し入世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る
驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力乏き者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に增進すること實に驚くべき所なり是より實驗者實試一層速に其卓絕靈妙なる奇効を知れ

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢(送料)各拾二錢

月やくおろし

流下すべき物より本劑壹劑分を用ゆれば二三ヶ月
てもキレイに流下す又特別製分を連用せば半年
及血塊にても必ず完全に流經す且
びつ月經不通月經不順より起
る子宮病血の道を全治**惡血毒**
し多年滯りの古血及
しな一掃することを確證す但
血し本劑は其效極めて**峻烈**
顯著なるも毫も衞生無害なり婦人
諸君安心して試驗あれ價は一
劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓
七拾錢特別製分貳圓**大盛**時を奏み近
參拾錢(注意)本劑の類似品を擬し種々怪
しき無**類似僞藥**は頗る用藥者
効なるは深く注意あ
りて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速に安全**快通**に
滯りたる月經に
以上の月經閉止

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日 目に必ず美麗に**保**除去すること無痛に

險附新發明藥にして惡部の大小輕重を問はず容易に根治し假令黶面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛に除去し得らるゝことを確證す故に之を用ゆべき天然の**美質**を完うせよ來館者へ全治者の**感謝**は山の如き
惡ひある人は速に用ひてほくろ、そばかす、なまづ、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し
狀及び除去したるあざほくろ、そばかすは各自除去せんと望む所の病名及患
を二種に區別し一等はあざ入墨はほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、本劑は其製劑
いぼのものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及
部は價は樣々なれば詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべ
し價は各種一劑分壹圓拾錢參劑分五圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓
拾錢郵稅參錢(患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす)
金郵劑小包郵送す

以上五藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

(にノ二)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新に生れたる模範婦人雜誌

婦女界

三月一日發刊 第一號 定價一冊拾五錢 郵税一錢五厘 一年共税壹圓七十五錢

▲閑院宮妃殿下の御平生と本誌に賜ひし大光榮

▲將來女子の爲すべき仕事と學ぶべき事柄……女子大學校長 成瀨仁藏

▲吾輩は斯る妻を擇ぶ
政治家 伯爵 大隈重信
實業家 日比谷平左衛門
學者 博士 高田早苗
小説家 中村春雨
美術家 久保田米齋
……見逃すべからず

貴婦人交際振 岩倉公爵夫人と鍋島侯爵夫人
日本室の裝飾 久保田米齋

▲良人が勤王の爲に斬罪に處せられし前後の痛恨 前高輪御殿御用係 小川直子

▲子供に對する母親の愛情は父親に劣れり……文學士 三輪田元道

▲身に沁む祖母の訓戒と私の子女教育法……遞信大臣後藤男爵夫人 後藤和子

大附錄 閑院宮妃殿下御染筆『藤花』石版八度刷
口繪 雛祭(三色版)岡田三郎助 桃の節句(石版八度刷)梶田半古……其他寫眞版七枚

▲不思議の怪美人に襲はれた實驗……學習院長陸軍大將 乃木希典

▲無識の爲に知らず〳〵子供を殺す親……女醫學校長 鷲山彌生

▲女子大學を卒業して小賣商となりし實驗 伊藤玉子

▲音樂は早學べ田舍の天才と器用彈はあてにならぬ 音樂學校教授 神戸絢子

▲三人の强盜に襲はれ危難を免れた私の實驗……やまと女塾長 伊庭國子

▲春のお化粧 遠藤つぼ子 お料理 宇山篠子

▲西洋料理法……櫻井女塾長 櫻井ちか子

▲善行旌表會の創立 孝女節婦等の事蹟を募り賞品を贈らんとす詳細は誌上に發表せり

寄稿歡迎 料理、衞生、文藝、問答、和歌(佐々木信綱選)短文(沼波瓊音選)俳句(内藤鳴雪選)繪畫(梶田半古選)

東京市神田表神保町 振替東京一三五番 同文館 電話本局特四三七 電話本局一五三九

珍重されたる日本服



米國婦人が日本室に座し日本の衣服を假粧したる寫眞にして三越呉服店の撮影にかゝり廣瀬海軍大佐より特に借用せしものなり

名家の令嬢



箏曲家今井慶松氏 令妹 敏子
（フイルノ女學校卒業）



博文館主大橋新太郎氏令嬢 文子
（三輪田高等女學校在學中）



海軍大佐廣瀬勝比古氏令嬢 馨子
（學習院女子部在學中）

●女子齒科醫學講習生募集

本所は女子にして齒科醫たらんとする者に須要なる學術を教授し文部省醫術開業試驗に應ずるの資格を養成するを以て目的とす

▲隨時入學を許す▼ 即今中速修免除

規則書入用の者は郵券二錢送らるべし

東京女子齒科醫學講習所

東京市駿河臺下猿樂町一丁目二番地（假校舍）

子のできる器及子のできない器 懷妊避妊自由自在器

（▲兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自療器）

醫學得業士 齋藤乙吉先生發明

實用新案登錄特許

アトシア atocia,

（膣內挿入小器具）

本器は產科婦人科日東病院長醫學得業士齋藤乙吉先生の發明に係る最も簡易安全にして毫も無害なる懷妊避妊自由自在器兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自宅治療器也即ち本器により膣內へ受孕を補助する藥劑を入れる時は人工的に**懷妊**することを得らる故に子の無き人は用ひて目的を遂すべく又本器により膣內へ姙孕素を消失する藥劑を入るゝ時は決て姙娠せず子澤山の婦人は夫に秘密にて用ゐて**避妊**の目的を達し得る而も本器は**梅毒淋病**其他の病毒を豫防し**子宮諸病**の患者は本器を用ひて**自身治療**することを得る不快の念なく天然の感を隔つることなき理想的嶄新發明品にて一度買へば拾數年間保存し得る世界唯一の婦人衛生器なり。

但し詳細なる說明書及使用法並に應用諸藥劑處方書は添付す。

（正價）ニツケル製壹圓拾五錢。純銀特別製參圓拾五錢。

人衛生上必ず携ふべき要用の具器なり。郵券代用は一割增。小包郵便密封にて即刻送付す。

世界一手專賣元 日新館藥房

東京市神田區五軒町十九番地（電話番號下谷五百四十六番）

るいれき患者に注意す

▲瘰癧は古來難症中の難症で本病の治術としては先づ局所切開するのが通例です併し根治の療法とはいへない假令一時は治しても十中の八九は必らず再發します加之頸部には最も醜態なる瘢根を殘し之が爲め往々婦女子の婚嫁を妨ぐることあるは實に氣の毒千萬の次第であります此病毒は單に容貌を損ずるばかりでなく漸次進んで體内樞要の臓器を侵し終に生命まで奪はるるに至ることも亦往々見聞す事實で此病の恐るべきは申迄もないが今日迄確に治す薬がなかつたのであり升

▲發見の新薬 金線草丁幾は此病に對し不思議の効能あり即ち小なるグリグリは内部より消散し大なるものは自開排膿して根切全治せしむるのみならず連續服用中全然體質改良健全ならしむる偉大なる効力あり

▲本薬は石津薬學博士及内務省衛生試験所の試験を經たるものにして其効能の確實なるは實驗せる醫師並に服用患者の證明に依り明かなる次第であります此の實驗を掲げたる八十頁の説明書「金線草私」は何人にも無代にて送呈す　東京日本橋本銀町四丁目　三田幸藏

▲本薬の價は四百五十瓦入參圓、二百[illegible]五瓦入壹圓五十錢（送費拾貳錢）

るいれき特効薬

脱毛液（けぬきぐすり）

本劑は極て有効なる脱毛成分を集成せるものにして主成分の化學的作用により皮膚に害なく根本より脱毛す毛深き人毛多くて困る人は速に本劑を用ひて其苦を忘れられよ着金即刻密封郵送す

●ヘールピン
●壹瓶 壹圓
●特製 參圓
●送費十五錢
●清韓臺卅五錢

右貳種共代金引替送りは謝絶す

東京市牛込區北山伏町一番地

百合園製薬所

代々家傳の妙薬

經通丸

月やく薬

調劑元

東京市丸の内

本劑は代々家傳の妙薬にて如何なる難産月經滯りも胃腸子宮等を痛めず安々と通じ輕症なるは其夜にあること請合也他薬を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ定價廿五錢五十錢一圓特製二圓但小包送を望まるゝ方は八錢を要す

有樂町二ノ二

江戸屋

誌友



（横濱）小田切錦子



（和歌山縣）森田鶴枝子



（熊本縣）松崎澄子

京都淑女高等女學校音樂部生徒



發行忽ち本社は賣切の盛況

女子文壇 二月十五日 第一增刊

若き婦人

紙數二百卅頁
美麗口繪數葉
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

東京京橋大鋸町 女子文壇社發行 （振替口座東京[illegible]）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新美文

全一册二百卌頁
口繪數葉入美裝
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百樣の觀察は讀者をして逍遒なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し新式の文章をげんとする者には無雙の寶典たるべし

附錄

- ●小寒日記……薄田泣菫
- ●裏の家……吉江孤雁
- ●埋傑……小川未明
- ●一轉欄……高須梅溪
- ◉女床屋……兒玉花外
- ◉拾て犬……岡田八千代
- ◉火葉……澤村胡夷

家庭日記

全一册二百頁
口繪數葉入美裝
定價二拾錢
郵税一錢五厘

本書内容

- ▲お七夜の赤飯と棟上の餅拾ひ
- ▲草生水日記
- ▲初めて丸髷に結ふ
- ▲大呉服店のバーゲンデー
- ▲憚る處なき女學生の境遇
- ▲開放したる心の扉
- ▲晴れの日が近くなる
- ▲同じ女と生れながら陰と日向の違つた身上
- ▲未來の博士達の爲に
- ▲舞臺に出づる迄と出たる後

其他數項

最近の日記 ——(附錄)——

三宅花圃
大塚楠緒子
與謝野晶子
岡田八千代子
長谷川時雨
國木田治子
尾島菊子
荒川澄子

短篇小説

全一册二百卌頁
口繪數葉入美裝
定價廿錢
郵税壹錢五厘

- ▲奉公人……島崎藤村作
- ▲水死……森田草平作

懸賞傑作

- ●破疊……秋葉清子
- ●女客……加藤貞子
- ●町の出水……赤崎愛子
- ●桃代……佐藤増子
- ●朝顔……吉田駒子

其他美文、書簡文、新躰詩、日記文、和歌、俳句、論文、小說總評數篇滿載

女子名文 新作家



全一册二百卌頁
口繪數葉入美裝
定價二拾錢
郵税一錢五厘

延等作物と對照し其人物を一目瞭然たらしむ。

若き女子が小說、美文、詩歌俳句の文藝に興味ある懸賞應募 新式編輯法にて統一せるもの。
別に日課表あり(投稿家の住所年齡)

附錄

- ○闇の夜……服部貞子
- ○敗者……加藤菊子
- ○火事……永代美千代
- ○氣まぐれ者……太田雛子
- ○新粧……尾島菊子
- ○六月……山田くにえ
- ○姉……故田中久子

東京市京橋大鋸町十二番地 女子文壇社出版 (振替口座東京第七貳九番) 實價全國書店

作文之最良材

女子文壇社編輯局選

女子懸賞文集 第二

●中判五百頁　特價金貳拾錢　郵税六錢

懸賞文集 文壇の光

●大判二百四十頁　特價金拾錢　郵税一錢五厘

（各殘本は僅少なり賣切れると絶版す）

世に作文書多しと雖も、妙齡花の如き少女の手に成りし生きたる作文作歌の良書は此等を推して其優なるものとす、女子平生の心掛として優しき文章を學ばんと欲する者は來りて本書に親しめ、新時代の新文藝に接觸せんと欲するものも亦本書を繙け、此の如く廉價に此の如く容易に、作文作歌の道に入るの法は殆んど他になし、敢て之を提供す

美文作法

東宮侍講本居豐穎先生題詠、文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題歌　國學院學士 小森松風君編

●大判二百卅頁　特價金貳拾錢　郵税四錢

美文の作り方を最も明瞭に解説し、加ふるに大家の名文を模範として掲げたれば、文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

殘本僅少 賣切れると絶版す

報知新聞記者 中村木公君著

實地精査 女子遊學便覽

女學校長寫眞肖像入

特價拾五錢　郵税四錢

殘本僅少 賣切れると絶版す

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め、自ら學校の選擇に迷ふ諸孃も之を讀め、一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

東京市京橋區大鋸町十二番地　女子文壇社出版　（振替貯金口座東京[illegible]番）

賣捌 全國書店

女子文壇 五月十五日 第二增刊

▲原稿募集の大要

都會の趣味、都會の情調、都會の印象等凡て婦人を中心とし、都會を背景としたる文章、及び都會の生活、都會の女學生、都會の風俗等凡て記實を旨とし、都會を觀察したる文章を募る。原稿は二十四字詰二百行内外とし總て假名を附ける事、

報酬は 一等正金二拾圓、二等正金拾圓、三等正金五圓を呈す



都會婦人

投稿締切 三月卅一日 最終便

別に小説(二十四字詰百五十行迄)散文(二十四字詰百行以内)詩、和歌、俳句の五種の創作を募る、報酬は五種を通じて一等十圓、二等五圓、三等三圓、四等二圓、五等一圓の價格に相當する品物にて寄贈す、小説は總振假名つき、和歌と俳句は一人十首限りとす。(但し製作は都會の意味を含ませる必要なし、題材凡て自由なり)紙上の匿名は自由なれど、原稿の一端には住所氏名を明記すべし、原稿には「都會の婦人原稿」と朱書すべし。▲賞品贈呈は發表翌月末の事。

募集發行所 女子文壇社 東京市京橋區大鋸町



女子文壇

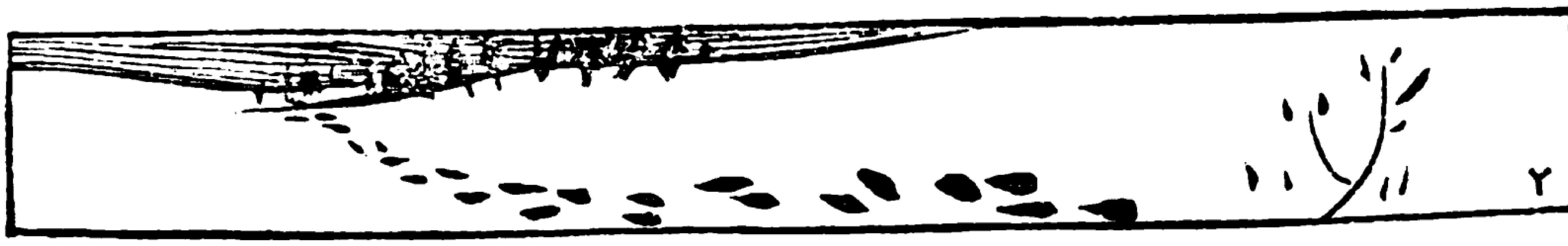
第六年第四號

明治四十三年三月一日發行

あまをとめ

浦づたひゆく蜑少女
舟こぎよせて我がたてる
ほとりに來れ我と汝
手に手とりあひ睦びてむ
心ゆるしてわが胸に
汝が頭をばおしあてよ
浪風あらきわたつみに
任せたるてふ身ならずや
そのわだつみにわが心
さも似たりけり風はあれど
潮の滿干はありといへど
こゝらの玉もしづみつゝ

『於母影』より



小さき疵

窪田空穂

一

休憩時間のベルが鳴ると、私はまた厭な氣のする十五分間を過さなければならないのかと思つて、ホッとした。同級の者は男生も女生も、俄にソワソワとして來て、先生に禮をする間も惜しいやうに運動場の方へ驅けて行くのであつたが、私はたゞ一人、跡にグズ〳〵と殘つて居る、皆が思ひ〳〵の遊戯に夢中になつた頃を見計ひ、そつと運動場の端の方を通つて、校舍から一番遠い、學校の表門の側の所へ行つた。そして歩きながらも、この何を思つてゐるのか、何を爲るのか氣心も知れない、まるで人種の違ふやうな生徒達に、氣味の惡い目を着けられまいと、心の中ではおづ〳〵として居た。

私の行つた所は、柵に沿つて松の老木が四五本ばかり立つて居、下に寒い蔭を落して居る所であつた。其所へは滅多には誰も來ず、運動場一面に敷き詰めてある砂利も、其所の所だけ何時まで經つても踏み平されずに居た。雨水は幾日も乾かなくて、松の落葉がジメ〳〵と腐つて居た。

私は其所へ行つて松の幹に背をもたせて、寒いのを我慢しながらもぢつと立つて居た。丁度授業時間を教場に居るやう、休憩時間は此所で過すことに定められたやうにして、そして授業時間よりも長い〳〵休憩時間を過した。

私は其所から遠く、不思議な物でも望むやうに、大きな校舍と廣い運動場と、何れ位とも知れない



大勢の生徒の、新しい語調と、珍しい遊び方をするのを眺めて居た。

　校舍は西洋風の二階建て、白壁に塗つてあつた。二棟あつて、鍵の手になつて續いて居る。教場の數は何れ位あるとか、百以上だらうと思つて居た。表の方の校舍には、屋根の上に望樓が聳えて居て、青いペンキで塗つてあつて、一番上の窓は、種々の色ガラスが嵌めてあり、それが何時もキラ〳〵と眩しく光線を反射して居た。その上には鳥の形をした風見車があつて、風は何方から吹いても南の方へばかり向いて居た。

　校舍の前は一續きの運動場。裏の方は校舍も庭も此方よりも廣くて、それは尋常科に宛てられて居た。

　三月ばかり前、私が父に連れられて初めて此の學校へ來た時、眼を瞠つて、キヨロ〳〵と、見ても見切れない物を見るやうにした。父は私の心を察したやうに、嬉しさうにニコ〳〵として、昔は此所は藩公の菩提所であつて、何うして、誰だつて入つてなんか來られなかつたぞと言つて聞せ、そして、初めて此の學校の出來た時には、誰もまだ見た事のない西洋造りといふものだといふので、遠い所から態々辨當を持つて見物に來たものだつたと話した。私は默つて居た。感心はしたけれども少しも嬉しくはなかつた。丁度、氣遣ひな樣子の知れない家へ客にでも來たやう、落ち着いて自分の居られる所だといふ氣は起らなかつた。

　その時の心持は、今もそつくりと殘つて居る。朝、學校の門を入つて來て、大きな餘所〳〵しい校舍と、「知らない顏の生徒の大勢が、元氣よく遊んで居るのを見ると、もう其時の心持が復つて來る。そして一時間一時間と經つて、授業に倦むに隨つて遊びが賑かになつて行つて、其頂上を見せる晝



飲の後の長い休憩時間、――ボカ〳〵と當つてゐる春の日に照らされて、大勢の生徒が汗を浸ませ、埃に塗れて、夢中になつて騒いで居る姿、校舎の白壁がキラ〳〵と輝いて、望樓の色ガラスの赤が、焔のやうに紅く光つて、それが眩しく見えたり、ツと曇つたりする時、さういふ時には私は、丁度水の中へ落された一雫の油のやうに、此所に斯うして立つては居るが、本當は此所のものではないといふ氣がして、心細い、寂しい氣が胸に一杯になつて來た。

と私は何時か、自分の村の學校を眼の前に描いて來た。あの廣い一續きの田の中に、疎い柵に圍まれて、破れた障子を其儘に見せてゐる低い板屋の學校、先生も生徒も、皆な何所のものだといふ事まで知り合つて居て、顔を見合せると譯もなくニコ〳〵し合つた。あの先生、あの友達――私の胸の中にはそれからそれと忽ち懷かしい顔や面白かつた事柄が一杯になつて來た。氣は伸々として、肩身も廣くなつたやうに覺える……。

なぜ村の學校に高等科が無くなつてしまつたらう？――私は幾度となく思つて、その譯が解らぬので、口惜しいながら諦めてしまつて居た事を、又持出して考へて見た。續いて、高等科の代りに温習科といふものが出來て、同じ學校に殘つてそれを修めてゐる以前の同級生と、此所に來て斯うして居る自分と、何方が幸せであるかを較べて見ようとして居た。

無理に來なくても好い所へ、たゞ一人來て、こんな厭な思をして居るのだ。飛んだ事をした。私は自分の爲た事を明らかに悔いた。と學校が、如何にも厭なものに思へて來た。

私の隠れ場所――初めは何どいふ事もなく其所へ行つて居た松の蔭が、何時か本當の意味の隠れ場所となつた。學校と私との離れた心持は、その離れた場所へ行つて漸く落ち着いて居られるもの丶や



うな氣がした。

晝の休憩時間、辻田といふ級でも一番の惡戲者で、教場では先生に睨まれて小さくなり通して居るが、運動場へ出ると恐しく幅の利く生徒が、遊びにも飽いたやうな風をして、のそ〳〵と其松の蔭へ來た。

丸顔の色の黒い、眼のくり〳〵した、口邊に人を馬鹿にしたやうな笑みを浮べてゐる辻田は近寄つて來て、ジロ〳〵と顔を眺められると、私は腹の中でギョッとした。全く彼の眼には、私といふものが、初めて彼の前へ曳き出されて揶揄ひ相手の犬の子でゞもあるやうな、冷かな、好奇の色の動いて居るのが認められた。

「君、家、何所だ？」

「××。」と、私は低い聲で答へた。

「××。」辻田は初めて聞く名て、さう言はれてもやはり了解めないやうに、又じろ〳〵と私の顔を見た。

私は彼の顔を窺ふやうに見て居た。辻田に同じ眼の色をして眺め返されると、急におど〳〵して來て、何といふ譯もなく薄ら笑をした。

間を置いて辻田は、

「君ア在郷の者のやうぢや無いや。在郷の者にや珍しく色が白い。」

私は眼を伏せた。顔の熱つて來るのを覺えた。××と何時も誇を持つて言ふ自分の村の名が、餘所餘所しく聞き流されたのがもう心細かつたのに、「色が白いや」と言はれたのが、男の子として明らか



に嘲りを浴せられたやうに感じられた。私は何も言ひ得なかつた。

辻田はにや〳〵として、何かまだ言ひたさうにして居たが、呼ぶ者があつたので其方へ行つてしまつた。

私はホッとした。

が、松の蔭には、たゞ一つ、私に取つて嬉しいものがあつた。其れは私が内々に樂しんで居るもので誰にも知られなかつた。否私自身すらも、それを嬉しいものに思つたのは、餘程後の事であつた。其所に立つて見ると、其所から運動場を越した彼方、校舍の窓の下を唯一の遊び場所にして居る女生徒の一團が、眞直に眼に映る。目まぐろしく馳け廻る男生と、上草履に從つて立つ土埃が日光にちらつくのを透して、私はそッと、竊むやうに女生徒の方を眺めて居るのであつた。

そして私の眼の向く所には、何時も第一に、同級の能々村といふ女生徒の一人が居た。

二

私が此學校へ入つてから一月ばかり經つた頃であつた。或る朝、此れまで見た事の無い女生徒が一人、外の女生徒と一しよに敎場へ入つて來た。

私達の級には、十人餘りの女生徒が居た。私は彼等に對しては、男生に對して怖れを感じてゐると同樣に、一種の深い憎みを感じて居た。そして此れには理由があつた。

一度は、私が先生から質問を受けて、起つて答をした時である。一かたまりになつて居た女生徒は、急にクス〳〵と一しよになつて笑出した。私を笑ふのだなと氣が附いて、堪らなく極りが惡かつ

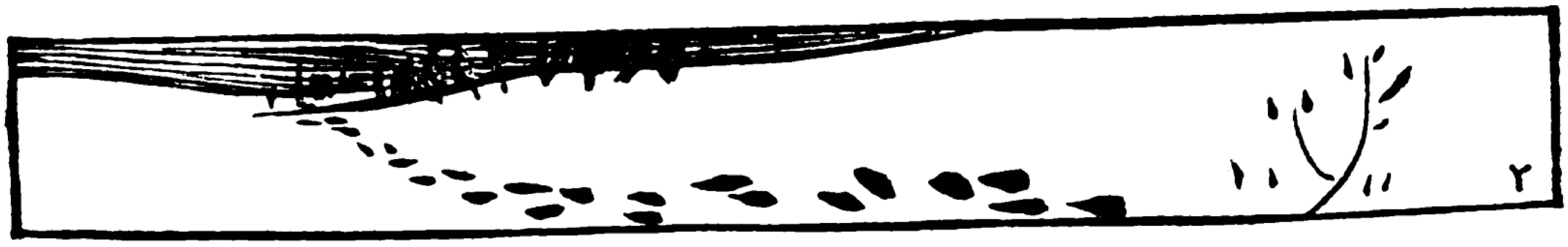
たが、何を笑はれるのだかは解らなかつた。私の答は間違つては居ないと信じて居たからだ。後で先生は女生徒に對つて、人の言葉癖など、笑ふものではないと注意するのを聞いて、私は初めて彼等の笑つた意味を解した。私は今一度心の中で先刻の答を繰返して見たが、をかしい所は解らなかつた。と私は、極りの惡いのが消えて、怒を感じて來た。

今一度は、私が日曜に家へ歸つて、日曜の夕方、伯父の家へ歸らうとして町の入口まで來た時であつた。私の背中には、母が態々搗かせて呉れた餅が、重箱へ二つ詰まり、風呂敷に包んで負はれて居た。粟餅屋の門を通らうとする時である、暖簾を潜つて、つと往來へ出た二人の女の子があつた。見ると私の級の女生徒。ぱつたりと顔を合せると、彼等は慌てゝ眼と眼と見合せると、默つてパタ〳〵と驅出した。そして四五間も先へ行くと、言ひ合せたやうに一しよに振返つて、私の顔を見てゲラ〳〵と笑出した。——包を負つてゐる私の姿を笑ふのだ、と私は極りの惡い忌々しい氣がしずには居られなかつた。

好く飽きもしなくて、ベチヤ〳〵とまるで喧嘩でもするやうに饒舌つて居て、默つたかと思ふと、面白さうに人の事ばかり笑ふ、女生徒つて本當に厭なさのだ、私はさう思ひ通して居た。

私は野々村——新入の女生徒に對しても、同じやうな心持を抱いて、別に注意もしなくて居たが、何うい ふ譯であるか、この女生一人だけは、何だか別物のやうな氣がして、そして彼を思ふと、何時何所でも、はつきりと其顔が思ひ浮べられるやうになつて來た。

學校が濟んで伯父の家へ歸ると、私は伯父の所有てある果樹だの野菜だのを作つてある、可なり廣い農場へ散歩に出るのが樂しみであつた。誰にも番をされず、壓へられて居るやうな氣もしず、たゞ



一人、青々とした作物を見、小鳥の聲を聞いて小路をぶらついて居ると、私は心からのび〳〵として、初めて居るべき所に居るやうな氣がした。さういふ時私は、思ひ懸けず——全く何の聯絡もなくふつと、能々村の事を思出すのであつた。

彼を思ふと、第一に浮ぶのはその眼である。丸い、大きな、黒眼がちな、そして其瞳をぢつと据えて、無心ながら何物かを見詰めて居るやうで、輕くは動かしもしない。何所にか微かに冷い所がある。其眼が浮ぶと同時に、額の圓い、何方かと言へば蒼白い色をした、痩せた顏と、前髪を切下げにして、何時も少しボワ〳〵と亂して居る所が浮んで來る。と、彼が何時の休憩の時間にも守つてゐる態度——女生徒の群からたゞ一人引き下つて、兩方の手首を腋の下から懐へ入れて、皆の賑かに饒舌つたり狂つたりして居る所を、默つてつまらなさうに眺めて立つて居る其風である。

休憩の時間、先生の眼から離れた所だと、女生徒は殘らず生れ代つたやうに燥ぐのであつたが、能々村だけは、敎場に居る時と同じやうに靜かにして、他の女生徒との間に距離を置いて、ついぞそれを變へた事がない。

「寂しいんだ、新入生だから、屹度あの人も寂しくて居るに違ひない。」

彼の顏や樣子を思ひ浮べた揚句、私はフッとさう心附いた。さうだ、其れに相違ない。それで無ければ、何時も〳〵あゝいふ風をして居る筈が無い。此れが今まで何故氣が附かなかつたらう、と私は自分の思ひやりのないのが却つて不思議にさへ思へた。

私と同じ樣に、寂しく心細くて居るのだといふ心持が、彼と私との間の眼に見えない幕を取り拂つた。私は何うかいふ機會があつて能々村と一度話が出來たならば、直ぐに親しい、手を執つて一しよ



に泣出すやうな仲になれるといふ氣がした。たゞ二人、同級の者の誰も居ない所で、私はあの眼を一杯に見詰めて、そして此心持を話したい。話して慰めてやりたい……
そんな事を思ひ續けて、私は何時までも農園の中に居た。氣が附いて歸らうとする時には、初夏の日に眞的に照り附けられて、顔は汗ばみ、喉は乾いて居た。歩き出さうとすると、眼はクラ〳〵として、シーンと四邊は恐しく靜かになつて、暫くは立つたまゝ夢中になつて居た。
其れは土曜であつた。月曜の朝學校へ行く時には、私は久し振りで懷かしい所へ行くやうに思へた。門を入ると、私は例のやうに第一に窓の下の女生徒の群を見た。見えない、彼だけが居ない。遲刻したのだらうと心待ちにして居たが、授業が終るまでも、終に來なかつた。
私は寂しい氣がして農園のある家へ歸つて來た。一日の課業が濟んだといふ心持も、初めて農園を見渡した眼にも、例のやうな嬉しさがなく、まるで先生から恥しい罰でも受けて、それを隱して居るやうな風であつた。
農園は町から直ぐ續いて、往還を折れて少し入り込んだ所にある。まるきり一つの別の區劃になつて居る。が其中にある家は伯父の家ばかりではなく、外に貸長家が二軒あつて、貧しい家族が七八軒も住んで居る。
私は一軒の長屋の前を通つて、次の一軒の前へ來た。其處にはアカシヤの可なり大きい木が三四本立つて居た。うす綠の葉は圓く傘を廣げたやうに、白く細かい花はポロ〳〵と葉の間を洩れて、濕つた黒い木蔭にこぼれて居る。それを前にして、此頃引越して來たばかりの洗濯婆さんが、たゞ一人でひつそりと暮して居た。



私は通りすがりに、雨戸が開いて、薄闇い土間を見せてゐる婆さんの家を、見るともなく見た。と急に胸がドキ〳〵と躍つて息も塞りさう、體も顫へるやうであつた。

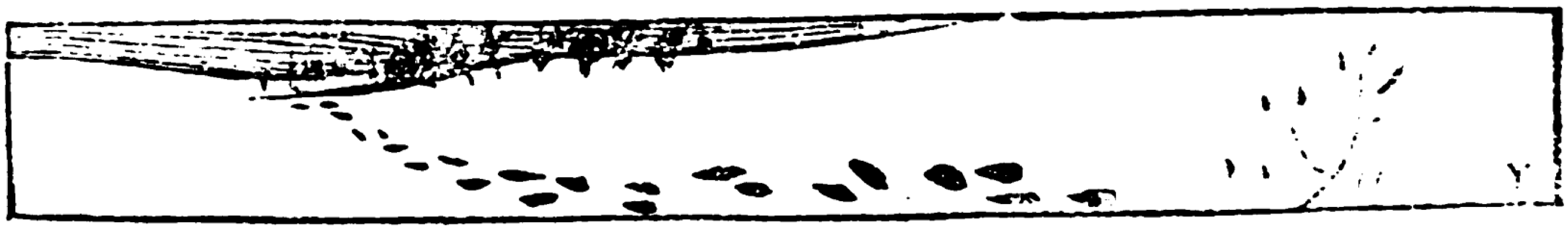
能々村が居る！思ひ懸けなくも能々村が其婆さんの家に居て、上框に腰を懸け、薄闇い中から此方を眺めて居るのであつた。

私は例の彼の眼――驚きを見せながらも靜かに何所か冷かさを包んで居る彼の眼を迎へて見たばかり、無意識に動いて居る足は、張り裂けさうな胸も、クラ〳〵する眼も何も彼も一瞬間だけに終らせてしまつた。はつとして、大事件の前に立つて居ると氣附いた時には、私はもう其家の前を通り過ぎてしまつて居た。

此の日此所で、能々村に逢つたといふ事が、私は如何に深い不思議であつたらう。私はその中に、汲むにも汲めない意味が隱れてゐるやうに感じられた。又とあるまいと思はれる機會を、何一つ言はず、目禮一つしずに過したといふ悔いを思ふ暇もなく、私は唯もう不思議な感じに壓しられたやうになつて居た。

其夜私は、遲くまで眠れずに居た。四邊の靜かなのに心附いて、眠らうとすると、誰か窓の外で呼んだやうな聲がした。私は胸を衝かれたやう、息も止つた。誰が誰を呼ぶのだらうと思ひ辿る傍ら、私はドキ〳〵と自分の胸の躍る音ばかりを聞いて居た。全身の力は窓の外に向つて、私は第二の聲を求めて居た。

つと胸に閃いたものがあつた。私はワナ〳〵と慄へる手で窓の雨戸を開けた。そして怖々と外を窺つた。



薄い月が家の後の方から射して、夜霧のかゝつた農園の上を靜かに照して居た。菜園、林檎林、葡萄園など、一續きに青白い微光の下に廣がつて、薄く濃く、高く低く隈を取つて居る。窓の下にある菖蒲に似た白い花が、暗い中に際立つて白く見えた。シンとして何の音もない。柔かい月光は、夜の靜かさに顫へて居るやうで、仰ぐと空が奥深く見えた。

うすら寒さを覺えて、頭がスーツと澄んで來た時には、私は自分で自分の手を握んで、眼に涙をためて居た。何といふ譯もなく、此儘此所を脱け出して、遠く何所かへ行つてしまひたいやうな氣がして來た。

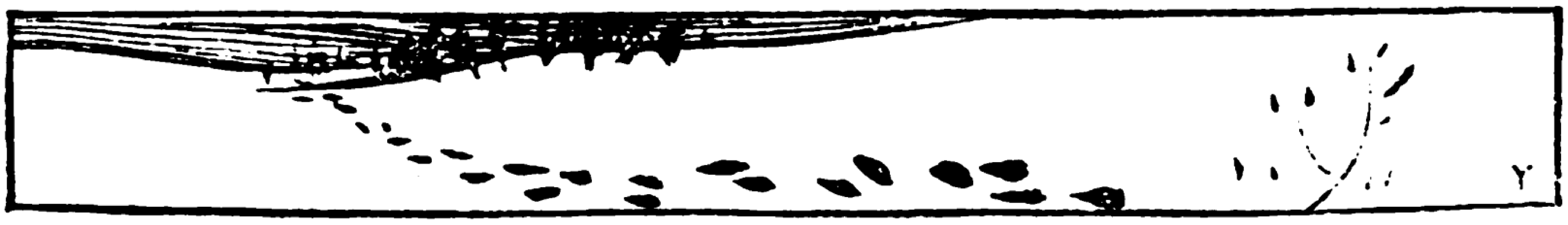
三

一月ばかり過ぎた。

晝の時間は圖畫であつた。圖畫は受持が別て、顔の蒼い、怒ると直ぐに涙を出す先生であつた。生徒は此先生だけは怖がらず、そして女生に贔負をするといふので、男生は注意の眼を怠らなかつた。先生が女生の方へ畫を直しに行くと、男生はザワ〳〵とし出すのが例で、さうすると女生は得意の風をして見せた。圖畫の時間に限つて、男生女生といふ區別がはつきりと附いて、互に敵視する。

その時間も例のやうであつた。午飯のベルが鳴ると先生は、辨當を食べるやうに命けて、管督もしずに出て行つてしまつた。

皆な忙しさうに辨當を食べ始めた。濟みさうな頃になると、辻田は忘れて居た事を思出したやうに突と起つて、男生の方へ眼て何事をか語つた。



「なア、おい！　女生なんて何だ、——贔負！」

「贔負！」と、四五人の者は彼の聲に應じて、草履で床を踏み鳴らした。

「贔負！」「贔負！」と男生は足拍子を取つて、三方から繰り返して囃し立てる。女生は怒つたやうに顔を紅らめ、ヒソ〳〵と何か言ひ合つて居たが、食べかけの辨當は放さずに食べて居た。

「おい、出よう！」と辻田は命じて、先へ立つて教場の外へ出た。七八人の者は附いて出た。皆な廊下の外へ出たかと思ふと、開けかけになつて居たドアを、教場中へ響くやうに、外からドシンと力任せに閉めた。

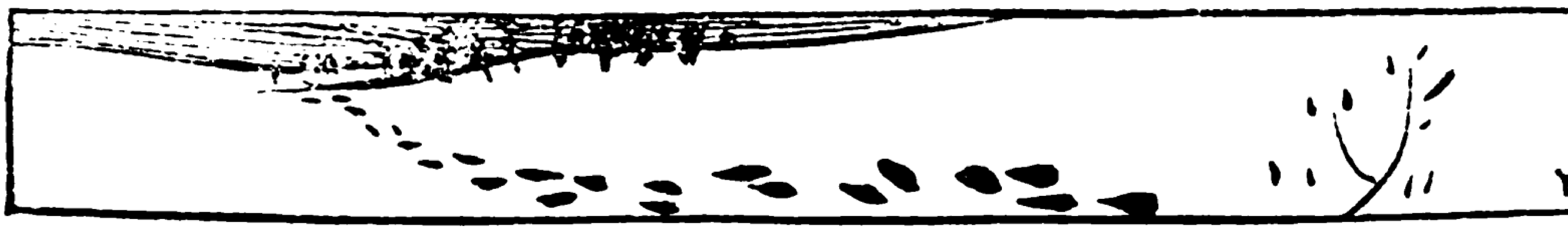
其響を聞くと教場の内に殘つて居た者は、呆氣に取られて眼を瞬つた。ドアーは把手の工合が惡くなつて居て、強く閉めると、外からは開くが内からは何うしても開かない事が分つて居た。

内の者は初めは冗談だと思つた。それでも二三人の者はドアーの所へ行つて、「おい〳〵」と喚きながら擧つて叩いて、開けて呉れと相圖をした。外はひつそりとして居る。内の者は自棄になつて、ドン〳〵と叩き續けると、ふと外から、ワッと一齊に笑ふ聲がして、バタ〳〵と廊下を彼方に走つて行く足音がした。それが遠くなつて消えてしまつた。

内の者は俄にマゴ〳〵と極り惡さうにした。女生と一しよに閉ぢ籠められた室の中に居るといふ事が暫くも我慢の出來ない事のやうに、紅い顔をし、泣出しさうな顔をして、狂氣ぽく戸を押したり叩いたりして見た。一人が心附いて窓の框へ登り、其所から庭に飛び下りると、餘の者も其血路から、押し〳〵をしながら吐き出されるやうに先を爭つて飛び下りた。私も其れに倣つて飛び下りた時には、教場の内にはガヤ〳〵と眼を瞬つて男生の一人〳〵消えて行く後姿を見守つて居る女生ばかり



になつた。
男生は窓の下を遠捲きにして、女生が何うするだらうと、面白い見せ物でも見るやうにニコ〳〵して眺めて居た。が女生は窓から首だけ出して、怒つた眼を此方へ向けながら口を動かして何か言つてるばかり、何うする事も出來ないらしい。男生は心持好ささうに笑つて居た。やがて女生の中の氣嵩な一人は、テーブルを踏臺にし、男生のしたやうに窓框へ登つて、其所から飛び下りようとする身構へをした。男生は驚いて、嚇さうとするやうに一齊に囃し立てた。と女生はまご〳〵して、そして下の方を見て今更に其高いのに怖氣が附いたやうに、そつと下りてしまつた。
女生の顏が窓から隠れた時には、男生はもう遊戯に夢中になつて居た。授業のベルが鳴つて教場へ入つて行つた時、男生はドアーが閉めたまゝになつて居たのと、女生の顏が怒に青ざめて居たのを見て初めて自分達のした事の執拗かつた事に心附いた。
三時の授業が濟んで皆な家へ歸らうとする時であつた。先生は改まつた樣子で。
「話があるから男生だけはお殘りなさい。女生は歸つても宜しい。」と命じた。
男生は今まで叱られずに居たので、大方女生が默つて居たのだらうと思つて、もう其事は忘れて居た。留め置かれると、直ぐにそれと心附いて、互に顏を見合つた。困つた色と忌々しい色とが誰の顏にも漲つた。何を言ふ者も無い。先生は女生と一しよに彼方へ出て行つたきり、待つても〳〵歸つて來ない。生徒全躰の歸つてしまつた校舍は、何時もの賑かな反對に、怖しいまでにヒッソリと靜まつてしまつた、白壁だけが際々と目に着いた。一度掛けたカバンを下して、ぢつと腰を掛けて居ると、泣出したいやうな氣がして來た。



其所へ先生は初めて來た。先生はボールドを背にして例のやうに教壇に立つて、暫くの間默つてぢつと生徒を瞰下して居た。その眼には押へては居るが深い怒りが見えた。

「皆さんは晝の時間に、女生徒に對して、何故あゝいふ事をしました？」

先生の聲には例になく稍顫へを帶びて居た。そして「女生徒に對して」と力を入れて言ふのを聞くと、男生は、今更に自分のした事を思出したやうに、一樣に深く俯向いてしまつた。

「男生徒が女生徒をいぢめるなんて、――何です。恥しかありませんか。そして自分達は窓から飛出すなんて！窓は出口ぢや無いてせう。」

先生の聲は、シーンと壓しるやうな靜かさの中に、獨り響いて聞えた。言葉を切ると其聲は四邊の靜かな中へ吸ひ取られて行くやうてあつた、生徒は息も荒くは出來ずに居た。

「誰です、あんな事をしたのは？爲た者は手をお擧げなさい。」

誰も應じない。

「辻田さんてすか？。」

辻田は第一に睨まれた。彼は俯向いてゐる身を縮めた。返事もしない。

先生は順次に四五の生徒の名を指して聞いた。誰も答へなかつた。

沈默は又續いた。

私は初めから、自分だけは留め置かれる譯も叱られる譯も無いと思つた、何となく餘所事のやうな氣がして、たゞ一人、眼を擧げて先生の顏を眺めて居た。

先生は顏にも語氣にも、此れまでに見た事のない意地の惡い所があつた。深い憎みが、強ひて押へ

てゐる下からチラ〳〵と感じられた。私には其れが噓のやうに思へた。何故先生は此れ程まで私達を憎むのだらう？私達は其れ程惡い事を爲たのだらうか？さう考へて來ると私はふと、此れは乾度女生が、意地の惡い願ひ方をしたに違ひない、それでなくて先生が此んな風をするものか。あの女生の連中だ、先生の所へ行つて何て噓を吐いたか知れはしない。――私の眼の前には、平常憎いと思つてゐる女生徒の顏が三つ四つ、ふら〳〵と現れて來た。ぢつと睨んで居ると、薄闇らかつた敎場の中で消えて、其所へ先生の顏が現れて來た。

「皆さんが悔いて、誰が爲たか自分で言ふまでは、何時までも歸しません。」先生は自棄のやうな調子で言つて、又此方を睨めた。

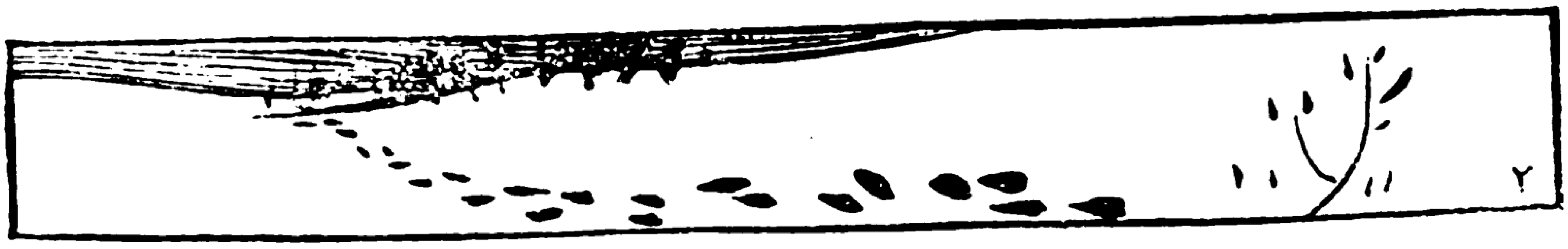
「先生！」と私は起ち上つた。女生徒に對する反抗の情が胸に一杯になつて、其れに驅り立てられて言つたやう、私は何時になく譯もなく臆せる所が無くなつて、半分は夢中であつた。

「先生、女生は先生に何て言ひました？――あの戶は破れて居て、自然に締まるので、誰も態々締めたりなんか爲はしません。」

私は逐つかけ〳〵、言ふ事が胸に湧いて來て、それを言ふのに忙しかつた。先生は不思議さうに私を見詰めて居た。男生の頭のゾロ〳〵と動き出したのが、眼の下に影法師のやうに感じられた。

「男生は窓から出ましたが、先生、女生だつて窓へ登りました。誰も飛び下り得なかつたゞけで、同じ事をして居ます。私は見て居ました。」

其所まで言つて來ると、私は急に胸が迫つて來た。泣出したいやうな氣がして、淚が込み上げて來た。言葉にして言つて見ると、自分が如何にも尤もで、女生が憎く、先生が無理であつた。



「先生、先生は何故女生だけを歸しました。一しよに留めて置いて聞いて見ると、女生の爲た事だつて解ります。」

私は倒れるやうに腰掛に腰を下した。體は微かに顫へて居た。遠退いて居た靜かさが襲ふやうに歸つて來て、私を包むだ。

暫くすると、先生の聲で。

「今日は此れてお歸りなさい。」と言ふのが、遠い遠い所からの聲のやう、私の耳へ入つた。

皆ドヤ〳〵と教場を出た。暗くなつた廊下に足音が寂しく響いた。庭へ出ると校舍の影が長く運動場へ映つて、松の樹を越して夕燒の空が紅く遠く見えた。雀がチヤ〳〵と忙しさうに鳴き交すのが聞えた。

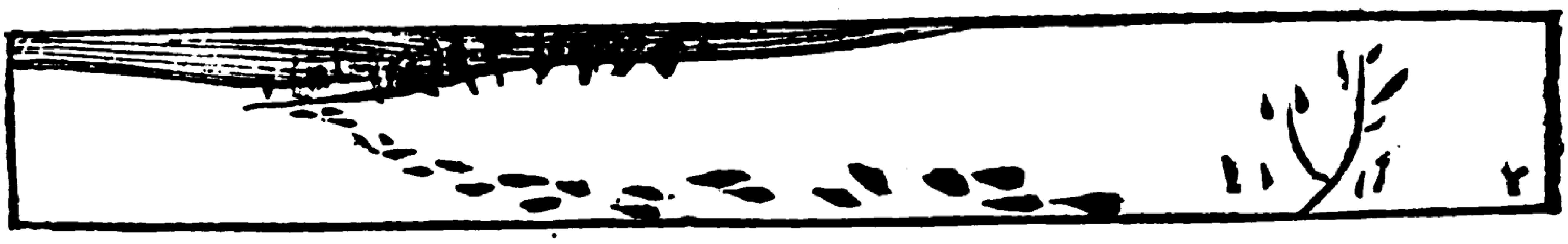
私の周りへは集るともなく五六人の仲間が集つた。私を見る眼には不思議な物を見るやうな色があつた。

「ね君、女生なんて生意氣だ。明日またいぢめてやらう。」

「君の言ふ通り、先生贔負だ。――ね、おい。」

仲間の者はガヤ〳〵と言ひ囃しながら運動場を横つて門の方へ歩いた。私は相手にならず、一人俯向いて歩いて居たが、胸の中には、敵を打つてやつたといふ好い心持も、皆に暗に賞められてゐる誇も感じられず、何ういふ譯か解らない寂しさと悲しさがあつて、それが他の心持を呑んでしまつて居た。

門を出て仲間に別れて一人きりになつた時であつた。私は此れまで不思議に忘れて居た能々村――



女生を敵のやうにして居たものゝ、この人だけは除けものにして勘定の中に入れなくて居た能々村の顔が、ふと胸に浮んで來た。例の眼、丸い大きな、ぢつと不思議さうに物を見る、そして何所か冷かな所のある眼は、明らさまに私に向けられて居た。私はぢつと見返した。と、その冷かな色は見る〳〵加はつて來て、何も言つた事のない唇は、私に向つて開かうとして居る……！

私は慌てゝ其顔を掻き消した。飛んだ事をした、飛んだ事をしてしまつた……と。後悔の情はむら〳〵と襲ふやうに起つて來た。こんな事になつてしまつて、私はもう、内々て彼の人を思ふ權利もない、合せる顔もなくなつてしまつた譯だ……

農園の入口に來た頃には、私の眼は潤んで居た。能々村が堪らず懷かしくつて、彼が居ない位なら學校に行くのもつまらないといふ氣がした、がつかりとした遣り端のない心持で、私は暗くなつた怖い路をのろ〳〵と歩いて居た。



近代文豪の作に現れたる女性

中村春雨

近代文豪の作物から其女性觀を研究すると隨分面白い、其一二をお話しすると、先づイプセンはフェミニスト――婦人を崇拜若くは庇護して其肩を持つ方――てある、「社會の柱」と云ふ劇ては初めはコンセル、ベルニックと云ふ男主人公の位置權勢が社會の柱だと世間て信じ、自分も任じて居たが、終りの方ではアーンと云ふ一女性の犧牲的の精神が柱てあると云ふ風になつて居る、又さう云ふ風に男主人公も認めて來るやうに本人の口からも云ふと云つたやう劇の組織がなつて居る。更にかの「人形の家」に於いては、ノラを如上の犧牲的精神より自己を解放して、「自分は自分てある」、アイアム、アイ、第一に自分は自分てなくてはならぬと云つた處、例へばニイチエの先驅者たるマックススチルナーと云ふ人が稱へた絕對個人主義を現はして居る、さうして舊き社會とか舊き家庭とかを破壞して、新らしき社會とか世界とかを新らしき自覺の上に築かうとして居る。又更に「幽靈」にしても作中のアルビング夫人は初めは昔しの宗教道德と云ふものに囚はれて居たが、彼は直ちに其の中から開放して自覺的の態度に出てんとして居る、其中には牧師のマンデルなどより進步した新らしい思想は女の方が多く感得し得るやうに描いてある。斯の如くイプセンは婦人と云ふものに同情し婦人が新らしき思想を覺り又自己を開放し得る可能性を有して居るもの丶如く見、又爾かあらねばならぬものと結論して居る。さう云ふ意義に於ては文壇に於ける近代の婦人開放論者のチャンピオンとして認めねばならぬ、チャンピオンの内にイプセンが存して居るのてある。

それと對照を爲して居るは、瑞典のストリンドベルヒて、是れはイプセンと反對にアンチフエミニストの代表者である、例へば其劇の『父』の如きも、其自分の妻の生んだ子が果して自分の實際の子であるか何うか證明は出來ぬと云ふ、生理學上の疑惑を基礎とした父の煩悶を深刻に描いてある、即ち婦人に對する不信



用從つて婦人に對する憎惡、さう云ふ如き思想がよく現はれて居る、其れから又『ユリー孃』と云ふ作の如き、立派な華族のお孃さんが肉躰的生理的の衝動に得堪へずして其家の召使ひと通ずる事を最も鋭く又凄い筆を以て描いて居る、此作に於いては如何に婦人と云ふものが淺薄なもので表面は非常に矜誇を持て居るかのやうに見えても裏面即ち劣情の方面か

ら行けば直ちに男の誘惑に陥つて了ふ、到底女性と云ふものはイブセンの云ふやうな自覺的な開放的なものてはないと或る意味に於いて女性に對する殆んど絶望を表白して居る。

此二人は恰度南極と北極との如く極端に婦人に對する見解が異つて居る、是れ一つは無論境遇上から來て居るので、イブセンは六十になつて十八の女に戀をしたと云ふ經歷などもあるけれど、兎に角廿三才の時に結婚した細君と一生同棲して居た、さうして死ぬ時は其の細君の最も手厚き介抱を受けて滿足して死んだ、しかしストリンドベルヒの方は、女優と結婚したり又離緣したりして三四回其の細君を代へた、そして今日は六十歲になつて今も下宿屋の一室を借りて獨身生活を送つて居る、婦人に對しては隨分苦しい經驗を嘗めて居る、斯樣に兩者の實驗上の差異から婦人に對する意見が正反對に違つて來るのではあらうが、しかし一つは矢張り作者の觀察の相違から來て居るのは勿論の事である、婦人開放論と婦人非開放論とは此の二人の文豪に依つて各有力なる口片を得て居るものと思ふ。

此二人以外にバアナード、ショーは又違つた見解を持つて居る、バアナード、ショーの作には婦人の開放よりは、寧ろ開放せられたる婦人を描いて居る、其の點に於いてはイブセンのよりは寧ろ一歩を進めて居ると云つて宜い、例へば『人間と超人間』の男主人公は初めは大層えらさうな事を云つて結婚などを排斥する、處が舊婚者なるヒロインに追つかけられて、其れて終にはヒロインの意志の儘になつて了まふ、即ち女の方が超人間で男の方が唯の人間である。又今一つの作『カンデイダ』の如きは男主人公の牧師が自分の妻のカンデイダを扶助し保護してやつて居るんだと云つたやうな事を廣言して居るが、いよ〳〵其の劇の終る頃に保護せられ扶助せられて居るものは却て夫の牧師の方であつて、實はカンデイダの方が保護者なり扶助者たる實力と實權を持つて居ると云ふ事が明らかに示されて來る。是れは一つは男優りのアングロサクソン

的の婦人、女子の選擧權要求運動をやるやうな、或る意味に於いて尤も自覺的な又尤も開放的な英國の婦人を反映するものとも見られるが、他の一面から云へば寧ろ一種の男子開放論である、即ちこの婦人の手から男子を開放する、さう云ふ意味に於いてはストリンドベルヒの云はんと欲して未だ云ひ得ざりしものを道破して居る感がある、であるからイブセンとストリンドベルヒの相對照した議論がショーに於いて攝調せられて更に一發展を遂げて居ると見えぬ事も無い、又其の意味に於いてショーが最も進步した婦人を描いた進步した思想家であるとも云へるだらう、兎に角婦人問題の研究者は以上の三人の代表作に就いて研究したらば得るところが少くあるまいと思ふ。（談話）

廢濠

澤村胡夷

私がまだ湖國に居た時分、絶えず往來してゐたのは舊藩時代の外濠際の隨分古い家であつた。其濠は殆ど全部埋れて了つて、たゞの沼地のやうに殘つてゐた。それは私がてふど其町に住つてゐた頃の樣子だが、今でもまだ其儘に廢れてゐるに相違ない。

其沼地には、葦も生てゐたし、水草も一面に繁茂してゐて、夏の朝などには蓮の花瓣の開く音さへ聞えた。其れよりも城の高櫓が煙靄の中から蜃氣樓のやうに現はれる。私は今でも夢のやうに夫等の光景を想ひだす事が出來るのである。

然し私は、夏よりも冬の、荒荒しく寂しかつた此濠の光景を忘れる事が出來ない。冬！殊に湖畔の寂れた市街の夜を吹通す木枯と、雪に封じこめられた家家の窓から老人の瞳のやうに全く輝きを失つた燈火がとびとびに漏れて來るのとを想へば、勢ひ、半ば崩壞した家、すべて舊時代の廢れかかつた建物の中に、長蛇の如く橫はつてゐる濠をも追想せずには居られない。續いて、其濠際の古い屋敷――其家族は私より二許り年嵩のお蝶さんを中心として、其母親、其妹、その外別に先生……といふ順序に、今でも私の頭に刻まれてゐる――この古い屋敷の入口に突起てゐた巨大な榎樹に吹付ける風の殊に物悲しい其響！

てふど、先生の誕生日といふので、ある冬の午後、私はお蝶さんの家へ招かれた。先生は私の父親と懇意であつたので謠曲を敎はつてゐたのだ。然し先生とは言はずに私は小父さんと呼んでゐた。家でも小父さんの宅へ行くとそう言つてゐたが――然し私の友達はお蝶さんの家へ行くのだらうと私に言つてゐた。

其日は曇つて薄ら寒い日であつた。入口の榎樹をくゞつて直ぐ家の南の空地へぬけ、例のやうに小高い岡の上へ駈のぼつた。而して直ぐ下の廢れた濠を見下してゐた。濠には鳰鳥が必ず横着に游泳してゐる。私は此鳥にいつでも手ごろの石を拾ふて投つけてやつた。此日も大きな石を思ひきり澤山投てやつた。然し一つも命中しなかつた。枯れた葦の葉が隨所水から頭を擡げてゐたが、やつこさん狼狽して其中へ潜込んだまゝ姿を現はさなかつた。岡の上の落葉は乾燥びて了つて、土も固く凍つてゐた。私の木履は其上でかんかん音がして、直ぐ側の雑木林の頰白鳥にも見るまに悉く逃られて了つた。此濠端には積石が崩れたまゝ隨所に散在してゐる。私はその一つへ腰を下して舊い城の高櫓を眺めながら、湖の上から此方へ雪雲の去來するのを望むことが出來た。

廢濠の側には雑木林と、私の先生の家と、桑畑と、まだ二三の古い屋敷家の屋根、其他は空地のまゝの――武家屋敷の跡である。町の東北を圍んでゐる山は雪の所爲で悉く灰白色の曇を帶びて、其と同じやうな曇が濠の水にも現れてゐた。武家屋敷の殘敗と崩れた濠の石垣と……其上を傷ましげに移り行く雲。時時、身を切るやうな風が、葦の莖を強く動かして、私には其處に長く止まる事が出來なかつた。

濠端の崩壞した石垣の上から、私はついと身體を起して、お蝶さんの家へ歸らうと思つた……途端！あつと言つてゐた際に、凍りついてゐた筈の大きな石がぐらぐら動搖して、私の脛！股！胴！咄嗟の間に泥深い水の中へ沈んで了つた。其時の非常な狼狽は足駄を片方だけ確り穿いてゐたのでも分る。

濠の石垣際は深く無つたけれど、私の半身は泥に塗れ、着物はびつしより濡れて了つて、動く事すら出來なかつた。命には別條がないと定ると、此爲體を他人が見て居はすまいかと、急にそつと對側の雑木林やら、枯た樹立、空地などを見周さずには居られなかつた。幸にしてこんな寒い日に、空地を逍遥してゐる

やうな人はなかつた。但、雲だけが冷笑するやうに光つてゐた。

私は漸くにして這上る事が出來た。

先生がてふど梅の枝をきりとる爲に庭から空地の直ぐそばへ來てゐた。而して突然に石垣の下から私が頭だけひよろりと出したのて、酷く驚いたらしい、

「何、何うしたのだ、陷つたのか」

と高い聲て私に問いながら駈つけた。私は唯「大丈夫てす、なあに大丈夫てす」と繰返した。

「危ないね、怪我は無かつたかい、一體何て陷つたのだ」



私は水へ陷つた理由は別に覺えなかつた。無論目的はと問はれても答へる事は出來ないに相違ない。だが當時、先生だけが泥塗の私を見たのならば私の家へ走つて歸つただらうと思ふ。然し先生の謡曲て錬上げた大聲が、お蝶さんの母親――それからお蝶さん、次に妹――と直に報じて了つた。母親の氣の毒相な顔と、お蝶さんの大きな眼と妹の忍笑とが程なく私の泥塗の身躰を取巻いてゐたのには驚いた。此時にも私は何の爲やら「大丈夫てす。なあに大丈夫てす」と言ひつゞけてゐた。だが私の身躰は冷きつて顫ひあがつてゐた。

此不時の出來事が誕生の祝宴を夜に入つて開かせた。夕方から雪が降だした。私は革色の先生の羽織と手織縞とを着せられて物々しく宴席に列せねばならなかつた。而して、皆に笑れて――殊にお蝶さんに笑れて、小さくなつた儘、一刻も早く宴會の果てん事をのみ胸の中に念じてゐた。

女小路

マクスオーレル

女とは、衣服を着た、髮を結つた、愛着的な、痛ましい、而して美しい人間的生物の名である。

發車時間に二分後れて女が停車塲に着くと、後れたのは自分の故てはない、鐵道の事務員が紳士でないからだ、と思ふ。てあるから、多くの女が下す紳士の定義は次の如きものだ。――紳士とは待つて呉れる者也――。

女二人が出會つた時に先づ第一に爲ることは、お互に心の中て嚴密に相手を分析し批判することてある。而して後にお世辭とお愛嬌の有つたけを陳列し合ふ。

女は永遠に善良て、柔順て、愛嬌があつて、獻身的て、愛着的てあるかも知れない。良人が好む所へは何處へても行き、喜ぶ事は何事でも爲し、かくて良人の爲めならば如何なる犧牲をも厭はないてあらう……働きもしよう、飢ゑもしよう、死にもしよう……けれども髮だけは、髮だけは自分の思ふ通りてなければ結はないかも知れぬ。

女の好む男に二種類ある。一は自分を好む男、他は自分を憎む男。

結婚した當座の三ケ月は、男は、自分の妻が如何なる女であるか能く理解して居ると思ふ。二十五年の后に至ると、其妻が如何な女であるかちつとも解らないといふ結論に達してしまう。

女の所有に屬しないものが世界に二つ有る。(一)――「時」の觀念。(二)――「距離」の觀念、而して、男に「時」を忘れしめる爲めに生れて居る、といふことを女が自覺した塲合に限つて、「時」の觀念を持つて居るといふのは不可思議な現象である。

男を魅する力が女に在る理由は、女が科學的の頭腦を持つて居ない所に存する。議論といふことは女に取つて向河岸だ。しか〳〵のことはかく〳〵のことを意

味すると聞かした所で、事實果して此であらうが其れであらうが乃至此でも其れでも無からうが、孰でもいゝ。こういふ小面倒な議論は女の與り知らぬ所だ。だから、男が夢にも知らないことを、「いゝえ、貴方が爲すつたんです」と決めてしまつた以上は、代數、三角術、乃至は微分積分の原理を引證して否定したところで、蓋し水に數書くわざにも等しい。「理屈は兎に角、貴方が爲さつたに相違ありません」の一天張で事が結着する。而して、死んで口が利けなくなるまでは「あの事は妾の云つた通りが眞實です」といふやうに男を承服させずには終はぬ。

女が良人と些つとした云爭をして、太陽のある間拗通した場合には、日沒になると、外套を一枚又一枚と半ダースも着込んで、恰も地球の眞裏を指して出帆する船の艤裝のやうに身を固め、何人と云へども絕對に側に近づけない。

女が肖像畫を畫かせる時には、秋毫も自分に違はないやうに書き上げて貰ふことを主張する。而して、美人に書き上げなかつた畫家はとんだ災難である。

寫眞を撮る時には、何時までゞも寫眞機の前に腰かけて居て、自分の得心の行くまでは幾度も〳〵撮直させる。であるから、拔目の無い寫眞師は、髮も肩も大變お格恰がいゝ、と讃めて置いて、だから定めし御立派に寫りましよう——後から寫れば、と勸めて了ふ。

予は嘗つて、予が敬愛する七十五才の老女に恁う云つたことがある。

「あなたのお若い時は非常にお美しかつたそうですねえ」

すると其答に、

「妾はちつとも然うは思ひませんよ。だけれど手だけは奇麗であつたと思ひます」と。

そこで予は其手を見た。

「ほんとに嘸ぞ美しいお手であつたんでしようねえ、今でもこのやうに奇麗なのだから」。

斯う云つて予は、其手を取つて、敬しく〳〵予の唇に當てた。予は、予のこの禮儀が其老女に喜悅を以て受納れられたことを公言して何等の恥づるところもない。而して其老女は、我が親愛なる母上であつた。

德の優秀て居るか居ないかは、女に關しては大した問題ではない。女は只だ、自分に魅力があつて、男が自分を美しいと思つて呉れて居ることだけを知つて居れば良い。知つて居て夫れを自ら私に誇つて居れば良

い。
　自分に由つて他人が失望するのは構つた限ではないから、他の女が自分の後を見送つて、「あのやうに美しく生れて居ればほんとにどれだけ良いか知れないのにねえ！」と羨しがつて吐く太息を聞くことは、必ずしも羨れた女の遺憾とするところではない。
　女の行動の大部分は――特に男に對する時の動作は――頭の指圖に依つてゞはなくして、心の命令に據つて發現するものである。この否定すべからざる事實から出立しない限は、女といふものを理解することは全然不可能だが、この原理を承認してかゝれば、世界の迷語―「女」―を解くのは、一見したほどに至難の事業ではないらしい。（福光東衣譯）

女性の詩と虚榮心

服部嘉香

一

世のあらゆる女性に對して、不敬の言を發するを許したまへ――、

心理的に見て、女性が著しく男子と異なつてゐる通性は、虚榮心と執著心とである。この二つの心理は、共に善意にも惡意にも解せられるし、又女性が日常の行爲、生涯の主義にも善惡兩面の特色を現はしつゝ働いてゐる。併し孰れかと云へば、虚榮心の方が表面に出易くて、又其の惡意の方面が著しく見えて、浮華輕薄、瞬時の出來心に左右せられて何等の操守が無いやうに思はれる事が多い。一方の執著心も亦、事「執念深い女だ」と云ふ言葉が、惡意に解せらるゝ事が多いやうに、輕い虚榮心の爲めに退くに退かれずなつて思ひ詰めたり、口惜しさが一杯になつて陰險な心を働かしたりする事にばかり利用される。それに執着心が女性の美點として、其の主義節操、日常の生活を支配する事が薄いのは、社會の事情と國民性の遺傳とに據る所が多からうと思ふ。
　この虚榮心があるが爲めに女性は普通に假面を被る事を不思議だとは思はぬ。又この執著心あるが爲めに缺點を缺點として人前に告白し悔悟する事もなく、容易に舊い物に見切りをつける事が出來かねる。近代思想の影響は、十分一部の女性に及んでゐながら、女性の作物に潑剌清新の感味が少ないのは、女性が未だ

に假面を脱せず、舊技巧を捨てゝゐないからであらう。殊に詩歌の方面に於ける女性としての天分は、男子が有するよりも多かるべき筈であるにも拘らず。まだ眞實の歌人、眞實の詩人を、明治の女性中に發見すること、一に與謝野晶子氏に止るのも不思議である。

二

詩歌はあくまで主觀的、個人的でなければならぬ、單に主觀的、個人的と云ふばかりて無い、同時に自發的、抒情的で無ければならぬ。主觀的、個人的と云へば、作家の感慨、氣分、衝動、機智、觀念等の何れをも含有すとして差し支へは無い。けれども「私は斯う感じました」とか「私は斯う思ひます」とか云ふばかりては、たしかに主觀的、個人的てあるに相違はないが、眞正の意味ての主觀詩、個性詩ては無い、即ち自ら發して情を抒ぶるのが必要てある。說明し敍寫し通譯するのては無い、「斯う感じました」と云ふ其の感情、氣分、「斯う思ひます」と云ふ其の思念、直覺、これらを其のまゝに歌ひ出だす處に特色がある。詩と云ひ歌と云ひ、紙上に印刷されるものは一篇「製作」の名殘りてあるが、これを遊離すれば即ち主觀そのものてある、個人そのものてある。私は自發的主觀詩、抒情的個性詩とも名づく可きものを以て、近代的詩歌の究極の面目とする。單に近代的詩歌ばかりで無い、總ての詩歌と名づけらるべき製作國、總ての時に於いて、は、當然斯くあるべき筈だと思ふ。併し日本從來の詩歌は、花鳥風月の詠物詩はもとよ



り、抒情詩主觀詩と云ふべきものも、多く修飾と誇張とに煩はされてゐた。とかく形式に支配されてゐた。その作品からは、作者の眞實の聲を直接に聞くと云ふよりも、なだらかな文字の調子が耳に辷り込む、その文字の調子と云ふ事に、從來の歌人の苦心が殆んど全部費されてゐた。生命の無い詩と云ふのは即ち斯ういふ類ひのものを指したものである。

形式過重、誇張修飾を以て詩歌の客觀的存在の必要條件としたのは、最早既に久しいことであつて、もう好いかげんに世人も飽いてゐる、近時詩壇に自由詩の運動が初められてから、長詩短歌ともに自發的主觀詩又は抒情的個性詩といふ極致を把握しやうとする眞面目な努力を現はして來た。詩人は多く自己內部の革命を行つて表白の態度にも根抵的の自覺を持つて來た。之は最近の詩壇に特に著しい現象であつて、明治の新躰詩が、新躰詩といふ不得要領な名を捨てゝ、初めて詩と云ふ一字に十分に眞實の了解を含ませるやうになつたのである。

此の了解、意識は未だ十分に一般的とはならない。殊に女性の詩には、長詩短歌ともに此の自覺を現はしたものが少ないやうに思ふ。その原因は色々あるだらう、女性が多く家庭の人となる事早く、人の妻として人の母としての生活をするやうになつては、既に女性としても絕對に自由で無くなる所から、自分の感想も幾分か制限されて、自然に詩歌に遠ざかると云ふのも重大な原因かも知れない。けれども私は女性が自己の虛榮心と執著心とに囚へられるからだと思ふ。

三

さきに戀ひさきにおとろへ先に死ぬ女の道にたがはじとする

平かに來て平かに去ぬ浪をこころとすなりよろづのうへに

此の二首は晶子氏の『佐保姬』に在る。『みだれ髮』の時代から見れば大變な相違である、然し、『みだれ髮』には寧ろ女性の虛榮心が極端に出てゐる。強ひて小さな自尊心を傷けまいとして、歌の上にも躰面を重んじた痕が見える、誇衒の歌である、足元の危い詩である。それが『常夏』『舞姬』などの趣味の時代、絢爛の時代を經て、漸く女史本來の面目を現はし來たつたのが『佐保姬』である。平淡の妙があるのは、最も自然

の女史の性情を歌つたからである。何等の虚榮心が見えない、無理に美しさうにしたり、強ひて偉さうに見せる處が無い、美醜ともに何の差別もなく、誇張辨解らしい痕も無い。淡々楚々たる間に、落付いた深い悲哀がある、

　心まづおとろへにけむかたちまづおとろへにけむ
　知らねど悲し

と云ふのが『佐保姫』一巻に貫いた情調である、この意味て『佐保姫』は女性の虚榮心を沒却した眞實の抒情詩だと思ふ。人に依つては『みだれ髪』時代の熱氣を愛するものもあるが、少くとも『佐保姫』には嫌味が無いではないか。

之は一例である、又短歌の上の例である。まだ日本には眞の女詩人が無いし、又その作品も無いから何とも云へないが、投書家諸氏の作品を見ると、私の云ふ女性の虚榮心が隨所に見える、そして又舊い形式に執著する所がある。詩歌は多少とも理想主義の傾向があるし、又形式上の努力を押しつめて行けば一歩にして唯美主義に入るの弱點がある、女性のみならず、何人の詩歌にも表面の調子に苦心して、少しも早く見え易い特色を作らうとするものであるのは、私とても決して否定はしない、けれども女性には、殊に舊い技巧に囚へられて、詩歌は唯美主義て無ければならぬと云ふ觀念を捨てかねた所がある。美人は最上級の形容を以て理想的美人として描き、悲哀は唯だ徒らに悲し悲しとばかり書きつゞる。自分に汚ない考が起つた、或は男に捨てられたと云ふ風の不體裁な事は隱して、なるべく自分の虚榮心、自尊心を傷けないやうに、讀者から笑はれぬやうと云ふ風の用意を以て作をする。だから其の作品は僞つた聲てあるし、又力が無い、生命が無い。婦人の會話――ちよッとした時候の挨拶にすら――に、空疎な、見え透くやうな虚僞を交換すると同樣に、その詩にも強ひて己れを辯護するやうな態度を以て、つい噓を云つてしまう。即ち女性の中より眞實の主觀詩人、自由詩人が出づる事を希望せば、先づ女性に對して虚榮心を捨てたまへと云はねばならぬ。そして同時に、淺墓な執著心、即ち未練の心を捨てたまへと云はねばならぬ。

私の手許に『女詩人』と題する小冊子がある。英國ヴイクトリア朝時代の女性詩人五十人を擧げて、その作品を數篇づゝ拔萃したものだ。之を見ても、女性の詩に如何に虚榮心が露骨に表はれるかゞ看取せられ

る。それに智識主義であつた當時の詩壇の影響を受けたものか、何れも談理的、哲學的、辯論的の臭味がある。コールリッヂ夫人、ブラウニング夫人、ジョージエリオット、クリスティナ、ロゼッティ、チスビット女史。アリス、メイチル。エミリー、ブロンテの諸氏などに殊に此の傾向が見える。標題にも「戀は盲目てふ俗言について」「貧困」「婦人の未來」「厭世」「ダルヴィニズム」「近代詩人」「性格」「二つの怖れ――生と死」と云ふ風の、思想家たるの面目を見せつけやうとしたものが多く、而かも内容は極く平凡てある。本書の編纂者が有名なウィルヤム、シャープ夫人て、獻本を受けた相手の婦人は「婦人問題に關して最も熱烈な運動家モナ、カード」女史てあると云ふ二事は、幾分か本書の性質を説明する材料にもならうが、殆んど二百篇に餘る詩の中て、抒情詩として晴れやかな女性らしい調子を持つてゐるのは、アリス、ギリントンの「西の國の戀の歌」ぐらゐに過ぎぬ。私は本誌の次號に、例として二三の極端な詩を試譯してみよう。

四

女性の通有なる虚榮心と執著心とは、女性をして眞の抒情詩人たる事を妨げる。けれども私は前に女性には詩歌的天分が多いと云つた、と云ふ事と、女性は假面を脱し得ないと云ふ事との間には、多少の矛盾が含まれてゐるやうに見える。併し、此の假面的生活に執著せず、素直に、又は大膽に自己の主觀を表出する時は、たしかに女性より偉大な抒情詩人が生れる。これまでの形式過重、唯美主義の詩ならば、女性の假面的本能は詩を作るに最も都合の好い性向てあつたが、所謂近代的詩歌、自覺した自由詩の作家たるに於いては、女性が一般に有する纖細な神經、鋭敏な直覺力、單純、率直の表白、いとけなさ、あどけなさが確かに有利となつて來る。男子よりも周圍の生活に對して直接な敏捷な感受力がある爲めに、殊に其の主觀は細かく動搖してゐるし、又他人に訴へてみやうとする無邪氣な本能があるが爲めに、シムプルな表白が可能てある。これらは總て男子に優越せる詩歌的天分てある。女性が自ら此の尊い天分を忘却し、もしくは善用しないのは、今まて詩の上に十分の發展を見なかつた原因てあらう。

女性は虚榮心に左右せられて容易にまことの事を人に話さないけれども、又時として腹の底まて打ち明け

たいと云ふ氣分を見せる。それは幾ら假面に隱れてゐても。事情に依つては思ひ切つた事も云つて了ふ。殊に斯ういふ場合には複雜な邪念を持たない、抒情詩の特色たるナイーヴテ、シムプリシティーは却つて女性の性格の奧に潛んだ本能かも知れない。主觀そのものゝ聲、個性そのものゝ叫びは、却つて女性の詩に多分にある筈かも知れない。且つ一種の靈機とも稱すべき直覺力は、男子の其れの如く雜念を交へる事少くして活く、全神經の同時に作用するムードの閃めき、之を捉へて、自發的に表白することに於いて何の憚る所なくば、其れて可い。それ以上に又以外に何等の要求も無いのてある。

女性には意外な所て勇氣を見せる傾きがある。一時の體裁を善くする爲めに其の場を繕つて置いたのが。重ねて虛僞を云はねばならぬ事になり、切迫つまつて死ぬるとか、又は口惜しまぎれに死んて面當をするとか云ふ勇氣がある、小勇とは云ひながら、これ丈の勇氣があるならば、自己を直白するのは何ても無い事てある。細くとも銳どい抒情詩は、たしかに女性の特技てあらうと思ふ。

五

私は茲に漠然と女性の詩と云つた、時として長詩と短歌と云つた。けれども同じ抒情詩にしても長詩と短歌とては表白の心持ちが違ふ、最後に其の事を一言しておきたい。

短歌は孰れかと云へば概括的てある、說明的、報告的てある。主觀の斷片も自然の情景も、ともに周圍の輪廓を明瞭に示して置く。

心なき身にも哀れは知られけり鴫立つ澤の秋の夕ぐれ

月みれば千々にものこそ悲しけれ我が身ひとつの秋にはあらねど

などの古歌は殊に輪廓を明瞭に現はしてゐる、それ丈のことてある、何等の連想もなく餘韻も無い。それが晶子氏の作

戀人の逢ふがみじかき夜となりぬ茴香の花たちばなの花

去ねと云へど君が門邊にはこびきてもて去りかたきわが心かな

などには幾分かの動搖がある、同じく抒情詩とは云つ

ても、連想なり譬喩なりに別様の興味がある。併し又されぱと云つて概括的、説明的たる性質は失はれる事が無い。

之に反して長詩は直ちに主觀の内容そのものを、血と肉のまゝに露はし出だす。自己の主觀の反應感、即ち實感を其のまゝに表白するのである。勿論、その時の感興を説明し、若しくは事實自然を印象的に描寫することはあつても、兎に角短歌に較べたならば、より多く主觀の内容そのものに迫つてゐる。本能的に自發的に歌ひ出した場合に、それが悲しい感情なのか嬉しい感情なのか、讀者には判斷の附かぬ事がある、三木露風氏の『廢園』には殊に此の風の詩が多い。即ち長詩は主觀の内容を開き出し、短歌は主觀の輪廓を描き出す、それ故に短歌の方が十分の抒情たる事が多い、云ひ殘さないで兎に角一時の感じなり光景なりを現はして了ふ。而して女性の詩としては、或る意味から云へば長詩が適當し、或る意味から云へば短歌が適當する。孰れとも作者の性情に據ることとて、つまり其の作品の中へ、無用な虚榮心を投影しない事が肝要なのである。虚榮心は詩の誇張。修飾、虚僞、無力を招ぐ第一の弱點だ。(四十三年二月九日)

晝の室にて

夢殿

柔かき日光のみなぎる、
暖き障子の外、
ほがらかに歌ふ小鳥よ——
我心虚しく、
默せる夢の扉に、
戀をさゝやく——
日光と——小鳥と——
暖氣と——美音——
あけはなちたる吾胸の、
明るさ、淺さ。
かくて戀も、
友情の如く近づけば、
ものゝ影黒く、
人に遮ぎられぬ
あゝ今我に殘りしものは
堪へがたき疲れのみ。
(日光の流れ入る室に——
小鳥の歌聞ゆる室に——)



木瓜の花と棄兒

北原白秋

道化の Pierrot がやつてくる。……
白粉の白い、何處もかも白い服裝の Pierrot が
絃の弱つたギタルラを掻き鳴らしながら、左手を
はなし、六月のあけがたの月夜のやうな薄明に
歌も唄はずしよんぼりと忍びやかに泣てゆく……

Seine 河の水蒸氣に、まだ
銀緑の瓦斯が點いてゐる
ゆめのやうな對岸の色のふかい陰影のなかを、
小蒸汽の黄色い燈がゆらめき、
緩るい汽笛が濕つた水と空とに響く。

Pierrot はしのびやかに泣いてゆく……

河に沿ふたすずしい路のそばに
木瓜の花が茂みをなして咲いてゐる。
赤い血のやうな澁い色の蕾と花が
明けやらぬ六月の露に曇つたまま、
匂の冷たい露が光つて落ちる。

そのしたに、パッチリと眼をみひらいた、棄兒が、
まだ殘つてゐる、つい頭の上の、弧燈の光を凝視
めてゐる。
ふつくらした白い毛布に包まれて、
薄い紫の光の幽かな反射に濕つた
なやましい毛織物の朝のにほひに咽んでゐる。

Pierrot は氣がつかぬ。
しのびやかな溜息をつきながら
白い顏の、白い服裝の、薄すらとしてしほしほと、
月夜のやうな薄明に
幽かな絃を掻き鳴らし、
明けてゆくアイスクリーム色の薄黄の露に消えて
ゆく……

ほど經て、その空の
薄色の黄と青との Nuance から
弧燈がふつと消える。

棄てられた嬰兒は、
泣かうとする刹那に、
小さい鼻孔をふくらませて
濕つた朝の空氣を充分にしづかに吸ひ込む……

Seine河の青い水面に、
澁い木瓜の花に、
投げられた金の光線がかがやく。
（一九一〇、二月五日）

哀感（詩三篇）

三谷蘆華

君は眠れり

青き瓦斯の光りに
輝きたる窓帷布を蔽ひ
薔薇の花甘き香に照る。
酒精の溫かき匂ひよ
オルガンの緩き調べよ
魔睡を誘ふあまき呟やき、
しづかに、されどまた騷がしき
我が感覺の惑ひ——

明るき瓦斯の下に、
醉眼にうつるもの
華やかに、なめらかに、快よく
夜は更けゆく。

窓の側に、
天鵞絨の赤き寢倚子の上に、
白き腕を捲いて幽かに眠れる君よ
私語かんとする我が唇、僅かに慄へ
我が瞼強き痙攣に醒めたり。

艶やかなる夜の女
赤き薔薇の花、
あゝ惑へる我が感覺はきく
燃えて崩れんとする歡樂の響きを、
そのひびきを。

されど見よ、

暴飲の酒卓の上に
肉叉飛び小刀散り狼藉のその中に
あはや辷らむとする酒盃を、
また陶物の白き器を。

危きものかくてまどかなり
君は尙、この擾亂のまへに
華やかに深夜の寂寥を吸ひ
豐かに安らかに醒めず眠る。

獻欲

君は泣く偶像の我が心の前に、
君は狂ふ偶像の我が心に觸れて、
君は醉ふ偶像の我が心を懷き、
君は慄ふ偶像の我が心を放ち。
君よされど今淡き憂ひのみぞ
朧氣にかくて我胸に響き悲しむ。

黄昏

秋の日は街路の甍に落ち
風強く吹いて雲黄にひかる。

いづこよりか、
すゝり泣き、咽び入り
ちやるめらのうち濕り鳴り響く。

あゝ君の後ろかげ凝視れど
黄昏の薄暗に消えてゆく、
凝視れど塵埃の彼方へ——

かゝる日よ
別れて後の我が胸に泌む、
強き哀感の、またもの甘き
黄昏のその味ひ——

西洋婦人の短所と日本婦人の長所

哲學博士　三澤糾

日本の藝妓と西洋の婦人……日本の若い女のひかえめ……他人の爲に生きる精神……西洋婦人のわが儘……妙齡の處女を崇拜する男子……良人は自個の幸福の爲に存在す……日本婦人の美德……美術的の挨拶……綺麗な料理……發達したる婦人服……顏と髮……皮膚の色澤……美人の少き理由

西洋の婦人は一體日本の藝妓のやうな處があると云ふが、一寸其語の中に眞理があるやうに思はれる。まづ西洋では日本の女に比して化粧と云ふ事を太切に考へる、それから他人殊に男子に會つて其の機嫌を取り調子を合はせてゆくと云ふ事を子供の時から心掛けて居て、談話の中に割り込んで自分の知つた事知らない事にかゝはらず、他人から輕んぜらるゝか否かを懸念するでも無く、話しの相槌を打ち、可笑しくもないのに笑ふ、丁度可笑しくても笑ひを怺へると云ふ日本に反して其表情を顏から眼から手に動かしてそんなに深くも感じない事でも相手の感興を助けて喜ばせる、廣くいろ／＼な事を聞きかぢり讀みかぢりして誰れのお相手にでもなると云ふ一寸藝妓と云つたところがある、其れが敎育があればある丈け話しても面白いので女のとてすから殺風景な男同士の中にあつて交はる事は一寸話して遉がに愉快てす。一體西洋の男子間の交際は日本の男子間の交際よりは遙かに殺風景で情合の濃やかなと云ふやうな點は無い、感情に觸れると云つたやうな話しは無い、男女ともさうですが、殊に男子間にあつてはセンチメンタルと云つた事を排斥し冷笑に附して了ふ、さう云ふ間にあつて女に交はると、餘り好い云ひ方ては無いか一寸爵晴らしになる、だから普通一般の友人として西洋の婦人と交はるには面白い。日本の若い婦人は男の前に默つて話しの相手にならぬばかりてなく、一緒に遊ぶと云ふ事も出來兼ねるし、まして無邪氣に男の心を喜ばすと云ふ修練も出來て居ない、こちらの方で交際の術を心得ざる我々の如きものは手持無沙汰て困る。しかし西洋の婦人はしんみりとした味に乏しいので自分の一家子供と云ふものを托して自分と樂を俱にする事は出來るが、患難を俱にすると云ふ點に於いては日本の婦人の如く確かとは思へない。つまり自分を沒して他人の爲めに生きると云ふ樣な事は、義理づくてなつた關係の上に於いては

勿論の事、自分が強ゐて求めた上に於いてもあまり無いやうに思へる。さうして男女ともであるが、殊に女子は克己の德に乏しい、だから其無邪氣な點は宜いが其の人の性質が善くない場合には其の修練を以て抑へると云ふ事が無いから、會つて度〳〵不快な目に會ふ事がある。て日本の婦人は家庭の中に於いて又廣い場所へ出ても、自分のいけないところを見て、克己して自分の美點を僅かに露はすから品が宜い、又人に厭な感じを與へると云ふ事が無い、之に比すると亞米利加の婦人の如きに至ては、實に我儘に育つた椀白子の樣なもので、教育のある好い家庭に於いては克己自制の德は素より養はせるものですが、社會一般の風習慣例と云ふものが婦人をして我一人──の感を起させるやうに出來て居る。日本では娘は弟妹の世話から兄の世話までする、それて長上に從順に仕へると云ふ事を教はり習つて來たが、あちらては娘の云ふ事はよし無理は無理ても幾分通してやると云つた風になつて居る、其れから娘が長上に對していろ〳〵な事をして上げると云ふよりは、寧ろ長上が娘に對して甘やかしいろ〳〵して呉れる、近所隣りの者が凡て自分の爲めに存して居ると云ふ考へがありはしまいかと思ふ程──少くとも我儘をしても差支無いと云ふ事に考へて居ると云つて宜い、其れが長じて十五六にもなり、少しく容貌でも佳いとか愛嬌でもあるとか云ふ事になると、今度は男の友達からして崇められるやうな鹽梅になつて居る、單に若い男が崇めるのみならず、妙齡の婦人に對しては一般の男子が非常に叮嚀に取扱つてやつて居る、十八九から廿歳にもなり一人前の娘さんの資格を以て押出されるやうになると、心前及び容貌の上に於いて十人前に勝れたる婦人に對ては四方から崇拜者が寄ると云つた風になつて居る、さう云ふ社會の狀態にあつては女の自負心を增長させるのは當然て、教育や家庭の躾はこれに對して抵抗するに餘程困難を感じるのであります。かう云ふ事が男子の身邊に蝟集した婦人を選んて妻としますならば其執着と云ふものは直ちに一變するになか〳〵難しい、だから夫の無理を我慢するとか、或は自分の快樂とか安慰若くは一己の學問修養等を犧牲に供して働くなどと云ふ事が一般婦人間に起り兼ぬると云ふ事は勿論、夫なる者は自分の幸福の爲めに存して居ると云ふ事を考へて居る心持や振舞が出ると云ふ事は怪しむを待たぬ、て、單にアメリカの一般婦人と云ふものが、其夫及び男子に對

して親切叮嚀ならぬのみならず、同じ仲間の婦人に對しても親切叮嚀てないと思はるゝのてある、勿論教育が幾分か進み理性が發達して居るから互ひに衝突する事などは少いが、自分を忘れて盡くし自己を損じても他の便利を圖つてやると云ふ事に至つては日本に比して少いこと同日の談てはない。てあるから日本に育つた教育ある婦人が行くと米國ては男女共てすが、殊に女子が好みます。日本の婦人は卑屈てあるとか個人性と云ふものが發達して居ないとか云ふ批評は下し得るのてはあるが、實際に就いては日本の婦人を好む、其れは米國婦人に缺けた德を日本婦人が有して居て、米國婦人は其德を缺いて居るから、矢張り心の底ては其の德を美と思はずには居られないのだらうと思ふ。即ち日本の婦人は謙遜、親切、叮嚀、躾がよい、ふわ〳〵したところが無くしてしんみりした味がある、其の好尚が質實てあつて又高いと云ふので或る婦人の如きは私に會して、日本人はアメリカ人よりも遙かにスプライズして居ると云つた、其れは單に例のお世辭からては無く、前述



の外に表はれた禮義作法を精錬して居る事である。例へば挨拶のし樣の如きものでも、日本人の挨拶殊に婦人の挨拶位心持の宜い美術的のものはない、物の言ひぶり、手のつき方、身體の使ひ方、日本の禮法はアートになつて居るのだが實際見て其のまゝが美術である。そして其の美術が佛蘭西の王朝時代の——我々が劇で見て居る外形上の美術ではなくして、其の心の底に矢張り美くしい心意氣が見える、禮法の精神と美術と云ふものが一體になつて居る、元來日本の美術と云ふもの丶特徵は其れが日常生活と離れないつまり美術と云ふものが日常の一行一動の中に入つて居ると云ふ事である。飯の喰べ方にしても亦同樣で、禮義に叶つた日本の飯の喰べ方と云ふものは甚だ綺麗なものである、喰べ物にしても料理の作り方が食べるものながらも其れすら矢張り美術を離れない。之を西洋の例へばロ—ストとかステ—キとか云ふものと、日本の口取りとか刺身とか云ふものと比べて見ても、日本の美術的趣味が日常生活中に入つて居ると云ふとが分る、成程西洋でもフアンシ—、クッキング——意匠的料理とても云ふものがあつて料理を飾らない事はないけれ共、それはつまり儀式立つた場合であつて、平常の料理と云ふものは滋養と口の味の外眼に訴へる料理と云ふものは餘まり考へて居ない、其の風は特に米國に於いてさうである、日本では別段飾り立てると云ふわけてはないが、漬物の切り方から、お吸物の中味の並べ方からして其の中に何等かの趣味を入れなければ承知しない、其尤も殺風景なるすき燒の樣なものでも、其れが日本の料理となるとチャンと肉を薄く切つて品よく並べさうして皿に盛つて來ると云つた調子てある。又家屋の樣なものにしても、日本人はいろ／＼かう美しい絨氈を敷いたり壁紙を貼つたり額を掛け並べたりするやうな事は餘りしないけれ共、障子の骨の拵へ方欄間の風入れの彫り方から違ひ棚の釣り方床柱の選み方から、さう云ふ實用的のもの丶中にさへ矢張り趣味と云ふものを發揮して居る。着物にしても禮服として日本人の紋付に羽織と云ふ姿、それから婦人方の衣裳の格などは世界何處へ出しても引けをとらぬ程發達して居るものだと思ふ、日本の着物と云ふものは忙しく立ち働らく今日の生活から考へると不便な點は免れないが、美術的には日本人の躰格に相應して殆ど完全な點まで發達して居ると考へる、しかし日用輕便と云ふ點から考へると、其の方は其の方で從來日本の方

て身體の勞働に從事して居る階級の者の爲めに洋服に劣らない便利なものも出來て居る。かの職人の着て居る腹掛バッチに印半纏と云ふ風なものは實に身躰の働きを自在にすると云ふばかりでなく餘程美術の要點と云ふものを出して居て、之を西洋の着て居るものとは比較にならないのである。

日本婦人の髮の結ひ方など云ふ事も亦是れ餘程發達を遂げて居るものである、そして其れが日本人の顏に合ふやうになつて居る、從來日本の人々は外貌を關はない處の宣教師達や、米國の女學生なんかに接して其れに依て米國の女の頭の飾りと云ふものを判斷して居たやうであるけれ共、頭の結ひ方と云ふ事など西洋でも餘程考へて居る事である、て、頭の結ひ方に關しても美術と輕便と云ふ事は多少衝突する事もあるのでしようが、しかし日本の婦人が是れまでの長い間に於いて爰まで改良を加へて來た其の髮の結ひ方を捨てゝ、西洋の假結のやうなものを採用し、其れて美しくなつたと思つて居るなどは、餘程滑稽な事である、殊に近年流行の所謂廂髮のやうなものは日本人の顏に最も應はない結ひ方ては無いかと思はれる。さらでも横に平たき日本人の顏をます〳〵平たく見せ、さうてなくとも鼻の隆くない顏をいよ〳〵中窪みに見せるものでは無いかと思はせる。それも過渡時代の產物として一時輕便なる束髮が流行したと云ふ事は咎めるにも及ばぬけれども、自分の容貌を佳くする爲めに苦心して居る令孃や奥樣方が、好んてさう云ふ醜い風をお取になるのは餘り感心せぬ事である、若し輕便を主にするならば日本にても矢張り輕便向きの髮の結ひ方なるものも存して居るてはありませんか。

其れからまだ日本婦人が外國の婦人に對して誇つて宜いと思ふ嗜みも數〳〵擧ぐればありますが、其の一つとして活花のやうなものは誰れが見ても、日本人獨特の趣味を表はしたものとして今更感嘆に堪へざらしむるものてしやう。

唯日本婦人の容貌、殊に顏貌色澤とが餘り外へ對して誇る事が出來ないものゝやうに思はれます、日本人の色澤の惡るいと云ふのは人種上の原因風土の關係と云ふ事もありましようが、又日本婦人が餘まりに自己を犠牲に供して、食ふべきものすら碌々食べなかつた事、運動休息の加減と云ふものを取らなかつた事とか、一家内及び一身の物質上及び精神上の苦勞を人知れず背負つて來たと云ふ樣な事が餘程關係して居るか

も知れない、かう云ふ點は日本の男子がわが同胞婦人と云ふものを更に一層立派にしやうと云ふ上に於いて考へねばならぬ點てある。此一點から云つても日本男子の婦人に對する道徳觀念と云ふものを改める必要がある。

其れから日本に割合に美人の無いと云ふのは今一つ原因として日本の藝娼妓の制度を擧げねばならぬ――こんな話しを婦人の前にするのは如何かと思ふが、姑らく議論として述べる――日本は藝娼妓までが美術的に出來て居る、成程西洋ても高等淫賣と云ふものがあつて容貌藝能の優れた者が日本の藝娼妓のやうな地位を保つて居ると云ふ事てあるが、しかし日本のやうに其の容貌の美其れから社交的の天性的技能と云ふものゝ上て優れ拔けたものを選り出して、是れを藝娼妓の社會に集合せしめた處は恐らく他にあるまいと思ふ。斯くの如くして選り拔いて集められた藝娼妓と云ふものは、多くは人種繼續の職掌から免除されて居たものなるが故、日本は代々美婦人滅絶策を取つて來たものてある。て、どうも日本婦人は概して容貌の美に於いて西洋の婦人に劣ると云ふ一事は遺憾ながら認めざるを得ない。しかしながら日本の婦人には之を補ふに精神の婦人美と云ふものがあるからして、形體美の掟木に當てゝ批判すれば醜いやうな容貌も人の心に映じては又甚だ心持のいゝ感じを起させる、それて西洋人も日本の婦人はチャーミングだと云ふ批評を下すのてある、即ち顔のエキスプレッションから又は一擧一動の間に自から親切優美その他男子が婦人に求めるところの徳と云ふものが表はれるからてありましよう。

日本の婦人は若い男子の心を喜ばせると云ふとを主として社會的選擇を受け來つて居ない、一家の主婦として又祖先傳來の家風を永く子孫に傳へる母としてどれ丈けの資格があるかと云ふ點を齢の長じた兩親親戚友人等が考へ合せて、さうして人種繼續の職務と云ふものを負はし來つたものてあり、又其の標準に依て敎育訓錬せられたものてある、からして家を治め子供を育てると云ふ上から考へて、必要なる根本的要素を備へて居る事に就いては決して他國の婦人に劣らないと思ふのてある。唯だ現代の社會と云ふものは從來と違つた德を婦人に要求し、又もつと廣い知識を母たり妻たる者に必要とするからして、是等の點に就いて日本の新婦人は西洋の婦人に學ぶ處があるだらうと思ふ。

（談話）

the reverse. It is not necessary that her clothing be made of expensive materials, but it is necessary that it should fit properly, and that it should become her.

—*Marden.*

示すに至らん. 婦人の衣服を作るに高價の品を以てせよと云ふ必要なしと雖も，其宜しきに合ひ之に似合ふ様に爲す事は，甚だ必要なり.——マーデン

Spring.

A: 'Time flies like an arrow.' Spring has come again.

B: Yes, the snow which covered the fields and mountains melted away. Now the long winter is over.

A: How delightful the spring time is!

B: The sun shines so brightly.

A: Yes, and there's not a cloud overhead.

B: Hear! birds are singing merrily.

A: Look! Swallows are come.

B: Have you already heard the song of a nightingale this spring?

A: Yes, and it brings with it the pleasant visions of lovely flowers.

B: See! the young grass looks so fresh and green; the leaf-buds are beginning to swell and blush.

A: How fresh everything looks!
By and by we can hear of flowers.
This is the reason why I like spring best.

B: Indeed, it is so. Remember youth is man's spring.

春

甲: 光陰矢の如く，また春になりました.

乙: 左様，野も山も覆ふて居つた雪も融けて. 長ひ冬がもう過ぎました.

甲: 春はまあ何と愉快てすこと

乙: 日もよく照ります

甲: 左様てす，して空に一點の雲もありません.

乙: あれ. 鳥が面白く囀つて居ます

甲: あれ，燕も參りました.

乙: あなたは今春もう鶯の聲を聽きましたか

甲: ハイ，そしてそれと共に愛らしい花の面影が顯はれます.

乙: 御覧なさい，若草があんなに青々として生々して居ます. 木の芽が膨らんで赤みをさして來ました.

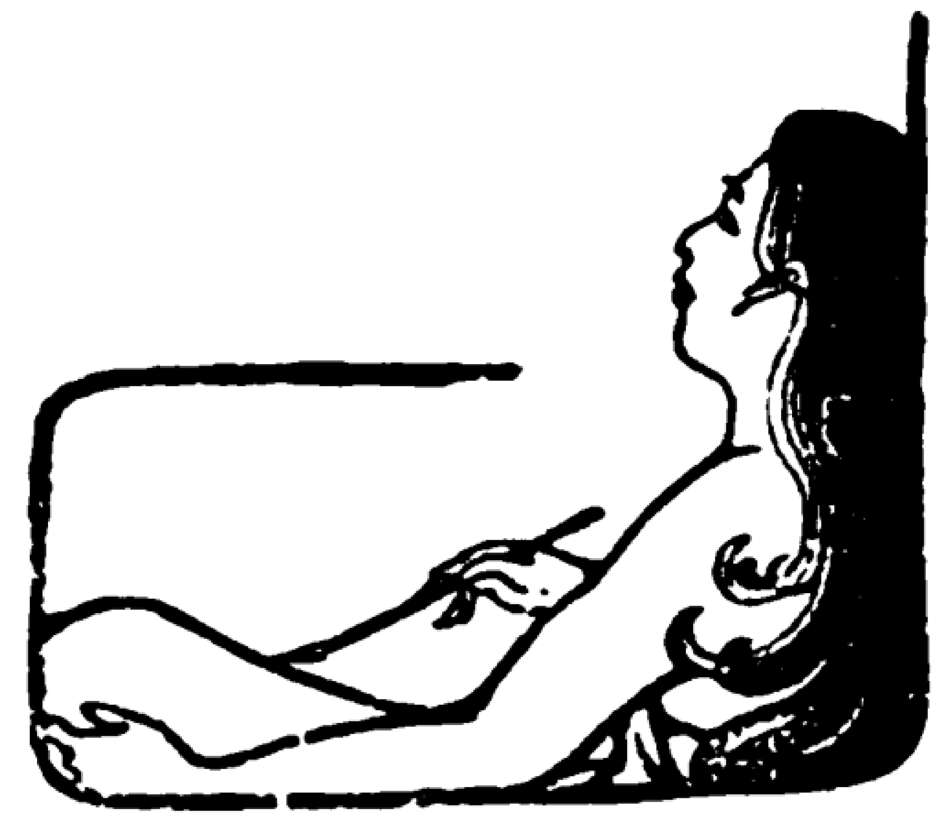
甲: マア見るもの聞くもの皆目新らしいこと. 其内に花の便りもあるてしよう. 是てすから私は春が一番好きてす.

乙: 本當にそうてす. ソラ妙齡は人生の春てすもの.

英文

（第六年第三回）

星野久成



Dress.

We may say that good clothes do not change the real man, but we know that a well-dressed man, especially among strangers, meets with a better reception than a man who is badly dressed.

It is useless to say that this ought not to be so. It is so. A man with a good coat upon his back walks with a better grace than he who has a bad one.

A great aid to correct manners is the practice of the frequently improving one's dress. Has that young lady who. to the superficial, seems overfond of dress lost anything by giving the utmost care to her personal appearance?

No man would prefer to marry a woman who wears a soiled dress and hair-ribbon in preference to one who looks neat and fresh in frequently changed gowns and becomingly arranged coiffures.

A becomingly attired orator or lecturer is twice as effective as he who confronts his audience in ill-fitting garments or whose linen is other than snowy white. Similarly, a woman's clothes affect her manner, either for naturalness. ease, and graceful deportment, or for

衣服

善き衣服は人の實質を變せずと言ふ者あらん，然れども服裝の整ふたる人は，服裝惡しき人よりも好き待遇を受るは吾人の知る所なり，未知人の間に在ては殊に然りとす．

此樣の事ある可らずと云ふは無用なり．是れ事實なり．善き上衣を背に纒ひたる人は醜き上衣を着たる人よりも歩るく格好見よきものなり．

風俗を匡正するの一大補助となるものは各自の衣服を屢々改修することを實行するに在り．外面には，衣服を好むこと其度に過ぐと見ゆる少女は．自身の外貌に至大なる注意を拂ふが爲めに曾て何物か損失せしことありや？

何人たるを問はず屢々上衣を更へ適宜に首飾を整へ清楚たる裝を爲したる婦人を捨て，却て汚れし服を着し汚れし紐にて髮を束れたる婦人を撰び之と結婚せんと欲する者あらんや．

適當の服裝を爲したる演說家或は講師は不適當の衣服を纒ひ雪白を失ひたる襯衣を着て聽衆に對する者に比して恰も二倍の効果を奏すべし．

之と等しく婦人の衣服は其風俗に影響を及ぼし，自然にして平易なる格好よき容儀を與ふるか，否らずんば其反對の結果を

青年時代の小泉八雲に就て

高濱長江

ハーンが青年時代の書簡四十三通は、今ボストンの人、エドワード、ザー、クラベム氏の手にある。クラベム氏は靑年銀行家で、大の日本贔負である。同氏の語るところに依れば、ハーンは一八六九年すなはち十九歲の時、英國から新紐育を經て、オハヨー洲クリヴランドの一親戚に賴らうとしたが、其の親戚には尋ねても逢はれなかつたのか、それとも他の理由があつてか、賴らないで、ヘンリー、ワトキンと稱する一印刷工と知合になつた――ワ氏は當時四十六歲で今は八十六歲であるが――ワ氏はハーンに植字を敎へ、旁々其の工場で用ゐるに至つたらしい。でハーンは每夜通勤したのであるが、ワ氏が居ない時には、通報文に滑稽畫か、短文を添へて、机上に置いたまゝ歸宅する――この短文の或物は保存されてあつたので、今はクラベム氏の手に渡つてゐる――その内にシンシナタ市の一婦人と心安くなつて、取交した文が十七通ある、孰れも一八七六年の日附である。讀者は此の手紙が二ヶ月平均三通となるに注意ありたい。これを見ると其の婦人に對するハーンの調子は愼重で、品格も高くはあるが、どうも一通りの情誼ではなかつたやうに察せられる。だが後ちに至つて、二人は其の受取つた手紙を互に返したのであつて、ハーンは之れを日本に來るまで秘藏して居たけれど、遂にワトキンに渡してかれにもするやうにと賴んだ。して一八七七年に新紐育へ轉じ、更に日本に至るまで、常にワトキンとは通信を續けてゐた。一昨々年ボストンで出版されたハーンの書簡集の内に、この頃の書簡が多く收められたが、ク氏の手許にあるのはハーンが自寫の鉛筆スケツチ、端書、短文、寫眞等の外に四十三篇の書信である。

ハーンの事蹟を編纂して書をなした人にはワヨーナ、エム、グールド氏あり、ウエツトモア夫人がある。前者の "Concerning Lafcadio Hearn" は多くのハーン崇拜者を怒らしたさうな、だが其れは鋤を鋤、猫を猫と言つたまでの事に過ぎない。後者の『ハーン傳付書簡集』にある "Dear Lafcadio." とか云ふのでは逆てハーン其の人の眞假は分るまいかと疑はれる。彼の米國の批評家クレランス、ステッドマンが、ポーとも比較するに足ると許した稀世の天才も其の手紙に依て、いゝより善く其の爲人を知るの便りとなるのは、疑をさしはさまれぬ。ク氏の通信によれば、この書簡を得るのには七八年間の苦心の結果であつたと云ふ。若し我邦に於て、氏の爲にハーン研究の資料を供給する人があれば、氏の喜びはいかばかりだらうか。殊に同集の内にはハーン自作の詩が一篇あるとの事だ、この珍らしい詩の寫しを余はどうにかして實はふと思つてゐる。



短篇小説

水野葉舟選

○町の娘（地賞）

名古屋　月霊子

正は朝から田中と飲み始めた。お高は一人て淋しさうに、次の間の火鉢に凭れて居た。

『僕ア全く繼子だね、否社に於てのみぢやないよ、一族の……社會の……』

酒に縺れた田中の聲が、泣くやうに聞える、

『まあ、いゝさ、君！』

と正が其の尾を、叱るやうに言つて引とつた。から元氣だとお高はすぐさう思つた。さうして酒だの、何だの彼だのつて無暗と運ばせる正の大きな口を、はらはらしながら、そつと月末の勘定の高を見積つて見た。

『高、お前も晝飯を一緒にどうだ？』

『は、いゝえ私はあとて……』

お高は襖越しにさう答へた。起つて白粉や石鹼や洗粉やの雜々はいつた小籠をさげて、默つて外へ出た。

『ご飯なぞ食べなくつたつていゝ』

お高は正の怯々した顔を思ひ浮べて、胸がすくやうに思つた。『たべないつたつていゝ、死んだつていゝ』くりかへしてさう思つた時に、わけもなく泪が眼に滲んだ。外には門松が立並んで、初春の日かけが長閑に流れて居た。子供達のつく羽根の音や、まり唄が一層春らしい感じを與へた。殊に盛裝した若い女の往來は、層一層街に色彩を加へて、お高の眼にも思はず恍惚させるやうな事があつた。其の日は生憎曙湯に『本日休業』と貼紙がしてあつた。お高は寒い街を又引返して、最う一丁遠い湯屋へ行つた。

歸つて見るとまだ田中は飲んで居た。二人とも烈く醉

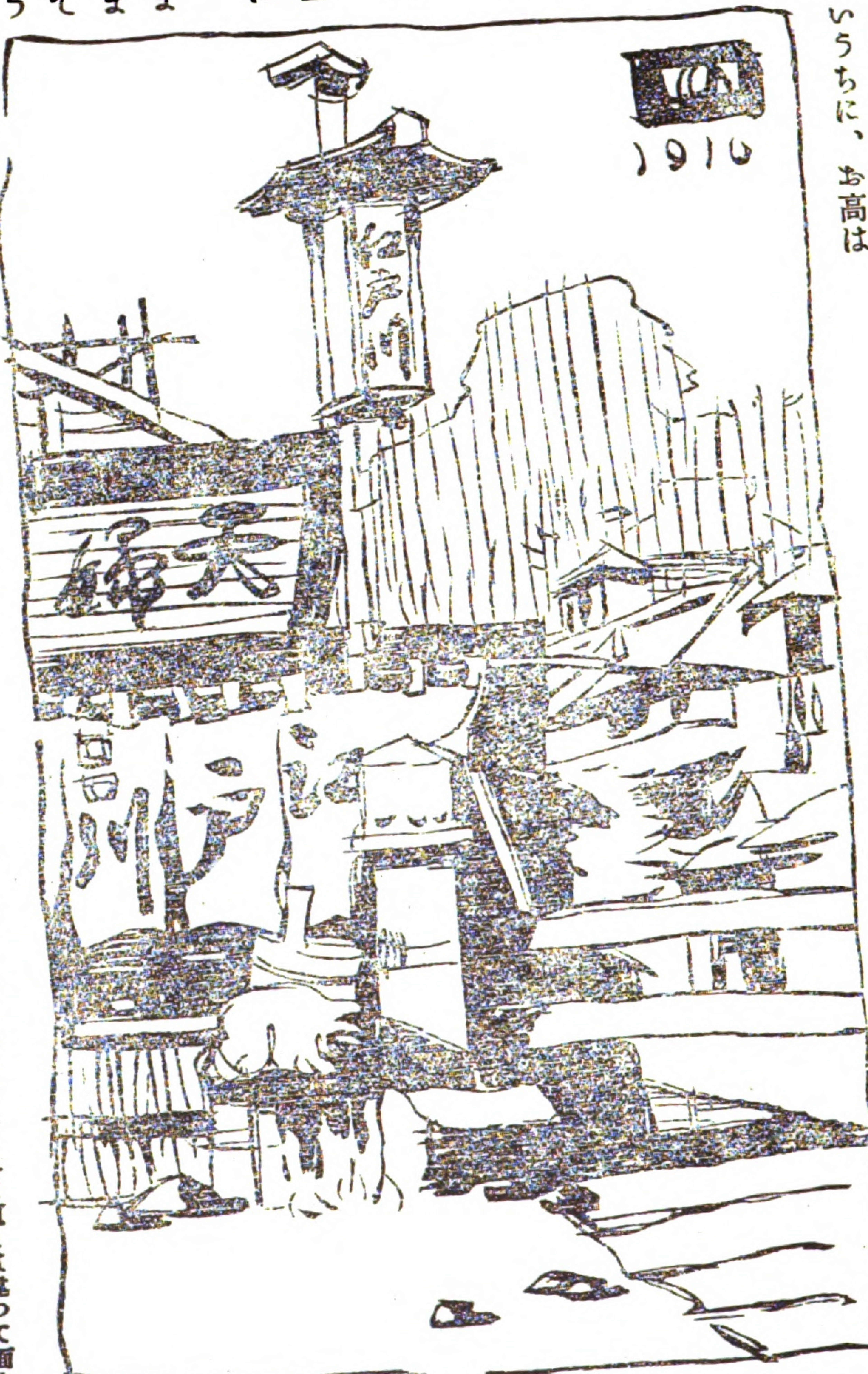
て居るらしいが、何か眞面目な話でもしてゐるらしいひつそりして居た。
『奥さん、どうも濟みません一日お邪魔しちまつて』と暫くして氣の毒さうに田中が言つた。
『まあ、そんな事を……』と狼狽しながら、お高は矢張り襖越しに、愛想よくさう答へた。然うして何だか急に自分をさもしく思つて『何卒ごゆつくり、何にもお構ひ申しませんで』と言ひ足した。
田中は遂々灯のつく時分まで遊んで居た。夕食にお高は二人の給仕をしながら、自分は一寸箸をつけたぎりでやめた。何としても、意地惡い、我儘な氣が何所までも〳〵つきまとつた。
『一寸其所等邊まで一緒に行かないか』
田中が歸るときに、正は其の酒臭い呼吸をお高の頰へ吹きかけるやうにしてさう言つた。
『寒いやうだから』といつてお高は灯を透かすやうにして田中の方を見た。
『さうですな、今夜は馬鹿に寒い』と言つて、もう先に庭に下りてステッキで身を支へるやうにして居た田中は、其時急に氣がついたやうに、オーヴコートの衿を立てた。
『さうか、寒いてな』と正は未練さうにお高の傍に佇つて居たが、氣遣はしさうに澁り〳〵田中の後から出て行つた。
嫌だ〳〵とお高は胸を抱いて泣き出した。家へ歸るんだ、歸ろう、何でもいいから歸るんだ、叱られたつていい、あゝお父樣私が惡かつた、默つて家を逃げだすなんて、もう將來孝行しますからどうぞ〳〵赦して……あゝ淋しい、淋しいんだもの、お父樣、お母樣。
お高は矢も楯も堪らなくなつた。賑やかな明るい家の有樣がまざ〳〵と目に見へて、晴着を着た妹のニコニコした小さな顏が二つ姉ちやん〳〵と呼ぶやうな氣がした。お高は机にうつ伏した儘、心ゆく限り泣いた。
『今晩は……』と障子のそとに人が立つた。
『は、』と云つてお高は夢から醒めたやうに、衝と起ち上つて障子を開けて椽側へ出た。人は船橋といふ菓子屋の婆さんであつた。
『ご都合は?』と言つた。『は』といつただけでもうお高は眞赤になつて了つた。
『あの旦那樣お留守で……ちやまた、何卒お氣を惡く遊ばさないで、恰度ついでだつたもんですから』と、言ひ〳〵婆さんは幾度も小腰を屈めて出ていつた。

正が寒さて眞蒼な顏をして歸つて來ると、まだ其所に坐るか座らないうちに、お高は

『今船橋の婆やが來ましてね』と尖つた聲でいつた。

『船橋？』と正は眼を丸くして、そして『失敬な』と嚙んで吐いたやうに云ふ。

『だつてまだ貴郞濟まさないんてせう、どうしてくれるつて何だか恐ろしい權幕て居たわ、あゝあゝお正月匆々から何の因果て……』とお高はお了ひを獨言のやうに言つて、聞えるやうに、ホツと大きな溜息をした。



（天賞）　江戸川附近　赤坂　ゆめみる人

「町の娘」と言ふ題がいやだ。書いてある事は題とは違つて面白い。正

と客とはクツキリと描寫してある。お高の心理をも少しつゝこんで書いて欲しかつた。終がよかつた。

○日　記（入賞）

横濱市　矢野きみ子

八重子が突然死んだと言ふ知らせを、たみ子から受けて、一週間許り過ぎた。

世は春となつて、人々の心も浮き立ちさうな、暖かい、櫻の花も一片二片開いた日、せき子は夫に、勤めの休みを幸ひ、留守居を頼んで、內田町のたみ子の家へ電車で行つた。

あの丈夫な、快活な八重さんがどうして亡くなられたらうか、たみさんの知らせては、只急病でとのみしてあるが、何だか不思議だ。始終妾達に、女だつて力がなければ駄目よと、一所に學校にゐた時分など、隨分殿方に負けない亂暴をしたあの八重さんが……。

神奈川行電車に、港橋から乘つて斯麼事を一人じつと考へて、乘客の少い車內を見廻した。

午後の二時頃の日は、車窓から差し込んで、もう袷ては暑い位てある。――

たみ子が一人机に向つてゐる處へ、せき子が行つた。

たみ子は嬉しさうな笑みを見せたが、眼は何となく曇つて、顏の何處かに暗い處がある。せき子は其顏を見て、相變らずだと思つた。が、自分も誘はれたやうに、眼を潤ませた。

「よくまあ……」

之れがたみ子の最初の言葉てあつた。

机の上の置時計が二時半を示してゐる。庭の木の影は長く、新しい疊に印される。

「之れ妾に？」

せき子は少時話の途切れた處で、たみ子が本箱から出してくれた手帳形の書物を受け取つて斯樣言つた。

「えゝ、お八重さんの遺品ですから貴孃永久に取つて置いてやつて下さい」とさつきより曇つた眼を伏せて、たみ子は言ふ。と、

「えゝ、妾一生持つてゐますとも……。然し妾之れ戴いて好いのでせうかしら……」

「本當はもつと何しなければならないと、お母樣もお仰つてゐましたが、何しろ未だ他の方々にもやらなければならないつてね。――貴孃、其れ八重子さんの日記ですのよ」

せき子は斯樣言はれて開いて見た。成程日記である。

――今更遺品を貰つて、八重子の死んだ事も知らず、

見舞もしなかつたのを悔んだ。たみ子は八重子の死の事に就いては、ほんの僅か許り、病んでから三日目、苦しみに苦んで亡くなつたと言つたきりである。然し此日記を見れば解かると言ひ添へた。――

「本當に貴孃方のやうに獨てゐればですけれども、いくら自分で思つてゐても、勝手にゆきませんのでね……」とせき子は自分の言譯半分に斯麽事も言つたが、たみ子は少しも惡い顔をせず、さうですともと言ふ樣に同情した。

『一月十日。晴れ。

近日になきあたゝかなる日なりき。學校より歸へりたるに、岡野町の叔母君來たり、明夜かるた會のある由、妾に來たれと强ひ給へり。好ましからねどもあまりの事に行く約束せり……。

一月十一日。晴れ。

あゝ何たる吉日ぞや。そも吾生れてより、今宵の如き思ひなせし事なかりき。あなめでたき日とや言はん。嬉しのかぎりなり……。

彼の君の兄上は早稻田に通學遊ばさるとや、吾が兄もそれなり。彼の君は今ある商館に通ひ居る由、ゆかし……。』

「たみ子さん……」

せき子は突然呼んだ。

二人して日の傾いたのも知らず、八重子の日記を、額をあつめて讀み始めたのである。――

「はい……」

答へた聲は細かつた。たみ子は一度あらましは讀んで知つてゐる。然し再び讀む今、深く考へ込んでゐたのだ。――二人は又眼を日記に移した。

『二月。日。曇り。

妾はお友達をあざむいてゐる。あざむく事は一番妾の取らざる處であつた。今でもさうであります。けれど〳〵――あゝ妾はどうして斯麽になつてしまつたのでしやうか。

何んだか羞かしい。もうお友達にも顔向けが出來やあしない。欺き――何とまあ大膽なしうち、大きな罪でせう……。

二月〇日。

日曜で殊の外天氣もよい。今日は〇様と川崎へ行く約束がしてある。九時〇分までに停車塲で逢はなければならない。それだのに、突然東京から兄

樣が歸へつて來た。あゝ泣きたい、行かれない、どうしやう。――……然しそうなつたらば、之れも皆自分の罪だ。○樣にはお氣の毒だが、兄樣の爲め行けない……
……。」

二人は無言のまゝ、顏を見合せた。

日は落ちた。何時か女中が點けたランプは明るく、部屋を照らして、二人の顏を華やかに見せた。

其晩せき子は夫なる人に、日記を見せた。而して一人でも多くの同情者を、友の爲めに得やうとした。――暗い運命に支配されてゐるやうな身――と言ふ句が、日記にあつた。せき子は幾度かくりかへして其處を讀んだ。――然し床に就く自分には、もうまるて日記の事など、忘れたやうに夫を見た。

枕元のランプの光は淡い。――

釘が一本ぬけて居るやうな感がした。惡い作とは思はぬが、急處を書きそらした感がある。

○泥濘（入賞）

相模　加藤婦美子

生垣の上から今が盛りの紅梅の梢が見えた。もう二三町といふ處になつて小夜子は足が進まなくなつた。霜解けの泥濘が下駄の齒を吸込んで、一歩歩くのも容易な事ぢや無い――。小夜子は路傍の塀際に身を倚せて「まあ、わるい道！」と眉を顰めて呟やいた。

此惡い道を、しかし小夜子はよく往來した、雨が降つても風が吹いても――去年の今頃だつた、雪の降る朝行つた時は「や、此雪に」つて澄さんが吃驚なすつて、美沙さんが「雪位に怖れる小夜さんぢや無いわ、ねえ。」と被仰つて笑つた事がある、彼の頃はほんとによく行つた。

小夜子は美沙子と姉妹も及ばぬ親しい友てあつた。學校を出てからも毎日のやうに美沙子を訪ふた、そして、光り輝く樣な處女の希望と憧憬とを語り合ふた、バイオリンも一所に習つた。兄の澄は美沙子と同じく喜んで小夜子を迎へた、而して、春の小鳥のやうな二人の樂しい談話は、その沈んだベースを交へて更に色彩を豐かにした、折々は外國の小説の談などをしてきかせた。

小夜子が美沙子の留守に行つても、澄は決して小夜子を失望せしむる事は無かつた。小夜子は時とすると却つて美沙子の不在をよろこぶ事さへあつた。繼母の

手に育つた淋しい小夜子の爲に、それが如何に懷かしい家てあつたらう。懷かしい家――、しかし最早さうては無くなつた、澄を夫とよぶ美しい丸髷の人が一人殖えてより、其家の空氣は何となく冷たくなつた、小夜子は胸が固くなつた樣に、笑ふ事も冗談云ふ事もできなくなつた、而して美沙子さへが遠々しくなつた樣におもはれた。しかし小夜子はそれを理由の無い事だと思つて、もとのやうにしよう〳〵と努めた。

「小夜さん、何故此頃は來無いんてす、僕が嫁持つたからつて、何も遠慮する事あ無いぢやありませんか、姉も妹も毎日待ちこがれてるんてすよ。」と、澄は例の屈托の無い調子て云つた。「何故此頃はそんなに外々しくなさるの？」と美沙子も怨じた、斯ういはれると、小夜子はます〳〵自分の、妙にいぢけた心の變化が呪はれた、そしてもとの通りに遠慮の無い親しさて美沙子や澄に接しやうと努めた、が、それは空しい努力てあつた。此頃は一月に一度も行かなくなつた。



（地 賞）飲食店の少女　水戶　玉川すま子

今日も心を激まし〳〵して此處迄來たのだが、どうも氣が進まない、あの生垣もあの紅梅の花が何となく冷たく嘲ける樣に見えて、辛いやるせのない思ひが胸をとざした。

「此雪に、おいての御褒美に、僕がけふ御馳走しませう、M先生の許へ持つて行かうと思つたんだけれど小夜さんにやかへられない、僕が三日かゝつてとつたんです。」つて、其時澄さんが、御自分で兎を料理して下すつた。あゝ、あの時分は樂しかつた、と、小夜子は又そんな事を考へ出した。

其時の澄樣と今の澄さんと些とも違ひはしない、美沙さんや阿母樣は無論の事少しも違ひはしない、夫を何故自分は其時の樣な心持になれないのか。何故？何故？と小夜子は心に問ふた。

何故といふ理由は無い、決して無い筈なのに、唯何となく其處へ行く事が辛い樣な心苦しいやうな――澄樣が憎らしいやうな、美沙さんにはづかしいやうな――。かう思つてきて、小夜子はつきつめたあるもののかげを心の底に見た。而して小夜子は頰を赤くそめた。

否々、小夜子の衿持はつよく夫を否定した、決してそんな理由ぢや無いのだ――。では、何故斯う足が進まないのか、もとのやうにいそ〳〵とした心持で美沙さんを訪ふ事が出來ないのか、小夜子は自分で自分の心が判らなくなつて了つた。

「あら、小夜さん、まあ。」と、眼の前に美沙子が立つてゐた。「さ、おいてなさいな、何を考へて？何故そんな處に立つてらつしやるの、さあ。」と美沙子は性急に袖をひくやうにして催した。

「あゝ。」と小夜子は晴れやかな美沙子の笑顏を見上げて淋しく笑つて「あんまり路が惡いんでね。」と辯解らしく云つた。

「此頃些ともおいてなさらないんで、如何なさつたかと思つてたのよ、兄樣も今日は居ますわ、待つてゝよ。」と美沙子は先に立つた。小夜子は頂垂れた儘後に跟いて歩いたが、「ひどい泥濘ね。」と小さな聲で云つた。一種のさびしさが弱い胸をついた、小夜子は瞼が熱くなつた。紫の褪めて横緒が泥によごれた。

幾度も拜見した事のあるやうな話てした。たゞ上手には書いてある。整つても居るもつと心に泌みて來るやうなものを書いてお見せなさい。

【秀逸】

○晴子　白菊

めづらしく晴子は庭に下りた、霜解のザクザクした庭をあても無く逍遥したが、頭の中は何とも云はれぬ寂寞に襲はれて「あゝ此儘、何處でも可い、人の居ない里に行き度い」とさへ思つた。殆無意識に歩いた、そして運動塲に出た、其處は樹木が一本もなくて、極日當りがよい、ブランコの下に來て倒れかゝる樣にグッタリ膝をついた、

「廿五、あゝ厭だ、何時の間に歳をとつて了つたのだらう、何が面白くて生きて居るのだらう、こうして寂しい生活をいつ迄續けなければならないのか」と痛切に思つた。

「勝郎はもう、六歳、早いものだ、子供は日ましに成長くなつて、私の衰を他所に、面白く暮して居る、何故、何故人は私の事を若いと云ふだらう、六つの子の母、四十の人の妻を……」こんな事はいつも晴子が所在ない時に考へる事だつた、今もそれを激しく思つた。

「何故、こんな事を思ふ樣になつたらう、四五年、いえ、二三年前の私は決して此樣では無かつた、人の面白いと思ふ事は面白かつた、それだのに」晴子はこんな愚にも付かぬ事は考へまい、とふと思つた、そして日外入浴しながら湯槽の中で恍惚なつて、自分の來し方、行末といふ樣なものを考へて居た時急に上氣せて危く卒倒れさうになつた事を思ひ出した。

「身體に支る」、と思つて、ふと膝頭の邊に痛い樣な寒氣を覺えて急に身を起した、輕く附着いた土を指先でハタイて足を部屋の方に向けた、

部屋は南向の日當の良い六疊である、晴子は此室で氣に向いた折は自分の襦袢などを縫ふ事もある、思ひ出した樣に琴の袋を拂ふ事もある去年の夏逗子に遊んでから、いつとなく、ハーモニカの音を好く樣になつて午の前後の靜かな時は小箱から出して唇にあてる事もある、此頃の樣に日の短かい時はこうして譯なく一日を送るが春先などの日の暢びた頃は全く無聊てあるてあてもなく着替をして何處かに出掛ける、行先は大抵呉服屋か舊の友達の許かてある、良人の洋行中を實家に歸つて、切つめの月給では及びもつかぬ贅澤をさせて貰つて居る親友の多美子夫人の服裝や裝飾は理由もなく晴子の胸をそゝつた、「せめて氣に入つた着物でも着なけりや」此寂しい胸は堪へられぬと思つた、そして晴子は出來るだけ贅澤にした、若く作つた、左樣いふ風に變化つた當時は人も驚いたけれど此頃ではも

う、誰も許して少しも怪しまない、陰でもいふ、向つてもいふ「木野村樣の奥樣の御美しい事」と、

常座はそれで滿足を覺えたが、いつかそれも倦き足らなくなつて、此頃は人の譽言葉も却つて忌はしいと思はれる樣になつた、晴子の心は日に增し冷へてゆく、云ひ難い煩悶に身をもてあました、

今晴子は物憂さうに椽側に上つた、そして庭の方を向いて部屋の座蒲團に斜に座つた、

「御手紙が參りました」といふ聲に驚かされて顏を上げると此頃來た書生の遠野が叮嚀に膝をついて一封の手紙を差し出して居る。「ハイ」と云ひながら身體を少し前に屈めて其手紙を受け取つたが畏まつて一禮してやがて去つて行く遠野の後姿を晴子は見送つて居た、そして此寒空に足袋もはかぬ勇氣を健氣にも思つたが貧しい彼と思つて不憫にもなつた、よく勉强をする樣子だからいづれ給料を增加してやりませうと思つた、

ふと氣がついて我に返つた樣に、今の手紙の裏を返して見た、神崎謙吉と達者に書いて住所は朝鮮京城何々、

「まあ神崎さんが朝鮮に……」晴子の胸は一寸躍いた、

手早く封を切つて讀み下すと中は、此度當地に轉任したといふ事を書いて御實家の御兩親にも御手紙差上げたがなほ御出の折は宜しくとばかり簡單な轉任の報知だ、晴子は一寸顏がホテル樣な氣がした、神崎は父の親友の遺子、托されて晴子と共に成長した、五つ上の今年三十の活動盛りだ、まだ晴子が木野村に嫁ぬ時分、父は内々謙吉を將來見込あるものと賴もしく思つた、——當時大學に通つて居たのである——けれども晴子の眼中には獨力事を成すといふ樣な靑年は置かれて無かつた、彼女は十八の時當時卅を三つ四つ越した今の夫に嫁いだ、そして物質の缺乏を感じる事が無かつた、

が二三年經過つと何となく寂寥を覺え初めた、そして自分には他の友達の樣に眞にスヰートな新婚時代の心持があつたかしら、と思つた、悲しい樣な氣が襲つた、自分の初兒の勝郎も大して可愛いとは思へなかつた弟位により思はなかつた、よく實家に行く每、もうあとが在つても可いにね、と言はれると晴子は厭な顏をした、時に夫にそれを云ふと「フム」と云つて笑ひもしない、怒りもしない。

晴子は今の生活と娘時代の事とを比較べて見た、神

崎の手紙を持つて何故か耻しい樣な思ひが湧く、今更何の申譯のないといふ樣な氣もした。

其夕、夫が歸宅つた時、夫の歡樂に倦き切つた樣な顏をしみ〲眺た、肥大えた體軀に近く座して給仕しながら、色々なとりとめもない想にふけつた、

其翌日は珍らしく氣が落付いて唐ちりめんの切など出して針箱の前に座つて一日暮した、夫の歸宅は遲かつた、十時になつてもまだ歸らぬ、多分また今夜は何處かで泊りであらうと思ひ乍ら書生に云ひ置いて寢やうと玄關の方に來た、遠野は二分のランプを灯して一心に勉強して居た「學校は早かつたね、今日は」と聲をかけると吃驚して遠野は顏を上げて周章て丶會釋をした、「お前二分ぢやあ暗いだらう」といふと遠野は「ハ、イ、エ」とドギマギして云つた、少し紅潮のさした頰を晴子は可愛らしいと思つて見た、十一時になつたら門をしめる樣にと云つて晴子は森とした廊下を寒さうな響をたて丶部屋に歸つた、女中部屋の方の樂しさうな笑聲が洩れ聞えた、

晴子は床の中でハアと歎息をついた。



（人賞）花見る人　紀伊　稗田みつ子

これでは、平凡だ。これでも、少し書き樣によつては復雜にかけもするだらうし、立派なものにならうのに。

○夜道

牛込　みち子

今日は一時頃淀橋から葉書が來た、其には「かねて

御奉職の件につき面談致度候間本日午後五時頃御來宅下され度候」、といふ走書だ、で私は行道に先一時間かかると見込んで、四時頃早稻田の家を出た、そして行く道々空想とでもいはうか、自分に取つては都合の好い事ばかり――「存分早う奉職先が有つたなあ、何處だらう、可成市に近い所をと前以て希望を述べて置いたのだから、ふいしたら今自分の通つてゐる此所大久保の學校ぐらゐかもしれない、さうだつたら通勤に便利だなあ――なんて勝手な事を思ひつついそ〳〵と歩いた、

　其内に餅屋の角を曲つて四五丁いつて淀橋の通町へ出た、ホッとして帶の間の時計を一寸出して見ると、五時には未だ二十分もある「大丈夫」と私は又前よりもずつと元氣よく歩いた、そして左側の瀨戸物屋を第一の目標に歩いて來た私は、お茶椀や皿や、猪口や平鉢などを澤山並べてある店の横の潛門に手をかけた、此間一度尋ねてよく勝手を知つてるもんだから、突々と玄關まていつて案内を乞ふた、すると、

「未だ歸つて見えませんが、何卒お通りなすつてお待ち下さいまし」、といふ奥樣の挨拶、で私は此間――始めて來た時に通された八疊で待つことにした、消然と火鉢を抱へてぐるりと室内を見渡した、床には依然狸の腹鼓を打つてる軸物が懸つてる、其下の書籍箱には、何やら洋書がずうつと並べられてあるけども、明が光さないので分明とせん、只、唐熙字典といふのだけはぼんやりしたげな中で劃然と目に映る、やがて臺所の夕飯も片付いて、子供達が次の間で罪のない聲に桃太郞さんなどを合唱した時に、丁度六時が鳴つた、

「噫、待遠い、雜誌か繪葉書でも出して吳ればいゝに」、と心では思つたけども、催促するわけにもゆかず、仕用事なしに火箸を弄りながら、灰の上に何やら書いては消し、消しては又書き、自分にも覺えぬ樂書をしてゐた、其内に四十格好の薄い細い髯を無理にぴんとさせたといふ樣な、而も丈の低い人がフロックで訪ねて來た、十分間位、其から間をおいて、貧相らしい瘦せた顏の小學校の敎員らしいのが、「視學は御在宅てすか」と大きな聲でやつて來た、其所へ奥樣も小さいのを抱いて出て來られたので、今迄一人で持ち切つてた火鉢は中央へ出て、四人のお相想となつた、奥樣は絶えず氣にしてお茶を入れてくれる、彼是する中に七時がなつた、「どうしたんでせう？ 随分遲い」、「お歸りになりませんね」、「ひよつとするとどつかへ寄つてるの

かもしれん――」、「でもね」、「人樣をお呼びしといて：：：」、などとり〲の事をいつたが、奧樣は次の室へ立つて、「先お退屈紛れにこれでも」、と鹽煎餅を一盆持つて出た、却中愛想の好い奧樣で僅の事でも、ハツハツと愉快て堪らんといつた樣な笑方をする加之話上手と來て、順から順と話題を持出して來るもんだから、客もつい其方へ釣込まれて「ハヽア」とか「フン左樣で」とか相槌を打つてゐる、けども私は何の興味もない、ばつかりが、奧樣が關西の人は誰もお鹽煎なんてあることを知りませんよ、と言へば、無いものを知る筈はない、と言つて見たくなり、東京の人はお煮付なんか砂糖づくめにするくせに又斯んな辛いものを食るかと思ふと矛盾とか言ふが、實際さうだから仕方がない、と言つて見たくなつて心が苛々する、そして足音がすれば、さうか、さうか？、と聞耳を立てて居た、

遂々二人の客は待期がつきたと見えて歸られた、其も其筈だ、大方八時にならうとするのだもの、

「本當にあなたはお呼しといて歸らんなんてねえ、」とさも氣の毒相な奧樣の口振、私はすかさず、「何か私に就てお話でもありましたか」、と聞くと、「いゝえちつとも」、と眉の間にしわを寄せて首を橫に振つた、「ハア左樣で：：：」、と私はさりげなく言つたものの、氣が氣でない、「私だとてさう每日出るわけにも行きませんからねえ」、とふて言葉の一つも胸先までは出たが、「一體、お世話を願つた弱みは此方だからと思ひ返して强いて笑顔の一つも作つて話をして居た、が遂々三時間も待つた揚句私は徒足をさされた、仕方がない、通へ出たが月のない夜道、――女の足で大久保から、戶山の原を歸るのは心寂しい、恐しい、と思つたので私はとぼ〲と田舍町を新宿の方へ向つた、何だか馬鹿にされた樣な感がむら〲として不滿に堪えん、寧ろ情ないつと聲張上げて泣きたい樣な氣がする、あゝ私は美しい希望に滿々て上京してから今日で二月餘、殆八十日といふものは每日〲斯うして職を尋ねることに消されてしまつてゐる、否未だ〲此先どうなる事か不解ないんだ、と淋い自分の前途を想ふて私は思はず知らず便ない淚をこぼした、今に小雪でも降つてきさうな寒い晚の暗い夜道に立ちとまつて。

一種の型にはまつた作だ。文章に輕浮な處がある。

○殘り物

德島縣　野菫

今し方迄霰が降つてゐた時は、四つ子迄が（雪やこ

ん〳〵）と騒いてゐたが、今は最う一人も見えない。

灰色の空は一層低く、此小さい里は壓へられるやうである。冬暖いと誰にも口にせられてゐた此頃を、今朝の大霜、續いて軒の垂氷に、常ならば夜のひき明からチリン〳〵、ガタ〳〵と騒々しい荷車の響もせず、二三里山から、日毎に出す割木、木材……等擔いだ人の影も見えない。けれども村端の鍛冶屋は、ひとり鎚の響が騒々しい。此所を通りかゝつた男、三十五位である、大きい紺の風呂敷包を背負つて急がしう過ぎていやに暗い隣の家に這入つた。日は西の山に見えない（持つて來ましたぞ）今の男は斯う言て上框に下した（まあよく、寒いに、さあお暖り）の此家の主人は、火鉢からほてつた赤ら顔を離して、火鉢を押した、（お便を有が度、遲くなりました）と男は頭を下た、（何？急だ事も無が、話すと見たいと言ふので……）（さうかな、有が度、私は最此れにや弱つてゐるので……）と風呂敷包を主人の方に押した、

主人は其れに返事をせず、包みを解いた――

中からは洋服が出た――黑羅紗が一着、

主人は、重さうに持ち上げて直ぐ下に置いた、そして上着の裏をはぐして（此れや暖いだらう）と言つた、

（それが狐二十八匹の頭皮ぢや、二つ宛耳が揃つてろう）、主人は成程と云つたやうに先々を手て押す、

（惜しい物だなあ）と矢張り押してゐる、

（さうよ、何時かも話した通り、何さま防寒用に弟が註文へたのだから……そして滿洲へ行く際に死んだもん〳〵）尚ほ語を續けて（思ふて見りや可愛相よ）と聲は小さく、震へてゐた、

（彼までに出世してなあ）と主人は漸く手を離して火鉢にかざした。男はハタ〳〵と煙管を敲いた、

（此の毛が最とふくらんでゐさうな物だなあ）、男は待ちかまへたと、言ふ如に煙管を口からはなして（それは斯うぢや、彼んな肺てなやつだつたから、學校の先生達が蒸さなけりやと云ふので、蒸したからよ）（さうかな、最う大丈夫だなあ）と其を頰にあてた、（此れが着物て有たら譯やないけど）と寂しい顏、（それても養家が大した家だと云ふから金なんか……）（何？一文もだ）煙管をとつて頭を振つた、

（ても昨年來た時かなあ……圓さつを東に澤山……

……）（其がぢや、彼なやりつ放しな男だから、宿屋でも何所でもサバ〳〵出して了ふからな）と尚續けた、

（少とも私にや廻つて來んのさ、今ぢや私が一番困り

よ、此村の學務委員等が、見込が有るつてて少しの田地迄彼に入れて了つて、馬鹿な夢を見たのさ、借金許り殘されて……)
(其りや誰でもさう思つたわ、山から高等へ通つて居た二三人の中で變つてゐたからな)
(うむ彼の時は妙だつたわ、彼て仲々親思ひでな、私等に迄、兄々言ふてな)と大分元氣づいた。
(十八の時から、四國や臺灣をとび廻はつて、漸々大阪に落着いてゐたに、最う少しすれば何うにかなあ:……)と又とりなほすやうに、(彼れて仲々養家の娘は大事にしたとよ、おかしなもんだ)と強いて笑つた、



今と昔　下繪　小堀とし子

主人も耳をかたむけて居たが、ニツコリした、
(そして此れは幾ら位と思ふかな)と主人が出拔に言つたので、あはてたが、急に男は悄げた、
(それかい、元は大した金が掛つたが、何ぼう新しうても:……其れに何うでも金にしなきやならんからなあ!何うだ二十圓には……)
(え!二十圓――高くは無いが此の邊りぢや、仲々うんと云ふまいよなあ)主人は心配らしい顔付である、
(さうでも有らうがお前樣も弟と何んだつたから、まあしつかりやつてお呉、又私も其れだけや知るから、と煙草入を仕舞かけた。冬の日は早暗くなつた今日は格別、其所此所の雨戸の音がガタ〳〵と急がし

さう。

（何樣にも願みますぞ）と男は頭を下げて立ちかけた（其りや出來るだけ、やつて見ますぢや、歸るかな）男はうなづいて、此れも弟のらしい黒びらうどの襟巻を無造作に巻いた、そして（又其内）にと頭を下げて此家を出た。男は取られたやうに暗に消えた！と鍛冶屋の前でパッと照らされた影は他目もふらず、俯向いた後姿で有つた。

大家ならば、彼れ程出世した男の物なれば、家の寶、否、後の思ひ出にもと、倉庫にても藏はれやうけれど生活に追はれる大方の世の人は、肺病で逝つた殘り物其れも此男のは一度も手を通さぬと言ふ物迄も、同情の涙一滴もないかの如に、斯うして賣り拂れるので有る、噫！逝きし人、家をさへうる兄なる人。

又も鍛冶屋のけたゝましき鎚の響、暗の空氣のゆれるを覺ゆる、男の悄然たる後姿が浮ぶのであつた。

結末の作者の抒情風の一句はいらぬ、全体には新しい味に乏しい。

○若き女同志

土佐　寂　静　子

十二月と云つても雪さへ降らぬ南の國は暖い、空も初秋の様に清く高く澄んで正午過は綿入の背はホカホカする、衣子は一人晝の休時間をワイ〳〵騷いでる友等のどよめきを遠く聞きながら、太陽を受けぬ教室の裏のジメ〳〵した黒板塀に倚つてホッとした。すぐ其處の一間も隔たら無い、小い水仙の花を圍んで話してゐる一團をジッと見詰めた、三人とも同じ格好の廂髪に白粉の眞白い華美好み、時々三ッの頭が三角形をして囁き合つたり合點き合つたりしてはドッと笑ふ、濕つぽい空氣を華やかに搖がしては衣子の胸に重く壓付ける様に傳へる、彼京樣の顔!! 知つてる癖、余の事て憎らなるわ、此麼人も居ない處で何を話してるだらうきつと男學生が、結婚話だわ」衣子は見ぬ振して注意深い疑深い眼光にチラ〳〵見る、とふと前方でも矢張り氣になるかそつと見た憚らしい瞳とパッタリ合つた。

衣子は背けるでも無いと思つてると「まあ衣樣なのちつとも知らんかつたわ」京子はニッコリして寄つて來た、後の二ッの廂髪の顔が驚きの瞳に振り返つたがジロリと衣子の上から下まで見下してさげすむ樣に笑ふ「何だ何處にさげすまれる處があるだらう!?」衣子も冷笑した。「衣樣如何したの此頃は甚いお見限りね」媚びる樣な表情を作つて、ツンとしてる衣子の肩に手

を掛けて顔を覗き込む、衣子の胸はポーッと熱した、温しい血が込み上げてきて、以前の樣にニッコリ「姉樣!!」と縋がりたかつたがすぐ「彼の僞の笑の中に熔けて耐るもんか、此場合出來るだけの冷靜な態度で以てさんざ欺かれた埋合せしなくちやあ……」と、「そりや其筈よ、もう近い中に奧樣になる方と」一寸言葉を切つてもつと〳〵强い事を言つて遣らうとしたがジッとうつ向いてる相手を見ると急に和らいで「ひとりでに懸隔も出來ますわ詰り別世界なんですもの……私はね、此先何樣て一人ぼつちに成る寂しみを今から除々に味はつてるのよ」心にも無い弱い事を云つてる中に胸は次第に穩かになつて來た、心がしんみりとなつてきた。

下句に「ね、姉樣!と甘へたかつた。京子は「衣樣、妾は違ふわ自然に懸隔が出來るんぢやあ無いわ、別世界だなんて衣樣は少の間に契約を破つたのね」優しく白眼んだ、衣子には今の言が非常に白々しく聞ゑた、姉妹の契約を破つて彼樣仲間と親しくして居ながらまだ白ばつくれて!頭が赫となつて、フヽンと嘲笑つた。「京樣大變お話に御急が入るのね彼事早う決めなくちやあヽヴァイオリンの貴女はコバルトて好くつても……」ほんとよ色彩に富んでらつしやる貴女に是非……」二人の廂髪が土をいじりながら不平相に云ふ。衣子には聞えよがしに云つてる樣に聞えた。京樣「短歌會催るよりお召の品定めが肝要ね……」と冷笑した。

午後の二時間の授業中に京子は此麼事思つた。「衣樣の今日の心は何樣しても解らない私の結婚するのをきつと不快に思つてる事だけは明瞭だけど……妾だつて實は惡かつた、姉妹と迄契つた衣樣に一言も云はず他所から聞いてそれを不滿に思ふのは尤だけど、幼い時父母に死別れた衣樣は何も彼も私に相談してた、妾が衣樣を思ふよりもつと〳〵衣樣は妾を慕ひ信用してた妾が嫁つた後は?あヽ若し私が一時熱中して吹き込んだ獨身主義を遂行して一生不幸な人に終つたら私の罪も決して輕くない純潔な無邪氣な少女を欺いて不幸に陷れた罪はまぬがれない」、一時薄心の静まつた、女の世を悟つた樣な京子は手帖を裂いて、「靑春心の燃え安いとは云へ女の道でも無い獨身主義なんか振り廻した事を思ひ出すと恥かしい賢明な衣樣は何樣にか笑止かつたでせう……たとへ結婚しても愛らしい貴女の御名は忘れません……やがて優しい奧樣に成られん

ことを蔭ながら祈つて居る」と云ふ樣な事を書いて衣子に渡さうと思つた。

衣子は中々先生の講義なんか聞く氣には成れなかつた。「噫妾は欺かれた！情深いと思つた情は皆僞だつたと思ふと腹立しい噫、私は亦元の寂しさに歸るのだ、「世の女は何樣して此樣平凡なんてせう周圍の迫害も壓迫も甘じて受けてる、美衣に白粉に人を僞つて然して誇としてる、覺めない人は苦痛も煩悶も無いでせうけど衣樣!!覺めた二人は一生、一生獨身生活を清守して幾多の眠つてる女性の反省をうながして……」空間の或物を握り得たと云ふ樣な燃ゆる樣な輝やかな瞳は胸に殘つてるのか、偉い人と姉の樣に慕つてたのに其は皆欺むかれてた、あの文學論も宗教論も、噫京樣も矢張り平凡な人だつた、金の前は坐く哀れむべき人だ、慾を滿す爲には聖い契約も破り人をも欺く、彼女自身も常に云つてた、世の女に娼婦の淫心の無き者は果して幾人てせう!?と云つたつけが京樣は矢張り其れに捕へられた弱い人だ、噫けれど果して妾は强からうか幾多の誘惑に勝ち得られうか!?あゝ京樣は十九、自分は十八だ!!」ホツと太息して吾に返ると身中がボーツと熱して居た。小い胸が騷いて居た。授業が終ると京子はすぐ手紙を持て階下に衣子の教室の入口から覗いた以前はよく此樣して熱せる手紙を交した、衣子はチラと其姿を見てハッとしたがわざと知らぬ振して「貴女大急ぎて歸らないの？」傍の友にニッコリ云つて、他の入口から後も見ず去つた。京子は「餘りだ!!」とじッと見送つた。

自分は女の小說を讀むだ經驗が少い。或はこの小說の如きは女の作者が習慣的に……と言つたやうに取り扱つたものかもしれないが、とにかく女の感情——愛に對する同情、異性の分ちなく起す女の嫉妬と言ふ事だけは味へる。たゞ作者はその境にありながら、自覺してそれを見て居ず、自分も情感的にその中に沒して居る、欠點はこゝにある。この作者に向つて、現代の如何なる作家の作を讀み如何の感を起されたかを聞きたく思ふ、而してそれがこの人に對する批評の一つだ。

若い女と、私と、夜が更けるに從つて、互に默つて顔ばかり見合つてゐた、默つてゐると、次第〳〵と陜い人氣の無い庭に、引ばつて行かれる樣だ。

ふと女が、目を動かして、遠くてするもの丶音を聞く樣子をしたが。

『何處かでもう蛙が鳴いて丶よ』と言ふ。聲を低くして弱々しく、なよ〳〵して居る樣な言ひ方だ、私は何となく、

『蛙ぢやない！』と言ひ消した。

『蛙ですわよ。あれ、鳴いてるぢやありませんか』——耳には何にも聞えない。

女は斯う言つたが、ものに壓せられてゐる樣な聲をする。

私は女が言葉にしては言つてゐないで。何となく感じてゐる恐ろしさを、ひしと感じて耳をすました。

『蛙ぢやない、人が泣いてるんぢやないか？』と言ふと、

女の顔色が急に變つた。目がきらつと光つた。唇がかすかに顫へて、

『人ぢやないわ』と言ふ。

葉舟氏『響』より



詩

河井醉茗選

○赤き實（天賞）

神戸市　田中落葉子

淋しい――
靜かに土に殘る自分の足音まで淋しい
いひ知れぬ寂寞が手をつないで
私をとり圍んで迫つて來る
私は歩まずに寂寞の捕手となつた
あゝと汚れた土藏の壁にもたれて
――
空を仰いだとき華かな夕日はなかつた
沈んだ大空に鳩の羽をふき散した樣な
白い雲がとんで居る
何だか自分の上に降つて來さうだ
とじつと見て居ると目につひた
赤い柿の實が――
葉もない細い〳〵枝の尖端に只一つ
――
ゆら〳〵として今にも落ちさう
何ともいへぬ心もとない
ぢつと危ぶんで居るけれど落ちもしない
風がふいてうごく
早く落ちればと思つた
私は落てしまはなければかへるを得ない
默して樹の下に近よつて仰いて見て
たまらなくなつた
あゝあやうい

詩の心持と云ふものが分らないで、盲探りに作つてゐる人が大多數であるのに、此人は詩を解してゐる、詩の心持を味ひ得る人だから作も樂に出來て、且同化力を持つてゐる、容易に得難いたまものだと思つて、自分にも大切になさい(評)

○新草原（地賞）

府下　鈴木春子

鈍色の大氣、物象つゝむ曇り日
しかすがに、嬉びの囁きぞみつれ、

こゝ——新草の原。
みづ〳〵し光の波は、微かなる甘き
香、若草は皆、醉ひふしぬ。
かゝる時乾びし聲の、暗がりの闇に
ぞ起れ、
「覺めよ！覺めよ！
　今ぞ、暗き波汝を沈めん——」
鈍色の大氣ものみな包み、
たゞ沈默せる曇り日の原。

新草原の如きみづ〳〵しい情調、散文に於ける貴讀の技倆から見れば、まだ〳〵詩には力を入れ足らぬやうに思ふけれど、流石に藝術を解してゐる人の作だとは思へる（評）

○薄霧（入賞）

筑前　中原登美子

ほの白む湖の彼方、榆の小林、
引きはえしうす霧は、
靜々と流れ初めぬ、
冷やかに朝風渡り、
色もなき有明の月浮ぶ。
朝霧はつと重く、
水面深く垂れて、
湖をおほふ。
日は照らず、月は沈まず、
かくて今、
翻る雲の如き、
白鳥の影を見ぬ。
ふと浮ぶ、
幻か、はた今見る夢か、
過ぎし日に、わが胸の戀の木の、
紅の花咲みて、
飛び去りし凶鳥の白きごと思はれつ
白々と空は明りて、
またゝくま、
朝霧はあな晴れても行くか。

詩に威容あり、殊に第二聯太だ佳（評）

【秀逸】

○窓の障子

A

——雪の日——
窓の障子の明り。
しばし事もなし、白き室。
折々は、歎欷上る
泣頽して、あはれ其ひきつり、
寒げにも、はたなやましげにも——。
かゝる時ふぶきは來る——痛しる
神經にと狂ひもかゝる、
其一時の强度の顫ひ——そのすゑに
細く强く、いやはての嘆音もるゝ
あゝ——洩るゝ——障子の面
そも、しばし。かくて障子は、
熱をふるひぬ。
白き官能のしびれ——神經の、
痛みいまいづこ。
くるへる熱の發散、
みうちに保ちがたき——、
熱のみちびき、其間歇熱——。
見つむる窓の障子の苦悶。・・・・

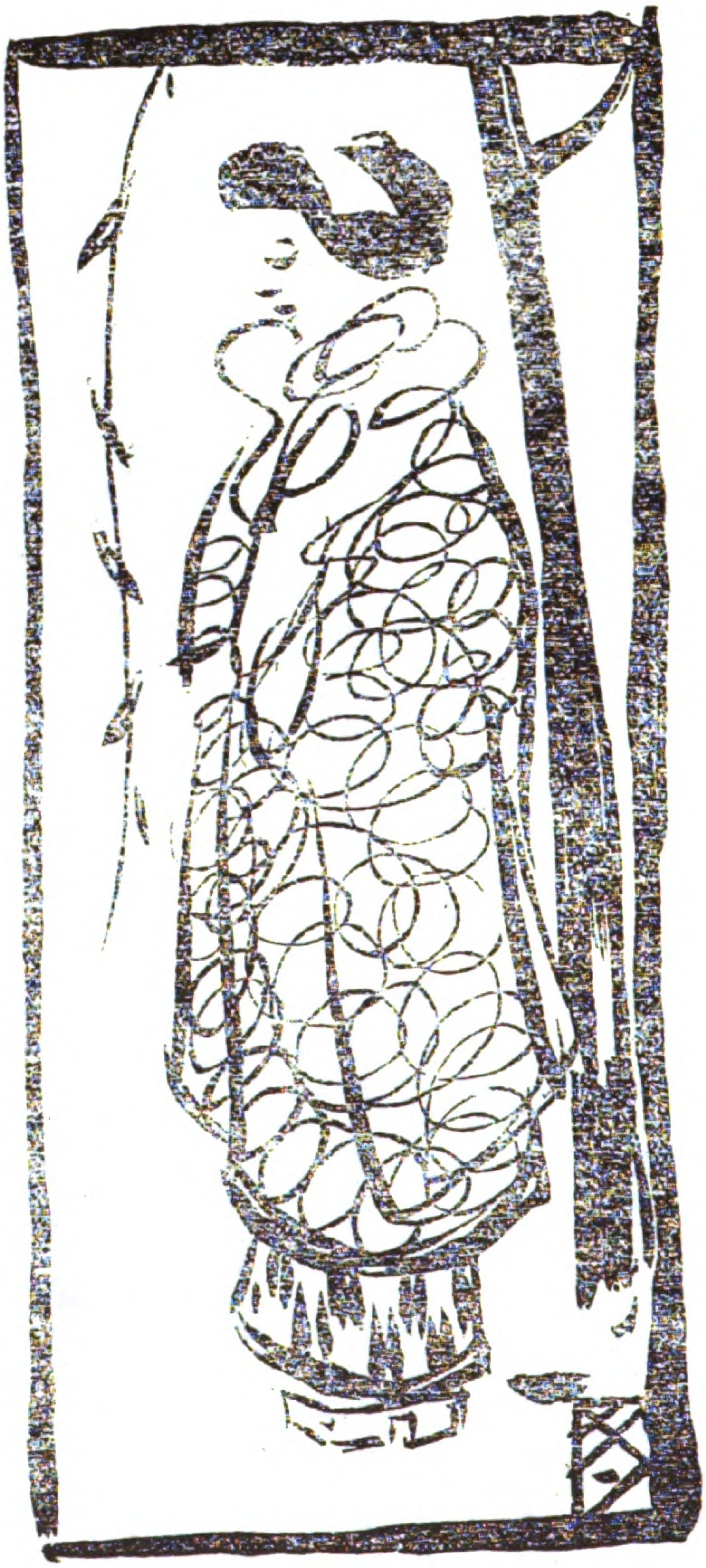
群集の中に罩り、官能の働きを利かせて近代詩の面影に肖かよはさうと試みた健氣さは嬉しいが、これではまだ充分解つてゐないやうに思ふ、尤も官能の鋭敏と云ふことは、必ずしも詩の第一要素ではない、近代詩人は皆神經が過敏になつてゐるから、必然的約束として、

官能の働きが常人と異つてゐなければならぬ、異つてるやうに粧はふのではない、自然に鋭敏な處がなければならぬ、切に讀書と注意力を養ふことを望む(評)

○冬

和泉　金田代志子

高い空、
冷たい風、
流るゝ雲、
靜かな冬の日。
雜木に吹く風にも
細い水の音にも、
潮の遠鳴にも、
淋しい、冷たい、
聲がひそむ、
山々の雪の上に
弱い太陽がさして
靜かに、遠く
冷たい光が輝く



春若し　新潟　村田すみれ

あゝ冬、あゝ冬、
自分の胸も今
冷たい、靜かな
淋しい冬に
光と暗と
ひしめき、倦んじ
休らひぬ
そのしばしの間
とざゝれてゐる――。

何ものゝ深い意識もないが、冬らしい淋しい印象は一寸表はれてゐる(評)

○黄昏

名古屋　岸　次子

黄昏は物のかげより。
ぬすむごと、ひそかに、
されど

手ふり、足ふり
灰色の、むくつけきすがたや、
我はいま老松の下
仰ぎ見つ
心のふるひ――。

見よ、人よ、
そが打ちふるふ節くれし
無言のしもとを――
されば知る
粉に砕く骨の痛さを、
若き日の苦き泪のしたゝりを。

あゝ人よ見ずや、
若き泪の子
君こそともには見め
今、黄昏は暗を誘ふと、
光明を追ひて、西行くすがた――。

徹底しない、黄昏の姿はむくつけきものとも受取れない、あまり細工したわざとらしい作だ(評)

○病院の朝

豊後　與志野綾子

疲憊しきつてる弱い體を柱に倚せて
初春の朝の庭を眺めた
茫んやりした意識にうつる幻影は淡い
温かい生氣の滿ちた光と柔かい空氣とが
庭一ぱい滿ち滿ちて居る。
椿は紺青の葉と葉との間にふはりと開いて
表情に滿ちた色を浮べて笑つて居る
蕾は葉と葉との間から頭を出して
幼い春に歡んで居る
只、一人病院に送られた私
こんな平和な自然に向ふと
「御母様」と絶叫したい、慕はしい。
あゝ、年寄つた御母樣よ、
この痩せた體は……

私は、只泣きたい。
葉隠れに見ゆる向ふの廊下に
白衣の看護婦が頻に動て居る
急病――?危篤――?
其れでも、笑ふ聲が聞える、
あゝ、白衣の婦人よ、憎い……
今私の胸は只悲哀と、恐怖とに滿されて居る
この靜かな病院の朝に笑ひたい
併し呻吟して居る人を思へば――
あゝ、あの聲は隣室の肺病患者の聲
あの黴菌よ、あの顔よ、恐怖い。
情のない看護婦よ、只、悲しい。

如何に女性の作とは云へ餘りによわ〳〵しい(評)

○夢

福井縣　片山千里

私は、昨日も今日も、夢を見て居るのです。向ふに見える、美しい輝く

家。其中に、誰か、私を招いて居る。
早く行かう。行かうと、走るけれど
も、動けぬ、何故動けないかと思つ
たら、私の着物の裾は、ピタリと、
をさへ付けられてゐる。辛い、苦し
い。

散文詩も斯う云ふ處から第一歩を踏出してゆくのは安全で宜い、人眞似をしてえらさうに見せやうとするのはいけない、只、誠實なれ（評）

○たよりなき心　金澤市　かつみ

さゞめきに、わが心ふとみだれぬ、
音もなくゆるゝ緋のカーテン
ありと見し幻像のそのまゝに、
消えゆく淋しさ――。
やはらかき洋燈のほのほのふるひ
床の上のエスの御像をまはりて
焚く香のけむりの快樂とぞ燃ゆる。
かゝるとき、さゞめきの後の沈默に
しめ〳〵と雨ふりて
胸の壁ぞくづれゆく。
あな、絶えがたき腐蝕する肉の香よ。
たよりなき心もて、ふと仰ぐ
かの御像よ、かつはまた、
淋しき、か弱きわれを囚へゆく
そのおだやかなる笑顔よ。

色彩で云へば塗り方の濃淡を誤つてゐるやうな心持もある、正しい處もある、意味のない處もある（評）

○深夜の洋食店　日暮里　かすみ子

中央にすゑられし大テーブルに、
かけたる白布はゆら〳〵と、
吹き入る風にあふられつ、
籠に盛られし果實の、
つやゝかに電氣にはゆるリンゴ、
はた香の高きバナゝよ、
見る〳〵數のへりゆきて、
ナイフの音のする〳〵と、
かたへに皮のうづだかう、
フロックコートの醉漢六人、
まなざしすゑて猶もあふる強き洋酒
物すごきかな、
互に吐く氣焔の刃、
狂ひなばいたでおはさん氣配
タイムはたゆみなく過ぎて行く
あゝ十一時、
やがてボーイのドア口に、
夜の更けしをつげゆくを、
うなづきし六人、
燃ゆるが如き息吐きて、
わしづかみにせしオーバコート、
シルクハットも横樣に、
荒らかに階段下りつゝ、
猶もきこゆる猛り聲、
たふれたる細長きコップ、
ブランデーの空瓶に、
電氣の光輝やきて、
あゝ卓上の、
いたくも荒れし狀態よ。

添削するには全部を變へなければならぬから其まゝにして置いた、これは勿論散文詩に作りなほした方が宜いので、文語の詩にするに

は、觀察がない（評）

○かへり花

茨城　黑澤とよ子

私は幾度かくちつけた、かへり咲の
櫻の花に。噫……「僕はきつと生れ
かへる、その時には、あの櫻にかへ
り花を咲かせて見せる」と、君の言葉
は、痛切に……痛切に私の胸にしみ
入つてゐるけれど、君のたましひは、
最早もはや、死んでしまつたものと、
思つてゐたに、二年過ぎた今日、こ
のやさしい花がさいたもの、まだ君
の魂は死なないのだ。「さらば君よ君
よ、二とせ前の、君そのまゝに生れ
て……」と、私は身をふるはしてく
ちつけた。
しかしかへり花は、熱烈な、私の唇
にはもの足らぬ。あゝつめたい。只
かすかな香があるばかりだ。
あゝ君はやつぱり……。

初めの說明が下手だ、一句か二句て濟むことを多く言つてゐる、後の方のは好い（評）

○つきかげ

越後　佐藤浪子

シツトリ湯氣の籠つたお湯殿、窓か
ら蒼白い月影がさし込んで、心地よ
く濡れた湯槽にパツとちつて居る、
青みを含んだ月の湯槽……灯に反
いて乳房のあたりへ香の高い石鹸を
塗つた、灯影に反いた胸が美しい、
あゝ私も月の光を浴びて居た、めぐ
る血潮の幽かな香が、ボーつとした
湯氣の中へのびて行く心地がする、
いつ迄も〳〵斯うして居たい。

能く女は湯槽を歌ふ、美しい人は肉體を愛すること深き故か（評）

○草の小道

鳥取　安木春子

おどろいて、私は思はず足をとめた
スイスの邊りを聯想させる杉木立！
これは煉瓦工場の跡！
足をうづむ牧草の中の少道！
幾度か夢に見た……それにそつくり
てはないか？
私はよくこの道で鬼婆に追かけられ
たり
魔ものゝために暗い恐い所へつれて
行かれた夢を見た
そう云へば後に足音が……
お、お、鬼婆が!? 逃げなくつちや—
—早く—逃げなくつちや　足がた
ゝぬ——足が——あゝ——矢張り夢
か知ら？

夢にみた道と、現在にみた道と、融合してゆくところに面白さを見出す（評）

○雲

本鄕　望月麗子

雲が行く後から又後から、
不斷の雲は私の胸の空を絕えず通つ
て行く、
薄紫の淡々しい春の雲はもう行き
過ぎた、
白い輕快な夏の雲もいつの間にか行
つてしまつた。
今は靜かな淋しい秋の樣な胸の空に
ともすれば灰色の雲が通つて

追憶の涙に時雨れるが、
魔の様な形をした濃い暗灰色の冬の
雲に、
やがて、包まれてつゝ
しまふのかしら、
依然として雲は行
く。

何うも理性が勝つてゐて感興を殺ぐやうだ(評)

○孤獨　山口　小川よし子

荒涼の生の野は今
黄昏て、
澱める空は死の影
を
深く閉しつ、咽び
泣く、
聲はあたりに凋落
の——秋の姿や。
かゝる時不圖こそ去れや我が友は
矜りの瞳かゞやかに、
かへりみもせですた〳〵と、
悲苦の音のみ殘しつゝ
急ぐ……離別や。
我はしも愁の眼瞬りつゝ、
追ひてこそ慕へ遙かにも
友の行方を。
かくて又弱きこの身は戰慄きつ、
不安の闇をたぢ〳〵と、
曇りし面を上げ
も得で
孤り辿りつ。

酷習て歌つてゐる離別の情と何の變りもない二つ三つ新しい詩語があつた處て、それは餘り詩の上の價値に影響しない(評)



あさまだき　福岡　田中千代子

○雪の夜　西多摩　三ヶ島よし

星一つその垣間見も
許さないで
鐵の扉を固く鎖した
やう。
空は一面に曇つて
日毎にほろびる七色
の雪の世界の
終りをわづかに守つ
てゐた
悲しげな灯が冷たい息に消されるのを待つて
重い黑布のやうな幕を下した、
天と地とその間

蟲の羽音ほどの風もなく
萬丈の岩の屏風を立て廻したやう
秘密——何をつゞる秘密であらうか？
安らかにいねたる子等が
眼い夢からさめた時
そのつくられた銀の世界に、驚き叫ぶだらう。

○蛾

下野　しのぶ子

外はから風がふく、木の葉がペラ〱とんで窓に當る。ザヾと音する洋燈の心をかきたてゝ、本箱の引出をかたづけてゐたら、いつのまに來たんだらふ。——黑い小さい蛾が——露さんから來たお手紙の上にとまつてた。ヲツと鉛筆の先で一寸つゝいたらペサと羽ばたきして、黑い粉を散らして洋燈の笠にとまつた。又つゝいたら又粉を殘して。此度はどこへとんだか見えない。いやな蛾。どうしても見出そうと思つて手紙や、はがきを一ツ宛とつて見たがゐない。障子の骨をズツと見た。がゐない。此度は立つてふとんをはたいて見た、それでもゐない。どこへいつて仕舞つたんだらふ。氣味惡くなつた。

○暮て行く

越後　雲井の雁

窓を閉して今日もまたなやみ疲れた心、あゝ暮て行く一日、淅しい笑を湛へてぢつと空を仰いでる。
そびえ立つ幾つかの峯、雑木林は今、今吐息して生返つた、冷たい頬に涙を湛へて立つてゐるのは私ばかりてはありますまい、暗い影は木の影からも、水の中からも、ともすると私の心からも、月は仄めいて、うるんでゐる目なさし、見てる私の頭は重い、重い、
夢を生む青い光りをあびて泣いてゐる
靜かに、靜かに——星生れ行く一ツ——はた一ツ澄み行く空——に

○窓によりて

麻布　常世草

風に搖ぐカーテンの隙より
冬枯れの淋しき庭を、眺めよ。
あはれ——戀失ひし身の
空ろなる胸
あ、今より後のわれは
何を思ひ、何なかなさむ
淋しき心、君は知り給ふや
この思ひ……誰に語らむ。
白き梅
ふならぬ香室内に漂ふ。

○夜の野

播摩　さゝ舟

淋しい晩だ
自分は今末黑野の眞中に立つて居る。
靜かだ
隣村の緣日らしい　露店の燈火があちらこちらに見える
黑い人影があちこちしてる
自分はじつと其火を見つめた、何だか
咒ふ樣に見える　黄色の炎を上げて
私は思はず戰慄した
いつの間にか手に持つてた　ばらの花が
燒野に散つて居た。
美しい
此黑い燒野の花片の上で靜かに
れむりたい。
自分を咒ふ樣な火、其火のあるのも知らないで、
只々靜かに美しい夢をたどりたい。

○薄　暮

京都　粟木はな子

日は暮るゝ、日は暮るゝ、
萬象の薄き愁の光——
打ち顫ふ靜浴の琴の音よ——漂へる、
あゝ、あゝ、
淋しらの曲譜ぞ歎く。
かゝる時——胸の
戀の若草——
くしくもえて。……

しかはあれ、常暗を
あゝ悲し
思ひぞ出づれ——
涯もなき、我が愁ひ。

○光　り

常陸　本村桂月子

俯向ひてる私の頬へ、何物か、パツト强い光りが射した……が直ぐ消えて了つた、消へたのではない、確かに何所かへ去つたのだ……、と、今迄ザツと沈んでゐた魂が急に動き出した……そして直ぐ其の光りを追つた。
床の間のかけじに四角形の、强い光りが射してゐる、今の光りだ、何だらう……あッ鏡だ、庭で弟のいぢつてる鏡が反射するのだ……魂は直ぐ見つけた、が容易に近寄らうとはしない、熱心に見つめてゐる……瞬間、光りはつと床

の間をはなれて、障子に射した……あつ今度
は壁に……天井に……あつ、……又床の
間に……魂はすつかり疲勞して了つた、もう
光りを追ふ勇氣がなくなつた、と光りも疲れた
のか、室の中央の疊へ來て止つてゐる……動
かない動かない、いつ迄も、魂も…… 動かな
い、いつ迄も、いつ迄も……。

○おもひに

青山島　貞子

寂しいと思つて、目をつぶると又一しきりの風
樂しい想ひに胸轟かせた 春も過ぎて仕舞つたの
か？
私は泣いた、濡れた夜着の衿が……
身に沁みる樣に！
おもひに風が雨と無り果てた
音は寂莫とした夜に――
私は枕元の詩集を開いたが
心はキーツの詩になかつた
外は强い雨の音がセコンドを刻む 時計の音を消
して行く
遠い澁谷の汽笛がなつた
私の目は自然と夢路を辿つた

○心の望

麻布　花　子

蘇生して彷徨へる如――弱き光り
……殘りの光り、あゝ暮れなんとせる
冬の日はあまりに弱き光りかな――
あゝ云ひしらぬ淋しき胸を、苦惱せる
佗びしき胸に――强き鋭き動搖き
あたへよ――よしや愛き海原に、惱み

疲れたる船に、荒波、砕く巖角の
――戀しさよ、
淋しき時よ、萬象は、我れ立つ崖も砕け落ちな
ば――嬉しかるらむ
いと暗きこの天地も濃き黒雲の
はびこりて、一葉殘さず流しなば
――心滿たんに
――苦き天地、ゆくへは遠き草むらに
胸の苦痛もこのまゝに、秘密を守り、
問はず、語らず――
あゝ、枯れ果てたる少女の呼吸、
醉へる如き强き香に咽ぶ…… 呼吸の扉の唇よ。
永久に閉かじ。

○河　原

德島縣　野　蓮

私は步いてゐる――何處迄も同じ響のする河原
を――。
足を止めた、とハタと響が消えたゞ 船は川の中
程を西へ／＼行く――話聲がはつきり――次第
にかすかに――
風がない、汀の水波は朝日に、純白に 美しう。
何の響もしない。
後は長いやぶ續き――幕をはつた如 いかめしう
――人の村々遮ぎつてゐる
私は守て見ろ、さいの河原の如に思つた――氣
が遠くなる――
堪らずなつて二三步斜に動いた、と又元のやう。
何か知ら拔足て來るやうだ――何うする事も 知
らない、――唯わの／＼と震へて、
人の聲がする――かすかに、夢の如 私は急に歌
聲を上げた――氣强くなつた、船が向へ着てゐ
る、

○白い花赤い花

深川　林　秋月子

白い花と、――赤い花が、
絕ゑ間無く降つて來る
その下に私は立つて
じつと見た、
と赤い花が一團になつて、
――回り狂ふ
白い花が何も降る。
白い花も一團になつて
互にまわつて居る
と双方の中から――
白い衣着た婆さんと
赤い衣着た婆さんとが出た、
醒めた青春の夢
と小聲て一しよに云ふ
白い花も赤い花も無く只淋く――
机の上に日が差して居た。

○うらみ

府下　藤掛つれ子

あの時のあの接吻、それがあなたてなかつたら、
妾はあなたを怨みます。
赤い椿の落ちるのを見て、悶へのはての貴女に
似てる、と言ふた男が、眉の濃い妾の好きなあ
なたてなかつたら、妾はあなたを怨みます。
それだのに……怨まなかつたに……。
恐ろしい苦悶と痙攣との斷續に耐えかれて苦
しッ、ゝ妾の胸に頭をなげ あの白い前掛に喀
血――黒のくれなゐの朱の紫の――したあなた
を怨む。
限りない不安にわなゝく胸を、いだいて泣いた
妾は、妾はあなたを怨む。
……戀も冷えた……廿も過ぎた

新詩句

瀧のやうに向ふの森の雪が落ちた
（賞）土肥 眞子

熱い息をかけたいあのお月様に
（賞）ます子

あのスーッと飛ぶ流星は海に行くのかしら
しのぶ子

執着、木にすがつたまゝ萎えた花
望月 麗子

あけぼのゝ花は微かに眼を開けた
さゝ舟

静かなる湖上の水を掬ぶ手の白さ
馬越 昌子

ぼんやりと見詰た花が動き出した
勝崎 菊子

パンが何だ死ぬまでじやないか
むらさき女

あゝ苦しい黒い花にみち／＼た
栗田よし子

聲たて笑ふてみたがやはり淋しい
片山 千里

あゝ赤い火、私の胸の焰の火
紫水

いと若き女の苦悶ー顫えし吐息
山本 芳子

幾度寢かへりしたらう、冴えた神經
黒澤とよ子

私は今無意識に若草を蹂躙してゐる
味方こう子

美しい花、美しい鳥、詩にしたいやうだ
田淵 醉子

涙の流れた頬のやうな色、冷たい月
よしふ

耳が熱い、面が熱い、胸が熱い
香葉

胸の奥に蝶が舞び込んだー追ふても出ない
福西たづ子

走て心は野も山も川も海もない
篠田とみ子

風がある、電線のうなり聲
森中百鈴子

春の風、紅の畑が胸を通る
花子

村の鼠聲、遠い子守歌が聞える
木村桂月子

破れた翅、細い溝を流れてゆく
鈴木 小菊

朽葉の香がする森の中へ入つた
しらぎく

青白い月光木の葉はぶる／＼とふるえた
かすみ子

諸孃が選者の言を容れて、兎に角多くの新詩句を試作して寄せられたのは嬉しい、川柳式、俳句式の作はだん／＼少くなつた、勿論新詩句としてまだ何程の土臺も出來てはゐないけれど、此れだけの詩句でも集つたと云ふことは、諸孃が眞面目に試作した結果には相違ない。入賞の「瀧のやうに」の句は或は俳句に近い描寫かも知れねけれど、之を俳句で表はすと瀧のやうにと云ふ處が乾度弱くなつて、實景に適切ではなからうと思ふ、新詩句としては少し新の字を冠らし難い方の作だらうけれど選者の知つてゐる古今の作物中て餘り接しなかつた形容だから之を首位に擧げた。次の熱い息の方は確に新しい、何かしらお手本はありさうに思ふけれど、斯う一氣呵成に言つてのけた處に新詩句の面白みを發揮してゐる。



散文

編輯局選

○明暗（天賞）

府下　鈴木春子

おどおどした小鳥の囁きが、暗い氣の滿ちた蒼黑い槇の葉の内に起る。冷たい四邊の空氣は、絶えず不安らしく顫へてゐる。

獨り槇ばかりではない。樹といふ樹――甘い戀の美酒に醉つてる樣な南天の實も、若々しい空想にふけつてゐる樣な淺綠の八つ手の葉も、長い過去の回想に吐息してる樣な椿の葉も、皆鈍い灰色の大氣の内に漂うてゐるかの樣な曇り日の雜木林のなかを、私は無限の恐れと、身内をそゝるある大いなる力とに壓迫せられつゝさ迷うてゐるのである。

ぐわさりと、厚い葉の觸れ合ふ音がした。ふと瞳を上げると、つい其處のこんもりした濃綠の椿の樹が陰影深く搖れてゐる。

さと日が射した。四邊の樹々は一葉一葉に小さな白熱瓦斯を點ぜられたかの樣に、急に明るい光に滿たされた。私は何となく胸の底へ暖かい息を吹かけられる樣な、むづがゆい感じがして來た。

銀燭の光りまばゆき、百疊の廣間……のろふが如き羨望の色に滿ちたる幾千の瞳の雨の如くふりそゝがれたる水色の衣……うす紅の帶……何處からともなく、暖い香りが流れてくる。あゝ美酒の樣な其匂ひ……私は其香にのつて、華のやうな歡樂と幸福とが、ふわふわと自分の方へ漂うてくるかと感じた。

噫……何と、何と感謝したら宜しいであらう。……このかゞやかな四圍の光景の如く、神聖に汚れなき事を思ふさま歌うてみたい。叫んでみたい！私は頭から足の爪先迄、ぼーつとした感じに襲はれて、歌ふ力も叫

ぶ力も失せて、ぐたりと傍の樹の幹によつた。四圍の物象が華やかな彩をなして夢の樣に眼の前にある。‥‥

雲が出たか、日の光は又だん／＼に薄らいでゆく。薄れゆくと共に、何となく賴み少ない樣な寂しさが增して來て、果は全然、欺かれた樣な不快な感じが、胸一ぱいになつて了つた。

例のおどおどした聲はもう聞えぬ。‥‥

世の獨創力のない者が何んなに焦つても、認められない代り、授けられたる創作の力は自然に開展してゆくもので、其力があつて、然うして人格さへ高ければ他の追隨を許さず文藝の貴族的價値を其身に添えることができます、選者は此の如き言葉を幾百度も繰返して居ますが、眞理は一つです、あなたは今興に乘つてゐます、此際ウンと伸ばせるだけ創作の力を誠實にお伸しなさい（評）

○曲つた家（地震）

信濃　優梨子

ぎーぎーッ――。あゝ嫌、又あんな音がする。柱のずれる樣な音が‥‥。

何故今夜はあんな音がするのだらう。

家が曲るのだ、と思ふと、其音が苦になつて什麼しても眠られない。

枕元のランプが、消え入りそうに薄暗い。右側にすやく／＼眠つて居る妹が、羨しくなつた。

ぎーぎーッと、頭の上邊りて又音がする。其度、私は斯う何かて締められる樣な氣がする。

「此頃はめつきり家が曲つた樣だがなー」つて昨日お祖母樣が、障子の間を透して見ながら、仰有た。

「雜作は好いんだが、何しても古い家だからなー」と暫く立つて、あきらめた樣に獨言云はれた。

「お祖母樣、恁麽に曲つた家は、地震の時一番早く潰れるの？」と妹が、心配さうに聞いた事を思ひ出す。

すると私は、去年の秋亡くなつた。お祖父樣を思ひ出した。お祖父樣の頭には、一寸許りの傷があつた。

それは、弘化四年の善光寺大地震の時に、「それ地震だッ」と、表へ飛び出さうとした時、どさーんッと、店のおろし戸が落ちたんだと、お祖父樣が話された。

「生氣が付いて、邊りを見廻すと、まるて知らない處に、大勢の怪我人と一所に、寐かされて居たが、其時の騷ぎと云つたら何と云ふものだか。丁度御回向の時て、遠くからお詣りに來た者が、皆そんな目に合つたんだからなー」と、私や妹を隱居家の炬燵に引き寄せて、話された事を思ひ出した。――と此頃は、何年にも無い暖かさだから、若しか地震でもあつたら、など、恁麽くだらない恐怖が襲つて來る。

ぎぎーッと、又鳴る。

「母樣！」と私は、堪らなくなつて、母を呼ばうとしたが、何だか聲を出すのが恐しい樣な氣がして、呼べなかつた。

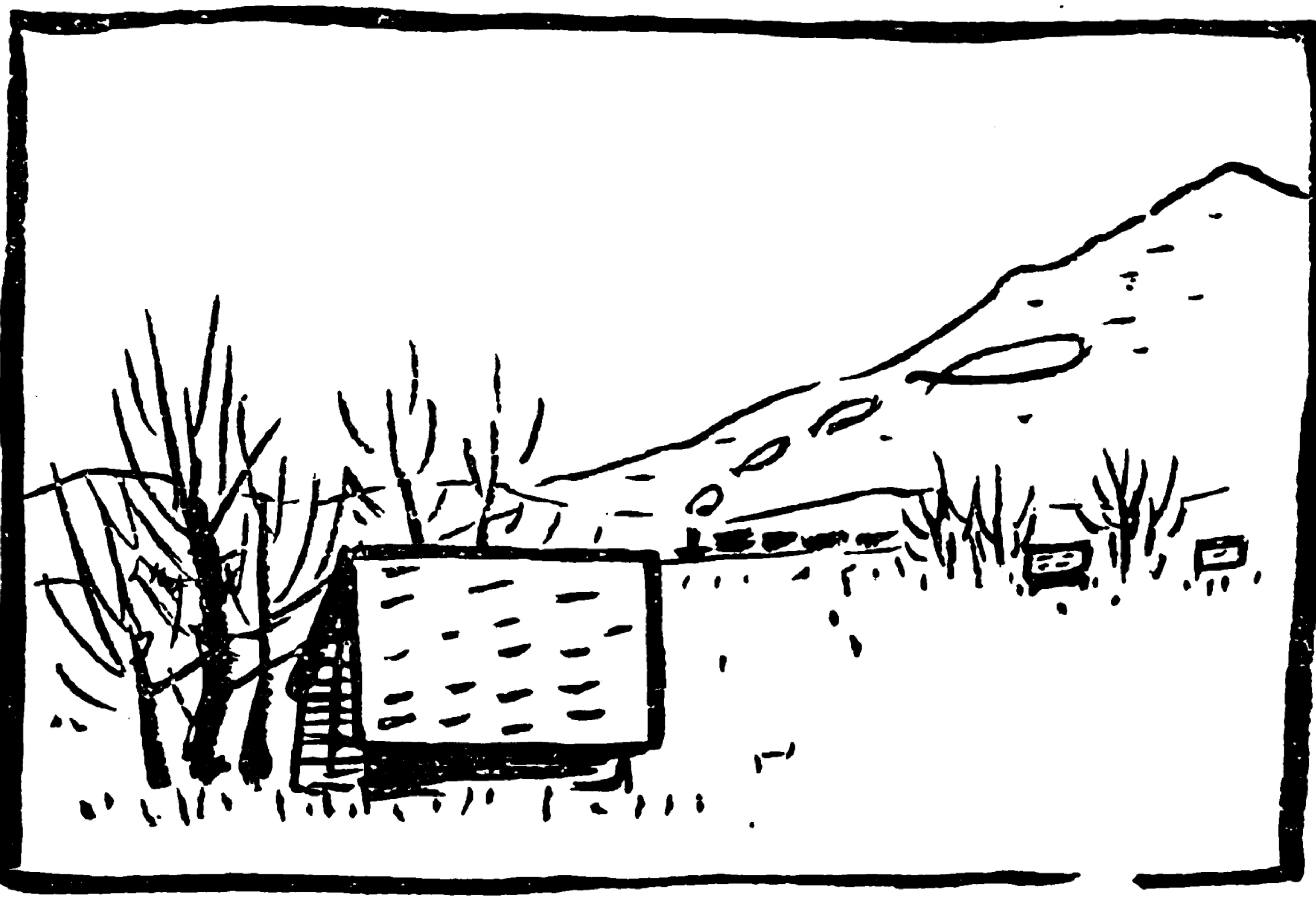
私の胸はもう、一寸した事にも怖ぢけ樣として居る。チーンと柱時計が一時を打つた。薄暗い中に、眼許りクリ〳〵と冴えて居る。

文章にうまみがあります(評)

○靄の中にて (入賞)

越後　白露

終日降つた煙の樣な雨も夕方に成つてやんだけれ共、四邊は一面の靄である。自分の周圍の空氣さへ何となく色を含んでる樣でしつとりとして重い。其靄の奥から滿水した川瀬の響と共に、折々漏れてくる床しい音、何んだらう…‥美しい肉聲も交つてゐる。かう思つて、固く成つた雪の上を無意識に歩いて川邊に佇んだ。其れはまだ春は淺い頃だつた。けれど雪消えには　もないので、谷奥からや川岸からかけ落ちる雪塊は濁流と一



靄の家　京都　寺井芥子

緒に成つてごう〳〵と恐しい勢い。溢るゝばかりに漲ぎつた岸の猫柳は搖ぎ乍ら濁水にひたひたとひたつてゐる。川一ぱいの靄であるから眼を見張つても向ふは見えないが、じつと耳を澄すと。ごうーと云ふ川瀬の音に途切れては又響く。噫、あの聲――あの音――水の中に漂ふて、下へ〳〵と流れて行く樣な――懷かしい音…‥。たしか三味線の音だ、向ふ岸の料理屋から漏れくるらしい、四方は靄に立籠られて山も見えない樹も見えない。て、自分一人空漠たる涯しもないスペースにさ迷ふてゐる樣な――そして流れの響き床しい音律、美しい肉聲、それらは、やがて爛熳たる春をともないくる女神の奏づる樂のしらべの如く耳に響いた。噫此瞬間は日頃の惱みも苦悶もない、只恍惚と夢見る樣な思ひに耽つて聞

き澄した。――折柄パッと華やかに輝やき出した夕日の爲め、忽ち美しい冥想はくづれて了つた。千筋の光線に射られて川下の靄は皆押除けられると、波が紅くキラ〳〵光る。兩岸の木立やら白壁の家が生れ出たかの樣に現れた。其れも束の間見る〳〵日は沈む……。又元の靄にかへつた。

が、最う三味線の音もしない、川瀬の音のみ激しく響いて、靄はます〳〵深く成るばかり……終には自分迄吸込れて仕舞かと、恐しく成つて急いて足を踏みかへした。

好い場所を捉えたものです、今少ししんみりとした情調があつたら何んなに好かつたでせう（評）

【秀逸】

○根岸めぐり（四）

鏡子

根岸鶯谷のふもとを流れる音無川と云ふ名前は妙に私の胸に泌みて居るけれど、川らしい川もないので、是もおぢいさんに聞いて見ると、「ハッ……嬢樣面白い事お仰るヂ」とはげてテカ〳〵した頭をつるりとなでながら「一たいあんたどつちからござらしつたな」と云ふ「私――あの笹の雪の方から」と皆も言はせず「それ其笹の雪の前に一間許りの川がござつたろに」「ゑゝ彼のごみだらけの……、」私は思はず目を見張つて「彼が音無川ですつて……」「驚いたかなハッ……」とおぢいさんはヒョコ〳〵歩いてほどけかゝつた小供の帯を〆てやりながら大聲に笑ふ、ふつと私は自分ながら可笑くなつた「嬢樣そんなにお笑しいかな、ぢやあも一つ聞かせやう、あんた櫻川と云ふを知つとるかヂ」と云はれて一生懸命に記憶をよび起した揚句「細くとも隅田に續く櫻川」と云ふ句がふと浮かんだ「わかつたかな、其川はの、今あんたが言つた狸料理の側のごみでうづまつた川だがな」「まあ」と私はあきれて無言のまゝおぢいさんの顔を見つめて居ると「根岸もな昔は宜い所だつたが、近頃は形無しさヂ、鶯谷を汽車がごう〳〵通る、女がくつなんかはいて威張つて通る世の中だて、根岸もむかしのまゝぢやあ居られんてハッ……」此おぢいさん餘程笑い上戸と見へて又笑ひだした。

さしもに長い夏の日もいつか沈んで、綠濃い木立に急わしげに啼く日ぐらしの聲を聞いて面白いおぢいさんに別れをつげて教わつたまゝの電車道へと急いだ。かねてもくろんで居た根岸めぐりも來て見れば餘りの意外さに、未だ見ぬ所はあつたが再び足をはこばせる勇氣もうせて、只わづかに二三の印象を止めたきり、さしたる興味もなく終つてしまつた。

此次に又何處か廻つて見たら何うです（評）

○はらめる女

根室　ゆみ

うそさむい夕ぐれをめかくる、生けがきの内に立つた自分は袂を頰にあてゝ風をよけながら、くつきりと白く夕やみに浮き出た女の顔をみた、あゝとみだ、とみさーん、自分は聲を出して呼んだ、きこえない、とみさーん、まだきこえない、ショールにおとがひをうづめて小またに歩く、どうしてもとみだ、たしかにとみだ、とみさーん一寸ふりむいて又、袖をむねのあたりでかき合はせてすた〱行つてしまふ、とみさーん、自分は枝折戸をあけてかけだした。

　とみさん、え、驚いてふりかへり樣に、まあその顔はまつさほだつた。

　お前どうしたの、今頃どこへ行くの、うちの横を素通りするなんてずい分なねえ、一寸およりなこの寒いのに、青いかほしてどつか惡いの、一寸もこないからどうしたかと心配してたの、苦しそうな息してるじやないか、うちへよつておいてな、今頃どこへ行くの、お使ひ?はいいえ、あの一寸、

　彼の返事はどきまぎしてゐる、息づかひがあらひ、面やつれがしてゐる、自分はふとおもひ出して腹部をみた、しかしてあゝ、といはざるを得なかつた、彼にかぎつてまさかとおもつたそれもついに水の泡。

　不快の色をつゝんで、この頃は忙しいの尤も暮だからねえ、今夜は急がぬ用なら歸りにでもよつておいて、うちの横を通るのだから、――まあ氣をつけてお出てよ、寒いからね、歸つたらばあやによろしくいつておくれ、はい有難うございます御めん遊ばせ、

　いつも口まめな彼にも似ず始終おど〱して母への挨拶もせず、袖を前であはせて腹部をみられまじとする。

　あゝ彼もよはき者よ、女!

女らしい觀察(評)

○寒夜

はぎ

十時にはもう皆散じた、散らかつた室、みかんの皮やら紙くづやら、それが今日の、あの今までの激戰の名殘、賑やかだつただけ、かるた會のあとはひつそりとして皿洗ふ音、箒持つ響が耳についてさびしい。

　終りの配達の來た時分と郵便箱を見にゆく、明日もよい天氣であらう、星の光はすごいまでに美しい。

　ふと熊助の部屋から義太夫の聲がする、まあ此遲くまで、と思ひながらからだをづつと戸口の方に近寄せてきくとも知らず。

「おとしよられしおまへにまで、苦勞をかけし不幸の罪」とぼ〱した調子で一心に語つて居るのが障子のあなからよく見える、薄暗いランプが寂しく頰に照つてぞつと寒さがしみ込む樣な心地、

「我身の瀬川に身をしづめ……」

殆ど夢中て語つて居る、伊賀越だと思つてなほ其處を立ちさらずに聞いて居る、
「と思ひし事も幾度か……」と語つてきたが「ハア—」と長い息をついて一寸とぎれた、
　喜助の娘はいまに行方知れず、いつにもそんな事した事は無いのに、そして六尺の入口に松を飾つたから、如何したの、と云つたら「ハヽヽ縁起ものでな」と云つて笑つた。
　宵に振舞はれた一合の酒て上機嫌になつて好きな道を語り出したのか、胸に苦しい思堪へかねて語つてまぎらして居るのか、知らぬけれども其哀音は私の胸に深くしみ入つた。
　たつた一人の父に行方をくらまして、何處の空をさまよふて居るか、
「淺草て美しいきものをきて、電車に乘つてたのを見たといふ人がありますが」と云つて惡い人にても買られはすまいかと心配の種を增して居た、暫くの別れのかど出に父の羽織をぬすみ出して去つた娘……を親なればこそ。」
　其夜、一時頃まで義太夫の聲は絶えなかつた、とあとて聞き知つた。

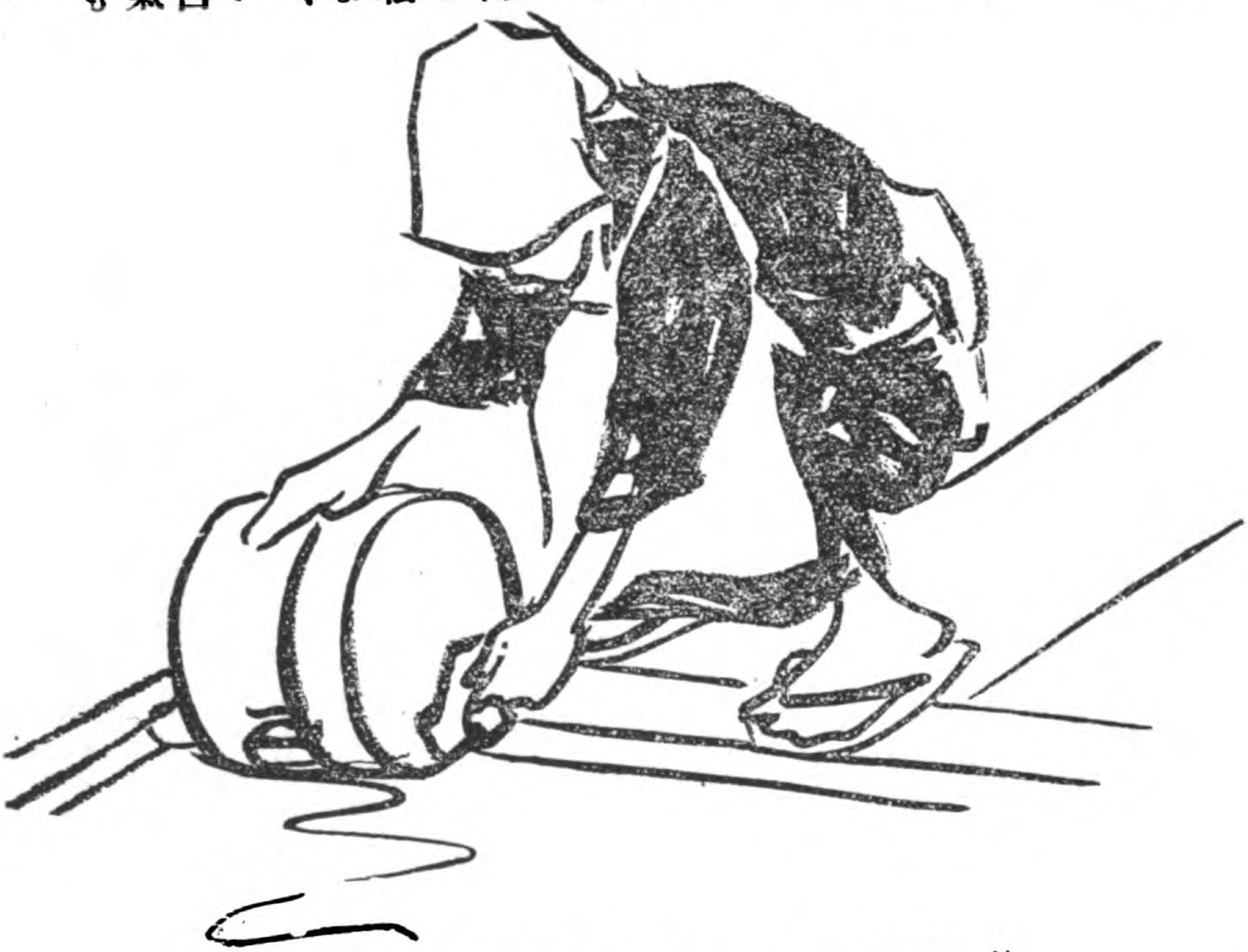
小品文には好い題材てす、少し樂に書きすぎたのが缺點てせう（評）

○女と女

A

お早うムいます。湯番の婆さんに先越されて、同じ言葉を返した。下を見ると空氣草履の古びたのが一足、にらみあつてゐる。女湯に島田髷の美しい人が、髮を氣にしながら耳の邊を洗つてゐる。チラッとこつちを向いた。幾つかの四角の棚の中程なのに、紫紺がかつた地に、雨絣の双子の衣物が入れてある。ハテこんな田舍に、高島田、きやしやな方、別莊へいらつした方かしら、ても二月程も着古した双子！妙に凝問がわいてきた。そして自分が人を見るといふ樣になつた心を、きづいて淋しくなつた。向むいてゐるので聲をかけるのも具合が惡いので、だまつて湯へつかる、と向の人もはいつた、一列になつて互に向の壁を見つめてゐる。つやつやしい高島田がいやに私の反抗心にさわつて、見むくのも變になつてきた、見まいとぢつと眼をすゑてゐる。時々手をすつたり頰をぬらしたりして、一點をみつめてゐると瞳がパーと開く樣て、見界がひろがる、何だかチョイチョイこつちをみてゐる、一寸手や體を動かすと、振向てもすると思ふのであらう、大急ぎてあつちむく。三度四度かさなると、自分の頭が氣になる人なれぬ自分はたまらなく、窮屈になる「い

やだ事はいらなきやよかつたに、いゝ度胸をすゑた小ちやな事をどうする」と思ふと、仕舞にはおかしくもなる。一人限りなので笑ゑない、手拭て面をふいたり何かしてゐる。のぼせた樣な、ぢつとして人の心を考へてるのが、くすぐつたい樣て、しびれた樣な身に、變化をおこしてみたくなるが、動くと又盜む樣にしてみられるのがいやでぢつとしてゐる、同じ湯につかつて同じ人間で、あの方は何を思つてゐるのだらう、なんて思つてると上つた。私も上る、が未だ向をみえない、何て弱い心なんだらう、が向も窮屈な思ひをしているのかしら、棚にあつた白粉をつけずに向へやる。氣の毒にもなる。水て幾度も面を洗つて上つて行つた、小鏡のたふれる音がする。



流しもと　水戸市　玉川すま子

其拍子に大膽に見やうと思つて、顏をあげると後姿だつた。袖がよれて、晝夜帶の細いのをキユツと一つむすんだ儘、いやに襟をすかす。急にばかされた樣な不快な念がわいてきたが、とう〳〵顏はみなかつた。

女どうしの持前の猜疑心とても謂ふべきものが能く表はれてある（評）

○片矢の濱に立ちて

伊豫　よしゑ

半里の砂利道をザク〳〵ふんでこの磯に立つた刹那、私の心はハツとおどろいた。

今まで四方からおさへられて、小さくなつて縮まつて居たせまい心は、急に强い風にぐるりへ吹きとばされ丁度水と空とが一線になつて、はても無いやうな海

を同じ廣さに開けた、海の面を見渡して胸は怪しくをどるのである。

瀬戸内海ではあるけれども、北風に磯を向けて走る怒濤は丁度、白龍が一時に怒り立つたやうで、凄まじい海のひゞきを殘して居る、私は空氣草履の足を揃へて沖から吹く風を受け乍らたゝずんだ、自分の足許から地は一歩〳〵斜に深く遠く傾いて、單に水色をして居る渚から、沖行く程淡藍となり、藍となり、遂には紺となつて白い浪が走つて居る。

辛い潮風を受けて磯に咲く花、今滿ち切つた潮から、白い砂を少しも見せないで、ピッシャリ咲いて居る、夢のやうな水色をした、浪に似た花、名を知らぬ私は浪の花とよびたい、花の上へ膝を落して、あゐの海と白い砂と、夢に似た花の咲いた、盆山のやうなこの浜に私一人、抱かれて居る事を思ふてうれしく思つた。そして、草をむしつては、打ちよする浪に投げ込んだ。

五六間あるいて松原へ入ると、強くない日射しに、松の淡い影が縱横にみだれて居る、腰かけに宜い松を見つけて腰を下した、二見浦の岩によく似た淡いちぎり島のあたり、小さい白帆が一ッ浮んで、二本松のある程近い島かげに帆に一杯風をはらんだ船がかくれやうとして居る、あまり遠くない所に、雪のやうな眞白い水鳥が一羽、潮にたわむれて居る、友にはぐれた鳥だらうか。

三年振に家に歸つて、戀人の腕にすがるかのやうにこの磯にはしつた私は、松原の中に數時間をまるて、醉つて居たのである。

愛すべき磯！白い砂にかきつけた、

描寫が自由て、又正しい（評）

○幼なき夢

函館　山田ひさゑ

母に添ひ寢の幼ない夢を結んだ頃の事であつた、赤いくゝり枕の小さいのにまだお河童の頭をのせて、此丸い目をいぶると何處ともなく遠い遠い遠くの方から、シーンシーンと淒い樣な悲しい樣な何とも云へぬ一種の物の音が聞える。子供心にも何だらう？つと思つた、そして何だらう何だらうと思ひ續けて居るものゝ單純な心に、別に深く想像を走らすでもなく其儘豐かな夢に入るのであつた。然し終に母に向つて尋ねた、「母樣あれ何あに、あの音なーに？」と、母は肱枕にうと〳〵しながら「何でもないよ」と輕く脊を叩いて、「何でもないからもうおねんねをし」と…、だが自分は何となく其物の音に引き入れられる樣な氣がして何だらうと知り度つてたまらなかつた、だから毎晩半ば眠りながらも母に問うたものだ、「ねー母樣！あの音、お枕のずつと心の方であの音何なの」、と。ついに

は母も我心を悟つて「あゝあれはね、龍宮へ流れる水の音だよ、海のずつとずつと奥に龍宮つて立派な御殿があつてねそれに流れて行く水の音だよ」。かく聞いた自分は如何に美しい心になつたであらう、天眞爛熳な子供心に何とも云へぬ一種の神秘が閃いて、自らも深く意識する事の出來ぬ勿論云ひ表さん言葉もない心地となつた、それから夜毎に其龍宮の水の音を聞きつゝ安らな夢に入る樣になつた。十二三年も前にチラと閃いた此美しい神秘は今も尚消えずに殘つて居る、あゝ戀しい幼時！あゝなつかしい思ひ出！。世俗に慣れて複雜になつた此心にも折々此美くしい音なつかしい聲がひゞいて、ともすれば寢覺めの枕に云ひしれぬ感にうたれるのである。

良き母を持たれた幸福を祝します（評）

○黑い花瓣に埋れて了ひたい

越後　佐藤浪子

漂浪の子の胸にも似た冬の光が鉢植の山茶花に照つて居た。怒力を失つた哀な影が室一ぱいに滿みて居て、ユラリ／＼と輪を描いて居る、窓際に据えられた姿見鏡にさへ寂しみの色が漂ふてジッと私を見詰めて居るやうな氣がする、周圍のすべてが私の魂を其絹の中へ引き入れやう／＼として居る、寂しいと云ふか悲しいと云ふか、物たらぬ情緒がみだれる、此慶弱々しい影に吸ひこまれ度くない、活き度い、大きな苦痛を味つて、あゝ、大きい苦痛――荒れた冬野に息ついて居る此光線のやうな――、散る／＼、黑い花瓣が、限りもなく、心の軟地に、私は一人茫然と佇んで居る、胸に冬のひかりを浴びて、噫、黑い花瓣にうづもれて終い度い――。

ちよつと散文詩と云ふ形です（評）

○肩揚

備中　紅薔薇

酒屋の澄さんの肩揚のない細つそりした撫肩が妙に氣に入つた。私も除つて見たいやうな氣がして堪らない、けれど學校で冷やかされるからと思つて辛抱してゐたが、休暇が來たのを幸ひ今朝早くお母樣にはだまつて常着の羽織のだけ除つて見た。嬉しいやうな、恥かしいやうな、又惜しいやうな氣がして幾度も肩を撫て見た。何んだかほゝ笑まれる。障子をあけて出やうとすると、兄樣がいらつしやるやうだ、急いで脱いですまあしてゐると、何も御存知ない。吹き出したかつた。それでも極りが惡いので今日は暖いからつて終日羽織を着なかつた。夕方になつて寒くて仕方がないので出して着たが變て／＼堪らない。障子に寫つた影を

見つめてぢつとしてゐると「やあ素的」つて兄さま。吃驚してゐる私の顏を見て「郵便箱よろしくだ」つてまああんまりだ。厭になつて脫いで投げ出した。そしてよく考へて見ると、私大柄だつて十七だものやはり除らない方がいゝ、二三年すると厭でも應でもとらなければならない。十七がいつまでつゞくと思つて又取り上げた。

十七のお孃樣がそつくり表はれてゐます（評）

○雪降る夜

相模　はる子

歌留多に夜を更かした正月の五日、白銀町の菊樣の御宅を辭して、蛇目の傘をポンと開いた時は早十二時過ぎてあつた。宵の內から降つて居た雪は板塀に、門松に積つて居る。燈の漏れて來る扉差した町を、北風に弄られながら兄樣と妹と私と、神樂坂へ路を辿つた、平常繁華な町だけあつて、未だ眠らない店も見える、飛びそうな派出所の赤い燈を掠めた風は、家並に竹を動かして、所々に雪しづれを作つて行く。坂を降ると流石は堀端だ、風が寒い。

先刻から反對のお茶の水の方へ行く電車は、幾臺か通つたのに、少しも日比谷行が來ない。風に向つて走るせいか、北行の電車は孰れも雪が凍り附いて眞白だ。小暗い濠端に立つて居る私達は、寒いので話も無く、唯周圍を眺めて居る許であつた。眠むそうな電燈の光が、傘の縁から朧氣に薄るゝ樣は、丁度山の端に輝く月の餘光を見る樣だ。ひら〳〵と雪のコートに降り掛かる風情が如何にも面白い。

兎角する內に電車は來たが、皆滿員なので、三つ四つ通り過してから乘つた。けれど中へは入れない。車掌臺に立つて、人々の間に挾つて居ると、冷い風が頰を撫でて、ハラ〳〵と雪を持つて來る。兄樣のマントに懸つた雪が、人の吐く息に解けて、露と光るのが誠に美しい。四谷の停留所へ來た時、急に隙いたので。運轉手臺近く座を占めた。

片側は御所、片側はお濠の寂しい中を、電車は走つて行く、切り拔いた樣な照燈の光が届く所丈は雪の霏々と降るのが見える、曇つた玻璃窓から朧氣に見ると、四圍は皆雪に包まれて、夢の樣に宏壯な東宮御所が浮き出て居る。何かな此の景色に入つては、他國の殊に、西比利亞邊の古い町を走つて居る樣に思はれる。妹が兄樣に「何時かお話して下さつた、アンデルセンの伽噺に有る樣な雪ね」つて云つたが、全く雪女に伴はれ、雪舟に乘つて、彼女の國へ行くのかしらとも思はれた。

時折息拔き窓が煽られては雪が舞ひ込んで來る、外は未だ烈しく降つて居るらしい。

演伎座の前で電車を捨て、ぬかる路を麻布へと辿つた。谷町の通は大方寢て仕舞つたので、淋しい。三人

が歌つて行く唱歌が、妙に滅入つて行かと思ふと、また鋭くも響く。兄様はお土産にと大福を買つて、懐にして獨暖い〳〵と云ふて居られるので、私等もと思つて、笑はれたけれど、お芋を買つた。

裏路へ曲ると、臺町の方から、屋臺を引いて甘酒賣の爺さんが、とぼ〳〵と降りて來る、其の呼び聲が如何にも心細い：つと、瘠せた犬が、鳴きながら行手をさへ切つた。

山の手の雪夜を知つてゐる者には一段の興味があります（評）



若き戀ひ　京都　宮原花子

○目の印象

やゑ子

もうお晝ださうだ。

半日何をした？と思ふと、大速力で馳け出してるやうだが、ふと振り返つて見ると足跡がない。「行つてらつしやいまし」と父を送つてから、……

おしげさんがお嫁に行らして丸髷におあげなさつたり。お良さんがビク〳〵帽子を顫はせて、音樂會に獨唱なさつたり、十一の秋、京都の先生から頂いたお手紙が無上に嬉しかつたり、其先生が堪らなくなつかしかつたり、妹のやうな俊さんが、曇つたやうな寂びたやうな寺町を下へ歩いて、松影ふんで大名門の學校へ這入つたり、……した。

さうすると兎も角、今日半日は長かつたやうな氣もする。然し時が未來から過去へ流れたから妙な工合だ。臺所で皿を重ねる音、炭を割る音がする。此の音は厭な音だ。顔がほてつて手が冷い、寒いのか暑いのか解らない晝だ。

机の上に左の手を載せて其上に左の半頭を載せてみた。右の眼てみると床の柳が物柔かなしんみり重い色をして居る。怠い瞼を閉ぢると暗いやうな明るいやうな斷へず搖れてる世界が在る。天地の始めは恁麼ものかと思ふ。其もや〱した中に、目が二ッあらはれた。圓い目だ。やさしい心を表白した目だ。心の底を見透かされぬ要心に人の視線を射返す鋭い光りでない。其れは新體詩を多くよむだ目だ。東京を嬉しく見た目だ。義兄と呼ぶ人を燃ゆる斗りみた目だ。彼女の目にふれたものは皆樂しく見た。悲しく見だした七日の後に其の目は見えなくなつた。

此の床の銀の實はその目に最もよく好ましく見えたのださうだ。

意味は深かりさうに思ふけれど、表白が適切でない、此人、癖の多いことは初めから分つてゐるが、それは決してわるくはないのです、今少し徹底して書くことに注意をなさい、殊に散文に於て……(評)

○雲井のお庭

豊橋　寒月女

日あたりのよい椽側で、半ばふくれかけた白梅の香をかいて、私は去年上京中につけた日記を調べて見た。思出多きかの時の有様が目に見える樣である。それは四月の廿一日、空は心地よく晴れた日であつた麹町の某宮家に上つてゐられる(お小間使)友人を訪づれんと、姉上と二人て出掛けた。あの乘換の多い須田町から新宿行の電車に乘つた。幾度か眺めた九段の花も青葉とかはり花の隧道をくゞる樣であつた、道はもう瑞々しい若葉となつた。半藏門から右に折れて麹町四丁目て電車を降りた。

某宮家の御殿は?と聞いたらすぐ分つたので、行つてみると、洋風の御門いかめしくあたりを拂つてゐる、御通用門から這入つた。頓て日本造の御殿の御玄關前て訪ふた。暫くしてゐらした方は二十ぐらゐのお小間使らしい品よき方、友人の事を御尋ねしたらば、やがて君がいらした。上京なすつてからもう足掛四年、實に品よきお行儀よくお成りなすつた。樂しい二三のお話の末に、お庭を拜見さして下さる。美しい御花畑を右にみて行けば、幾十年經たかと思はれる樹々の生ひ茂つた淺い森、こゝから左手の方を見れば、清く廣やかな御庭には、松茸のやうな形に生ひ立つた松ばかり御惠の露に霑ふて、遙かに洋風の御殿を望むでゐる。何となく勿躰ないやうな氣がした。森の木々を縫ふて丁度植物園の下に降りて行く樣な道を下りてゆく。

途中に傘の形に竹もて覆はれたる松の趣、又ない風情。下に降りれば、大きなお池の一隅には、菖蒲蓮などがそこところに思はれ植えてある。その盛りの時の美しさがそどろに思はれた。向ふを見れば、返り紅葉か、紅こき一木が緑こき淡き樹々に混つて。雅なる土橋も見える。お池を隔てたあの松林には、滿木紅葉する頃松茸も澤山出るとか。あ實に幽邃閑雅なる御庭の風光に暫くは恍惚とした。やんごとなき御方々の、花に月に折々の御すさびも思はれて、今此御庭を拜するさへ畏れ多いと思ふと共に、泌々と友の心を嬉しく感じた、すぐ側の土手には今を盛りの菫たんぽぽ、其他小さい奇麗な花が咲いてゐる。御美しき姫宮樣の御手に摘まるゝかと思ふと、實に羨ましい。やがて元とは違つた道を上り上つて前の森にきた。

懐かしい友と別れて姉と二人廣い道を歩く。風がはげしい。電車で歸る。思ひがけない君を訪ふて、口にかけていふさへ畏き御方の、御庭の一部なりと拜んだ事のうれしく後々までも忘れ難き思出となるであらう。

普通の人には一寸見られない場所を見た記事としては、餘りに普通てした(評)

○生のなやみ

豐後　與志野綾子

夕暮、柱に倚つて病み上りの倦怠い軀を擡せて儚かない人の生を思ひ

ました。

太陽が朝、赤ふ赤ふ、幼い、淸い姿をして、ふはりと浮いて來ると、目の醒めた後の靜かな心から、漸々、心中が複雜して來るやうに、街には漸々どよめきが起ります、其どよめきは、ありとある人が生の滿足を得よふとする聲です、響きです、さうして又其れが、暮れになると、一時のどよめきと共に、太陽は赤い光から黄色い樣に、薄昰のやうに、春の歡樂を歌つた後に秋の悲哀を覺ゆるやうに、悲しい〳〵光を殘して沈んて行くのてす。私は其れを思はずに居られませぬてした、あゝ、僅に十二時間か、十時間の生と私は思つて見ました、私等の生も五十年と申しますが、何だか物足らないやうに思ひました、死ぬると云ふ事は、病んだ私の頭には强く印象します、空恐ろしゆう覺ゆるやうになりました、其刹那私の胸に溫かい淚の溢るゝのを覺えました。太陽の生も私等のやうに處女から妻、老母と云ふやうに私は思つて見ました。

妻、妻、私等は何うしても此名を冠られはなりませぬ妻の時は、太陽が最も全盛を歌ふ時て、どよめきの、一番甚だしい時てす、人生の苦鬪の時です、私等は、此の弱い儚かない體て此の苦鬪の時に進まればなりませぬ、苦鬪せねばなりませぬ、たとひ女だからとて、弱い心を持つてはなりませぬ。幼い時に、人生の苦鬪は花てあると聞きました、其れが、かよはい私を動かしました、其印象は消えませぬ、其れが私のほこりてしやうか、味つて見たいやうに、苦鬪して見たいやうに幼いながら胸を跳らしました。倦怠い私の腦裏に、うつり行く幻影を、とりとめなく、くりかえすとき、何となく、ほこりと、悲哀を、淡く覺えました。

○鐘樓堂

安藝　秋花

淋しい思ひの内に、日は暮れた。重い頭を、片手でおさへながら、來るともなしに、枯草の中に詫しげに立つてゐる、鐘樓堂に來た。

今朝迄、降つてゐた雨のせいか、枯草の中から、いふに言はれぬ、懐かしい匂が、微かに香つてくる。にび色の雲の塊りが、空の中をふはり

ふはり飛んで行く。やゝ南に傾いた屋根が、苔て青い、中に釣つてある大鐘も、青さびて、木につけた繩も、切れかかつてゐる、凡てが、靜かな、淋しい趣、私は寂しい時、悲しい時、いつも此所へ來て、あの今も聞ゆる、はるか後の枯木林の小枝のさゝやきに、慰められて歸る。

煙

枯れた柳の木にすがつて、光り淡い夕月を見上げた、鎌のやうな四日の月は今築山の松の枝に、隱れかけてゐる、ぢつと見てゐると、もうと白いものが、懸つて光りが曇つた、目を落すと、向ふの灰小屋から、煙が、もや〳〵と、はい出て、それがだん〳〵廣くなつて、四邊を白う閉ぢてしまふ、峰ばかり見えてゐた、東山も見えなくなつた、光り淸い夕月も、里も、あゝいつ迄も〳〵、此まゝて、此所に居たい。

○田舍芝居

奈良縣　福西たづ子

寸餘の麥畑は壞されて、形ばかりの小屋は建てられた。板囲で、菰の天井、雨天順延の廣告を要するこの粗末な芝居小屋で、不如歸の悲劇は演ぜられたのだ。この劇はもう今で三度目だ。けれど其の度每に、一種云ふべからざる新しき感想に打たれるのだ。今もさうだつた。

殊に彼の、早や離緣されて、荷物の屆いて居る事も露知らず「ちと歸つて靜養せよ。」との慈父の言に、歸り來る所など、實に、いぢらしくて、目もあてられぬ位てある。私は只聲を立てじと、唇を强く嚙み締めた。けれど、どうしても、涙は潸然として頰を傳ふのだつた。座は寂として、聞ゆるは、只、啜り泣きの聲のみてある。私のお隣に、私と同じ年恰好て、髮はちやんとハイカラに結び、人品卑しからぬお孃樣風の方が被居つた。私は何氣なく、泪の視線をその方に向けた。この瞬間、得も云へぬ不滿を感じた。「何處て風が吹いてゐるのかなあ。」といふ態度て、ぼんやりして被入もの。私は腹立たしく思つた。そして、つく〳〵かう考へた。涙の無い方だらうか。涙が惜しいのだらうか。それとも、涙を出すと、人格でも下る樣に思つて被入るのだらうか。愧しいのだらうか。涙は泣けるものの、慰藉みだとか、この方は、已に此の慰藉を去られて、涙なき悲しき哀れなる啜泣に、沈んで被入るのだらうか。否とよ。彼が片頰に、微かなる笑の湛へられてあるではないか。噫。無情の人だ。其の笑の中に、如何なる秘密が隱匿くまれてあるのだらう?

人の悲み泣けるを見て微笑むは、やがて人の喜び笑めるを見て悲む方なのでせう——其藥指に嵌め給へる純金指環は、何する爲めのものぞ。已が品位を高めんがために、反つて其品格を落しつつあるを、知り召さぬのだらうか。と思へば、今まで品の好い氣高いお方と、羨はしく思つてゐたに、もう〳〵お側に居るのも忌になつて、とう〳〵母にせがんで居場所を替へた終つた。

○月の夜に

西多摩　三ヶ島よし子

おお滿月！と私は庭へ下りて、今雜木山を離れやうとしてゐる月を見て思はず叫んだ。さつき障子の外てぱつと飛立つた音に驚かされた、たくさんの小鳥が一羽の影も見せない。たつた今そこらて「お月樣が、出た」と可愛らしい聲て呼ばはつた女の子の姿、それもどこへか隱れてしまつて、あら十藏の軒下へ眞白な畫仙紙に墨繪の梅か何かを畫いた、壁一ぱいの軸が掛けられて、廣い座敷へ電氣燈を點けたやう。夕日の名殘を沈めてゆく西の山の上には、幾萬の小さな光を代表したやうな星が一つ、大きな月を迎へてキラ〳〵と輝いてゐた、その瞬きもいつしか見失つてああ！月はだん〳〵高くなる、小さくなる。長く淡かつた木だちの影がだん〳〵短くなる、濃くなる。自分の影も。寒いのも忘れて立つてゐた私は俄かに寒さを覺えた。歡樂の醉から醒めたやうな心地に。けれどまだはてしない碧空の屋根を捨てて、眞黑な煤埃を浴びながら、血も涙も乾かされてしまふやうな、落ち葉はさて置いて、つや〳〵しい樅の綠葉でも何でも、みな燒きつくしてしまふ恐ろしい種ばたに、蹈まらうとはしなかつた。「誰れか留めて、とめて」と乞ひ叫ぶやうな水車の音を落

ち再び痩せはてた流れに戻る水の音がすぐ近くでする、それがてを増して、そつと胸に手を當てると、打つてる脈の音がよく聞える。暖かい血が動いてゐる。私はまだ凍つてしまはないのだと思つて少し足を運んだ。冬の月——今年の最後の望月はいよ〳〵凄い光を、懐しい昔の鏡——に添へてひからびた菊の骸と一しよに葬らうとしてゐる、私の魂を彷徨はせるのであらうか？白い靄を被つて眠らうとしてゐるあの谷も、いた〳〵しく刺だつてゐる枯木の山も、今夜は平な野のやうな氣がして、何處までもどこまでも行つて見やう、そして自分と同じ長さの息を同時にする人とともに、この一夜を寢ずに明かしてみたいと思つた。

○迷ひ心

大阪　芳香

歌留多のお催しとてお招き下されありがたく存じ候ぜひ〳〵馳せまいらせ皆々樣のおん手の内拜見致し度き心は山々におわし候へども生憎さしたる用事之有候ため殘念乍らも今日は參りかれ候まゝ、あしからず思召し玉はり度く候かしこ。と一葉の繪葉書に認めて、ポストに投げて來た私は居間の机にもたれると、ホツと太き溜息を吐いた、そして宛てた辰子樣のお宅のとを次から次へと思ひ廻らすのであつた、定めしあの葉書の着く時分は今日招かれた誰彼は廣いお座敷に集まつて、笑ひ興じて



たどん屋　紀伊　稗田みつ子

加留多を取る最中だらうに!!!私は實の處、さしたる用もなんにも無い又あつたとて一年一度の新年會の事だもの爲ないのだ、それに用事のためなんてかこつけて食事よりも好きな好きな歌留多を斷つた!何となう自分ながら意氣地が無さ過ぎるではあるまいか?とも思ふ、だけれど歌留多と云へば云へ、誰も彼も美しく衣着飾りて、あるは指に光るものさへ、はめて人の目をひかせ、自らも誇りて榮華に遊ぶ人達と私はどうして心よく遊ぶ事が出來ようか、誰しも隣の人の衣美しきを見、己が纏ひたる袖のさゝしきを思へば知らずしらずに、人を恨み又不幸なる身を悲觀するのは人情なのだ、と思へば愈々行き度もない!本當によく斷つた事だと思ふ下から亦、着物なんか如何でも構やしない、矢つ張り行つて思ひきり取つて取つて去年のやうに勝ち盡したいと、胸にわく〳〵と浮んで來る!と次には何故火事が出たらうか、火事さえ起らなければ相當に交際も出來たらうに……今日も行つて遊べたらうに……と愚痴の出かけたのを思ひ返して、あゝ這麼ことを考へるやうでは、年の暮れに、母君が奈何ともして晴衣を是非と仰しやられたのを、自分乍らにも殊勝げに、今暫くは入りませんからつて進んで斷つて御安堵おさせした其甲斐が消えてしまふ!!!誓つた言葉が反古に成る……あゝ之れも運命だから……

…花咲く春を待つとせなければ…やをら座を立つて、未だ堅い梅の花を眠と見るのであつた…。

○春の夕風

麻布　常　世　草

青春十七、花やかなるべき少女子が、哀れ何を思ふぞ…椽によろ高島田。パラ〳〵と散るは涙かはた露か…。

黄昏れかゝつた空は薄くぼんやりとして、時折り絹もて撫でらるゝ様な春風はそよ〳〵と、怪しうぬれた頬を吹く。嗚呼…夢…夢…過去の事は夢であつた。と云つて諦められる事なれば、何故に此様な思ひを致しませう。

おゝ英様…此日この時間、何を思ひ、何をなすつて被居る？君香は君香は、運命を歎ち、君を慕ふて泣て居りまする。こゝ二三日にて定るべき運命！人は目出たいと云つて、祝つてくれます。父様母様はいづれも希望にみちた眼を輝やかして、嬉しさうに幾嫁を取つて下さいます。闘えて泣いた苦しい胸中、誰が察してくれませう。

人妻——何と戦慄せずには居られません。うらぶれの子が最早や運命に反抗する力さへつきて終ひました。曾ては、花散る夕、月すむ夜半、二人して心行くまで語りあかした昔が懸しい。最後の會見——さうあれは丁度此頃の様な晩でしたわね、誰の思ひて曇つたかどんよりした雪空に、梅の花のみほの白う——淋しく窓に身をなげかけて仰せられし御言葉。今猶一言一句忘れはいたしませぬ。離れともない袂を無理にお別れしてからは、あのわけてお互に消息する事さへ出來ないのでせう、どんなに私は悲しかつたか…。

當時を偲び、現在を思ふて私の胸は張りさける様です。私の心中を知つてくれる者は英様一人——

英様、私は今一度貴方の清いみ手にすがつて、泣いて〳〵涙の泉で、この心を洗ひ清めたうございます。あゝなつかしい同性の戀人！懸しい英様！。が、海山幾百里を隔つた北のはて…とても〳〵所詮叶はぬ願ひだわ。

せめてはなつかしい面影をいだいて…。

○髪洗ひ

山口　酒向とし子

「サ早くなさいよ敏子さん」お姉さんのお聲聞くや新聞ほうりなげても一度荒櫛を通してお湯殿に行つたら「サア洗ひましやうやお島田もいゝけどびん付油を澤山つかふには閉口子」こう被仰り乍らお姉さんは今し方迄七輪でグメ〳〵踊つてたふのりをお手にうけて前髪の方から先に熱いのをこすりつけて下さる——「アッツツッツ」「あんた此位でないとおちやあしないよ」私はだまつて目をつぶつた、甘くもないけど何だか海戀しい様な香りが鼻をつく「アッツ」こんどは姉様がこう被仰つた、——私は可笑しいけどこらえて居た—また熱いのが塊へシーンとしみる、其心地良さつたらあゝ私はほんとどうしても目があけられない、其上午後の靜かな暖かい日が硝子越しに頭から脊中へズーと射しこんで居るもの、——どこやらて雀がチヽ〳〵騒ぐかと思ふとパーと一時に五六羽もとびのいた様な様子、相變らず二人は無言…と何だか私の顔がひつぱれるやうな心地がするのでフイと目を開いたらあゝ春日に醉つたといふは此事だらう赤、青、紫など七色が美しうはしから〳〵目の先にふらはれるでは御座いませんか‥見ればたらひの中のふのりは過半ねずみ色に變つて居た、「敏さんまあいろふてご覧よつぼどよくおちたよ」けんと上はふのりてずる〳〵してゐるけど底がサラ〳〵する様でほんと嬉しかつた、私は腰をのばしてお湯を入れて下さるのを見て居た、と顔のひつぱりがおかしくて〳〵「姉さん〳〵顔にまでおのりつけて下すつて‥「もう可笑しくて言葉は綴かずお姉さんがお猿のやうに成つて笑つて被在其またおかしさ、えいやらやつと「これですもの子心配も一通りぢや無い事よ」と仰在つた私もえいやらやつときゝとつた、——それから二度熱いお湯で洗つて最後に済水をそゝいてもらつた時の心地良さ!!!おつむがかろくスッと成つて來ました、荒櫛てかきぬいて一寸いらつて見たらまあ！髪の減つた事!!!思はず眞顔で姉様を見つめてまた笑はれたけど何だか惜しくて堪らなかつた、洗へば減る事は知つていても‥．お節の

わらしびでゆつたりとくびつて頂いて薪木を割る松ちいを相手にしばらく日なたぼつこを致しました。

○時計屋の店頭

徳島縣　野　菫

神々しい青空、日は光まぶしう里を照してゐる。風は冷や〳〵するが、何となく散歩にでも誘ひ出さうとするやうな白晝、菓子屋、傘屋、雜貨店、家々の人は皆活氣に滿ちて働いてゐる、格別に鍛冶屋の鎚の音は元氣がいい。こんな中へ、ふらりと來たのは青い顏を頸巻にうづめた二十前後の男、一寸立停つて時計店へ這入つた、掛時計が半打許りかけ並べてある。

男は始に低く案内を乞ふた、じれつた相にもしたが、誰も出て來なかつた、遂々外に出て北を見南を見て、又家に這入つた。店には瓦燒の火鉢に、赤鐵の湯沸しが主人顏にぼつ〳〵と湯氣をはいてゐる。

男は火鉢の側に腰を下ろした、やがて煙草を吹かし出した——顏には不安の色が漂ふてゐる。

男はつと外へ出た——北を見、南を見て又這入つた、そして元の所へ腰を下ろしたが、手をかざさうともしない——揃へた足を急がしさうに動してゐる——あり〳〵と見ゆる不安の色と、身振とを、消さうとつとめてゐるらしい。

それで又外に出た、今度は隣りへ這入つた——按摩の婆が糸をくつてゐる、賑々しい響のする事で。

カラカラッ！と氣味よい響がハタと消えた、急に靜になつたので、男はいぶかつて早口に何か言つてのけた、

（おや〳〵、それはまあお氣の毒樣、今し方迄何てしたから川へでも行つたのでせう、一寸見て……）と起ちかけた、

（有が度う存じます、ちや少し待てば歸るでせう、それにも及びません）

男の聲は元氣を帶びてゐた、輕やかに頭を下げて出た、そして火鉢の所に腰を下ろした——不安は取去られた、青い顏には紅を見せてゐる、再び煙草を吹し出した。

○柱暦

丹後　若　菜　女

惠ちやんは嬉しさうに飛んで歸つた。

そして火鉢に凭れてゐた、母樣の向側に行儀よく坐つて母樣のお顏を瞶めながら、懷中から何か取り出して母樣に手渡した、母樣はそれを凝乎瞶めて居られたが、寸時して淋しい瞳を動かせて、

『何所で貰つて來たの』

と問ふて、眼は矢張暦を見つめてゐる。

『春ちやんの兄樣に……』

惠ちやんは母樣の物淋しい顏を見て恰ふ答えた。母樣は何故に此の氣の浮き立つ、新玉の春を迎えた今日であるのに、恰も不安の顏なのだらう。と惠ちやんは母樣の今のお顏を見て、悲しくなつたやうに俯向いてしまつた。

稍寸時して母樣は態とらしく笑はれた——苦笑——。惠ちやんは、夫れを又不思議に思つたので、

『母ちやん今日笑ふと一年笑つて暮せると云ふのに、何故夫麼に悲しそうにしてゐるの』。

と云われて氣が付たやうに、

『ホヽ、正月だつたのね、さ、その暦を掛けやう』

母樣は立つて時計の横の釘にかけて、眺めて居らしやる、惠ちやんも同じやうに見てゐた。

母樣は今年で四十二歳……惠ちやんは九歳である、母樣は此の庚戌の四十三年を如何思つて迎えられたんであらうか。俗に言ふ四十二は厄年とか、此の可愛い兒を殘して若もの事があつてはと、お顏も自然に淋しくなるのも無理はない。此惠ちやんの貰つて來た、柱暦が又一枚宛つ減てゆく間には、どんな不幸がないにも限らないと、母樣はつく〴〵想ひ沈んで、幾度か眉をひそめられたのであらう。

○沈みゆく赤い日

金澤かつみ子

沈みゆく赤い日を私は、手すりに倚つてながめました。まあ、何といふ壯觀な景色でせう。暮れかゝる空のひとゝき――形の面白い雲が美しう夕日に輝いて、地平線の森が黄色に光つてゐます。ゆるやかな夕暮の風が、びんのほつれをなぶる心地が、なんともいへません、私はだまつて、胸に手を置いて、その景色に見惚れました。

心の中は、たゞもう果ないうれしさに滿ちて、手の指は胸々讚美歌の合奏をしてるやうです、けれどかうして樂しい境地にあるかと思ふのも、あつといふ一瞬です。ふとした刺戟に依つて蘇生つた心はすぐ悲しくなります、ひとりで山道をあるひてゐて、霧につゝまれてるやうで淋しくなります。

こんなときよく「不二雄さん」のことが思ひ出されます、「思つて呉れるな、自分が希望のある人間になつて歸つてくるまでは、ないものとあきらめて、忘れてゐて呉れ。」といはれましたけれど、私はいつ、ひとときか、あなたを忘れたことがありませう。すまぬとは知りながら思ひつめてゐます、なんといふ分からず者でせうねえ。

不二雄さん、あなたら、あの赤い血のやうな日を見られたでせうに―。

○うたがひ

上海　水仙花

私は不思議にたへません。或る私の知人に年は二十六ほとんど婚期すぎんとするオールドミッスがあります。去年の夏、はる〴〵故郷を後に上海さして一人で來ました。別に職業もなく只ぶら〳〵と一日一日を遊び暮す故、他の方々が結婚を進めますけれど、私は一生ミスで行くとて少しも耳をかたむけません。土曜日や日曜日などには。書院の生徒さんや、會社員や、支那人の日本留學生などが澤山遊びに參ります又その老孃は、男のかたが多いほどよろこびむかへます。處が女の交際はおきらひのせいか、皆無でございます。他國へまで國をとびだして而も此のせちがらひ世を何もせず遊び暮すとは妙だ。とは、心ある殿方や、奥さん逹のうはさです。或方面のうはさによれば、妹さんから多少送金なさるとか申すことですけれど、それは只表面のみだそうです。又、其妹が素的なおてんば者で、今或る田舍の女教師です、御自分では、若い女の身で海外まで來て學校而かも支那人の教師をするものは天にも地にも我一人だとそれは〳〵は氣焰萬丈です。年は明けて廿四才。此の姉妹二人は幼少の頃より母親にわかれ、今はけい母とかで、其折合わるきため、我家をぬけ出したのだそうです。男とさへ見れば誰かれの別なく交際を求めます。おそらく上海で○○おてんば女史をしらない殿方はありますまい。或る人は姉さんが、支那人と黑ぬりの二頭だての馬車に乘つてゐらしたのを見受けたとか。あゝ、この二人のオールドミス姉妹には我々の思ひもよらない秘密がひそみをるならむとは、同人の境遇を知れる人々のうはさです。私も是には定めて新聞紙上の好材料となる事がひそんで居るだろーと思ひます。

○立ちぎゝ

しのぶ子

實際米が安くなりましたからな、我々農民は實に目下の處困難だ何しろ當地などには金と云ふ代物が少なくなつたんですからなあ、東京の銀行には金が有あまるつて云ふが、まさか借りに行く事も出來んしなあ。この不景氣の處にもつて來て新暦でお正月する事になつたんでまるで、てんでこまいさ、西洋人は日本の名花は櫻花だけあつて氣質も丁度櫻花の如しだつて笑ふつちうが全くよ、櫻花も美しく咲いたと思つても嵐にでもあふものならすぐにもう散つて仕舞ふんだもの、今年だつてもそう、始めの中は豐年だと許り何處の村でも、やれ芝居のやれ相撲のつて大騷ぎしてさ、米が安くつて不景氣となるとまるで火の消えたやう。考へて見れば日本人はから意久意がないんだ。そこいつちや西洋人はえらいや、かりに十の建築物をするとしても景氣が好いからつて日本のやうに二十にもましたりなぞしないそうだ、よしました處が二つ位だつて云ふからなあ。然しこれがですなあ、今日內地で米は高くつてドン〳〵景氣がついたらそれこそ大へん。二十億の借金は何處へやら。皆々ぜいたくを極めるから從がつて輸入品も多くなり已に輸入超過になつて居る我が國を衰へさせるやうなもんですからな、こうなつたのもつまりは天の惠で我々農民は實に天に向つて心から感謝せればならん時なんです。



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　根室　こがらし

この下よ落つれば千尋底遠き海ぞと胸のときめくわれは（根室灣の氷を踏みて）

○（地賞）　長野　石上照子

この世てふ惡夢の後に逢はむとぞ消息賜びぬ悲しけれども

○（人賞）　伊賀　岡　花子

おほらかに白雪かつぎ山に立つ父のみ墓をおもふ朝かな

【秀逸】

○　牛込　平塚白百合

淺みどり若草山は日を吸ひて少女のごとくよろこべるかも

○　東京　花　風子

五色の絹の糸もてかゞりたる手まりのゆくへやがてしらずも

○　磐城　吉田光子

君まさぬゆふべの椽にわすらるゝ日など思ひて蟲の聲聞く

○　和泉　谷ふじ枝

我が胸に歌のかず／＼思ふごと男はつねに少女かぞふる

○　伊賀　山村龍子

友はみな人妻となり子を產みぬ我れ千首ほど歌を詠む間に

○　信濃　吉川多美子

にほやかに春をよそほふあけぼのゝ茜のなかに鶯の啼く

○くれなゐの長椅子に凭り蜜蜂の羽音きゝつゝ君を待つかな　　富山縣　むらさき

○こゝろ故悲しきことも喜びもかづあるものと思ひけるかな　　秋田　白萩女

○大楠をはなれし月は寺町のゆきのいからを淡くてらしぬ　　大阪市　山内花雪

○嵐山の春のあしたにひら〳〵と花散るに似るあけぼのゝ雪　　大阪市　山内溪子

○まろ柱ゆふべとなれば淋くも倚りて歌ずす梅のさかりを　　伊豆　鈴木矢壽子

○喜びの住み得ぬまでにかなしみのみちたる胸を君しらじかし　　兵庫　杉山春翠

○青白き小さき光のまたゝきと吐息は悲しおとろへてゆく　　上毛　柳澤もと子

○春のかぜ稲荷の森の赤のぼりはた〳〵吹きぬ初午まつり　　四谷　味方こう子

○天つ神ゆめゆるさめやいつはりの怨言ならべて我な戀そね　　四谷　味方てい子

○相見ざる廿日あまりの寂しさにおとろへたりと語りぬ鏡　　大阪　福井まさご

○我が胸の海浪だちぬ大船もくつがへらんず君こゝろせよ　　三重　松下かく子

○荒れ狂ふ魔神の息と思はるる吹雪の音に夜あけぬるかな　　秋田縣　紅雲子

○玉の床よごすこゝちに雪ふみて若水汲みぬ年のあけぼの　　西多摩　三ケ島よし子

○石のごと冷やかにてもいませかしなまじひわれをあわれと云ひそ　　麻布　江森美子

○嬉しさははた悲しさに次ぐといふ君とわれとは事なかれかし　　福岡　田中千代子

静岡　壽香子

○み名かきて頬などをそめしそのかみのあはき心をなつかしと思ふ
喜美子

○秋の月下界を輝す御光をあびて清むるわが心かな
麻布　常世草

○さ夜更けていづちの寺の鐘ならむしじまを破りかたはらにきぬ
信濃　淺田いと子

○祭日を銀の城立て守らるゝ信濃國原のどかなるかな
長野　紫の米子

○わが兄等白き熊狩る北國の冬をおもひて雪の山見る
越後　佐藤浪子

○今日もまた君が文見ずかくてわがわかき血潮もほろぼされんず
成田　の[illegible]ろ子

○なつかしき君が玉章手にとれば梅のにほひをかぐここちする
岩見澤　藤田たれ

○人知れず忍ぶ思ひを押へえず繪にぞかきけりある日の君を
石狩　河合菊子

○暖かきよき春日なり草に木にうす紫の霞のひくらむ
岡山縣　桐本悦子

○あゝかくて老ひゆくものかひた流るにがき泪に戀もあらなく
北海道　葉雪

○十とせなほ夢の様なるひと言を思へる人は愚かなるかな
磐城　繁子

○君かすむ里の後の山の端に描けるごとくかすみかゝりぬ
遠江　富永雪子

○窓明けて冬の雨ふる庭見ると火桶はなれぬ紫の袖
下關　山本芳子

○あな悲し君が御まへに額さげて衣の汚點見る十九の少女
駿河　松原いし子

○春雨の降る淋しき日鶯の聲ばかりをば友としおもふ
三河　天野清子

○若き人肩の包みに小猿のせ西して行きぬ町のはづれを
日暮里　かすみ子

○消え果てし戀の焔の灰がらをまた誰かきて燃やさんとする
長崎市　茂榮

○ふらんすの少女美くしーさはあれどわが振袖を我はよろこぶ
茨城　春かぜ

○しろたへの衣干したる尼寺の垣根の梅に鶯のなく
熊本　波の花

○追羽子をやめて今年の初島田手をやりなてぬ春のちまたに
石川縣　星花女

○わが若き心に似たるおぼろ月かかる夜なりともにうたはむ
常陸　木村桂月子

○少女子の小さき胸に君と云ふ御名刻みて忘れず三とせ
東京　清子

○春雨や米屋の軒の下蔭に七つばかりも雀居るかな
長野　古畑正枝子

○我れかつて病みける折りに夜もすがらなぐさめくれし君故にこそ
長野　藤澤すま子

○この若き君をおきては天地にわが手とるべき人一人なし
相模　はる子

○君戀ふる閨へに泣くと消息を手にはしたれどまだ見ざりきな
函館　山田ひさゑ

○われ泣きてかたへ去らじと手をとれば君ゝ泣きつゝ理りを云ふ
碓井　片山千里

○涙しぬ母なくなりて人あまた來しをよろこぶ人の子故に
能登　近江加能惠

○ふくらかに立てし前髮くづるとも二十の春を戀に泣かまし
牛込　塚原けん子

○戀人の心の野べの枯れはてし中に迷ふはあはれなるかな
麻布　石井すみれ

○少女われおぼつかなくもうた思ふ春の小窓に細き雨ふる

麹町　牧野嵐水女

○しら玉の胸にひゞくや夜の琴の悲しき人のうたにまじりて
大阪　小　百　合

○何となう胸せまり來る夕にはかたへに君のいまさぬがよし
神戸　あけぼの

○うらまむもいとゞ悲しき心地してなほなつかしと今日も云ふ君
大阪　植村艶子

○一つ二つほころび初めし梅が枝に淡雪ふりてたそがるゝ日よ
信濃　丸山峰尾

○われの住む信濃の國の三月は今を盛りと櫻花咲く
東京　鈴木春子

○川の蟹頭黒にむれて遊ぶなるをかしきを見て今日をくらしつ
小石川　渡邊倘子

○花もよし月もよけれどうぐひすの朝啼く時ぞわが山はよし
府下　矢藤きん子

○病みませる君に見せむと思ひしにあはれ散りぬる白梅の花
長野　川澄尋子

○戸口いでて若水を汲む妹のたもとに松の雪かゝるかな
信濃　上波多　ひろえ

○朝行けば彼方の枯野時雨よびわが襟寒く風ぞ吹くなる
播磨　菅原靜野

○ある時は君をうらまれある時は我うらみすれをかしき人ら
島根　すみれ女

○いさゝかのすなの小草の小石山のところ處にあるがよろしき
日本橋　松岡千代子

○まゐらせむ梅の小枝に歌添へて君が學びの机の上に
深川　佐久間さだ子

○思出のよき日とならむ笑みに居て寂し心地の解きがたきわれ
名古屋　宮田和子

○少女子は追羽子すなり門松のみどりつゞけるみやこ大路に
名古屋　ゆり子

○かず知らぬ羊の群を守りつつ君月影を笛ふきてくる
遠江　山本益子

○若菜をばつむ手休めて聞きにけり薫の聲君が歌聲
岩手　館坂秋月

○西の空仰げば高し岩手山のぼる初日は雲にくもれど
牛込　笹原芳江子

○それ羽根をぬすみ去りける犬にくみ君振袖になみだしたまふ
山口　小川よし子

○定めなき浮世のさまを見せんとか風なきに散る白玉の露
茨城　黒澤とよ子

○さやかなる月にすみれを摘にけり君まつ宵の手すさみにして
茨城　船橋拾子

○埋もれぬ峰こそ今はなかりけれ北の國なる冬の日の雪
鳴澤ゆり子

○ひそやかにかひかたらふを喜びしひと月ほどのわすられぬかな
淡路　加藤香菊

○羽子板の斜めにそれて羽子失せてわが泣く時に來たまひし君
德島　野葦

○わが白く洗ふ大根をほめ行きぬ春の夜にゆく二人の人は
群馬縣　小町

○まきてれしその手枕の夢ならずまた身にかへる夜のありや否
上毛　江澤紫城

○梅が香のわが窓ゆろう入りぬべき靜けき夜なり君の戀しき
筑前　中西まさ子

○秋の夜やわが古壁のすきまよりもれ入る月に心みだれぬ
魚津　谷いくゑ

○大君のみよの榮を祝ひつるわが門松に春の雪ふる
本郷　渡邊三枝

○重なりて一つに見えし遠近の山は雲にぞあらはれにける
日暮里　藤掛つれ子

○恐ろしき悶へに叫び血をはきぬくれなゐに朱にくろにむらさき

○　兵庫縣　米田比奈

まがつみになやめる君を救はんと鋭き刃もて行く男もなし

○　磐城　倉田花子

此水のそこに小さき歌の神おはすと云ひて吾頰笑みぬ

○　京都　宮原花子

春雨のなゝめにふる日小傘をば斜にさして君まへをゆく

○　肥前　眞崎てつ

君が聲あまたに分れきゝわかぬ心の暗の底しらぬ谷

○　大分縣　藻の花會

重かりし病もいつか心地よくなりて黃菊に鋏取るかな

○　門司　永松露香

やすからぬねたき心す君と居てひそ〳〵語る白羽の鸚鵡

○　豐後　與志野綾子

病みあがりよろ〳〵として母に倚りさくらのもとをさまよひしかな

○　小樽　湧田芳枝

なんとなく背の春のしのばれて寂しかりけり君嫁ぐゆゑ

○　本郷　望月麗子

ふとさめて見果てぬ夢の後を追ひ見上ぐる空にあるおぼろ月

○　西山登美子

去年の露みどりのいろの門松にすこし殘りて春風ぞ吹く

○　佐渡　本間綠子

此頃の夜毎の夢の人のかげ去ぬあとに居て悲しさに泣く

○　千葉　藤田すみれ子

薑つむ野邊の乙女のくろ髮をよろこびなぶる黃の胡蝶かな

○　京都　本鄕はるの

去年見てし君なつかしく思ふ哉花散りかかる黃昏の路

○　長野縣　花園さか子

背子と呼び妻よと云はる初めの日ほのかに見えてうれしき夕

○　筑前　矢野靜子

春の野邊寒さに枯れし草々はやゝ甦きそよ風にのぶ

○　筑前　中原とみ子

人はみないやしと云へど我れはたゞこの錢得まく街に花うる

○　秋田　大山愛子

安くして安くしもなく死てふ名をたゞに思ふな悲しき妹

○　東京　渡邊秀子

入海の霞むともなき春の朝浪間に淡き月さへぞうく

○　本郷區　渡邊きゑ子

木がらしの聲こそわけてかなしけれ望も何もかれてきく夜は

○　牛込　平塚白百合

雪の朝見ゆるすべてがいと淸き佛のくにのここちするかな

○　神田　三好富久子

うら若き十五の春のたのしさとくらべて今日の寂しらに泣く

○　京都市　楠田信子

やうやくに戀のほのほをぬけ出てぬわがくろ髮のけふ三筋おつ

○　京都　平井道子

我心柳の枝の如ゆらぐ春日となりぬ十九こえつつ

○　深川　林秋月子

霜白ふ置きたる橋の上に立ち夢に見たりし君思ふ哉

○　はぎ

忘れむと日記をばつけて過ぎし年かかりきなどとまたかかむとす

○　福島　春子

冷けき延命の神われ召すと夢見し朝を君おとなひぬ

○　備中　篠原しげ子

なほ笛に鶯の聲ふき入れて病みたまふ姉にまゐらせむかな

○　岩代　金子きよ子

いたづらになめしき戀と云ふな人淸きけだかきわれの初こひ

○　伊勢　岩崎曲水

今日もまたかゝる思ひに暮れぬると終りに書きぬ初戀の日記

○　丹後　香薑

折りふしは君の名呼びぬ我ひとりものおもはれて悲しきまゝに

○　大坂　花橘

こしかたを思ひて一人野路行けば暗きもの來て我にさゝやく

○　上總　森嬉美子
常磐なる松の緑をよろこべる君にしあればうとみたまはじ
○　美濃　藤井ひで子
あなやそも戀しき君の聲すなり送り給ひし詩集の中に
○　京都　きみ子
事多き師走のある夜たゞ一人月照る森に人をおもひぬ
○　杉本かず子
絶え／＼に落葉の下に一つなく虫の音に似む我身我歌
○　北海道　伊東小百合
さらでだに淋しき宵を胸やみてねられぬ窓に秋の雨きく
○　羽後　三浦ふみえ
この夏は君ときくかな時鳥おそ櫻ちる湯の宿に居て
○　廣島　伊藤たつよ
白銀の野原をかすめたそがるゝ山寺の鐘の雪の日はよし
○　飛驒　知代子
我が追ふは人かさあらず幻のやうなる戀をとらへむとする
○　飛驒　政子
あざむかむたくみならねどこの日頃をかしき歌をおほくおくりぬ
○　麻布　花子
灰かけど火は殘り居ず悲しさはもゆる思ひもつくし果しか
○　宮城　沼倉馥子
けふも亦失せし小猫の爪たてし小櫛を撫でゝ涙流しぬ
○　秋田縣　藤原いて子
おさふべき力は盡きぬ我が胸の戀の思ひの頬にどよむ
○　伯耆　富貴子
花の丘緋と紫と黄の羽の小鳥つどいて春を謳へる
○　播磨　さゝ舟
海といふこころよきもの見てしより胸ひらけぬる十七の春
○　金澤　かつみ
ふと君と道にあひたるうれしさに勝鬨あぐるわが胸つはもの
○　福井　稻の花

夕されば姉のうつしゑとり出でゝ顔にをしあて忍び泣くわれ
○　兵庫　祥子
うす月夜垣根に立ちて物思ふ我影淋し梨の花散る
○　滋賀縣　志賀小なみ
みやしろに白鳩のむれ居る見えて神の銀杏にかすみたなびく
○　沼津　渡邊とよを
ちら／＼と松の木の間に眞帆片帆見えて長閑きいその家かな
○　長野　竹內愛子
朝拜を終りて歸る若人の傘重げにも積る雪かな
○　和泉　金田文子
白梅の花の下枝をくゞりつゝ鶯のなくうれしき日かな
○　山口　宮原たか子
澄みのぼる秋の月にもさそはれてなびくらむかや尾花かるかや
○　長野　川澄すみ子
いくとせを只一すじに君思ふこの心しも憎しと言ふや
○　讃岐　衣輪すゑ子
右ひだり手足をのべてやらじともするがようなるみ言葉なれど
○　千葉　瀧砂子
君と見て口つけて見ぬ紅きばら甘き雫はくちびるによし
○　長野　平林琴江
山ざくら花のちりかふ春の日は彌のかれなりたそがれにけり
○　兵庫　正子
松が枝に積もれる雪を照らしつゝ御空に昇る冬の日の影
○　能登　和子
しら梅の蕾ひらきぬそのもとに二羽の雀は餌をあさり居る
○　山口縣　椙良美奈子
双びなく崇めし君が我こゝろ食みしと人に告げひろげまし
○　岐阜市　篠田とみ子
もゆる火に戀の白玉投げ入れて煙となるを今まつこゝろ
○　愛知縣　岩月まき子
暮れし野を思ひに耽けり彷徨へば笛の音ゆかし君あられども

秋田縣　町本なほ子

○蛇の如枯野を白くうねり行く川の流の清き夜の月　秋田　白百合子

○捨てられし後の心は何事も手には附かずて涙のみする　京都　田口こう

○いとまなき身にしあれ共文机にむかへば君の面影を見ゆ　筑後　柴田百枝

○我胸の清く眞白き花園に一本匂ふ紅ばらの花　信濃　櫛原たづ子

○桂川櫻うかべてわが船の枕の下にひたひたと鳴る　臺北　稗貫光子

○ゆるしませ燃ゆるひなげしそれのみは散りてのちさへ抱かまほしき　高知縣　長尾峰子

○結ひそめの我まろまげの前髪にさくらの花のとまりてありき　大阪　田宮蘆

○星まばら君と居倚りて欄に鴨川千鳥鳴き鳴くを聞く　越後　金塚美代子

○菜の花に二つの白き蝶とびて梅の小道は月になりゆく　三重　吉川澄江

○少女子は甘き昔の思ひ出に涙ぞすなる行く春の日を　三島　遠山雪子

○忘られし昔の戀のわきいでゝこゝろ惑ひぬ若草の野に　美濃　芳翠敏子

○七つほど白帆うかべろ海を見て君をまち居ぬ若草の岡　美濃　傍島小枝

○二分の出の洗朱のふきの素袷の裾さばきよし春の風ふく　新潟　吉田不三子

○聊かのあらそひ事に我は今日君と別れて家に歸りぬ　新潟縣　水野やすゑ

○灰色の雲は氷りてさながらに雪は降り來ぬ山里の家　遠江　鈴木小菊女

○葉がくれの鋭きとげを知らずして觸れて歎きぬ紅ばらの花　神奈川　鈴木辰子

○冬の朝白き湯呑の湯より出て細々登る白き悲しみ　七尾　鹿江能子

○濃き色の緑の波の間よりゆた〳〵上る赤き日を見ぬ　奈良縣　稲西たづ子

○わが君の魂はむくろを離れ來て苦しき事を囁き給ふ　京都　寺井芥子

○紅椿鶯の鳴くおん寺に友の住めるをわれは羨やむ　尾張　加藤胡蝶子

○朧夜に別れし昔しのばれて春雨のごと涙の落ちぬ　富山縣　みゆき

○伊勢の海白帆の一つ漾へる夕の波の上に雪ちる　神戸市　落葉子

○罵りをいひて別れし夕より一入君のこひしうなりぬ　丹後　壺内若葉子

○わが心おぼめきしかなその色の濃きをめてつゝうすきをおもふ　新潟　吉田かほる

○喜びかあらずなげきか悲しみか今宵夢みし君をし想ふ　青森　三上いく子

○朧かりし美くしかりし影追ひて我れはさびしき戀の墓守　備中　馬越昌子

○大ひなる胸の火焔に氷雨してほそくづ高ふひやゝかに凝ろ　埼玉　磯野菊子

○悲に疲れしわれは野の石に身をよせつゝもよゝと泣きぬる　越後　岩本芳子

○天少女降りて我にさゝやきぬとやうにはろの風ふく夕　秋田　稲子

○さらぬだにせまきかよひ路いとゞしも降りしく雪に見えずもなりぬ　京都　楠田栄花

○幾度も後かへりてわれぞ見し片町の月春の御姿



日記

横瀬夜雨選

○廿三日廿四日（天賞）

小石川　つゆ草

廿三日。新聞見る間だけと炬燵に入つたら、いゝ氣持にぬくまつて讀み終えても出溢ぶつてる中十一時に成つて仕舞つた。思切つて裁板の前に座る。ッと横切つた小さい影は小雀らしい。山茶花がハラ〳〵散る。羽にふれてか。早く仕上げて澄ちやんに着せて見度くて自然と針の運びがはかどる。襟のまち針ようく氣を付けて打つて此度こそもうだりつりが無い積だけれど念の爲母樣に見て頂く。あゝ、又しても中三針だつて居た。いつに成らば上手にと……遂心弱く泪ぐまれる。朝子樣から御文參る。例の分り切つた御世辭たつぷり……もう〳〵こんな心にも無い御筆の綾に喜ぶ私ては御座いませんよ馬鹿らしい。石鹸の泡の樣な交際がいつ迄續くでせう、必々と契つた卒業式の日を忘れ返つた樣に此方から差上げた返じさへ給はらぬ方もある。女は薄情だといつぞや兄に云はれてヤッキと爭つた昔が戀しい。下さるかと思へば是だもの厭に成つちまふ。

夜雨戸閉てに椽に出ると皎々と月が照てゐる。二千里外古人心……限なく溢れた青白い光を浴び乍ら、裏に廻つた。崖一面枯薄に蔽はれて白茶色に光つて靜に眠に落ちて居る。どの木も葉が落ち盡して骨の樣な細枝が縱横にこぐらかつた影を地に引く。兩手を胸に組んで楓の幹に凭た私の胸中は仰ぐ月光の夫の如澄て居る。何の不安も不平もなく……十幾里西に在す姉樣は……矢張此月に妹を想つて下さいますか。御心を我身一つに集めた嬉しさは昔の夢……今は變らず思ひつめてる妹から離れて人に半は傾いて仕舞つたもの。想出の絲たぐつてなつかしむのが我さが。返らぬ昔の夢追ふものは意氣地が無いと云ふけれど……

廿四日。能くから晴の續くと。毛程の雲さへ見えぬ青空に凧のうなりが高い。春らしい響。暮だのに氣がの

んびりする。桃割に母様から結て頂く。私の毛かと不思議な位、眞黒につや〳〵して嬉しい。御雛に行くとおばあ様が目を細くして賞めて下さるから暫日本髪にして居りませうねつて御約束して仕舞つた。朝は暇だつたけれど午後から御歳暮客が切なしで立つたり居たり針箱がとう〳〵出せなかつた。明日からいよ〳〵皆が冬休。又折角片づけた室を弟に散かされたり兄様にちよい〳〵用を云ひ付かるかと思ふとがつかりだわ。さう〳〵今夜は髷をつぶさぬ様そつと寝なくちや……。いゝ月だつたけれど……出なかつた。



少年の時　新潟　水澤蝶子

「女は薄情だ」おつしやるまでもありませんと。言つたらあなたは矢張ヤツキとなるだらうか、今。

○なみだの元日（地賞）

山口　酒向とし子

九人家内打揃ひ芽出度大福にお雑煮をすます迄は本統に新年だつたが……着たくはなかつたけど髪は島田なり此時に着て見ないではと仰在るので彼の菊の裾模様の重ネを着たのがそも

〳〵涙の種姉様が肩がまあこれ程しかないわほんとにいゝ事と仰在つた迄はまだ〳〵着心地もかつ〳〵だつたはてなあの糸錦の帶を立矢にすればよかつたけど私が否おたいこにと願つたのは是は私の罪だ、――帶釣をメる時には何だかせつない樣で着心地が面白くなかつた、……「まあこつち向ひてご覽、あゝよつぽど良いよあゝよくうつる「ほんとに模樣がよかつたな――」お祖母樣はにこ〳〵こういつて見て下さる、けれどお姉樣は何やら云ひたい笑顔で只上から下を見おろして被在る、「姉さんおかしいてしよ何見たい樣？眞くイチマ……？「フーンどうもおかしい……あんたの日比の恰好は一寸もないわ」「うそでよつぽどいゝのなのつてまあ御本家の姉さんに見せておいて」御祖母さんはこう被仰たけど私はもう少いお姉さんのお顏て讀めて居るもの、なんて見せに行く氣があろうぞ、浮かないけどわざと笑顔でまた、「一寸姉さん何見たいやう？」「……妾はほんとうの處を云はなければ氣が承知しないからありのまゝをいふがなんてもお前は脊が低いな――本統にイチマだイーエづく〳〵はしとつてはないよ、ても何でしようね日比の樣に可愛處がちつともないもの、惜しい事にはそれ程のぼて〳〵がちつとも目立たないわ、何分にも脊が低い」、――もう〳〵腹が立つて〳〵堪えきれず自と顏が赤らんてのまれるだけは辛棒したけど熱い涙がはしから〳〵頰を傳はるてはないか!!「何がおかしいもの、そりや誰てもちりめんを二枚着ればそう良い恰好にはならないよ姉樣のいふ事を眞に受けるはお前が馬鹿よ」こうお祖母さんが被仰つて被在る處へ大きい姉さんがアラマアーいゝ事！さも心からは被仰つたけど私は出すまいと押かくす涙がホロ〳〵出てどうしても皆樣の方へは向きなほられない、「いゝえおかしいてす、イチマてす、……もう〳〵重ねなんかどんな事があつてももうもう着はしないから……」私はこういゝ乍ら後向ひたまゝクワ〳〵帶をひきといて手早くふだん着を着てドカッと机に打伏して仕舞つた、「お前ほんとに罰があたるよ、かんしやく起すつても程がありますよ……」これ丈を耳にしたきり、泣いて〳〵泣きつくしたけどあゝあきたらない!!!――早いかおそいか一度はこれも着なくちやなるまいがあゝ、私は今の内に死んて仕舞い度いわ何故こう脊が低く產れたのだろう、行樣だつて同じてはないか！もう〳〵口惜しくて〳〵私はお姉さんのお言葉を恨んて泣くのては決して〳〵無い、お姉樣はもう昔からおべん追從大きらひの御性質だもの、お姉樣がありのまゝを仰有つて下さればこそ低い脊も高く見えるといふもの、私は誰も恨むのてはない只つい悲しくてならないのだ、……猶も前後覺ず泣いて居たらいつやらお祖母さんがいらしてお優しく「敏子さん早々からそんなに泣いてお前島田が折角いいのにこわれて仕舞よさあばいを着かえてねもう紋付は姉さんに仕舞はせたから……」私は手をとられて始めてあゝわ

るかつた!!!とつひ〳〵涙がこぼれて一言半句もない、——お祖母さん始め皆様あゝ亡き母様!!を思ひ殊に元日だからとは思つたけど終日心の底の底が或る誠に寂しい者にとらわれて居たのであつた、

これは事實あつたのでせうか。背がひくいと言つてもほどほどがある。私の村にゐるおきちといふ女は身ごもるたびに子が生めなくて三年働いてはためた金を一度の難産に無くし、無くし今も矢はり夫婦して奉公してゐる、手桶がやつと持てる位のせたけだ。呪はれたる人の子の運命よ、泣けばとて終にかわく涙かは。

○迎春日記 （人賞）

赤坂　静江

微かな初鷄の聲に不圖目がさめた、と同時にもう十九と思ふ、形許り大きうてもからもうねんねえで、と母様は仰有るけど、ほんとに大人に成つて仕舞ふた。

今朝は冷たい若水にといて薄すり刷いて、さんざ母様のおもちやに成つて着せて頂く、帶は暮に萩原の叔母様のお見立の、焦茶地に孔雀の羽根をぬいたのを、白鹽瀨の丸ぐけの帶止キユツと結んで、「さあヤツトお人形が出來た」と母様が大きな姿見の底の影を見ながら、

去年の耕無垢は白に變つて、馴れない高髷が大人びては見えるけれど、さすがに重ねた襟の一ッ〳〵若々しい光がほの見えて、云ひ知らぬ思に胸が波立つ。

お屠蘇祝うて直ぐ父様は正裝て參內。雨は全く晴れて暖い日ざしが春の様、長閑なたこのうなりも聞える

お座敷の椽に福壽草の鉢出して、お友達のお端書見るまだ七枚だけ、私も初筆とつて常陸の人と逗子の濤様へ御賀狀認める。用は無いけれどまさか追羽根も出來ず獨て雜誌の口繪あさつて居たら、母様が少し廻つて來る様に仰有る、直ぐ車で琴のお師匠様とお友達三四軒へ上る。最後に高梨へよると澄江様が四日の骨牌に是非と繰りかへす。大分練習したらしかつた。

お晝は父様は聯隊にいらして母様と私と乳母と里と四人限り。お飯後惓きもせずお炬燵の中でお蜜柑等いたゞきながら、つまらぬ事に高笑してゐた、信州の房様から繪端書が屆く、外に二枚

表玄關に名刺受出した儘取次しない事にしたのに、誰か大きな聲でよぶ、近いので澁々出たら、厭な從兄の章様「謹賀新年、謝平素の疎音、倘祈將來之御厚情、庚戌元旦」だつて眞面目に言つて行つてしまふ、皆で大笑ひ、名刺は大概聯隊の方許り、三十五枚迄數へたら門の方で、劍の音がしたので、あはてゝ飛んで入て「まあこの人は」と母様に笑はれて仕舞つた。

夕方重い高髷を俯けて、椽柱に靠れながら小聲に明日彈く松竹梅を、歌うてゐると、襟元を流れこむ風が冷たく身に泌みて、思はず襟を合した。

氣づけば美しく染められた夕雲の彩は、次第に消えて薄れて、私の十九の年もやがて一日過ぎてしまふ。

參內の二字の異様に輝くを見よ。美しう柱に凭れる高髷の人の俤を想像せよ。都は花の人多し。

【秀逸】

○お手傳

常陸　木村なか子

一月三日、晴、今日は從妹の靜樣が、町内だけれどお嫁さんにきまつて十二日の御祝儀だつて、日も無いのでお仕度縫ひのお手傳へに行く。私が受け合つたのは振り袖一重ね、但し上着は小豆色地縮緬に、白て松竹梅を染めぬいた江戸褄模樣下着は二枚とも白綸子。長襦袢二枚、但し眞紅紋羽二重の通し一枚、廻りトキ色地縮緬に紅の大牡丹をあらはしたの、それは絹板〆の胴ぬき一枚、以上婚禮の前日迄に自分が仕立てるのだが、まだ初めなので、何れを先きに縫ひはじめやうか、一寸迷つた、振袖の上着から縫ひはじめる、品がいゝから縫ひいゝ、よく出來る、早く縫へる正午迄に、裏表兩袖、表身頃脊縫ひ終る。

午後、食事休み少しして、表身頃、脊縫ひ終る、直ぐ精進あげの天ぷらて、晩餐頂いて歸宅する。

正月四日、曇り後晴、八時にご飯頂いて直ぐ靜樣の家へ行く、昨日縫ひかけの振り袖縫ふ、裏表縫ひ合はせる、上前の褄が好く出來て、下前の方は何うも氣に入らない、て此麼へタなのに手がきまつて了ふのかしら、と一寸煩悶して見た、裏表の兩袖付け終つて、靜樣に手傳つて頂き綿入れる、フキ八分と云ふのですそ綿だけ極く厚く、他は眞綿だけ敷く、午後四時廿分仕立て上る、衣紋竹へかけて見て泌々見とれた。小町娘と迄歌はれる靜樣が、あのみどりの黑髮を水の滴るやうな文金の高島田に結ひ上げ、白二枚の上ヽ之を重ね、厚板の帶胸高に立て矢の字、に〆めて、お嫁入りの姿何んなに美しかろうと想像すると目の前にかけてある振袖が靜樣の立つてるやうに思はれた。六時歸宅、床に這入つてから靜樣のお嫁入姿を想像して、あゝ自分も一度あんな姿をして見たい、と思つたが、獨身主義だつた、と悟つて淋しさが犇々と身に迫つた。

「獨身」……ほんの文章のあやでせう、あなたの住める下舘は自分の母にとつても青春の思出多き町である、人がよく來るのであなたのお噂をきくこともある、幸にすこやかにおはせ。

○ひきぞめの記

金杉かすみ子

昨日からどんよりして居た空はたう〳〵雨となつた暮から胸につかへにつかへて居たおひき初めはいよ〳〵今日と迫つて終たお師匠さんも隨分だ私に玉川なんかあてるなんて……玉川は井口樣がおはこだのに昨日から母樣が島田にお結ひとさんざお仰るのをお兄樣に加勢して頂いてやつと束髮と定めた。

今日は特別に朝からお風呂をたてゝもらつて念入りにお化粧する其間にお叔母樣が着物を運んで下さる、緋綸子の長襦袢に仕立下しのぶどうねずみの三枚重、鶴模樣の帶を母樣がお立に〆てばら色のしごきをキュツと結て下さる、「おいもう十一時だよ」お部屋から兄樣が聲を掛けて下さる、「あらおくれるワ」と大急て車

を花月樓にとばす、もう大方集まつて居らつしやる、誰も彼も今日を晴れと着飾つたお姿の美しさ、大川樣のお島田の似合事「吉野樣御目出度う」と袂を引かれてハッと振りむくと田中樣相變らず前髮を思きつてだしたカムレット後に緋のリボンをさして空色のお召しのうつりの宜い事思はずそつと自分のリボンへ手をふれて見る。

大廣間には五面の琴と二挺の三味線とで千鳥の曲がはじまるさすがよりによつた方々だけあつて手のこむところでもちつとも亂れない、あ此度は私等の番だと思ふともう胸がどき／＼する私の組は川村樣と木口樣松井樣田中樣と私と五人だ曲が終るとつと五人は互に顏を見合はした。

つきあたりの紙が玉川と變つたので仕方なしに座につく、いよ／＼となると氣が落ちつくのか胸の動悸も納まつた、夢中でひき終るとやつと肩の重荷がをりたやうな氣がする、其次が菊水。椿づくし。八千代。六段。と云ふ順で五時に終る。津川樣のおゆるしのひろめに松葉形のブローチが出る、歸宅したのは六時を少し過ぎた。

見物人が一人もゐぬようだし、お師匠さまもゐたのやらゐなかつたのやら、それも書いてない、この君の事ではなかつたのであらう。あんまり榮えない。

○元日の日記　はぎ

とにも角にも新年と云へば昨日のほてりだらけの街ながら、室ながら何となく物あたらしいのも不思議、廿一の春を迎へて、今年はさて如何なる年を送る事であらう、昨日島田に結ふつもりだつたのが、つい、やめる事になつて今日は輕い束髮紫の矢がすりにはうつる樣に思つたから深紅のリボンをかけた、お正月はいくつになつても氣持よく、羽子つく手はやめられなかつた、もう幾年、テニスもしないのだけれど、やはり其頃の手つきは忘れて居なかつた、

一日は何でもなく過ぎてしまつた、こうして一年も事なく過して了ふのであらうか、何もせずぶら／＼して過すと何だかお正月らしくてい丶氣持、夜、元日の夜の町を見度いと思つて街をあるく、たゞひつそりと昨夜のにぎはしさは何處に吹いて去つたかと云ふ樣な面をして居る、

新年、誰にものこさず來る新年、それならこそ大晦日には夜明かししてまて、兎に角一通り用をなして元日を迎へる、でも何だか糊つけ細工みたいで滑稽な樣にも思はれる、だつて、無理やりに新年に來られて、おめでたう／＼云ひ合つて居るのですもの。平常面白からぬ人に向つても本年も相變らず澤山おじぎをして居るのを見るとまさか相變らず角つきあひませうつていふ誓でもあるまいにと思はれて。

三度着物をきかへた、初春の氣が、くゆらぎ渡る心地、

花が地味なきもの　をきて　嬉しさうにお　雜煮を祝つ

た、誰だ、心ない人、花のきもの丶事を五十位の婆さんのみたいだと云つて笑つたのだつて、つんぼの花の面は悲しさうだつた、めでたい〳〵てまつりあげる元日も人の胸には悲しい事、口惜しい事は絶間なく往來するのだ、

一日は過ぎた、ことしも殘すは三百六十四日、またやがて「舊年」たるべきもとを刻々に形成して居る、

今朝の初日、この夜の星のまた丶き
小兒、老人、死、あ丶我靑春。

最後の二行はまるで詩だ、がさう有りがたいものぢや無い、筆があまり輕快に走りすぎるから大きく深い所があらはれない。のでせう考へてください。

○朝晝晩

熱海　章子

起やうか、起たつてする事もない何れは死ぬんだ、此儘寢てやうか、すればいつかしら瞳を閉ぢて仕舞へる、悶も何もない、苦しみもない、嗚呼然し絕えず囁く波の音が、昨日とは全然變つた、何かしら喜のある日をのせてくる樣に思はれて。あの美しい山、其巓を空を仰いであるから、求めて樂を作らう、胸の血のほとばしる迄生きやう、かう思つて起上つた。十六日の月が西の空に殘つてゐる。あたりの家てはあつい戶をたて丶、月にそむいてゐる。默せる海岸道を南へ南へと、步をゆるませた人はたれも〳〵通らなかつた。

晝近く、靜止狀態を保つてゐた「しゆろ」の葉がわな丶き出した。柑子蜜柑の木の一群がゆれて、章子が泣いた、あ丶又木嵐かと思つて、雲の逸走を一心に見てゐると、肩へ手をかけた者がある「アラNちやん」「これねやつておくれつてMちやんがよ」と古い雜誌三四冊だす「少年世界ね?!どうもありがとう!」一二枚はぐつてみてゐると、肩からのぞき込んで「晩によんで頂戴よねー、ねー」とうるさく云ふ。都の父へ溫泉の分拆表を送るべくポストへ投じにゆく。六尺巾の川沿道、六十位の婆樣、寺まゐりの途中とも見えるのが、しきりに裾をはぐりだしてゐる。同年輩位なのが一人これは、莚に座してうづ高い古綿をほぐし乍ら「おゝおゝ勿體ない樣だね、裏の方が上もので」「東京から貰つた品だよ　フーン損だね裏の方がよくつてさ」滅びざる靈を永久に美しく保ちたい、願はくば靈によつて生きたい、切に――切に――。

今日もたうとうくれつちまつた、いま〳〵しい夜の空氣の壓迫を思ふと呼吸がせわしい。三人對座しておつと耳をすましてゐると人買ふ樣な聲がする、たすらなくなる「今晩は」勢よくかけこむだNちやん、乞食王子をよむでくれとせがむ、膝に頭のせて眼をみはつて聞く。あゝ私にもこんな可愛い丶弟がほしいとおもつた。小さい子の話を空流しに、長壽新法の論說をみる、言々句々皆この胸をおどらす「人の眞正の壽命は其人の事業の多寡を以て計るべし年月を以て計るべき者に非ず」といふ事を論ぜられてある、自分は之をよんで多大の安慰を得たが又省みて、新らしい不安と悲

に掩はれた。あゝ病むだ身、記憶にのこるべき如何なる事をなされやう、あゝ今夜は又新らしい悶をせねばならぬ。

三年越し輕からぬ病をいだいて、花ひらく南の濱にさすらへる人の日記である、姉ぎみも學校を休みて看護に從ひたまふよし。近く中山百合子上田田鶴子の二孃を失うて君をあやぶむこと切なり、少き子よ願はくば死を恐るゝ勿れ。

○初雪

磨志緒

まア之は、と戸を開けてゐる豊の、とんきような聲に母様は驚いた様に起きて室の戸をおあけなすつた、まアあなた、と之も驚いた風にお父様を見かへつて被居る、銀世界かとお父様は寢返しして初雪にはめづらしい澤山だと言つて被居る、私も起きた、書齋の戸をあけると泉水は氷がはつて金魚は底の方にじつとして居る、盆栽の松杉が一等奇麗だ藤のS字になつた一尺計りのにもモロの三寸計りのにも其形通りに雪が積つてゐる、顔を洗つて勝手の火の焚てある所で手をあぶつてゐたら、孃様お手があいてますかつて豊が言ふ、何と尋ねたら、此お菜を切て頂きませう、こんな風にと敎へて呉る、ほんに豊はよく氣が利く私の嫁く日が定まつてから常にこうだ、先て困らぬ様にと思つて、呉るのだらう、こんなに雪降りだつたら困るわ、私ても戸をあけて雪が降つてたら、お母様の様に、まアあなたと言ふだらうか、そんな事よう言はん、今迄兄様〳〵つて甘へてたから何でも言つたけど—こんな雪の日一日勤めてお歸りなすつたら着物は炬燵に掛けて溫めて置かう、でもそんなに、かぢけじやないつて被仰るかも知れん、こんな事思ひつゝ菜はきれて了つた、洗つて鍋に入れて外へ出て見たら今學校へ行く最中、皆テルの大きな物を頭からかぶつて、杖を持てよろ〳〵行く、暫くして子供のお母様が、雪かき持て、お前等かいていてやろぞ、ひどいやろげ、と言ひながら自分はたゞ手拭かぶつたまゝ學校迄かいて被居る、親と言ふ者はと嬉しくなつた。昨日折角洗ひなすつた



クラスメート　群馬　江澤小町

お隣の大根、雪にあふて、ひどい事て、平氣な主人だ、盆踊の歌を歌ひながら大根に莚を掛て被居る。
　書齋にきて一月に投書する原稿でもと硯を見ると氷つて水入の水もない。窓をあけて塀の雪をすくつて息てとかせて書た、此日記も雪の水（こゝ迄書てフト頭を上ると昨日造つた楓が柱掛からすつと枝が出てゐる、紅葉のあるのに雪がふる、こんな事思つて）雪はまだ降つてゐる、靜に靜に――　（十二月十六日）

　そんな事はよう言はんて、ぢやどんな事ならおつしやるのです、序に初やに習つておかぬと間に合はないでせう。

○早春の一日

美濃　葛の葉

四日。妹にも美しい繪端書て年賀状をやつといたに、まだ來ない、而し年が改まつて嬉しいと云ふのでも無し、來ないとてどうといふ事はないけど、待たれて仕方がない、歸省するといふのでわざと出さぬのかもしれぬ、昨年妹のうわさで持ちきり、涛子なぞ、泣いてゝも東京の姉ちやんが……いふと直ぐだまる位、けど私は夜晝となく夕暮の暗がせまる樣て、待ちはまつたものゝ、扨て今近くに、來るとさし迫られては嬉しくない、けど樂しかりし嬉しかりし昔を思つては、來たら二人は手をとり逢つて泣くのかしら、と遂人知れず涙にむせぶのである、いぢめて仕方が無いから丸髷に結つたが、重くていけない、とかいつて來てたから、多分丸髷て歸る事だろうが、白粉べつたりて、赤い手柄かけて、何とかの櫛て……もう何も思ふまい、母樣も父樣も兄姉も皆東京をよく知つてる方、妹が話に口をそへて、日比谷の九段のとさわぐとき、私はどうしてるのだろう、地圖や書物て、大抵は心得て居るけど、まだ實地を知らぬから……一言も口を利くてはない、遂涙が出る、妹が姉さんにとかいた土產を出した時、うけとらぬも心地惡しかろう、がうけとるなら私にもいゝ心地はしない、扨てどうせう、世間の人が私を狐か狸の樣に思つてるてあろうが、二人つれだつて步く事もいやだ、がそれはせずには居られまい母樣の御心も推し計つて、昨日も妹の本家の祖父さんが、まだ來ないかね、つて仰有つたが、噫、妹は私一人て待つ子ではなくなつたのか、私は妹を殘し得なんだが、妹は私を殘して旅立つた、私は一人娘をうらやむ事切てある、誰だか結婚は悲しいにはちがひないけど、自然てふ大なる物に從ふより人間は外に仕方がないと諭されたが、歸する處はそんなものかしら、妹の頰はやせたてあろうか、こえたてあろうか、而し、何てもいゝわ。

　だから言はぬこつちやない。『姉が妹の酌に起つ』と琉球では唄ふのです。けれどお友達の內報によれば近いうちにあなたのもおめでたが有るといふ、して見ればやはりあなたも旅に立つ一人である。

○感慨

東京　夕ほし

バラ／＼と降る雨が、瓦斯の光に、電燈のかゞやき

に蠟燭の焔に、明るくあかるい軒をうつて、時を刻む大黒柱の、長い針に、短い針が、一文字に合つた、ハッと思ふ間にうち始める、恨みを殘すゆつたりした調子て、我ともなく數へ了つた最後のセコンド！十二時。人生、若きを誇りし十七の春も遂に逝く、あゝ、ついに逝くかな。

ゆかばゆけ、去るものは追はじ、來るものを迎へよ、とは、等しく叫ぶ現代の聲てはあるまいか、日に日に老ひ行く人の身よ、人の心よと、かこつも早き、十八年の我なれど、無邪氣に振舞ふ十五六の少女が、ともすれば……恐怖に伴ふ妬ましさに、針もてつゝく隙子も、物かは、五寸の胸を呪ひは貫く……。お目出度うなんて冷評かすものぢやないわ、星をも欺く眼を閉ぢて、首垂れて、震ふ胸を兩腕に包んて、此所、夕ほしは、感慨に堪えぬ面地の、表情なの、觀客もそのお積りて御同情なさらなきやあ、流石の女優もアガッタリ…… なんてホ……。店の忙しさにつれて、用もない私まて御相伴をして、昨夜……と云つちやあ可笑しいけれど、伏せつたのは丁度二時てあつたの。てお正月早々寢坊をして了つたの、床をけつて彼此してる間にもう九時、六疊の窓を開けてみれば、東天紅ならぬ灰色の空、とう〳〵ふり出した、雨は一としきりまもなく止んだ。階下へ來ると、火鉢の側にもう五六枚の年賀狀が置いてある、一番上のを裏返してみると、先達、代議士になつた惟廓さんからだ……開院早々多忙のため……とは振つた、嘸かし藏原さん、お得意になつた御挨拶なのてせう、あらまた小林からよこして、去年父樣から飛んだ無實の嫌疑をうけたのに……ても商買に拔け目がなくつてねお正月うちに是非撮しに行かうかしら、そして女子文壇へ一枚……とは思つた丈、こんな御面相を萬人の前へ恥曝しな、と我を嘲けつて消えも入りたき感慨にまたも胸を痛くした。

相もかはらず奔放なり、赤サヨツキのクラハラ先生を槍玉にあげたのは痛快だがあぶなくて仕方がない。

○ある日

牛込　平塚白百合

一月十三日。今日はほんとにさむい、學校はお休にしやうかと思つたけれど化學の實驗があるし、數學があるのてとう〳〵行くことにした。弟達はまるて犬ころのやう雪が降つてうれしいな、なんてこの寒いのに庭に下りてあつちの隅からこつちの隅へ雪をころがしてだん〳〵大きくしまいには二人ても動かなくなつたので、岡部（書生）をよんてやつと表座敷の正面になる處へころがして、タドンだの炭だのと大さわぎしたあげく、てもどうやら出來上つた。赤うらのマントもそこへほうり出したのてジョンがくわへてじやれてゐる。二人は眞赤な手をハア〳〵云ひながら息をかけては入つて來た。もう學校へ遲くなつてよとおどかしたので急ぎ御飯をかきこんで帽子をかぶるとトットと出てゆくのて姉樣も一共にゆくから待てゐらつしやいと

止めてゆう〱お仕度を始める。弟達も初めはじれてゐたけれどだまされたと思つたので、縁に炭をつけたのもつて來て裏庭て雪つりを初めて。何日もねぼうの兄樣も今日は珍らしく起きて來てこんな時ゆかなけれや配當が少ないからなんて、ダヴルをつけたり荒縞のヅボンをつけたり、高商出のハイカラ樣は出來上つた、けれどをしいかな赤テガラの若々しい方がうしろから背廣をかけるのでないから何んだかお氣の毒だ。思はずくゝと笑つたので兄樣は金ぶちの上から妙な目して見てゐらしつた。

さあ行きませうと四人して出かける。母樣はころばないやうにとお氣をおつけになる。兄樣は通りに出ると早速電車にとびのり。洗朱のお包が遠くなつてもハツキリ目についてゐた。今日もやつぱりまたあの方にあつた。カムバスに何か書いてあるやうだつたけれどはつきり見えなかつた。フト書はかけないから兄樣の寫眞機出してせめて今日は五六枚うつそうと思つた。

東京の方は何を書いても氣が利いてゐる、野暮ては無い、がそれだけ上すべりてある、目まぐろしい刺撃に頭をつからしてしまつて、深く想ふとをしない。遠くおもんばかるともしない、だから人事をうつす點においては地方の人は足下へもよりつけないが、抒情の方面の詩といひ文といひ生命ある藝術品はつれに他から産するのではあるまいか、

○半日　　青葉

縞物を持つて、日あたりのいゝ椽側へ出た、梅鉢の傍て玉が咽喉をゴロ〱鳴しながら、足を投げ出して、寢そべつて居る、せつせと、針を動して居ると、弟の聲がするので、ふと顏を上げると、半洋袴に黑い靴下半靴を穿いた、色の白い眼の涼しい、上品な、男の子を、連れ立つて居る、あゝ此子だな近頃に、母樣が死くなられたので、當地の伯母樣に世話に成りに來て居る、道夫さんといふのは、と思つて見てゐると一間程前まで來た時、立ち止つて、私の顏を見上げ靜に目禮をした、まだ弟と同年の十歲位だのに、何と落着いたと感心した、弟の出した、座蒲團に、四角に座つて、伏目になつて、庭を見て居る、美しい子だが、何所かに沈んだ所があると思つた、弟は、と見ると何日にない、チヤントと座つて畏まつて居る、御本を見せてお上げなさいなといふと尻輕に立つて、古いのや、新しい、小年雜誌を持つて來た、君それが一月のだ、と出す、そと受取る時、右手の藥指から金光がさした、まあ、男の子に金の指環!!他の子だと、一寸お見せといふ所だが、あまり相手が大人らしいので默つて居た十一時が鳴ると、ツと立ち上つた、弟は、もう歸るのと見上げて居る、はあ、此本借りてもいゝの、あゝいゝとも、それぢや借りて行くよ、僕のの本もあいてゐるから讀み給へ、はつきりした聲て初めて、口をきいた、私の前へ來て、有難う御座いました、相變ず落着いたものだ、じや失敬、失敬、靜な靴音の消え行く方を茫然眺めて居る弟に、道夫さんて、あの子てしよう、といふと、

ウン、何だか沈んで居るのね、それや沈んで居るよ、君は母様があつて羨しいつて何日でも泣くよ道夫さんはね、涙はこぼしても聲は出さないよ、と不思議そうな、弟の顔を見ると、可笑しくなつて、それがほんとうに泣くといふので、誰かの様に涙は出ないのに大聲を出すのは泣んじやない、人威しといふものよ、といふと弟は、眼を剝き出した、

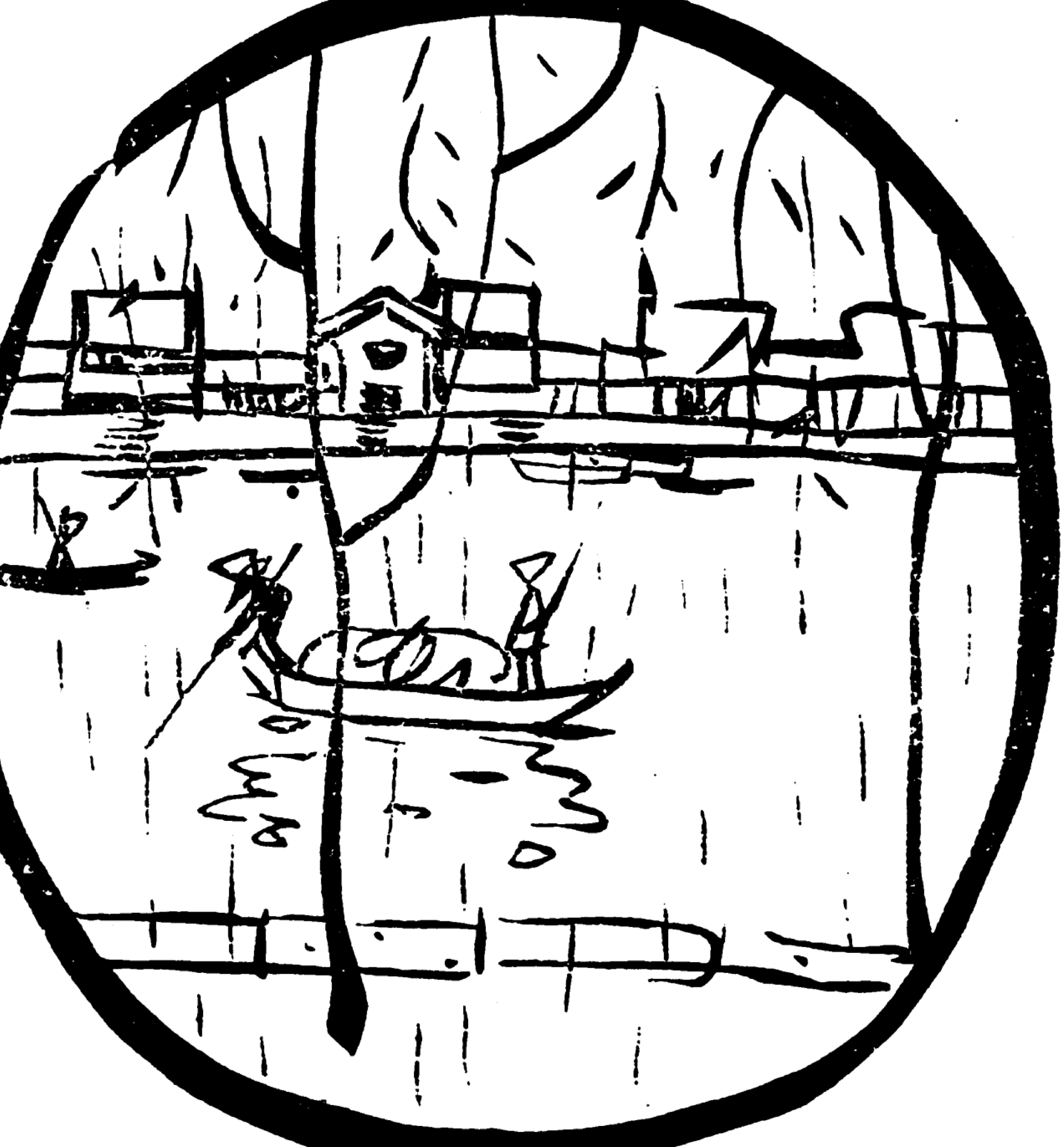
「おれと來て遊べや親の無い雀」孤し子の顔はどこか寂しいものである、いぢらしくも可わいさうにも見える、けれど其悲みは淺薄だ、知らずや、かぎりなき寂寥をいだいてなほ地上に生くる人も在る。

○朝の記

下總　善子

善、善やもう夜が明たよ早くサヽ起きて、

ウム……



春さめ　　青森　松尾千代子

オヤ／＼まだ寝てるよ驚くね茂や姉さん起きないから、蒲團はぐつておやり、はぐられては大變早速ムックリ起上つて仁王立寝卷を着かへて釜の下を焚付る昨晩十二時まで起きてたのでねむくつて仕様がない火が漸くもえ付いた、床をたゝまうと座敷へ行く母様は私を起して置いてグー／＼また寝てる茂も何か夢見てるか高いびき、ぬき足に自分の床へいつて、どてらを丸めて、ふとんの中へ、丁度人が寝てる様に枕をそばへ置いてしらぬが佛の釜の前、御飯も出來たお汁を造らへなければならない味噌をするのに音がしては面白くない寒いのに外ながしへ持つて行つてゴリ／＼する。

座敷の雨戸もあけずに置いた、朝日がお池へうつゝてきれいだ事、奥て母様が善起たかへと聲がする、わざとだまつてる、此度は弟の聲やあ姉様まだねてるよ、何まだ寢てるほんとに困る子だねふとんをはぐつておやりよ。

あら姉様居ないよ、何居ないどうしたらう、もしあなた善が居なくなりましたよ、私は可笑しくて笑ひながら座敷へ出て居つた、あらお前は。

川柳子曰『脫けた床いますが如くふくらませ』と。

○始て肩上げのおりた日

信濃　優　梨　子

一月三日、「子母様、可笑しう御座いませう」と私は又、肩上げの取れてつるりとした肩を撫てながら、後て羽織の衿を直して居て下さる母様を、振り返つて云ふと「先刻からあんな事許り云つて、什麼だか姿見の前へ行つて見てお出でなさい」と、餘り口說くて、おうるさいと見えて、窘める様に被仰つた。

私は、そつと姿見の前へ立つて見た。

何だか急に大人らしくなつた様で、誰も居ないのに、思はず顏を赤くした。

思つた程可笑しくも無い。此頃少し瘦せた肩へ、お納戸地紋羽二重の羽織が、すらりとかゝつて居る。

九寸の袖が、肩上げの下りたせいか、長い様に見える。地模様が少し、華美過ぎたと思ふ。兩手を延ばして見ると、だらりと兩方の手首へ袖口がかゝつて、嫌な氣持ちだ、

人が見たら可笑しいだらうか、と後を振り向いて寫して見た。

什麼しても二つ位の年上に見える、と思ふと何だか自分が可哀想になつた。

すらりと裾長に着た、紋織お召の二枚小袖が、羽織の色によくうつつて居る。

肩許り氣にしながら、お琴とお茶のお師匠様のお宅へ御年始に行つた。

道て摺れ違ふ人が皆、私の肩許り見る様な氣がして、恥しくて下許り向いて歩いた。

「歸りに一枚撮つておいて」と出掛けに母様が被仰たけれども、私はよして急いで家へ歸つた。

上げのある常着を着ると、急に子供らしくなつた様な氣がする。あゝ、是も何時の日にかは、おろすのだ、と思つて、斯う何とも云はれない名殘り惜しい様な、泣きたい様な氣がした。

「恥かしわれが肩上とれぬ」と歌うた太田榮子さんにお目にかかつた時肩のあたりの寂しいようなのを見て今更にあの語句を口の中でくりかへしたのももう三年の前になつた。人は皆かくて老いて行くのである慘酷なるかな。

○自炊日記

淡　月　女

廿日、

寒いと思つて目がさめると驚いた窓の戸がすいて居

るのだもの、まだ階下ても起きぬと見へてひつそりして居る、早いのか知らと思つて窺間から外を見ると明るい起きて枕時計見ると七時十五分前だ、いそいで下へ降りて顔洗つて來て火をおこして御飯たいて頂き一寸髮をかいて袴はいて後片付もせずに出かける、銀行へ着いたのは八時五十分此頃はいそがしくて四時に歸れた事なし今日も居殘りを五時半までして歸るお腹がすいて仕方がない、お夕食して下へ行つてお鍋洗つてお米といてきてお湯にゆく、着物ぬぎながら何の氣なしに姿見に寫つて居る自分の顔を見ると鼻の脇に鍋墨が一文字について居るからおかしくなつて一人で笑つてしまつた、四日目て入浴したのてよい氣もちになる歸つてから田舍の母の所にお餅を送つてくれる様に手紙出す、

十時消澄、

廿五日銀行がいそがしいので早出するので五時半に起きる御飯たいて仕度して出かけるまだ早いので寢坊の家てはねて居る霜が澤山降つて寒いことと勤めはつらいとつく〴〵思つた居殘りすませて六時に歸ると母から小包がとゞいて居る、いそいて開いて見ると粟と米のお餅別に手織の銘仙一反、之も母の情とうれしくて頂いてつゞらの中にしまふ、明日は日曜だから年末に頂いた賞與を爲替にして送るつもりて手紙だけ書いて置く消澄九時半。

「すまじきものは宮仕」

○賞品

大分　原田澪子

仲兄さんの書齋に行つて、文章世界を借り、余の廿歳前後と云ふのを讀んて居たら惡口やの兄さん、何だいそんなもの、つまらない。と始め出した。よくつてよと云つたまゝ、相手にしないて先を見てると、おい、今日は十二月の十五日だよ、十一月の末日迄に發送するのが馬鹿に遲れるぢやないか。と鼻先て人をあしろう様な口ぶりが、ぐつと癪に障つたので、默つてらつしやい、今にいいものが來てから見せびらかしてあげるから、それよりか、貴方の秀才文壇社だつて如何てすか、後月中に來なくちやならないんだのに。やあい。私は口の中て我慢して、やけに頁をバラ〳〵繰つた。そしてから六日たつた。母樣は反物を左手に掛けて左見右見、折角樂しんてたのに男物ぢや惜しかつたね、と奇麗に思ひ切つた私を慰めて下さる。仲兄さんは頭をかき〳〵、僕のに呉れるとなら貰はない事もありませんけれど、その、妹から仕着せして貰つたては甚だ男が下りますからね。と何所まで大きな口をきくのだろう。貴方の賞金て、椿姫を買つて下さりや私、喜んて進上するわ。と微笑した私の顏を見て、仲兄さん一も二もなく承知した。

直に裁つて縫ひ初めると、兄さん側について居て、何時出來るんだね。とニコ〳〵し乍ら、澪、兄さんがお菓子をおごろうかね。と珍らしい御氣嫌て欣々として外に出た。

後に大兄さんニヨロリと入つて來て、豪氣だね。とひやかしなさる。だつて自身て稼ぎ出したと思ふと嬉しくて堪らない。

旦那樣に昔の懸人があつて赤ちやんが出來かゝつて、こん度はお赤飯を焚いたと書いて來るだらうと思つたら、賞品の御自慢なり、兄さんばかりてなく、どうぞ私にもお裾分を、

論文

編輯局選



○『今の女』を讀む（天賞）

備後　井上年子

これは批評でもなく反駁でもなく、たゞ私の意見を忌憚なく發表するのです。

この一文で論じられた樣に現今の女子が果して呪はれて居るか何うか、私をして遠慮なしに言はせて頂くと此說は餘りに消極的な、悲觀的な觀方ではあるまいかと思ひます。

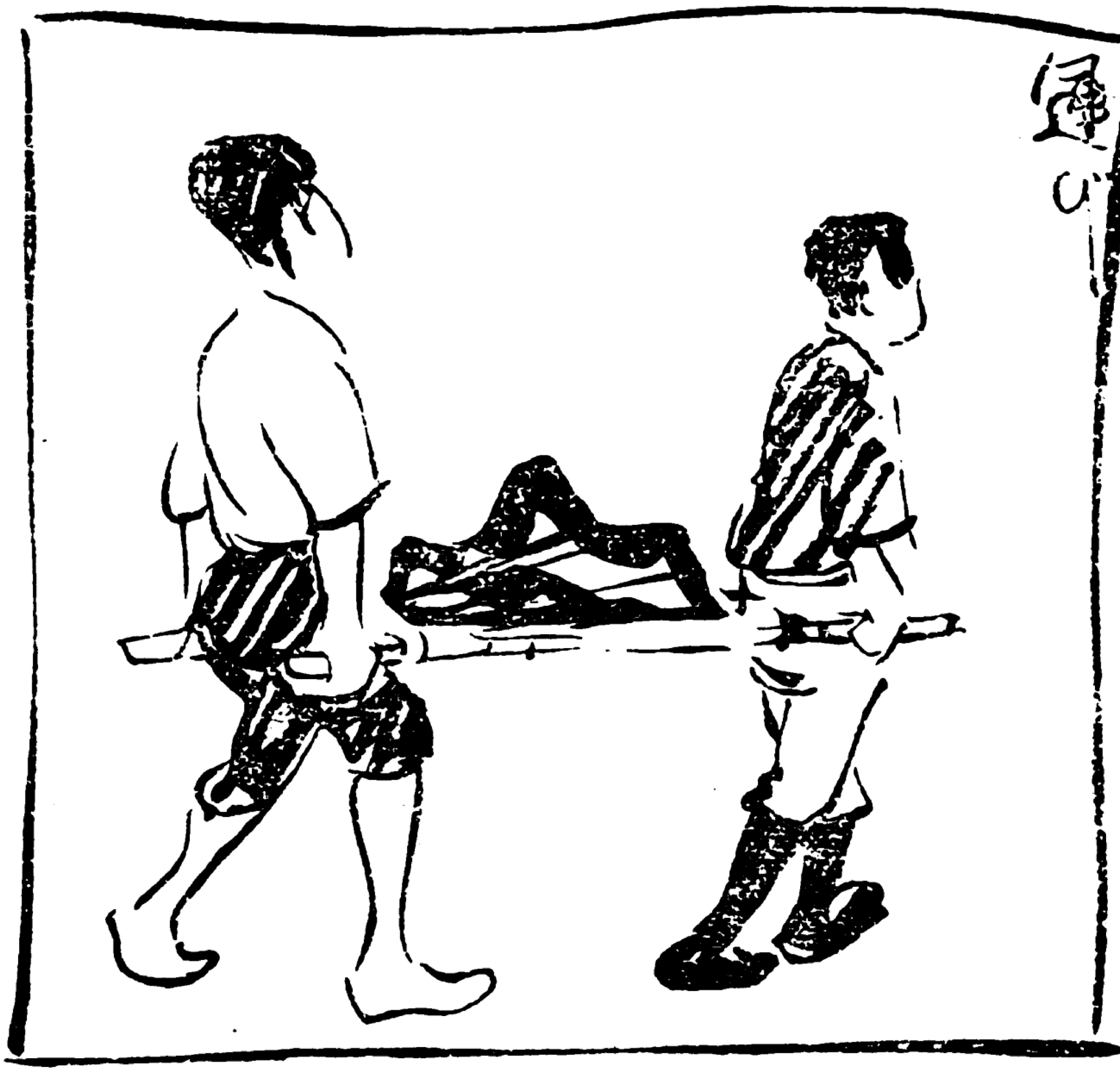
「忌憚なく思想通りを發表すれば生意氣と言はれる」けれ共これは決して左樣ではございません。女子として、絕對的男子がなすべき言行、例へば政治の如きに口を出したり。又は特有の例の長い舌で、無暗にべら〳〵しやべつたり等するから、遂にお轉婆とか生意氣とか言はれるので、自己の天職即ち女の行ふべき道に向つて、思想を發表し意見を述ぶるに、誰れがなんと言ふものですか。私は思ひます、現今の社會は決して女子を呪ふたり壓迫したりして居るのではなく、否むしろ女子の爲めには大に盡して、更にその羽翼を擴張せしめんとして居ります。其證據には、女子敎育は益々奬勵し發達し、女子の職業は成べくこれを廣い範圍に於て求め、女子の權威に對しては充分の保護を與へ、つまり社會に於ける女子てふものゝ地位を、女子自身に求めさせようとして居るのが、現今の社會の狀態ではありますまいか、それに社會は女子を呪ふて居るとか、いまの女はつまらないとか、無暗に悲觀するのは、つまり社會が與ふる食物を、充分消化する事が出來ないから起る、一種の病的現象でせう。

思ふ事望む事、それをたゞ理想に止めて置くと言へば、何んだか口惜しい樣な情けない樣な心地もします

が、しかし胸に手をあてゝよく考へてごらんなさい。女子と言ふものは、とかく虚榮にあこがるゝものですから、其希望が分相應て出來得る事ならよろしいてすがもし虚榮が根柢になつた途方もない希望てあつたなら言つた所がだめてせう。でもし其希望が普通一般の即ち自己の地位や境遇て求め得らるゝ希望てあつたなら、何も遠慮する事はないドシドシ言ふべく望む可してす、社會も又決して障害は與へないてせう。

然るにそれを言はれない望まれないと言ふのは、希望其もの、裏面に、例の虚榮がついていて、自己も又暗にそれを知つて居るからてす。具體的にお談しするとつまり、第一意識の虚榮と言ふ火がどん／＼もえて居るのを、第二意識のむしろを以て押えつけて居るので、すきさへあれば不平と言ふ烟が吹き出すのてす。ですからこの邊は、自己の何者てあるかと言ふ事を中心として、更に深く考へたなら、決して女子其者が不幸てもなく、又總ての希望を理想にとどめて置くにも及ぶまいかと存じます。

呪はれたる女、成程一面即ち弱點の方面から消極的に觀察すれば、或は呪はれてるかも知れませんが、更に考一考して、も少し積極的の方面から觀察して頂きたいてす。それは女子ばつかりてはなく、男子でも弱點の方面からのみ觀察すれば、決して女子が想像して居る程樂天的でもなく、幸福て



働く人　かごしま　勝田かつ子

もありますまい、いゑむしろ呪はれたる男子とても言はなければならないでせう。

それから近頃の女子は、とかく男尊女卑とか、或は男女の權利地位が平等でないと言ふ事を非常に苦に病んで居られるやうですが、しかし是は甚だ間違つた考へでせう。偏屈な封建時代はともかく、現今の社會に於ける女子の地位は、法律の上に於ても道德の上に於ても、決して男子と何等の等差はございません。つまり女子自身が自ら卑下して、男子に對するすべての主張を讓歩して居るからこんな狀態になるのであつて、女子だからと言つて、自己が首肯せざる事物は、何人も是れを犯す可からざる以上、何所までも其權威を發揮する事が出來るじやございませんか、つまり「弱き者よ汝の名は女なり」が、現今の女子の頭へ泌み込んで居るのでせう。

それなら女子にも參政權を與へよと言ふ人があるかも知れませんが、これは又甚だ間違つた主張です。女子は到底政治を司る器でない、と言へば語弊があるかも知りませんが、こんな事は女子の天性的職業でありません、例へば女子を軍人にせよといふのと同じ事で、こんな事はあまり望まない方がよいでせう。

終りにのぞんで、感情の强い皆さんは、たゞ自己だけを中心とした、告白的な主觀的な態度を取らずに、も少し客觀的な研究的な態度を以て、觀察して頂きたいです。

まだ私見は盡きませんが、また稿を更めて發表いたしませう。

是れは昨年第四增刊「家庭日記」中掲載の告白に對する批評であります。冷靜の見辛辣の筆、よく一面の眞理を道破して居ます、しかし其態度が高壓的で而かも典據とする處現代の律法制度或は道德習慣のみにてよく婦人を保護し權利を擴張し得とのみ解して他を言はざるは聊か彼れの深刻に對して淺薄の感がないでもない、原作の所謂呪はれたりとする所は此作中にもある「女子自ら卑下して男子に讓歩してゐる」云々のコンベンション其ものを根本から破らうとする努力を妨げ呪ふが故に悲觀すると云ふわけだつたと思つた。とは云へ議論としては堂々たるもので眼中情實を入れざるところ近來の快事であります（評）

○ランプと家庭（地　賞）

大阪市　渡瀨淳子

婦女の務めの一は人に慰藉を與ふるに存する事は古來定まる所であります。終日の生活苦鬪や勉學の疲勞に身體を綿の樣にして歸り來る家族を、半夜の慰藉に新なる力を回させ、又翌日の新生活に入らしめる事は婦人の最大なる責任であります。此平和と安息との半夜に婦人を助ける第一の味方は燈火でありまして、世俗に「暗夜に燈火、地獄で佛」とも譬へらるゝ如く、

燈火は夜の家庭の生命と申しても過言でありますまい。此燈火の中部部を通じて尤も多く用ゐられるのはランプであります。婦人は自分の責任を全うする上に此ランプを活用せねばなりませぬ。樂しい晩餐の席、快い團欒の座は花やかな燈の光に輝いて、鬱した氣も伸び伸びし、疲れた目も活き活きしませう。もし其時婦人の心遣ひで、其ランプのホヤは美しく拭はれ、金物は燦然と照り映えてゐたならば、其夜其家人の夢には天使を迎える事が出來ませう。反之、其婦人の心の直からぬを表した樣な犬牙形、M字形の燈から、天井にも屆き兼ねまじき煤烟を漲しホヤを黒ずませ、又は燈心の短くなれる油の殘り少なる等を其儘に點火した場合には、初めの笑聲歡語も次第に沈んで家人に不快の念を起させるのみならず、自然と小言の一つも出て折角の感興も何處へか失せるものであります、故に婦人は唯日課としてランプを掃拭する計りでなく、自分の助手、味方としてランプの効用がいかにホーム全體の精神の上に及ぶかを考へて家人の慰安の助けとする事を怠つてはなりません。

奇警の論ではないが尤も適切な具體的論議であります、かゝる常識に富んだ寄稿のあることを喜びます。（評）

○日用品の求め方について（入選）

上毛　江澤紫城

皆樣のお家では、毎日お用ひになる、買物と云ふ至極大切な用務が有ります。是は今更喋々する迄もなく私等婦人たる者の、家政經濟上、大に關係のあることてす。先づ食料品其他種々の日用具の買物について申しても、上手にすると下手にするとて、一年に多大な相違が生じますから、是非注意してほしいのです。何故同じ金錢を使用して、上手と下手とがあるかと申しますに、今時の若い婦人達は、其利益を現在知つて居ながら愚にもつかない事を考へて、サアそんな買物と云ふと、何んだか「恥かしい」と云つたり、して逡巡する所謂奥樣振つたり或はお孃樣振つたりして、サツパり自分で仕ないでつまりは奉公人任せにしたり、又は出入りの商人が持つて來るのを待つてる風で、經濟の事など毫も念頭に無いから見す〳〵非常な損耗を仰いで居ります。

如何なる高貴の婦人でも、日々の買物はなるべく自分でお出向になつて、そして品物を十分お擇びの上お求めになる習慣にしなければいけません、現に其鑑ともすべきは、聞及ぶに尾崎東京市長の御夫人です、此方

は毎日二三時間位は下女を召して、能く買物をして來らるるさうです。市長の御夫人ですら其通りですから、何處の婦人でも、敢て買物に恥づる必要はないです、自分で行つて買求めた物と、奉公人などに買はした物とでは、第一品物の擇び方に大層相違があります、たとへば些と野菜の樣うな物を買入るにも、奉公人賴みですと、八百屋の店先に並んでる物を何氣なく直ぐ買つて來る風で、其品物が古いか惡いか直段が高いか、そんな處迄は概して注意がとどきません、が自分で行つたとすれば、何から何まで買はんとする品物は全然檢査でもする樣うに擇んで、相當或は格安に新らしき物をば買求むる事が出來ます。それから何品でも出入りの商人が持つて來る物は、必ず割付て高くなつて居ります、其上塲所によつては品質に及んで、幾分か惡い事は已に申すまでもない、謂はば店へ置く品物とは又相違があります、店へ置く品物は多くの人目に付き易いですから、なるべく新らしい樣うな良い物を並べて、古い樣な惡い物を持ち出すのです。一家の經濟を掌る私等婦人は、これらの點からして、克く注意をしなければならんものと思ひます。

これ亦時弊に適した好議論(評)

【秀　逸】

○子供の教育に就て

田三好富久子

氏より育ち、と言ふ事が御座います通り、誠に子供のそだて方程、親にとつてむづかしく又大切なる事は無かろうと存じます、例へ氏は賤しくともそだて方が良ろしかつたなら、如何な豪い人にも成れましやう、親の躾方一つで神の如に清い子供は、惡くも成りますし良くも成ります、それに恐らく子供程、何でも親の眞似をする者は御座いません、自分は未だどう云う事が良い事か惡い事か解りませんから、親のする事は皆良い事と思ひまして、親が足を投げ出せば自分もなげ出しますし、亂暴な言葉を使つて人樣の惡口を申しますれば、矢張一緒に成つて惡口を言ふといつた風に、良かれ惡しかれ一々眞似ます、ですから親たるもの、誠に始終家に居て家事を治める母親に於ては、言語、動作、些細な事にまで注意して、子供を良い方に良い方にと導びいて行かなければなりません、又其れが親たる者の義務であろうと存じます、私先にかう言ふ話を聞いた事が御座います、それは、或る田舍に老いた母と若い娘と、大層仲良く暮して居りました、すると或時其母が、齢にも耻ぢず不品行であつたと言ふ事を、娘が知りまして、それからと言ふものは、今迄の母を尊敬すると言ふ念は、忽ち侮蔑の念と一變致しましたと同時に大變親思ひであつたのが、母と言ふ念などは全たく念頭に無くなつて、只母は不貞操な女、自分の

母として尊敬すべき人で無いと言ふ觀念が、始終頭にありますから、母の言つた事は一つも有難いと思ひません、ですから春の如に暖かゝつた家庭も、氷の如に冷やかに成つたと云ふ事です、私は其れを聞きましてつくゝゝ感心致しました、何でも親たるものは、子供から尊敬される樣で無くてはならないと思ひました子供から輕蔑される如に至つては、最う終ひです、白糸は赤にも黑にも直きに染まります、而し元の白にしやうと言ふのは到底不可能であろうと存じます、あゝ世の姉樣達よ、どうぞ此の子供の敎育と言ふ事に就きまして、重大な責任を持て戴きたいので御座います。

首尾一貫した好議論、而して筆に力あり（評）

○所感、二一

（五卷十六號を讀みて）

京都　益　子

病氣

病氣は人生の一大幸福であるとは、餘りに極端な言方ですが成程塲合に依つては幸福なことゝもありませう。病氣にかゝつて初めて病者に對する美しい同情はおこります、又一ッには健康な時の幸福を心から感謝する事が出來ますもの。而し大切な身體を重い病に苦しめながら。不治の病氣になやみながら同情心の起るを以て、幸福だなぞと感謝しても居られますまいが、言ふまでもなく病氣といふものは貴賤の別なく、人の身に、何時ふりかゝるものとも知れません、一朝病氣におかされた時には、如何に黃金の力でも、如何とも詮方ない事、ですから徒らに苦悶して悲觀せずに、その樣な考へを持つことも大に必要であります、けれ共決してそれ程に病氣を歡迎したものではありません。

それよりも常に、攝生を重んじ、病氣にかゝらぬよう心懸るこそ、最も肝要であります。



子守　小石川　渡邊よし子

同情

自己が苦しんでもつて起る處の、他人に對する同情について、一言、感じたまゝを述べてみませう。同情は實に美しいもので、人間として世を送る上にその心なくてはなりません、況して婦人には、尤も心得なければなりませぬ、互に同情心あつてこそ、苦しい時に慰を得、悲い時に望みを得る事が出來て、波風荒い世の中を渡ることができるのでありませう。扨てその同情について考へますに、折々間違つた同情をもつて與ふる人があります、私なぞもよくそうです、例へば或る人から病氣の苦痛を訴へられたときに、お察し申ます苦しいでせうと、云つて共に泣き沈むのはどんなに同情が深い樣てすが、同情された人は、却つて多くの悲しみを覺え、折角の同情も何の益する所もありません、それよりも、これしきの病氣に何故そう心を痛めるのですか、今によくなりますのに、泣くてはありません、と心强よく言つた方がどんなにか氣力を勵げまし從つて恢復も早くなる理、それてこそほんとうの同情となります、私はかういふ方法でもつて、同情心を活用させ度と思つて居ります。

『病氣』は明快なる駁案であります、『同情』は理論として物足らず、何となれば同情の精神と作用（手段とも云ふべきか）とを一つに論じたのはいさゝか欠點でした、同情の高まつた時前後も知らず泣く事もあります、又勵げますのは別に智が加はつた行爲です（評）

○妾の靈魂不滅論

尾張　長阪金子

靈魂とは佛者の言にして醫者は之を精神と云ふ、而して佛者は之を不滅と云ふ、卽ち人死すれば身躰は消滅すと雖も其靈魂は永久に不滅のものなりと云ふ醫者は之に反して人死すれば其精神は身躰と共に消滅すと云ふ。

されど吾人は之を科學上より論じ不滅と消滅の二樣に區別するを至當なりと思惟す。

凡て宇宙の動物は種々の原素集まりて細胞と成り、種々の細胞集まりて一定の形を成し、之が種々の階級により五官機能及精神機能を發するものなり、吾人々類は動物中五官機能及精神機能の最も完全に發育するものにして、萬物の靈長とこそ云ふなれ、之が種屬保存の爲其子孫を播殖するに當り、男躰細胞の一部分と、女躰細胞の一部分と合して一魂となり、發育して胎芽となり、胎兒となりそれより或は男胎となり或は女胎となり產れて初生兒と云ふ、長じて兒童となり大人となるものなり、

（一）されば何人も子あればたとへ死すとも其人の細胞の一部分は既に分離して子と成り居れば、其人生の命は全く死せしに非ず、子として生存し居るにあらず

や、子として生存し居る以上は必ずや精神も伴ひ居るなりされば子あり孫あり系統連綿として絶えざる以上は吾人の生命も精神（靈魂）も共に不滅のものたるや疑ひなし。

（二）サア言へ今若し不幸にも子孫無くして死する人こそは生命も精神（靈魂）も共に消滅するや明なり。

故に吾人は常に子無きを憂ふるも亦宜ならずや　子孫を殘して死する人は、其身躰は恰も蟬の脫け殼の如きか、要するに吾人の生命及精神（靈魂）は吾人の血統連綿として絶えざる間は不滅にして一朝子孫斷絶する時は、吾人の生命及精神（靈魂）は己れ一代にして消滅するものなり。

つまり子を殘した靈魂は不滅で否らざる靈魂は滅すると云ふのでしよう、こんな說も無論あるが、さうするといつか地球が黑焦げになるとすつかり靈魂が滅亡するわけですね、どうも何處かで聞嚙ぢつた附燒齒らしい議論です、作者衷心の叫びと思惟とが聞きたいものです（評）

○後を見よ

羊もり

私は新らしい春を身に迎かへて苔の生へる樣な古臭い思ひを今更しみ〴〵と心にうかべました。あゝ思つてもぞつとする一月二日の夜我が第二の父と恃むおん方が年賀にまいられた時おいしいおつゆを料理して賞めていたゞいたまではよかつたが「襖をたてて下さい」と父にたのまれて、小笠原流に小腰をかがめする〳〵と奧と茶の間のあひだをたてきつて其まま下座に扣へて居りますと、お客樣は私の樣子をしげ〳〵見てなすつたがやがて絶えかねたやうな樣子をなすつて「これこれ今から盆の檜をかついではいけません後を見なさい後を見なさい」といはれて、はつと後を振りかへれば……まあ襖が二三寸も片よれて明いてるではありませんか。どうしやうかと顏から火がでさうで穴があつたらはいりたうございました。何氣なく側で見てなさる父樣のお顏へ泥をぬつた樣な氣がしましてね。そこそこに座をはづしてまつくらな納戸にかけこんで太い太いため息しましたの。そして何とはなしにこれからはきつときつと仕事をした跡は振りかへらねばやむまいと片意地の樣な固い決心をしたのです。それからの私は何事をしても「後を見よ」との心のさけびに知らずふつとむくのがくせになつてしまひました。そして後を見て整頓してると鬼の首を取つた樣にうれしくてなりません。このおはづかしい失敗談を申しあげいはずと知れた「後を見よ」の理屈にかへました。

年頭の好箴語と云ふべし（評）

書簡文

編輯局選



○ホロナイを過ぎて（天賞）

赤坂　静江

豐原を立つて三日、鈴各山脈も見えずなつて、只白い風が吹きしきります、今朝七時アイ村を出て十一時ヲダサン着、此處で馴れた馬橇もすてゝ犬橇に移りました、首飾して王樣の樣な先導犬に續いて、屈強なのが六疋、アイヌの一言に飛ぶ樣に走ります、ゆれる度に父樣につかまつて太息して笑はれましたが漸々に馴れました。

今道は氷つた波うち際を行きます、右手一帶は海にそうて急傾斜の落葉松、椴松の密林、更に遠く西の方は峻しい連山の頂きが低く垂れた雲の間に仰がれます海岸は少しも屈曲なく、見はるかす山又山、丘又丘、積つた雪の白き許り、家らしいのは一軒もなくたまにあるのは、漁期のみ使ふ壁のない小屋だけです。雪許りで母樣は眼を痛めなさいました樣子、是から眞岡迄此の佗しい旅はまだ四日續きます。

走つて渇いては雪をかむ犬の哮える聲が邊に響いて淋しいとより辛らう御座います、母樣は黑馬物語を讀んで居られますが、私はいつかの愛吟を持つた儘開きもせで、思ふとも無く内地の青い山を思ふてゐます。

もう梅も咲くでせうに、華氏〇下二〇度です。

今宵はシラヽカの街に淡い夢路をたどります、郵便局のあると聞くのが何よりの樂しみ、詳しくはいづれ宿て、さよなら（樺太旅行中）

北地からの景と情とをもたらして讀む者の感興をおどらせます、材も珍らしく筆もなか〳〵練れて居ります。（評）

○故郷の母に（地賞）

西多摩　三ケ島芳子

初春早々と御心をこめられた御贈りもの、今朝ほどたしかに受取りました。軽いからもうお海苔だと思ひながら、大急ぎで披いて見ると、まあ、香んばしい海の匂ひと、あの襟の色合と、私の嬉しさ御察し下さい、その豪氣な笑顔がピカ〳〵する鑵の盃に映つたのでなほをかしかつたのですよ。早速近所の世話になる家へ少しづつあげましたらみな珍らしいつて喜んでくれました。今年のは大そう品質が上等のやうですね！これを味はふとまるで家へ歸つたやうな氣がします。あの前の川に浮いてる海苔採舟も、畔の干場も見えるやうな氣がします。こちらの方でも同じやうな方法で紙漉をする家があります、紙ては食べられませんし、さう思ふやうに何かが買へませんから、ほんとに何よりの品なのでございます。かうして私が一人で山の中に居ると思つて在京の



芋あらひ　麻布　松下たれ子

陽一（弟の名）は先頭第一に、目の覺めるやうな繪はがきで年始狀をくれました。きつと前の晩あたりは繪はがき店の前に一時間も立つてゐたのだらうと思ひましたの。久吉（弟の名）もつゞいて雜誌を送つてくれますし、なか〳〵氣取つた意匠のを、わざ〳〵注文したのですね、御地へも行きましたらう。今となつて兄弟の有難さが身に泌みます、あゝいつになつたら十人の家族がのこらず寄り合ふことが出來ませうね、母上樣、何だか妙な氣がしてきました。寒に入つたといふのに今日の暖さ、まるで四月頃のやうで鶯が鳴きさうですね、庭の寒梅に白い花が二つ見えますの。どうか父上樣によろしく願ひ上げます　さよなら。

巧をつくしてわざとならず讀過幾回となくうまいと嘆稱せしめたるは此文（評）

○もう御泣せは致ません（入賞）

神戸　浦上百合香

先日はお氣の毒てした、あれくらゐの事を申したからつて伯母樣がお泣き遊ばしたのてすつてね、伯母樣はお泣きにならないものと思ふて居りましたのは、割合に涙よわくつて被居るのには少々驚きました、此後は決してお泣きになるような事は申上ません。さて今日は義姉樣は午前當宿てお留守の間に洗濯を致しました、洗濯と申しましても二人の肌着が三枚と足袋が五足もう此頃はなれまして手の痛みも覺えません、それに義姉樣お歸になつてお喜び下さるのがうれしさに、少々痛くても何とも御座いません、義姉樣と申せば眞實にどう御恩返しを致せば宜う御座ますやら、他人の私をどう思召してか百合さん〳〵と眞の姉樣もをよばない程のお世話をして下すつて、毎日大勢の子供に敎へてお歸りになれば又覺えのわるい私に何から何まで敎へて下さいますので、私もなるべく臺所の事は一人て致さうと思ふて居りますが、中々朝は寢坊を致しますし、夕方は歸りがをそいので、ひとりて處か手傳も出來ません。

夜は何もする事がありません、早くから床にはいつておそくまて話をして居るのてす、どちらも親の無い身とて話はいつもしめりがちになりますが、ちつとも淋しくは御座いません。かへつてそれが樂しみてす。てすから伯母樣、もう何も御心配遊ばして下さいますな、着物の事なんか尙更ちつともほしくも着たくも御座いません、それから役所の方も大分なれまして、以前のようにそうつらくは御座いません、しかしまだ寢ぼけ顏して朝歸りの道で女學生に逢ふのはやつぱりね、なんだかかうはづかしいような悲しいような……ではもうこれて止します。つまらない事をながく書いて又お泣き遊ばしてはいけませんから。左樣なら

此書の中に人生が縮めて入つて居る、（評）

【秀逸】

○妊娠中の妹へ

淡路　菊子

お手紙有難う、皆々樣お變りなくお暮しの御樣子何よりも嬉しく存じ升、私は歸鄕後一日〳〵と快い方てすからもう何もお案じ下さいますな「夕嵐と曉の冷氣は殊に御身に障りますから」とはよく言つて下さいました、私はあの短かい言葉が泌々と嬉しく感じましたよ、それよりか冬さんこそ身重の躰、さぞ姑御樣の手前氣兼も有ませうけれど靜かに冷えぬ樣に身を持つて下さい、聞けば先月が產月とやらそれに今月と云つてもう五日てお正月が來るては有りませんか、それは乾度月の勘定違ひしてるのてせう、てなくてもそんなに

心配するに及びません、母の胎内に長く居た子はえら者になると昔から申升、御覧なさい楠公や豊公様ぉ皆月後れてお産れなさつたと申ますでは有りませんか、いくら氣を急いだとて出る時にしか出ませんから、そんな余計な事を案じてる隙にお目出度うの年始狀でも書いてお置きなさい、成る可くならば母樣代りにお産の時は走せ行きて何彼と氣を附てあげたいけども、病上りの痩身でまだ手も足も力ない何の役にも立たぬ躰て却てお邪魔になるといけませんから、あてにしないて居て下さい、今から申上て置升が子供が生れてもあの五香とか申升ものなんか決して飮ませぬ樣になさいよ、姑御樣は古風な田舍の方故、もうちやんと用意遊ばしてるでせうが、成るたけさからはぬ樣にね！此姉が言つたと申してもかまひませんから、產婆も此方から雇つて連れて行つてもよいのですけれど是とても姑御樣あんなに申して被在つたから止むを得ませんでまあ變つた事がなければ舊產婆でもよろしいでせう、いづれ近日お父樣それや是れやて參ります、噫お母樣在世でしたらどんなにかお歡び遊ばすでせう、私等は女斗りの同胞故成るたけ男の子をと朝な／＼神樣に祈つて居升の、身を大切にして早く目出たいたよりを聞かせて下さい、さらば。

實際にあらざればかく綿密な注意は屆かないでしやう、敎訓あり輕き滑稽あり、此種の書翰中近來の佳作　（評）

○針の舊師に

新潟　たき子

突然殊更に手紙など差上げて、誠に／＼失禮では御座いますが、誰と云つてたよる人も相談する人もなき不幸の私にかゝりあつたが災難と覺召して、御多忙中誠に／＼恐れ入りますが、何時にても御手すきの折一寸と御披見下され度、我まゝながら呉々も御願ひ申ます。實は先日も御意見伺ひ度と思つて、御邪魔に上つたので御座いましたが、遂あんな事で何やかやにとりまぎれ御話し申しそこねましたが——御耻しいが私此頃、これと云ふ仕事もなくて、毎日ぶらぶらいたし夜も遂眠く朝なども遂不性いたしますがこれと申すも、以前からの神經質も手傳つても居りませうが、つまりは心に望みも張もない不しだらな日を送つて居るからの故かと存じまして、斯く怠つて居る間に又側へ參つて、一針でも御導きに預り度と存じますが如何なもので御座いませう。尤も年が多くなつたのをたてに何のかのと、父も祖母も不贊成らしう御座いますが、どうせ最早や一生を捨てた私今更世に出る望みも御座いません故、假令若い御娘達の御中間入りは出來なくとも心持ては五年も十年も年を捨てたつもり——いつまで

からしたあてなき日を送つて居りましたとて、私の行く道が先から開かれて來やうとも思はれません故——それに私の今日までの半生は「自分はどうなつてもかまわないから」と、思ひ〳〵した引身故に、日蔭の身にもなつた事と思はれます故——云はば今が私の一生の別道、少しは親の意にもとつても、御師匠様の御手許に、御導きに從つて兎も角も、我身一つの立つまでに修業いたし度ものと存じますが、御師匠様の御目にうつる私は、何れの道をたどつたならば正しい道で御座いませう、自信なき決斷なき迷ふて居る私を、せめて哀れと覺召して、御賢明なる御批判なし下され度、何卒〳〵、伏して御願ひ申上げます。

價値ある書簡、吹けば飛ぶやうなのと選を異にしてゐる、一部の女子の心を代表せる作　(評)

○舊師の許に

き　く

御寒さの折から御つゝかなうおはしまし候や、此頃は打ち絶えて御無沙汰御ゆるしたまはり度候、一度學校に參り久々にて御めもじ致し度く存じ居りながら、つひそれもかなはず居り候、はや運動場の梅のつぼみ赤らみ候ひしにや、あの木かげにて今一度鬼事、めかくしに與がりたく、事につけなほありし頃はなつかしく候、同級の友皆々さしたるかはりもなき樣子に御座候、木塲氏はもはやふたり目の御子持たれ候よし、御世話一方ならぬ事と存じ候、松井氏先日宅に遊びに御出て御座候て近々に結婚の樣相成るかも知れずそれにつきては是非先生の御宅に參上いたし色々承り聞えたしなど申し居られ候、もはや御逢ひ遊ばされ候や、さて先頃某新聞に出て候柏原氏の事は全く無根に御座候誰か爲にする處御座候て、あの樣の記事を投書でも致し候なるべく、私ども一同、同氏の爲にいたく同情致し居り候次第、あの人に限りさる事露ばかりも候はぬは必ず〳〵保證致し候まゝ先生にも何卒御安心遊ばされたく候、束の間も忘れ得ぬ母校の名、私ども一同誓つてきづつけ候樣の事いたすまじく心掛け居候、ゆかしかりし五年間の朝夕はいまも事毎に思ひあらたに御座候、やゝに知りそめ候人の世のうきに驚きもし、おそれも致し居り候へども心して浪こすべく候、

また〳〵きこえまつるべく候、御自愛切に祈り上げ候かしこ

絢爛を出でたる平淡とはかゝる文なるべし。(評)

○彈初めに見えぬ友へ

信濃　優梨子

富貴子樣、お彈初めには遂お見えなさいませんでしたのね、お風召しましたつて如何？　私、貴女の住吉がほんとにお聞きしたう御座いましたわ。あんなにお稽古遊ばしたんですもの、甚麼に殘念に思召したでせう、お師匠樣もね「今日は森山樣が見えないで殘念でした」つて幾度も仰有いましたの。

富貴樣、二人て散ざ樂しんで待つて居ました、お師匠樣と西村樣の奥樣の千鳥子、それはほんとに好う御ざいましたの。東京からいらした方の尺八と、花岡樣の三味線が這入つて、それが、皆、一寸の隙もなく、しつくり合つて居るんてすもの、もう堪りませんてしたわ。何だか斯う、氣が遠くなつて終ひそうてしたの。是許りはお聞せ申たう御ざいました。

小西樣の花子ちやんと、原田樣御姉妹の六段は、眞實にお可愛う御ざいましたの。お三人とも、赤の五吋巾のリボンをお揃ひにかけて、ずらりとお琴の前へお座りなすつて、お師匠樣のお聲に連れて、可愛い聲で前歌をお歌ひなさりながら、綺麗な小さいお手が自由に運くんてすもの、熟と聞いて被在た何方のお顏にも、美しい微笑みがこぼれて居りました。

私は子、富貴樣、お笑ひ遊ばしてはいけませんよ、お彈初め匆々から大失敗よ。小督の——夜半に手ならす妻琴の——あそこの處を間違つて終ひましたの。お師匠樣が何時も「間違へたつて知らない顏してすまして被在い」つて仰有るてせう。けれども什麼したつて、私にはそれが出來ませんの。すぐ笑つて終ふんですもの。



さよなら　本郷　渡邊京子

後て婦美さんに可笑しかつたてせうつてお聞きしましたら、「貴女お笑ひなさるから不可ないわ、一寸もわかりませんのに」つて仰有いましたの。まア〳〵恁麽不手際をお目にかけないで好う御ざいましたわ。

お稽古始めは八日てすつて、いらつしやいます事? 委しい事はお目にかゝりまして子。お遊びにいらつしやいな。左樣なら。

華麗なる事實、才氣ある筆（評）

○都の妹に

下野　しのぶ子

當地は昨日からの雪まだやみもせず、日光おろし吹きすさみてなか〳〵の寒さです、都も寒くなつてお米とぐ手がさぞつめたい事でせう。國さんも精坊も御丈夫？體は何よりも大切、夢粗末におしてないよ、宅でもね皆々健全よ、御安心なさいな。此頃は健坊も大きくなつてね、「あんよ」が出來る樣になりましたよ。いつぞや送つて下すつたそなたのお寫眞を出しては「東京の叔母ちやん」つて大喜びしてますの。それから今朝小包を出しました、絲入の綿入とお羽織は國さんのだからね、かすりの綿入とチヨツキは精坊に渡して下さい。チヨツキは寒い時洋服の下にきる樣につていつておくれ、それにどちらも大きくおなりだらうからつて肩上をしなかつたから折を見てそなたのは勿論精坊のもして上げて下さいよ、精坊の衣服にもしもほころびでもされて居たらよく縫つておやりなさい。精坊をよく可愛がつてね、惡友などにそまぬやうそなたが責任を以てよく監督して下さいよ。もう學期試驗も近よつた事とて忙しい事でせう。轉ばぬ中の杖二人とも病氣などしない樣にずい分注意してね、九十五點生も體がへぼては何んの役にもたちません、自分は身體が丈夫だからと云つてあまり夜ふかしゝて勉強などしてはいけませんよ、時間さへ利用すればいくらでも勉强は出來るものです、二人とも學校までは半里位しかないのだから決して電車になどのつてはいけません、人は時間の經濟上云々なんと云ふがお前達はそんなきまゝ云ふてはなりません。神樣からあつかつた金錢物品けつしてむだに粗末にしてはなりませんよ、日曜のかるた會にはきつとおことはりして教會にお出なさい。ては御身を大切にして勉强なさいよ、冬休みには一學期よりもよき成績のおみやげをまちます、精ちやんにもよろしくサヨナラ

隨分厳しいが温情たつぷり、國さんも精坊もよく云ふ事をきかねばなりません。（許）

○家出せし兄の許へ

安藤　秋花

明けまして、お目出度う存じます。

なづかしいお兄樣は、遠い〳〵御地て、如何なる新年を、お迎へ成さいましたか、放浪生活におなれなすつたとはいへ、お寂しうはございませんか。こちらは誰も變りは有りません、樂しい年を越しましたから、どうか御安心成すつて下さいませ。

眞赤な朝日が、筥山の塔の陰から、靜に照し出す平和な山里、樂しい笑聲のたえぬ、我が家、時折はなづかしいと思し召す事もございませうに、何故お歸りに

成りませんか、まつて〳〵、待ちあぐんでゐる、妹を思つて下すつたら、どうかお歸り下すつて、快活なお話しを聞かして下さい。

昨夜は、お隣りのかるた會に行きました、皆んな知つてゐる方ばかりて、面白くはありましたが、何んだか物足りませんてした、私しは面白く遊んてゐても、お兄樣はひとりて、どんなに淋しい思ひをして入らつしやるかと思ふと、たまらなくなつて、ぢつとして居れません、御父樣は、お兄樣のお話しが出ると、何んともおつしやらないて、時には涙ぐんて入らつしやる事もございます。おねがひでございますから、どうか早くおかへり下さい、まつてゐます。

兄さんは何處て此手紙を受取るてしよう（評）

○親しき友へ

つゆ草

只今御文拜見致しいづくも憂世と打ち泣かれ申候。今頃は獨お室に打ち沈みて在しまさずや等考へ候ては御痛はしく御上のみ只々氣づかはれ候まゝ、仕懸けの縫物押やりて急ぎ筆とり申候。ならば〳〵何も知ろし召さゞりし昔に返し度く存じ候。さはれ、兄上も在しまし、父上も慈悲ふかくいつくしませ給ふものを、いたづらに嘆きて父上樣の愛に背き給はぬ樣切に願上候。いくらも例の有之り候事乍ら、異母の子の世の人に厭はれ候は、我からと何事にも僻目持ちてなす可らざる遠慮をし親を疑ひ候より、おのづと親の方にても疎む樣に成り知らず〳〵親子の間ひやゝかに隔り行き候に斯成りては些細の事迄恨めしくて言々にひねくれ候て女にあるまじきかたくなのすね者に變り候故かと存じ候へば、つとめて平和に溫き御心もて何事も判斷遊ばされ候樣願ひ上候。又いか許り口惜しきとの數々に出逢ひ候とも、そは心深くたゝみ置きてさりげ無く時に合せて談笑致し候が我等女の務かと思ひ候。決して決して憂顔など御見せ遊ばさるまじく悲しき時、口惜しき時、恨めしき時泣き給ふ時は我家に御出遊ばさるべく候。必々我袖もて御泪拭ひ參らせ候に……必や御許樣より兄上樣の方幾倍の憂き思か在し升べきに、よく慰の御相手と成り給ひて共に〳〵み心こめて御母樣に御仕へ遊ばされ度く、左候へば誠には必誠もて報はるゝものに候。もし又報はれ候はずとも御恨み遊ばさるまじく候。恨は神の子のなすべきものには有らずとか、前々より御きゝ知りの事と存じ候。何卒〳〵一日も早く暗く淋しき御思より遠ざかり給ひて、元の如御幸福の御身にお立ち返り遊ばされ候樣にと、夫のみ神かけて祈り居り候。差出がましき言葉のふし〳〵、例のへだて無き心からと御免し下され度願上候。かしこ。

委曲の妙を盡くす、辭令を以て勝る（評）

○印度より

大阪　静なみ

日に日を追ひて雨量少なく今宵あたりは八十五度の暑にて加ふるに風さへ吹かで寝苦しかるべしと思はれ候、日本の八十五度は今時大したものには候はねど、炎天の暑をうけたる夜は中々に御暑く、アラビア海も涼風を送らで、たま／＼の風は沙漠的の生温きものにて候。

昨夜、知れる一外人を訪れ申候處友はアポロバンダーの濱に向ふバルコニーに其の兄君と月を賞して對話中とて、よき敵御坐んなれと立迎へられ候、話題は只今賣出しの一英國秀作家に付てにて候ひき。女性的男子を諷する得意なるを友が賞め、兄君は其のユーゴーにかぶれて或る一章は悉くユーゴーより採りたりとの反對論にて候、思はず話につられて仲間入り致し候へども下地なき議論の根はまことに薄弱にて文學の智識の得難きを幾度か嘆き申候(略)

當地は此の雨上りでサンマーシーズンに入り十月より諸種の興行シーズンに入るとか申しきゝ候、運動は男女ともフットボールの全盛時代と見うけ候(略)

申上度きこと數々なれども夜も更け行き候まゝ今便はこれにて失禮申上候。

皆々樣にもよろしく、なつかしき故山音信れを待つ

印度よりとしては物足らず、今少し强き色と匂ひとが出して欲しかった(評)

○君さんへ

牛込　平塚白百合

ねー君さん私もとう／＼こんな事をかくやうになつてしまひました。やつぱり細腕であろうが社會の荒海にこぎ出たら、逆ろもこがなきやならず、順潮なんて時は凡そないやうなものゝやうに見えますわねー。無理を云はれてもハイ／＼、何を云はれてもハイ／＼、實際やり切れませんのねー。學校時代の勝氣なんか何處に行つてしまつたのか薬にしたくも出て來ませんわそれにもし出たらそれこそ、それこそおはらひ箱。ホヽヽヽかうして世の中は並木のやうに頭をそろへられてしまふのでございますのねー。私もその並木の一人かと思ふと情なくつて。それに男の方と違つて容色の事が又一問題になるのですからねー私もうつく／＼いやになつてしまひましたわ。たつた二月の内にもうほと／＼あきれてしまつたのでございますよ。殊に取締のチカ／＼頭の赤ら顔は見るとゾッとしますわ。

私の方ばかりこんなにくど／＼申しましたが君さんの方はどんな。私の方は商館だなんて云ふのでは入つて見たのですけれど、ツヾリも滿足に出來ないやうな男でもやつぱり男は男ですねー、私を一段下に見てゐ

ますから、こんど生れる時は私やせてもかれても男と生れてホ、、、、大變な元氣でしやう。まあいくら書いてもつきませんからその中休日を見て、お出て下さいませな。その節は一寸電話で大よその處をおつしやつて下さいませ。きつと〳〵おまちいたします。さよなら

瓢逸なところが面白い、文は例の如く圓滑自在（評）

○病中の滑稽を友に

埼玉　初音子

芳子樣先日はほんとに失禮でしたわ、あんな御手紙上げて驚いたでしよう、包まず御話するから許して頂戴、三日でしたのねあれは、お雜煮を食べ過ぎたのよ、午後一時頃から急にお腹が痛み出しましてね、一寸足を見たら細くなつて居たの、先年寄宿舍でなくなつた富子樣が丁度そうだつたでしよう、平常脚氣で苦しんで居る私驚かざるを得ませんわてつきり脚氣の衝心と思ひつめて、永くとも明日中にはと思つたら本箱が氣にかゝつて仕方がなくつて、えぐられるやうに痛むのをこらへて日記帖と原稿類皆樣から來た御手紙など一包にして夜具の下に隠して置きましたの、愈となつたら火に投じ樣と思つて、其から不意と氣附まして貴女にあ



春の渡舟　京都　妻木はな子

の書を送つたの、末期の筆だと思つたら涙がでましたわ、丁度父母が留守だつたものですから、都合が宜過ぎて余計な事迄致しましたのよ、漸くお醫者が來て手當をすると痛みが引いてしまつて、けろりなの、後悔先に立たずてす一旦郵便箱に入れた物は出ません、仰臥すると天上板の節穴迄が人の顔に見えて私の輕卒をあざ笑ふて居るやうてした、下女が後て氣が違つたのだと思ひましたつて云ひましたわ、兄樣に大切の日記帖見せておくれなんてからかわれますの、又此世の人になりましたから宜しくね左樣なら

頗に滑稽「又世の人になりましたから宜しくね」又可笑し（評）

○久しく音便れ無き友へ

こすもす

淑子樣此頃は何うして被居いますの、一向御便りが無いつて又餘けいな事と被仰るか知れないが之でも中々心配して居ますのよ、其れはそうと先日吉田玉子樣といふ方から手紙が舞込んで、流石の私が少々面喰ひましたわ、玉子樣といへば私のクラスでは友野樣より外にありませんてしたわね、彼方は去月の四月からふつつりと御便りが無くなつたので私もとう／＼五本目に降參して文通するのを止めましたの、處てから云ふ譯けてしよう、尤も結婚遊した事はクラスレターで拜見しましたが、私きかないわ、十ケ月も御便りの無い御恨やら、突然私をへどもどさした御恨やら其れは其れはこて／＼と云つて上げましたの、ずゐぶん強い事を書きましたら、其れて私も馬鹿てしよう、笑はないて頂戴、後で心配になつて來ましてね、玉子樣は御存じの音無しい方でしよう、どうなすつたかと思つてね、ほんとうに私も災難よいくら厄年になつたからつて一月早々友野樣に手古摺つてびくついて居るんでしよう處で御便が無いと又貴女にまで此樣な目に逢やしないかと思つて（之はほんとうに思つた丈よ）御腹が立つたら御無沙汰遊すな、では餘り惡まれ口をきいて惡まれない先に御いとましませう、御自愛遊せよ、後は此次にさようなら

何だか煙にまかれて了ふ、きび／＼した筆ですから作者の器を籍りて云へばあの私も少々面喰ひましたわ……（評）

○嫁げる姉に近況を報ず

伊豫　多景子

當地の樣な暖い處てさへ火桶のそば離れ難い今日此のごろ、別して姉樣のお國は北の雪國、さぞかしと皆おうはさ致して居ります、御障りはございませんか、當方は皆無事でございますから御安心下さいませ。

お正月にはね、御兩親樣をはじめ、九人の兄姉弟妹召使までみんな揃つて、例の通り新年の御祝を致しました、御父樣はまあ／＼皆無事で何よりだと云つて御滿足の色が見えて居りました、誠も五つになつたつて

よろこんで行儀よくお盃をいたゞきましたよ、姉様は今年は變つた處てはじめてのお正月、どんなにお感じ遊ばして？そう〳〵暮には結構な送物を有難うございました、皆からよろしく御禮をとの事でございます、芳子も今年から女學校へ入るつて云つて居ます、それから山の梅はすね早咲きました、三郎が折つて來ましたから床脇へ生けて置きましたら今眞盛なんですよ、お座敷へ入るとすぐぷーつとそれは〳〵いゝ香がしますの、姉様處はまだてせう少し封じてをきます、ほんとに寒いてすから御用心なさいませ、兄様に山々よろしく、おいかき忘れてゐました、隣の光さんてすね尾上へ嫁く事になつて今おこしらへの最中ですよ、ぢやさよなら。

普通の出來、しかしこんなのは何時ても趣味が深い（評）

○弟に

陸奥　伊久子

暫く御無沙汰致しましたね、お手紙嬉しく拜見しましたよ、御身始め皆々様お變なくつて何よりてす。當方もお父上お母上何れも御壯健なれば安心下さい。今年ノお正月にはお待ちしたかひも無くお歸りがなくつて殘念てしたね、而し其丈叔父母様が可愛がつて止めて下さるノてすからかへつて喜ばねばなりません。何れ改めてお話する時もあるてせうがね、お前は行く〳〵林田家即ち叔父様の跡を繼ぐ事に成つて居るのてすから、今からよくお兩方の仰せをお守りして御孝養申さなければなりませんよ、念の爲に云つて置きます遊ぶのはいくら遊んでもかまいませんが勉强はしつかりするんてすよ、お前は見込のある人てすからと、こう云つても慢心してはいけません。叔父様は若し望みがあるなら外國へ遣つてもいゝとの事てす、お父上も御他意は有りませんから此所二三年の間は眞面目に勉强なさい。やがては錦を飾つて御養父母様や我々へ安心させて下さる事と、末長い事てはあるが樂みにして居ります。

其れから小包誠に有難う。お菓子は兩親大悦びてす宜しくと。リボンや何ヵ嬉しくつてよ、よくお見立てがお上手てす事オホヽ、お前の好きなすまし餅、母様が一生懸命お拵へになつたのてす。たくさんお送りしますから叔母様方とね、私から少してすけど二圓お小使にして頂戴。大阪のお兄様は近々お嫁様をお貰ひなさるさうてす。くれ〳〵も體はお厭ひなさい、今度の夏休みには來られますから樂みにしてね、何かと不自由の物があつたら云つてお寄こし、皆様へ宜しく左様なら。

幸福な弟さんなるかな（評）



短文

編輯局選

○雪の降る日（天賞）

牛込　平塚白百合

雪がチラ〳〵と降つてゐる。地の上のは次々に消えてゆく。私はふるのをヂーと見入つた。何だか雪が地へ刺込まるやうな氣もする。尙見てゐた。何時の間にか雪がさし込まるのではなくなつて、私の身體や家が雪の落ちてくる度にだん〳〵地の中に沈み込むやうな危うさを感じた。私はピッタリ疊の上に座つた。まだ目をつむつてゐると家も身もづんづん沈んでゆく。

評　天地たゞ色なき色、音なき音

○知人の感（地賞）

岡山縣　白雪

高橋千代子樣も死なれた。交際塲裡の花非常に寫眞ずきの人としてよく雜誌でお目にかゝつてゐたのでこんどこの報を聞いて知人の死を聞いた感がする。しかし今一つ言ひしらぬ一種の人生觀がおこつた。あゝこの感を抱くもの天下私一人であらうか？

評　面白いところを言つた、

○新らしき傘（人賞）

熊本　波の花

雨はやんだ、まあ折角新らしい傘をさすだつたのに、たゞ持にはおしいふりもしないにカチリと廣げた紺蛇の目藍の香がぷんと鼻をうつ好い香さえてあれ傘は肩におかれた。

早くばらばらと睡たくなるやうな優しい音をきゝ乍ら苦もなく歩きたい。

評　君は趣味を知る人

【秀逸】

○一人言

東京　吉野阿隆

二階ではかるたが始まつたと見えて障子の割れる樣なさわぎ其れにひき代へ此の室はしんみりとして猫の廊下を歩む足音妙に耳にそば立つ、

あゝ私はなぜ一人てゝに、今迄何をぐず〱して居たんだらう、さつきも誘つて下すつたのに、無理に其を斷つてしまつて。

評 何が可笑しくつて笑ふんだらうと拗れても見たり

○春雨　東京 花風子

窓の下を、素足に足駄履いて、意氣な前懸締めた人が通る。片手に、濡手拭下げて。さした黒蛇の目から、華奢な肩や、白い頰を、ちら〱と見せて行く。

評 すいと掠めたは濡燕！

○煙むれる夜　滋賀縣 志賀小なみ

月はまだ昇らない。向ひの窓の影法師は、お米さんてあらう、ベチヤベチヤとよく喋べる女だ。又、油屋の龜さんが來て居るのてあらう‥‥あれだけ噂をせられてもお米さんには分らないのだ。夜は大分更けた樣てある。

評 お噂ましう左樣なら‥‥‥



祖母の印象　小石川ゆり子

○諸嬢に一言　信濃 駒澤比呂子

男女同權を間違へて、夫婦同權と思つて居る御婦人が多いやうに見うけられますが、此處はよく〱考へて、お嫁に行かれたら夫に對しては良妻たり、子には賢母たるべく、今から理想して置いて戴きたいのてす。

簡潔、「今から理想して」も振るつてる（評）

○暗い室　金澤 かつみ子

お互に思ひあつたのが不運なのでしやうか、この頃私は何だか自由になれるやうな氣がして、暗い室にかうして獨りて考へてゐると、つい悲し

くなつて涙が出てくるのです。あゝ私らの歡樂はもう過ぎ去つたのでしやうか。(ある人へ)

評　心弱らば胸の緒琴にふれよ

○三ツの聲　函館　山田ひさえ

あゝ行き度なあ……」と眞情は訴へる。

もう行かない死んだつて行きやしないわ!」と、意地が叫ぶ。

でもそんなに急に行かなくなつたら妹さんの思はくもあるわ!」……と常識の聲。

評　畢竟第三聲の勝利

○靜寂　東京　鈴木　春子

薄暗い豆ランプの光半面に受けて大きな目籠間に向合つて芋の皮むく母娘、折々露もつ瞳見合せては詮方無げに吐息つく。ガランとした廣い家の内をシーンと靜寂の聲が冴え渡る。後に立掛けた煤ぼけた金泥の唐紙に二人の影法師がゆら〳〵揺れた。

評　暗流屈曲

○何ぜでせう　大阪　植村　艶子

別に想つて居たと云ふ理由ぢやないが、何となく慕しかつた龍様と一年振でかるたを取つた、而も龍様は奥様と御一所に、折々此方を見てはお笑ひなさるが、其度に侮辱を感じて胸の動悸が高なる計り、かるた等少しも目につかない、何ぜでせう。

評　それ目の前に「昔しは物を」が……

○春の朝　丹後　香蓮女

新しき障子に朝日が一面に照りつけて、室の隅から天井の隅までがまぶしい程明い、障子の骨に塵一つ無いのと、疊の新らしいのとは此の上もない心地がよい、何鳥かすうつと障子に影を殘して過ぎた、植込に居た鷄は羽叩き高く一聲長閑に鳴いた

評　希望洋々

○善き妻のわづらひ　上總　敬子

白前掛をはずしかけると、『達夫の分は如何した』と、父様はお箸をお置きになつてゐる。良人にはお汁だけにしてお二方のお膳へは、鯛の味噌漬上せたのが直ぐ父様のお目に止つたのである。養子の身が、と仰有る母様はお默りでご飯を、お換えになつてゐる。

評　難かしい世の中

○夢　北海道　村本たけ子

美世ちやん、美世ちやん、と、闇の中で呼て居る、聲は美くしいけれど——、胸は躍る、息は詰る、頭は、揺られる樣だ、はつと、氣が付て見れば、生暖い藥の香が、鼻を突く、冬の夕日は硝子ごしに鈍い光りを、顔にそゝいでゐる。

評　背骨が痛い

○年立つ日　淡路　加藤　香菊

肩上げの取れる迄は無想に送つて

来たもの丶今は年毎に更け行く身の果は如何に——と春を迎ふる樂しみのうちにも人知れぬ淋しさが胸に滿ちる、遊ぶべき友さへなき身は一人机に凭れて靜かに過去を追想して居ると、窓の外に人の聲「此子はねー八才になつたと云つて歡んで居るのですよオホヽヽ」「ホヽヽヽ」と母となれる二三の人が集へる樣子——

評　やるせなき哀しみ

○私の歳　津久田　野百合

「たつ子さん貴女お幾才」「あら知らないワ」じや何のお年辰てしやう？」「いヽえ」あんなことたつ子さんてお名じやありませんか」などヽ云はれますと私は何だか悲しく成りますのとまたなぜ一年は十二月なのだらうとそれが恨めしく成りますわ。

評、本統に何故十二ケ月が一年なんてせう

○伯母　京都市　八木勢以子

春の日と伯母心て眞實によく云つてありますのね、……思はず伯母樣の前て斯うこぼしたので、私の伯母達だつてそうてしたよと苦笑遊ばした矢張これお次第おくりてせうか。

評　次第おくりが振るつた哉

○藝妓　備中　紅謌薇

崩れかヽつた奴島田の首すじが妬しい程美しい。一寸小指てほつれをかき上げてチラと私を見た艶な者。私其目がいかにも憎くかつた。「兄樣藝妓つてあんなに得意さうにして、氣樂なんてせうか」「それはつらいと思つてるさ」つてさあどうか知ら。

評　女てもそれは分らぬ

○自由　西多摩　芳子

四五年前までは、小説も讀ませなかつた父が此頃は、雜誌も種々讀め、投書もして見るがよい、男とても女とてもどしく交際するがよいといはれるけれど依然さうも出來ない私は皆樣が「父母の言葉に背くから交際を斷る。といふのを拜見すると羨ましくてならない。

評　然れども御身は幸福也

○焦飯　大分縣　匹子

好きなく焦飯も、最う三年前から食べませぬ、焦飯の好きな者は、痘痕面の人と連れ添ふと、世の人は云ひますが。若しやく、三年前まで食べた爲に、三年間の辛抱が、水の泡とならねば良いがと……寝ても起きても唯それはかり……？

評　焦飯に痘痕面！成程思ひ付きた、

○妹　日本橋　松島千代子

姉樣は嫁いだが、美事私しの思ひは破れた否自ら好むで彼つたのだ、或歌留多會の夜二人の樣子に深く其れとさとつたと共に何も女夫になるばかりが……と思ひついた故さつそく兩親に其れとなく良縁よと一心にすヽめて此の結縁は成り立つた……たとへ自分の或る物は破れやう

と終生に妹としていつくしまれ愛されて行けば私は……。

評　一應は然り而して再應は否

○類似　熊本　木村　清子

電燈の下に村岡様、少し離れて私、共に髪を揃へてゐる。ふと硝子障子を見て、驚いた。二人の手が著しく明暗を異にして寫つてるのに。が私は悟つた――地球の赤道地方と、極地方とが、日光の直射と斜射によつて、著しく寒暑の差ある事を

評　イヤかう六つかしくなつては大變だ

○澄様　金澤　むらさき女

級中で無神經と綽名された澄様が近頃時たま群を離れて一人で、沈んだやうに空なんかを仰いでるのを見かけると大分噂が高くなつた。或人はいつか室へいつたら小説が澤山あつたから必と感化れたのだろうといつた。何にでも通がつてる敏様はフンと笑つて何にも言はなかつた。

評　早く肺病にでもなればいゝと思って

○嬉しさ　福井縣　片山　千里

去年の夏から、蒔たり、すぐつたりしんを止めたり、取りに行つたりしました綿を、秋がすむと毎日操つて紡いで絲にしまして、昨日からひて今日やつと機にかけてしまひましたが、少しも人手を借らぬのだ、と思ふと無上に嬉しい、明日はどうても早くから起きて、一反半位は織りたいと思つて居ます。

評　此樂み王侯は與からず

○半襟　德島縣　吉田　紫花

お蝶さんとお花さんとが京の土産にお揃の美しい半襟を貰つた、うす紫縮緬に紅い蔦かづらの染め出されたやさしい、柄、二人の白い首に纒つたらどんなに引き立つてせう、キラキラと光つてるぬいの金絲の端は目にてこそ見えぬけれど、二人ともあれがきつと線の絲につながれてゐるのでせう。

評　見どころ

○藥　横須賀市　鈴木　辰子

妾は茶色の苦い藥を呑まうとして瓶を口へつけては放し放してはつけ終にグッと苦い藥を呑んで、苦い顔て瓶の藥を見た、線の處まではもう一息、呑もうか呑むまいかと考へて見たが思ひ切つてグッと、線の水平まで呑てほつと一息口中には苦味が満々て居る。

評　一向利目がありさうにもない

○寫眞　兵庫　祥子

此間父様がお撮りになつた爺やの寫眞が、やう／＼今日出來上つたので、爺に見せると直ぐ懐から眼鏡を出して椽側の明い處へ持つて行つた、ぢつと半時程も見て居たが一旦那様是は私とちがひます爺はもう少し色が白い様に思ひます」と眞面目にいつたので、皆爺の顔を見て吹出

した。

評　正直歟にして此言あり

○弱者の武器は

麻布　花子

私共、弱者の武器はなんでせう？何物を持てむかつても、勝利を得ることはできないでせう――あゝ、この中に只一つの武器は無言！僅かに強者に對する武器は無言の内にあるばかりでせうか？……それとも風吹くまゝに從ふべきでせう？――

評　猶は有り曰く涙

○私の空想

神奈川縣　木村涙花



春の人　金澤市　中島まさ子

大家の夫人に成つて多人にかしづかれるより大學者と成つて何々女史とあふがれるより親しい松子樣と只二人深山の谷間に床しい小造な家を立て社會の一物をも目にとめず讀書に耽り美しいうぐひすを友人又は女子文壇社へ文の使にさせて暮し度い

評　文壇社へは御免蒙る

○歳暮の感

信濃　小林美代子

伊藤公が暗殺された事も、淺間の大噴火の事も、豊作で不景氣な事も

回想はゐてもありません、がそれよりも、私は母の白髮の繁殖の速かなのと嫁に行つておやせになつたお方と、年を拾つて馬鹿な自分が一番泌み泌みと深酷な悲痛事の樣に感ぜられます。

評　君一人のみならんや

○親心　　佐賀縣　ふじ子

お隣の大工の家の照ちやんは、今年九歲になる可愛らしい娘だ。大きくなつたらどうぞして、女學校に入れ度と、今から佛壇の前の竹筒に貯金して居る。今近所の子供が進物を持つて來た、照ちやんの母は一寸自分の財布をのぞいたが、ツト立つて竹筒から五厘銅貨を出して、お質にくれた。そして財布から一錢銅貨を出してチヤリンと竹筒に入れた。私は悲しい氣がした。

評　女性の美

○白い鳥　　臺北　稗貫美津子

つと向ふを見た途端丁度綿をちぎつて風ある空になげた樣な唯眞白い鳥ふら〳〵と眞實に疲れた弱〳〵しさうな翼をしてすうと小山の蔭に落ち入つた……と私の心はもう冷たくなつて居た、花咲き充ちた胸の園生はうら枯れの野と變つて居たのである

評　白鳥は何のシムボル？

○病後　　豐後　與志野綾子

茫んやり柱に倚つて春の朝の柔かな光を體一ぱい浴びて、痩せ細つた腕を見ました。春だ、春だと欲ばしい如ふに心は跳りますが、痩せた腕を見ますと淡い悲哀を覺えます。ふと目を街道に移しますと、女學生の一群が靴音低く通つて居ります。

○馬車道　　加賀　星花女

刺す樣な風が吹き荒んでるのに馬は汗出して走る、山の樣な荷車赤毛布の百姓……を追越した、人々皆追越して仕舞ふ、小僧も……と小僧は駈出した後れまいと、顏が赤く、汗がにじむ蒼く、胸を擴てた、もう見えない。自分は馬車に乘つてる。

○賜物　　德島縣　野　靈

鳥居の側に、落葉を焚いた大方の灰から、紫の煙が立つてゐる。と始業時間迄、兒童が込合つて暖つてゐた樣があり〳〵と浮ぶ、私が此校にゐた時も、能斯うしたものであつた。孤獨の而もかたわのお春樣が、危うげな身振で宮の庭を掃き集めた落葉を。

○熱淚　　大阪　濱千鳥

青い松の枝を通してばら〳〵と冷たい音を立て豆を撒く樣に霰が庭石の上へ落ちる「アラ姉樣霰が」と病床の妹は叫て謎た唇に淋しい笑を浮べて居る「和さん早くよくお成りよ」と私は矢庭に抱付て痩た妹の頰へ忍かれた熱淚を流した。

○淋しい野　　岡山縣　竹本玉子

枯れ果た野を葬式の一群が靜に行く。歌もないが、詩もない、單だ沈默と哀愁を意識して居る、柩の主は誰れ！未だ日淺い里の花子さんと聞く、白い提灯が力なく風に戰慄した時暮れの鐘が沈んだ大氣を破ぶつて心細う哀れに響いた。

○子供の歌　　伊豫　よしえ

八つと九つの同じリボンをかけた女の子が椽へ出て、學校遊びに唱ふ歌を作つた「開かして頂戴」と云つたら「花が水に浸つて寒からう、痛い、冷たいあゝ如何しませうと云ふて居ります」他の唱歌の調子で大きい聲て唱つた。



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）春雨や隣の人のなつかしき　東京　佐久間貞子

○（地賞）寒月や死せるが如き田舍町　遠江　富永雪子

○（人賞）明月にかしこまりゐる案山子哉　磐城　天野りき子

【秀逸】

馬を相す翁の鬚や秋の風　豐後　藻の花會

若竹のそよぎの下の金魚哉　福岡　田中千代子

涙もろき我とはなりぬ時鳥　岡山　桐本悦子

汐風呂に千鳥きゝ鳧須磨の宿　上總　敬子

凍る夜や佛に點す灯の一つ　越後　藤原法子

落ちし葉の一葉一葉に霜白し　加賀　勝崎菊子

江戸の春雨むらさきに煙り鳧　四谷　味方こう子

鴫鳴くや森靜かなる堂一宇　越後　小栗しづ子

若葉蔭にいなゝく駒や君の家　札幌　高見米子

蝶二ッ行衛は花の菜畑かな　三河　天野清子

雪の日の軒を辿りてみそさゞい　大分縣　艶子

古寺の大杉高し冬の月　三重縣　松下かく子

梅咲いて垣新らしき山家かな　かすみ子

親めば戀と言ふなり花の春　長崎市　茂榮

悔が香にゆかしき山に伏家哉　石川縣　星花女

明月や客ありげなる蜂の寺　府下　龜井芳枝

御降や土冷かに鍛冶か庭　秋田　菊子

船上る人の問ひけり梅の路　北海道　菜雪

春の雪僧都の紫衣にちら／＼と　牛込　塚原けん子

見まはせば枯木のかげや冬の月　麹町　牧野嵐水

後先の里は霞みて春の水　麻布　石井すみれ

門川に數の子洗ふ夜寒かな　大阪　小百合

頬を風に吹かせゝ草をつみにけり　豐後　工藤榮子

節分の夜の灯影や金襖　下關　山本芳子

片里や家もまばらに凧　信濃　上波多ひろえ

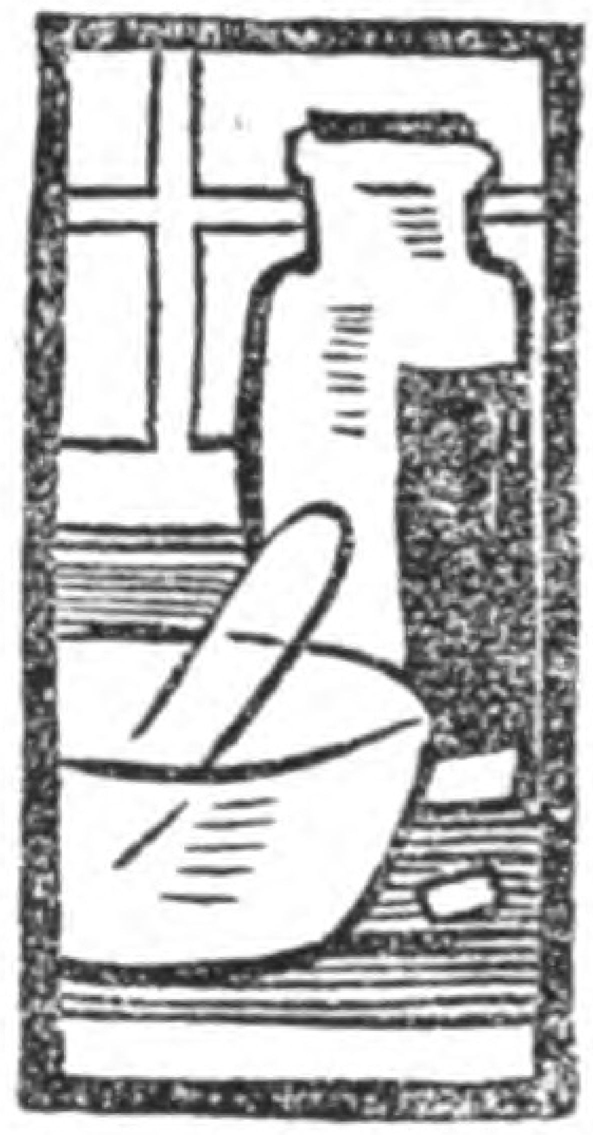
桶さげてゆけば流れの氷かな　日本橋　松岡千代子

梅咲いてなかしき春となりにけり　京都　時雨子

梅咲きて妹の墓にも春の色　大阪　植村露子
古寺や昔を偲ぶ秋の月　札幌　村本たけ子
朝霧や菊それ〴〵の化粧して　靜岡縣　山田しげを
雪ふりて母みとる夜の孝子かな　府下　矢藤きん
層樓に醉ひ申しおくるゝ御慶哉　岡山縣　竹本玉子
草摘みや虫の脫け出し殼の數　新潟　水澤蝶子
明月に大根洗ふ女かな　靜岡　村瀨常月
公達の面も輝く初日かな　市谷　笹原芳江子
根芹つむ里の夕べや月白し　鳴澤ゆり子
蝶に明け蛙に暮れて花曇り　茨城　天貝守代
夢さめて雁の聲きく旅寐哉　濱松町　高畑小菊子
岸近う漕ぐや夜舟に梅かをる　本郷　渡邊三枝
文身の龍は朝湯におどりけり　日暮里　藤掛つれ子
さゞ波も靜に暮れて朧月　肥前　眞崎てつ
積みにけり庭の小松の初雪を　大分縣　藻の花舍
點々と小春の海の白帆かな　筑前　中原とみ子
雪消えておぼろ月夜や梅の岡　鳥取縣　松浦春江子
くたびれてわらじ餘多や春の宿　大阪　秀米
發句一つ案じつゝ眠る炬燵かな　越後　金塚千代子
谷一つ越して藁屋の椿かな　大分　藻の花舍
駒に乘る人美しや春の風　佐渡　本間綠子
菜の花や田舍娘の色くろき　京都市　本郷はるの
少女子が羽子つく袖に旭哉　鹿兒島　川崎常子
森々と立つ老杉や宮の月　筑前　矢野靜子
朧夜の梅のかをりや鯉はねる　丹後　高田香童
闇の夜や燈火見ゆる梅の道　大阪　花橘
あだし野や我袖ぬらす夕時雨　德島　堤芳野
とそ機嫌父のうたひや母の舞　千葉　岩田よし子
日は暮れて河ひとすじや雪の中　伯耆　足立春子
見も知らぬ人も讀せり春の風　京都市　平井漣子
脛の毛に榾火の灰を拂ひけり　伊豆　鈴木矢壽子

たそがれや一羽がらすの雨に啼く　山口　酒向敏子
殘菊に霜おく朝や古籬　德島　野澤繁子
朝寢髮春なほ寒くときにけり　京都　辻花子
我冒はず車夫も語らず霜の道　岡山　しらゆき
朧夜や庭の燈籠に梅散りて　備中　篠原しげ子
寒月やものうげに啼く小鶴　岩代　金子きよ子
白桃や下手な佛師の假住居　秋田縣　藤原いて子
春の日の椽になげたる人形かな　金澤　かつみ
牛の背に桃の花散る月夜哉　兵庫　祥子
ゆきくれし麓の里や梅の花　沼津　渡邊とよを
青柳は牛の背中に靡きけり　伊勢　瀨木八重子
京人は雪踏み分けて小松引　信濃　竹内愛子
桃の下少なき水の流れけり　京都市　如月女
寒月や夜明けの鐘のもの〳〵し　愛知　岩月まき子
隣から枝し垂れ來るさくら哉　秋田　濱岡みや子
島畑の麥尺にして蝶のとぶ　秋田　白萩女
春淺し一寸にして牡丹の芽　秋田　加藤うん子
冬の日や手を拍てば響く大伽藍　青森　はつゑ子
たをや女の松うる聲や雪の朝　宮城　沼倉馥子
雪深き孤村に犬の聲すなり　濱松　平岩白菊
春風に折鶴舞へる廣間かな　信濃　吉川多美子
富士はたゞ白し麓は春の山　三島　遠山雪子
日記みて泣く人もあり春の暮　麻布　常世草
昨日來しうぐひす雪に失なひぬ　山城　木の花
針仕事隣の梅の香をめでつ　京都　田口こう
櫓船に笛吹く人や朧月　信濃　柳原たづ子
白梅に駄馬つなぎたし山の宿　奈良縣　中富よしみ
鶯の谷より谷へ渡り鳴く　和泉　金田代志子
叱られて門に泣く子やかへる雁　長野　石上照子
温泉の宿になつかしむ子や春の雨　備中　馬越昌子
黒き鳥鳴かで飛び行く秋の暮　埼玉　饗野菊子

女子衛生問答



產科婦人科
醫學士　北畠孝夫述

問　私は過ぎにし月、月經なきまゝ、沓鐵丸を服用しましたため月經を見ました、翌月は普通てしたが、今月になりまして急に胸先苦しく心地惡しきため胃病と存じまして胃活を服用しましたら、そのためか心地よくなりましたが此頃はみかんや酢のものゝ如きすきもののみを好み、いま迄の甘きものは喰べたくありません、妊娠としては前月に月經がありましたし如何てせう、此頃は少し下腹部が痛みます。(雨峯女史)

答　月經をのみ標準として妊娠を判斷する事は往々間違ひの種となります、(之は嘗て文壇上にて詳く御話してあります)、妊娠後一二ヶ月に於て定期性出血を腟より見る事があります、之を或人は妊娠時の月經とも名けてあります、然し之に反對する人は妊娠後は月經はなし、妊娠後一二ヶ月許り間歇を置きて出血するのは抑も病的てあると唱えております、兎に角妊娠後に於ても月經の樣に定期性出血のある事は事實故へ單に月經のみを以て妊娠を判斷するのは過謬を生ずる甚である、然し大抵の場合に於ては妊娠後月經は閉止する事故へ月經の閉止あれば他の妊娠徵候(稍疑がはしきも妊娠時に屢々發する徵候を不確徵候と云ふ例之ばツワリ即ち妊娠嘔吐の如き)の三四を連結して判斷すれば先づ妊娠と定めてよし、然し是とても確實とは云ひ難し確實なる徵候即ち胎兒を觸接する事(腹外より)胎兒の心音を聽き取る事、胎兒の動搖等を認むるに至らば最早や確實なる妊娠と判定して可なり、貴孃の仰せては月經も唯だ一度休止したのみにして翌月も翌々月も正規の月經を見たりと云ひ、唯だ多少酸味のものを好むと云ふ丈けの薄弱なる點のみを以て妊娠ならんかの疑ひを抱かるゝは少しく早計なるべし、妊娠ならざるも胃の神經性異狀を起すが爲めに嗜好品の變換する事は時としてあります、殊に婦人にはその傾向を有するもの多し、或はその類に非ざるか今少し經過の摸樣を御覽の上御疑ひを解かれよ、

問　(一)私は顏に「ホクロ」のやうなものがたくさん出來て素顏て見ると見苦しくて困りますたやすく取る法はありませんか。
(二)私は月經の第一日には大相下腹が痛みまして何もてきずまるて病人の樣になります、月每に二三日づゝおくれますが外に差し支はありますまいか(越後、田舍娘)

答　(一)ほくろは醫士の治療によれば除き去る事が出來ます、種々の藥品を應用する事故へ素人の方には過謬の生ずる恐れありますから述べません、
(二)月經時に起る痛みは月經痛と唱へ、子宮、卵巢、輸卵管、子宮周圍組織、骨盤蜂窩組織等の疾病に罹れる婦人に發す、その痛の程度も種々にて或は劇烈なる事もあり或は輕度なるあり一定せず、又以上の疾病なくも神經質の婦人或は貧血せる婦人の如きは往々月經に苦む事ありその他格別に生殖器に疾病なく健康なる婦人にも月經痛の起る事があります、
月經痛の最も多くあるのは、排膜性月經痛(子宮內膜炎の一種)子宮口の狹小、子宮の位置の異常(前屈子宮、後屈子宮)等の疾病若くは異狀てある、貴孃のは唯だ月經痛のみを御訴へにて他に病狀を御示しなき故へ果して疾病の爲めか、或は疾病なれば如何なるものなるやを確實に知る事を得ず、
月經の多少遲引する事は格別故障なし、

問　心臟病て此夏咯血致しましてから今に胸が何だかおさへられたやうてあつたりぶる〳〵したりお寒むくてズーンと致しますと左のちゝが何だかきゆうとちゞまつたり人樣のせきや其外靜かな時にコトンと音が致しましても誠に心持ちあしく心臟にひゞきます、それからまた咽喉がひきつけられる樣てあつたりしていつかまた咯血になりはしないかとかこたれたりしますが肺に成る樣な事は御座いますまいか、それかといつて步行には何ら異狀も感じませんけれど立ちとゞまりますとこうぶる〳〵するやうに感じます、どういふわけてこんな風に成りますやら、御教示を願ひます。(未婚廿歲女)

答　咯血は肺結核に原因する事最も多し、肺結核の初期若くは末期に發す、初期に發するものは多くは少量なれども病變の進行したる者

には大量の略血起る、元來略血は肺結核に多きゝ以　略血　れば直に肺結核を想像すれども、赤、稀　は纖維性氣管枝加答兒、氣管枝擴張、腐臭氣管枝加答兒　肺膿瘍、肺壞疽、肺の楔枝出血、肺癌腫、肺「エヒノコックス」肺ーヂストーマ」肺の創傷（銃傷の如き）月經の代償性出血等にても略血を起す事あり、心臟病にてもその調節を失したるゝめ肺に鬱血を來しなどし稀に略痰中に小量の暗赤色の血液を混和する事あゝも鮮紅なる血液の略出する事なし、あなたの仰せの如く果して心臟病の爲めの略血なるや少く疑はしく考へます、或は多少肺　故障を起せるものと考へます、醫師に診斷を仰がれよ、又た非常に神經質におなりの樣でありますゝ之は恐らく前回の略血より來れる恐怖の爲めであると考へます、然し略血の原因を明らかにし、醫治を御受けなされ適宜の治療を行なはれたらば略血を再び發する事をも豫防し得、且つ其病を治癒するにも敢て不可能ではありますまい、

問　頭の半分、右たら右、左なら左とはつきりと際立つて時々しびれます、別段苦しいとも思ひませんが何う云ふわけですか。（通ふ千鳥）

答　枕跡に木枕の如き硬きものに永く頭を壓して睡りたる後に よく、仰せの如き事がありますす、それ等の爲めでは有りませんか、他に異常あれば御示しあれ、それこれ考へ合せれば詳細なる觀察を下す事は不可能です。

問　(1) 私のお母さんは昨年の九月頃から姙娠てないのにお腹が次第に大きくなりますから地方の醫士に診察して戴いたら「ランソー」とか申す病氣でおくては治らぬ切開手術せねば治らぬと申されましたが老體のお母さんは、そんな恐い治療は死んでも仕て戴かぬと云はれますが外に宜いお藥か治療法かどありますかお教へ下さい、そして此病氣の原因はどんなのですか。

(2) ぜんそく病は傳染若くは遺傳いたしますか。（岡山縣　郭想女）

答　(1) 卵巢の腫瘍殊に卵巢囊腫が腹腔內に於て大なる發生を爲せば腹部は非常に肥大する事は、稀でありません　之は醫士の申す通り腹壁切開を行ひ、その卵巢囊腫（若くは他の卵巢腫瘍）を摘出する他に治療法なし、卵巢腫瘍の他にも腹腔內に發生する腫瘍は種々あります、子宮の筋腫、腎臟の腫瘍、脾臟肥大、肝臟の腫瘍、副卵巢の腫瘍、膵臟の腫瘍、大網膜の腫瘍等枚擧すれば澤山なり。

(2) 喘息は傳染性又は遺傳性なし。

問　私は昨年からにきびが出來始めまして色々と治療しますけれ共全治いたしませんが何かよい治療法をお教へ下さい。（熊本うめを子）

答　面皰（にきび）は毛囊孔の閉塞によつて生ずるものなり、その治療法として加里石鹼或は硫黃石鹼を以て顏を洗滌すべし、その他硫黃亞鉛華軟膏「イヒチオール」硫黃花 亞鉛華膏一、クンメル／エルト氏 液等効あり、殊にクンメルフエルド氏液を塗布したる後に乾燥せしめその上へ前記の軟膏を塗布すれば頗る効を奏す、又他に面皰摘滅器を以て面皰を壓して之を除去する法あり。

問　（一）私は鼻が低くつて御恥しい事がたくさんにございますそこでいつも西洋人の鼻の高いのを見てどうしてだらうと思ひますなぜ西洋人の鼻は高いのでしようか

（二）又私の知つてる方は十六才でよい家の御孃てすが大變に肥つてゐらつしやいますからいつも〳〵悲しんでゐらつしやいます今は肥えても二三年たてば御痩せなさいますねー先生！（田舍の花）

答　（一）人種的素質の然らしむる所である元來白晳人種の顏面角（頭部より額に向ひ引きたる直線と頭部より後頭結節迄引きたる直線の間に生ぜる角度の大小は人種によりて各々差違あり、白晳人種は九十度に余程近く、他の人種はそれよりも銳角に近し、西洋人は初は九十度の顏面角度を有するものにして自家の之に近きを自慢しております）の直角に近き者は鼻梁（はなばしら）が自然高くなります。

（二）お說の通りに相違なし、

問　私は十二三才頃より至つて神經過敏なりしが昨今にいたりて殊に甚だしく、他人の机上に金錢のおきある時は若しや紛失せば疑ひを受けずや、としきりに心配になり、後程其の人に紛失の有無をたしかめざれば安心せず、又自分の机上に置きたるものは人のものにあらずやと心配し、自分のものと信じても氣がゝりになりてほと〳〵困難致し候、かゝる病的觀念は如何にしても全治いたさず候や。（鶴見野菊子）

答　御示しの通りなれば貴嬢は一種の精神的過敏に陥れるものゝ如し、その狀況を察するに恐らく多少強迫觀念の生ずるものならん、強迫觀念とは吾々がある慮を進行しつゝある間に、吾々の目的觀念を破りて強力なる不快を具へたる觀念が強迫的に浸入し、之を退けんとするも去らず且つ一種の苦悶を伴ふものを云ふ　強迫觀念感情抑欝したる場合等に起るもの多し、長く續いて起くば竟に妄想を發するに至らん。然る可き醫師に就て治療を受け絶對的安心を得られよ、

問　私は身体肥滿して、下向にて仕事をしたり夜こたつにねると顔赤くなり、のぼせて腦や耳が痛んで困ります、又冬になれば顔があれて困ります、療法はありませんか。(奈良山中、不孝女)

答　多血肥滿性の處女には御示の樣な神經性異常を來す事があります、格別に御心慮を煩はす勿れ、顔の皮膚の粗糙となるを豫防するには粗惡なる石鹸を用ひず又多種の塗布料を用ひず、粗製お白粉杯の使用するを禁じ、洗面後には硼酸ワセリン若くは硼酸グリセリン等を塗布せられよ、又寒風に晒す事も避けらる可し　尚は注意の爲めに申可きは餘に顔を麗かんが爲めに過度の摩擦を爲す事は皮膚の上皮を破壞する事となる故へ必ず之は禁ぜられよ。

問　私は「イボ」が首手足等に澤山できて困つて居ります、これを去るよい方法はありませんか。(武藏、字氣良)

答　疣贅の治療と申さば醫藥としては五十プロセントの撒里失兒酸コロヂユム」を局部に塗布すればその藥液は乾燥して皮を張りたる如くなる、之をそのまゝおけば大抵二三日で自然にとれます。

問　(一)私は全身「たむし」が出來て困ります、いろ〳〵手をつくして見ましたがどうもだめです如何したらよろしいでせうか。(二)此頃わたしは大變記憶力がなくなりました腦がわるいためでせうか。(かつ子)

答　(一)たむしと申しても分明ならず、濕疹、疥癬その他種々の皮膚病によりて全身に小さき腫物の生ずる事があります、是等は各々療法が異なる、御氣の毒ですが尚ほ詳くその病狀を御示しなさい。
(二)神經衰弱の爲めに起きるものと認めます、恐らく頑固なる皮膚病の爲め永年困苦せられたる結果なるべきか前記の御病氣を治癒せしめたならば此の方も自然に消へ失せるでありませふ。

問　隆鼻術を受くるには幼い時と又體の充分發達した時といづれがよろしきか、又手術後は體の成長に伴ふて高くなるでせうか、(松山百合子)

答　寧ろ成長の後に於て爲すを可とす、適當なる手術によりて完全にその目的を達し得たらば身體の發育如何に關せず、已にその時より鼻丈は高きなり。

問　十九才の女、身体健全なれども尿が近くて困ります、如何にすればよくなりますか。(はま)

答　尿利の頻數なるは種々の原因によりて起る　神經質の人　泌尿器に疾患ある人及びその他全身病にても之を伴ふ事あり、他に異狀ありませんか、原因が不明でありますから治療法も御示し致し兼ねます。

問　私はよく肥つてる故かしれませんが乳房が大きくて困ります　又痩せるのには如何いたしたらよろしいでせうか、お敎へ下さいませ。大和、恐な娘)

答　妙齡の處女にして殊に健康なる人は皮膚脂肪に富てある故へ身體一般肥滿を呈し、殆ど脂肪組織よりなれる乳房の大なるは自然であり、又美觀である、身體發育の極度に達した後若くは生殖機能を發揮した後には脂肪質も漸次に減少し楚々たる優容に歸着するのである、今から痩削法杯を御研究なさる必要はなく又その樣な爲せば自然に逆ふ事であります。

問　私は只今琴を習つて居りますが、聲が出ないので困ります、何か美き聲の出る方法はありませんか。(大阪、聲惡女)

答　固有の音聲は人々の天受にして發聲器管の構造の然らしむる所なれば醫師と雖ども如何ともし難し。

問　私は月經期間不同にて四十日乃至五十日位にあります(白帶血も少量あり)時としては交媾後直に來潮することもあります、婦人科的診察の要ありや。(韓國、御願ひ女)

答　多少の異常有るもの丶如きも格別に著く生殖器に異狀なき樣に考へられる、然し婦人科專門醫の診斷を仰がるれば健康如何を確定し得る次第である故へ診察を受けらるゝ事は然る可き事と考へます。

問　（一）妊娠時の心得と（二）疲小便の全治法をお敎へ下さいませ。（愛讀女）

答　（一）妊娠時の注意す可き要件は去年號の女子文壇に詳細に說明してあります、更に之を繰り返せば限ある紙上を以て多數の出問者に答へる事が出來なくなります故へ御面倒乍ら去年號の文壇に就て御取調を乞ふ。
（二）夜尿症（れしよーべん）の治療法も先逢て委しく述べました、御覽下さい。

問　（一）私は十町許りあるくと夏は胸苦しく冬は肩、腰が痛みて困ります。
（二）手が荒らくて見苦しくてなりません、皮膚を柔かにする法はありませんか。（田舍娘）

答　（一）格段に疾病のある爲めやはそれ丈けでは確かならず、今少し他の狀態を委く御示し下さい、然らざれば治療法を御示し致し難し。
（二）ベルツ水、或は「グリセリン」、或は流動パラフヒキンとカヽオ脂を等分に混和せるもの等を充分に手に塗布せられよ。

問　妊娠中月經下しの藥をのむと胎兒はおりるとき丶餞がほんとてせうか。（牛込、新夫人）

答　妊娠中に左程危險のある藥品を服用せらるる必要はなき事と考へます、俗間に流布せる種々の月經おろし藥抔と唱ふるものは頗る曖昧なものである、効力の存否は頗る疑はしい。

問　私は折り〳〵頭痛がし又讀書の時など氣がむしやくしやして物事が分らん程になります少しの事も早く忘れ安く其れがため大そう勉强をさまたげます治療法はありませんてせうか（心配女）

答　神經衰弱症に罹れる爲なり、適宜の運動冷水浴規則正き食時時期を定むる事、夜深迄て勉學せざる事等を勵行し夜は九時乃至十時に寢に就き朝は六時に離床し、運動散策、體操等を爲したる後に食事に就く可し、その他醫士に就て治療を受けられよ。

問　變なお尋れ致しますがおしつこなど催してから手のひけぬ仕事などしてゐて遂忘れてしまふ事がありますが身體の何れにかかくれてしまふのてせうか。（S子）

答　矢張り膀胱に瀦溜しておるのてある、一時尿意を促したる時に排尿せざれば尿意即ち刺戟は一時痲痺して消失するのてあります、然し一定時の後には又必ず尿意即ち排尿を催さしむべき刺戟は起るのてある。

問　一昨年十一月頃より步行するに胸に響き恰も板の如く堅くなり臥せば呼吸し難く少しの寒さに遇へば惡寒來り風邪にかゝりてせき痰しきりに出て十日位經ざれば全快せず常に夢見惡しく誰か來りて胸を壓迫して殺さんとするが如く食は胸に止り小音にても動悸高し醫師に診察乞へば腦神經なりと因みに母は肺にて死去せり。（長尾よし子）

答　或は肺結核の初期以上（?）なるやも測り難し、確實なる良醫に診斷を仰がれよ。

みどり子に　緑子さんの御訊れに答ふ、事實上妊娠の成立すべき理由なし、妊娠は度々申す通り男女兩性の生殖細胞（精糸と卵）が通常輸卵管内に於て相い合一して始めて成立するのてあります、（多くの場合に於て）その之を成立せしむる機會は交媾に因るより他にはなし、能く〳〵考へて御覽なさい。

山口、小川よし子に　妊娠は男女兩性の生殖細胞（精糸及び卵）が相い包合融和するに因りて起るのてある、初よりそれを目的とせざる交媾（所謂ゆる避姙手段例之ばルーアサックの使用い場合）は妊娠の機會を妨ぐるものとす。

山口、枯尾花女に　(a) 甚だ不明なりも少し詳しく其狀態をお示し下さい。(b) 本號の「田舍娘女」の問を御覽あれ。

花子ふみ女に　小生には不案内なり直接學校へお問合せあれ。

房陽の伏女と、心配女に　お氣の毒てすが誌上にての答は致し難し。

十八歲女に　本號の「熊本、うめを子」の問を參照あれ。

新刊

○日本情史

佐々醒雪著

本書は我國の戀愛史である、又一面から男女關係の思想上から見たる文學史とも言へる、上古に始まつて現代に到る、其間に伏在してゐた戀愛の思想を主として文學の方面から解釋し批評したもので、文學を愛好する者には非常の興味を以て讀むことが出來るであらう。著者は日本の文學、殊に韻文の歷史には通じた人だから此種の著述には適當なるは素より、題材が稍もすれば臆斷に陷り易い著作なるに拘はらず、却つて眞面目な說を多く聽き得たのは紹介者の喜ぶ處である　四六版本綴函入（定價八十錢、飯田町新潮社發兌）

○煤烟

森田草平著

四十二年文壇の評判もの森田氏の『煤烟』は第一卷が出た、記者は此小說に就いて二三の識者の意見を聞いて本紙に發表したいと思ふからわざと此處には批評を略す（定價七拾錢如山堂發兌）

○二十二篇

田山花袋選

新進作家中の腕利きの作を一人二三篇づゝ凡て二十二篇を集めた小說集である、此等の人の前途は今遽に云々するの必要はない、二十二篇は何處までも二十二篇として、若き人々の面影を永く殘したい（定價金五拾五錢、京橋區南傳馬町東雲堂發兌）

○秀湖小品

白柳秀湖著

小品文を以て一家を成してゐる秀湖氏の近作を集めたものである、日誌を沈むるの記以下數十篇、それぞれ作者の眞摯な態度が表現されてある、小品叢書中亦此一卷を缺くべからず（定價金五拾錢、京橋鑿文館發兌）

○迷へる巡禮の詩集

細越夏村著

細越夏村氏の詩六十四章を纏めたもので、口語體の詩も文語體の詩もある、氏の作には感興はあるが、表現に空疏の傾きがある、詩人は永遠に若し、今後の發展を俟つ（定價金三拾五錢、岩手縣盛岡市悠々書樓發兌）

○自然と印象

第九集

人見氏の『酒場と夢みる女』加藤氏の『さまざまの色』福田氏の『春の午後』其他今井三富など青年詩人諸氏の作凡て三十二篇、自由詩社一派の光焰熾んなりと云ふべし、此集にて記者は三富、福田氏の作を殊に翫賞した（非賣品、牛込自由詩社發兌）

○昔の春

秋雨、白茅合著

小寺秋雨氏、田中白茅氏の歌集である、「霞たつ野に歌きけば何となく昔の春の偲ばるゝかな」（秋雨）「雲雀なく野をたゞ二人さまよひし昔の春のなつかしきかな」（白茅）（定價二十五錢、大阪天王寺山本榮文堂發兌）

○家庭十二ケ月

一月の卷

一種の家庭讀本で一月の卷には一月に關係のあるやうな記事が滿載してある（定價金參拾五錢本鄕一丁目啓成社發兌）

○美顔法

北原十三男著

性來美くない顔でも、方法に依つては美くすることが出來る、本書は美顔術に經驗のある人が誰でも自ら爲し得る美顔の方法を詳しく分るやうに說いた書物で、一般に婦人の身だしなみの進んで來た今日此頃、有つて然るべき書物だと思ふ（定價五拾錢、日本橋區本銀町紫明社發兌）

○白河樂翁（後篇）

碧瑠璃園著

前に紹介した白河樂翁の後篇である、前篇は既に五版を重ね、天覽にまで供せられたのを見ても本書の聲價の嘗ならぬとが分る、裝釘凡べて前篇と同じ。（定價金一圓二十錢、日本橋區本石町至誠堂發行）

○簡易聖書

小田賴造譯

トルストイ翁は今の單に露國のみならず世界の偉人として重きを爲して居ます、此原作はト翁が聖書中の煩鎖なる信條儀文を去り、簡易直截に實行し得べき信仰經驗の見地より其の粹を拔き註釋を加へたもので、聖書研究者に取つて有益なるは勿論單に修養の書として適當な讀物である（定價六十五錢、麹町區平河町金尾文淵堂發行）

○嗚呼九年（前編）

堀江閑山著

千歲見一と云ふ田舍の青年が國稅署勤務の判任官から、裁判所書記高等文官等の試驗を受けた後、志を轉じて宗教文學を研究するに至ると云ふ筋に其間の思想の轉移を書加へた小說である、間々先占の意志表示とか妨訴抗辯の種類とか法律書的の口吻が交るのが缺點であるが、所謂る受驗者生活の有樣が器用に寫されて居るのは如何にも面白い（定價壹圓、郵稅八錢、府下淀橋町大字角筈三百五十三番地遊星社發行）

○權利保護之策

岡部學三著

主として債權債務に關する重要法規を解り易く說明せんが爲めに著はされたものである。望むらくは、利益的變化だとか毀損的變化だとか學者ぶつたことを言はずに、モツト嚙んで碎いた通俗的の編纂がして欲しかつた。（定價五十錢、京橋區南小田原町三ノ九樂山堂發行）

餘興

廣告新聞　婦人向

誌友別荘案内

東京を距ること十里、文堺停車場から二町南へ歩くと誌友別荘と書いた標札のかけてある門に突き當ります。かれて普請中てありましたが、やう〳〵落成いたしましたから半日とお暇があつたら必ずおいて下さい。後ろには千古の秘密を皆様にだけ洩らすべき大森林があります。右の方には東西の花卉を集めた庭園があつてナンナ川といふ詩的な淸流が、その中央を流れ、左の廣々とした芝生の下を廻つてはるかに白帆の浮べる所まで眺められます。文齋には、婦人の見るべき讀み物、閨する書物、殘すところなく閲覧室に備へてあります、はやく來て遊んで下さい。樂しんで下さい、何なりとも研究して下さい。（よし子）

廣告

美聲良藥　鶯丸（うぐひすぐわん）　無代進呈

このお藥は、妾が或る山へ行きましたら、鶯の雛を捕りて來た人に逢ひましたので、憫然に思つて、買ひ取りて元の巣へもどしてやりました、すると其夜の夢に、鶯の親がお禮に來まして、翌朝手に持つて居りましたのがこのお藥です、不思議に思つて試みに用ひましたら、まあ蛙の様な聲が玉を轉かす様な聲に變りました、てすぐ友達にも澤山分けてやりましたが、少しも減らないのてす、欲其て皆様にも差し上げますから、欲しいお方は送料二錢封入して、お手紙をください。申込所福井縣丹生郡吉野村余田片山千里。

八―――――――――――――八

婦人用八字髯

定價一個八十八錢

今回弊店に於て發賣する**婦人用八字髯**は最も進歩せる必用品にして歐米各國の發明家諸氏も**驚いて舌を出す**ほどなれば貴婦人令嬢の湧くが如き歡迎は世界到る處に遍し**特に**今月中購求の諸君に限り**涙くじ**にて**景品**を呈すあたらぬくじは一本もなし運好き人は音譜、延聲記號、ゴムの様袋など澤山當る運惡き人にても紙製ピアノ、自然製香水など當たること受合なり

發賣元　男女同軒

（天賞）（篠田とみ子）

8―――――――――――――8

* *

見よ靈界の天然石鹸（てんねんせきけん）を

この天然石鹸は花の色、花の香、波の聲、月の光、青葉、紅葉、露の玉などあらゆる天然の精を以て精製したるものにして此石鹸を御使用ある時は肌は雪の如く顔は花の如く心身共に清められ爽快の感あるべし。

尚御申込の折は天上の自然の宮居天然の石鹸販賣部宛てに乞ふ。（人賞）（しのぶ子）

* *

秘密交換

弊商會ハ廣ク各位ノ爲ニ流行品交換ノ勞ヲ取リ申候之ハ某ノ新年會ニ用キタル鞣止某ノ席ニ再用シテハトナヤミ給ヘル貴婦人令嬢ハ御依頼相成度直ニ店員參上仕ヨリ依頼ノ品ト一定ノ固極メテ秘密ニ御交換申上候

ヴアニチー商會

（かけ川）

白き顔

明治五十三年號豫告（定價五拾錢　紙數三百頁）

●禪（小說）　梓　白妙
●靈（詩）　太田きし子
●瞳（小說）　きく
●高潮（脚本）　水野　仙子

●夕暮の顏（散文）　鈴木　春子
●涙（某詩人の墓前に捧ぐ）　K　女
●愁の水（英詩）　R　S
●日本橋（詩）　ゆめ女
●三月の夢　ひさ子

●名流婦人の女子文壇投書家時代（楠博士夫人其他）

●花袋、葉舟、鏡花、醉茗諸氏を歷訪す　婦人記者
●女流政治家の家庭
●女子詩歌學校を觀る
●女子敎育家の大革新

●南極觀光團に加はりし婦人の實話
●全國婦人巡回講話會の大盛況を報ず
●變へたる口語文と興らんとする文態

●口繪▲火星より見たる地球▲飛行器にて撮影したる富士山上の大吹雪▲肉體の色（原色版）▲日韓合併されたる新地圖等凡そ二十八葉

東京麴町中央第十六丁目　女子文壇社發行

（地賞）（土佐、淑靜子）

懸賞 裾模様陳列會
（四月一日より二十日迄於當店樓上毎日開會）

遠くば音にも賞顯紳士淑女達、近くば目にも都鳥、問はゞ答へむ業平町藤原名乘つた呉服店。満都の花も咲き初め、溫水溫めば都人は、蝶と戲れ遊ぶらむ、遊べど蝶の裝の、風流ならぬを乙女子の、かこつを見つる畸工が、腕振ひし光淋の、燃ゆる思の裾模様、お召縮緬小袖帶、かごと許も逢はむとぞ、思ふ心の色も香も變らぬものと誓せし、鴛鴦ならぬ妹と脊も、子を思ふ親達も、燒野の雉子夜の鶴、孰れ劣らぬ心もて、心々に向ふ島、花に遲れぬ今日明日を、早ふ來りて求めませ。猶當店は主より、番頭小僧に至るまで、五月の鯉の吹き流し、品に意裝は凝らせども、仕掛からくり工夫する、飛んだり跳ねたり掛け引の、浮いた心は更になく、勤めてあれば信用は、世界に響きて知られたり。都は電話て新橋のモシ〳〵五千五百番、遠き磯過や山の奥、唐天竺の外ならば、振替貯金三十番、注文すれば品物は、直ぐ御手元に飛んて行く、實に便利なる世や店や、先づ早ふ來て買ひ給へと主人に代つてハ子謹申すオホヽヽヽ。

（相撲、はる子）

•現•代•の•內•裏•雛

満天下のお孃様方、文明の現代に生れた內裏雛を御覽遊ばせ、古の長所も保存されて居て、特に大書すべきは現代特色の凜々しい品威がそなわつて居るのです、高雅な洋裝に意匠を凝した新式の內裏雛を求め遊ばせ、野に山に若草が萠出てゝ鳥も歌ひ人も醉ひ、桃匂ふ雛の節句も近づきました、當店の陳列館に裝飾されてあります嶄新の雛人形をお母様お姉上様と御一緒に是非見にお越し下さいませ、十二一重召した雛様を飾り並べてお祭り遊ばしたら嘸お賑はしい事と存じ升、御注文のお方様へは希望の貨を差上げ升、お飾り遊ばしたら何が出ませうか？満天下のお孃様方、ぜひ一度お覽下さい。

（佐藤涙子）

○○◯◯◯◯◯
○○
○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○　○○○○

涙の大安賣
うれし涙かなし涙煩悶の涙あくびの涙うそ涙其他御好みに從ひ大塲小塲あり

女子涙泉堂



讀友倶樂部

短評

○本誌第二號本欄――仙子樣の歸鄕は どこまでも細かく書いてあります。 が、少しクド過ぎたり、又省筆しすぎた所があるやうに思はれます。初めから四行目「流れる間に 流れるのを遮ぎられて」は實によい。 三頁の十二三四行の言葉は少しクドいと思ひます。五頁の「風の音――」以下二三行は、至れりつくせりです。六頁九行目の「明後日のこと」の上に「明日」と言ふ文字を入れたらばと思ひます。 九頁から十頁へかけては、大分ゴタ〳〵してゐるやうです。 然し何時も乍ら佳い作です。 も少し此先を書いたらばと存じました。 妄評はお許し下されまし。

△夜雨樣の花なる人の戀しとてを讀みまして、かなしくなりました。 私は夜雨樣の詩ても文ても讀みますと、 きつと泣かされます。

△床、 此頃歡樂と言ふ字が大分はやります。 何だか好きませんれ。 私は褐色の胸の方がすぐれてゐるやうに思ひます。

△きものは新しい、面白い小品です。

△短篇小說――風の晚、 自分てはあまりよいとは思ひませんてした。 然し私は若い女や男を描かうと始終思つてゐます。

△小賤女、 とよ子さんは中々細かい所にまて、お氣がつかれる方てせう。 之れは自叙體の失敗したものです。 然し此人の筆はたしかに達者だと思ひます。

△らん子樣のお雛さんは、 地質のより佳いと思ひます。 若い人々の動作が能くでゝゐます。 只もう少し芳さんとお雛さんを突込んて描いて戴きたかつた。

△僕の姉さん、 澪子さんのはどうも惜しい所でおしまひになつてしまう。 もう一寸考へて戴きたい。 筆は中々達者てす。 前號の凩などもそれてわります。 新しい方面に向はれたいと思ひます。

△日記――年の暮(せゝらぎ) 私と同じ土地にゐるだけ多く私には感ぜられます。うまい作てす。

△色々の事を申してすみません。 どうぞおゆるしなされまし。(横濱、矢野きみ子)

○「歸鄕、」 仙子さまの、 誰やらじやありませんが、 それこそ、 ほんとに舌をまいてしまいました、 私なんか批評は出來ません。

△「花なる人の戀ひしとて」 夜雨先生の、 はげしい作、 とげが立ちそうて何だか、 あぶなうございます、 氣の弱いものだつたら泣きます、 よんだ後て、 いら〳〵しいやうな、 變なかんじをあたへられます。

△抒情詩は二の方が好きてす。

△投書欄、 詩、「月と吾」 Aさまの、 宜うございますこと。

△散文、「朝の光」 春子さまの、 ほんとにお上手。

△日記、「初めて先生になつた記」「初冬日記」は面白うございました。

△一番、 論文が物足りない氣がいたします。

△お留者の欄は止して頂き度うございます。(伊豫、よしゑ)

○巻頭の口繪空と水、私はあの繪を大變好きましく思ひました、夕暮あのやうな處て敬愛する先生又は友と共に語り共に歌ふ事ができるならば私は浪さんの同情者の一人てすから浪子の墓は興味深くよみました、湖畔の女とは誰方の事てすか私はあの二篇の詩をつく〴〵と味つてよみました、夕暮美しの雲をながめて物思ふ時私のハートにもあの詩はあるのてすけれど、不才の身、自分の思ひを詩に言葉に表はす事ができないのてす、湖畔の女詩人の詩は即私が歌はんとして歌ひ得ざるそのものなのてす、岡村雪子様に、私は貴女を少しも存じません、寫眞さへも拜見しないから知りません、てすからいきなり貴女に御交際を願ふのてはありませんけれども、論文欄にある貴女の文章を拜見しまして一言のべたく存じます私は貴女にとりて未知てはありますが同情者の一人てある事を知つて下さい、貴女は「傳染病てふ故をもて世は私を排斥する云々」と被仰いましたが、不治の病におかゝりになつた貴女のみ言葉としては御最もてす、けれども私はかく排斥され給ふが故に貴女に御同情致します、世は何といつてもいいてはありませんか、貴女を愛し給ふ神御兩親又未知の同情者ある事を思ふて早くよくなるやう御勉めなさいませ昔は兎に角精神の持方養生の仕方によつて決してなほらない事はないてすから貴女は學校にいつてらつしやるのてすか。(千夜子)

○私は本誌がほんとうに好きてすよ、今迄見た本のどれよりもまた時鳥のはつれを聞くより好きなのよ、わけても餘興欄が好きよ。(いく子)

○外山先生の浪子様の墓の御案内誠に嬉しう存じました、此小説は三度よみて三度とも泣きました、芝居て見て又泣きました、今度のお墓の記事てまた〳〵泣きました私の學友二三人とも申合せて東京へまゐりました時はきッと浪子様のお墓へ參りませうと存じます、外山様の御案内はありがたうございました(長野縣、よし子)

交際を望む

○ロンドンより交換を望む　私は只今英國ロンドンに來てゐますが我が母國の繪葉書を非常になつかしく存じます誌友の皆さんの中て御送り下さいました方には當ロンドン世界第一の都の繪葉書てお禮いたします宛名は左記の通りてすが御面倒と思召す方がありましたら英國倫敦日本大使館内小野よれ子として下さい(21. Homstead, Wny Yone Quo. Garden Suburb, London N. W. Enolund.)

○米國より　妾は亞米利加、加洲のロス、アンヂエルス市附近に居る者てすが誌友の皆様方と繪はがきの御交換を願ひます、若し御寫眞を下さる方には妾の金色夜叉全部、濱子、海潮音、英譯不如歸の中何れなりと御好みのを差上げます、尙當地て發行する新聞雜誌御好みの方は御申越し下されば御送りします(大西清子、K. Onishi. P.O. Box 53, Piru Venturn Co. California.)

○カナダより　戀しき懐しき故郷を後に波路遙々此北米に着いた時は、まだ學びの窓を出て間もなく、世路辛き浮世の風も知らざる十九の花咲く頃てあつた、早や三度び異郷の月を眺めし獨り友なきを恨むのてある、紙より薄き人の世に獨り異郷の月に泣く身はせめて文の交際なりとも給はらば如何に嬉しかるべき、(加奈陀コロンビヤ洲ステブストン日本人メソジスト教會にて秋本露子)

○同じやうな境遇の方に　誌友の御姉様方よ妾は本誌を六年間も愛讀して居るけれど御交際を願ふのは今度初めてよ、私は幼少の折實母と生別れとなり今は冷き繼母の膝下を離れて苦學三歳あゝ此長き間語ふ友もなく又一人の同胞だに無し願くば御情け深き(己れ如き不幸の境遇に有る者と)同情に富める方と行末長く變る事なく姉妹として御交際を願ひたいのです同縣なれば尙ほ嬉しいてす(栃木縣足利在の生てす)(府下淀橋町字柏木三四七、栗原方、龜井芳枝)

○水晶類と交換　四方の姉様方、御願いたします、妾は山なしとは僞り山又山の片田舍に起き伏しする小娘てす、どうぞ左記の書物など、御送り下さい御願ひ申ます、「金色夜叉」「心と心」「女夫波」「ハイカラ令孃」「魔風戀風」「己が罪」「噫無情」「小女の煩悶」や貴孃様方の御生れ遊した御國の、特産物、「バイオリン」「手風琴」諸令孃方の御手細工品等何れにても御送り下されし方には我國名産の水晶印材(無字)其他細工品及品石床置文鎭等にていたします(山梨縣東山梨郡中牧村中尾域内　岡政子)

○裁縫會　誌友の皆様、妾れ裁縫會を始めますがそれは同じ志の方々と集つて洗濯、洗張、仕立物所と云ふ札なかけて裁縫の賃仕事をして

學資金を作りつゝ勉强致すので御座いますが東京に苦學して成功を望む方は お知らせ下さい委しいお話を申上げますから（牛込區水道町一〇辻ゆき子）

○仲間入り　文壇御愛讀の姉上様方よ日々お寒いてはありませんか妾事は初めて御伺ひするのですが當裁縫所の、ならえさん、浪子さん、花子さんなぞは度々繪葉書御交換して居られますが、わたくしも當月から、仲間いりさして、いたゞきたいのであります、皆様何とぞ御交際願ひます妾は本年拾七歳の不束ものです 繪はがきに名所寫しん、粗末ながら少々もつて居ります然し男の人はいやですが 清い御交際ならいとひません（京都市五條通油小路東入、大島裁縫所内、糸柳いく子）

○改めて　都合あつて久しく御無音致して居りましたが本月よりあらためて 皆様なにとぞ御交際を御願ひ申ます 埼玉縣磯野菊子様福井縣北利様私も初め福井縣にて 小學校に奉職致し今では當地に樂しく其日を送りて居りますふつゝかなれども此後なにとぞ 御交際の程御願ひ申上ます菊子様御同名にて御なつかしう存じます。（大阪市北區西野田十六町桝屋きく子）

○十六歳　妾も當年十六歳になりました、どうか諸姉様も愚な者を教へ導かれんことをお願ひ致します、そして諸姉様何卒〳〵御手紙下さいましな御返事はかならずさし上げますから。（大阪市東區南久太郎町三丁目九一、吾要久子）

○女ひとり　誌友の皆様私は昨年母を失ひました三人の姉は嫁ぎあとには 女ひとり殘されて毎日淋しく暮して 居りますどうぞ御交際下さいませ（前橋市横山町二、黒崎くに子）

○火事のため　記者様妾はどこ迄も惡運つよく過ろ一月三十日火災にかゝり全燒仕りました穀物も一切燒けつくし漸く衣類が少し出ただけで御座います それて懐しい此女子文壇にも別れなければなりませぬから 實に殘念てなりませぬけれ共仕方が御座いませぬ 此端書も燒け小屋の隅にて認めました 先づは一寸御別れの御知らせ迄（大分縣直入郡城原村四六九渡部艶子）

○栞其他　御姉様シナリ、ハンカチーフ、リボン、ヒジツキ、等の御交換を願ひます猶誌友の皆様の中にヴアイオリン御不用の方は 御讓り下さい又舶來繪葉書も御送り 下さいな私しも必ず御送り致します 男子の方にても本誌を愛讀して妾の様な者とも御交換下さるなら 御受け致します（北海道後志國磯谷郡南尻別村字ニセコアンベツ温泉場近江屋方月露子）

○紹介　諸孃にして外國人と、信書や、繪葉書の交換をお望みの方がありましたら 往復葉書か又は郵券貳錢封入てお申込なさい 紹介いたします、（福井縣武生町旭山本方、萍）

○寫眞其他　文壇愛讀者の諸孃様何卒寫眞繪葉書しをり等を送つて頂戴な送つて下さつた方にはきつと私の見苦しき 寫眞に雜誌小說等をそへて御禮致し升尚寫眞を送り下さつた方には信州案内又字引美文活法等にて御禮致し升 （長野縣東筑摩郡波多村四一〇中島きさ子）

○御わび　御玉章を下さいましたお情深き皆様へ再び此處て御禮申上ます、 そして寫眞のお望の方もありましたけれど 餘り多人數て一つ一つ差上兼れますから こればかしはどなたにも御ことはり申しますよ、 皆様あしからず赦して頂戴な、（愛媛縣、文子）

○三年級　私は某女學校三年に通學致して居ります不束の者てすが 誌友の皆様よ今後永久に雜誌あみもの繪葉書リボンの 御交換を願ひます又私の寫眞もさしあげてもいゝのてす （京橋區桶町六小谷勝子）

○朝顔種子　誌友の皆様から妾へ朝顔の種子百種交りと交換をとて、書籍や雜誌や繪葉書（五枚）、編物等御送り下さつた方へは即日に種子を送つて居ります、 所が東都の悪友とのみにて何も書かず、 女子文壇御送り下さいました方は御所が判からず、 朝顔種子を送ろ事が出來ませんから、どうか至急に宿所氏名御知らせ下さい（大阪市南區天王寺大道三丁目松澤豊子）

○廻狀　さしつけながらお敎し遊ばせ、 私ネなつかしい誌友皆様の手紙を綴つて、 順々に廻して讀む事にしましたら、 どんなにか趣味多くつておもしろいてせうと存じますの。 皆様如何思召して？…若し御同意のお方が いらしつたら、 何卒その方のお所とお名前を詳しく此女の誌上てお知らせして頂戴な、 そしてそれだけを廻狀のお友達として、 各自の消息や各地方の通信なんかしあひましたら、 どんなに有益てござ いませう。 御賛成遊ばして頂戴ネ…（忘れな草）

○何品でも　誌友諸姉様寫眞、栞、リボン、あみもの、 繪ハガキなど珍らしき物何ても御惠

み下さいませ、妾御禮として古雜誌其の他の物て必らず御送り致しますわ。(茨城縣久慈郡西小澤落合船橋捨子)

○姉妹二人　片田舍に寂しく暮して居りますどなた樣にてもよろしいからどし〳〵と雜誌や御レターの交換をして下さい拙手ながらも早速によろこんで御禮致してよ(山城國乙訓郡久世村、大橋八重子)

○和歌　誌友の皆樣の御内て、外國においてなさる御方を御存じてございましたら御ひきあはせ下さいませんか、次に私和歌が大すきてすの繪ハガキに和歌を書いて御惠み下さいませんか御返事はキツトいたしますわ(京都市西障紋屋町小島方靜月子)

○御禮と希望　小說、雜誌、繪葉書、玉章、其他色々のものを送つて戴いた諸姉兄樣こゝに改めて御禮致します。何誌上の皆樣に御願いたします、妾は美人繪葉書を希望致すのですが御持の御方は妾の見苦しい寫眞、雜誌、小誌及び手製の編物て御禮は必ず致しますから御送り下さいませ、男女の別なく極々淸い御方に限ります、倘花物種子も御惠み下さいませんか。妾は花好きて毎日其手入を致して樂んて居るものです。(遠江引佐郡都田村新木北六十三鈴木小菊子)

○惠島縣の方々に　本縣の長曾我部菊子樣は此節どう遊ばしたんですか。ちつともお顏出がないやうぢやありませんか。妾はあなたの熱烈な美文や詩が讀めないのを悲しく思つてます。それに吉田古隣子樣の散文は毎月面白く拜見して居ます。多田らん子樣、お所はどちらですか。お知らせ下さい。此間二三度花びし樣とおつきあひしましたが、おなつかしい優しい方のやうに思はれました。本縣にもう少し投書家が盛んにこしらへたいもんてす。私も二年程前から暫らく投書を止してゐましたが、又今度お仲間入を致すことになりました。みなさまよろしく。(德島市八百屋町三丁目高木樣內中村勝子)

○歌俳同好の方に　私は非常に歌や俳句が好きてありますから、誌友の皆樣何卒葉書や繪葉書へ、御書きになつて御交換下さいませ。(山形縣西置賜郡白鷹村中山、大瀬すみれ子)

○名古屋より　お懷しき誌友の皆樣に申します愈々當地て開かるゝ共進會の期日は漸く近ついて來ました、繪葉書も既に出來ました就いては御寫眞を御送り下さいました お方へは此の繪葉書一組づゝお送り致します、また、御希望に由つては私の姿も御送り致します但し例に依つて男子のお方は固く御斷り致します(名古屋中區東古渡字柳畑二三番地大橋方宮田和子)

○高野山の麓　諸姉樣私は高野山のふもとに淋しく母と一人の妹と暮して居るものですが同情深き姉樣よ何卒永久にお交り下さいませ和歌の交換も御願申上ます(和歌山縣伊都郡九度山村、木澤てる子)

○音樂好き　誌友の姉妹樣よ私は音樂が大好にて七八年前よりオルガン、ピアノ、ヴアイオリン、ハモニカ等少しづゝ稽古しましたが何も面白い歌を知りませんて淋しく日を送つて居る哀れなる者てありますから誌友の姉妹樣方にて御存じの何歌にてもよろしう御座いますから曲譜共に何卒敎へて頂戴よ必らず御禮は申し上ます(東京淺草區北富坂町廿八尾崎樣方日羅野九羅子)

○廣島其他　誌友の姉樣方の內て廣島の各女學校へ御通學の方又異鄕の姉樣方も繪葉書、玉章の交換をして頂戴よ拙筆ながら御返しいたします(廣島縣廣島市大工町八丁目賀屋梅太郎樣內、河本義子)

○一句ても　私は田舍に住んて居る不束な者てすが下手な橫ずきとやらて俳句は大へん好きてすから皆樣方て俳句の好きな御方樣は何とぞ一句てもよろしうございますから御送り下さいませ必ず御禮は致します(三重縣鈴鹿郡關町大字中町、田中みれ子)

○俳句同好　の方は繪葉書に三句位書いてお送り下さい妾も直ぐ送り返しますから(下關市西細江町橫田樣方、山本芳子)

○和歌の評　誌友の皆樣和歌の御交換を願ます十首以上半紙に御したゝめ下さいました方へは下らぬ評を附して御返しいたします又秀歌は新聞か雜誌にのせて掲載の號をさし上ます批評をして下さる方には私方から御送りもいたします(美濃瑚町、饒島小枝)

○初めて　初めてゞ不束な田舍娘てすが、今月から愛讀者となりましたから、御交を願ひます、私の方は春とは只名のみてすわ：：近所の御方は遊びに來て下さい、妾待つて居りますよ、(北海道札幌郡篠路兵村安達けい子)

○左の方々も交際を望んて居られるのてす、勿論特別の條件はありませんが、誠意を以て新智

識の交換と、情誼の親和を計りたいと云ふことです。

○大阪市南區坂町松井方　植村艶子
○茨城縣北相馬郡北文間村長沖　宮久保秋子
○富山縣中新川郡上市町　藤澤穠子
○大阪市東區南久太郎町三丁目　東　入穂子
○上總長生郡白深村鷲巣區奎運堂内　御園芳月
○茨城縣西茨城郡西那珂村　川和田初子
○北海道旭川公有地　鹽ノ谷勇子
○同旭川町二條通六ノ七、大光寺方　仁科仁子
○靜岡縣沼津町新町　稻野かほる
○能登鳳至郡皆月　松井きくえ
○東京芝區汐止二ノ一鐵道院官舎ニ七　井出紫子
○富山縣下新川郡　福島小草子
○山口縣都濃郡久保村中畑方　山本美津子
○福岡縣田川郡後藤寺町川宮　穂本照子
○靜岡縣志田郡和田村　原崎久子
○岐阜縣加茂郡黒川村鷲見方　春野秋子
○東京淺草榮久町八　島田ちか子
○秋田縣仙北郡金澤町厨川町　加藤うん子
○秋田縣仙北郡金澤町すみれ會内　萩原とよ子
○同　本間てい子
○同　町本なほ子
○備中國小田郡城見村　小見山春子
○備中國後月郡木之子の里　馬越昌子
○上野長野原局區内日影村四八　富澤きく子
○廣島縣比婆郡東城村川西二六　後藤すみゑ
○三重河藝郡神戸町　森井房江
○北海道虻田郡辨邊村十五線十二　石井露草
○福井縣坂井郡高椋村石橋淨光寺内　平泉ひさ子
○山口縣都濃郡富田村中村　岩崎つぎ子
○長野縣東筑摩郡波多村上波多　中島あさへ
○千葉縣長生郡白深村中里　篠崎伸子

記者と讀者

○長岡、小原玉江さんに、短文の半枚も同封も差支ありません(記者)○京都、今堀奈都さんに、賞品のお禮はたしかに(記者)○捨小舟さんに、女學校に入學なされた許りですのに作つてみやうと云ふのは結構です、決してづう〳〵しいなどゝは思ひません(記者)○伊勢、よしゑさんに、お知らせありがたう、あんな事は別に記者も氣にかけて居りません、その爲に本誌を見たい人のふえたのは可笑しうございますね(記者)○出雲、しらきくさんに、本名お出しにならないでも差支ありません、其代り責任を以て好い作をお出しなさいませ(記者)○門司、鈴木靜枝さんに、三年間も友誼のかはらない好いお友達を本誌の紹介で得られたとやら、貴孃の爲にも幸福です(記者)○K、Tさんに、若し口繪が抜けてあつたり、落丁があつたら其本屋へ返して新しく完全なものと取かへて下さい、本社直接の御購讀なら直ぐ御郵送下されば完全な雜誌と御かへ申します(記者)○南千住、YHさんに。十五日以後の到着は翌月十五日締切の原稿に加へます(記者)○北海道、濟川雪子さんに。御挨拶拜見いたしました、何うぞどし〳〵お作り下さい少しも面倒てはありません、尤も佳作でないと紙上には出ません(記者)○一讀者さんに、御注意ありがたう(記者)○寺島よぶさんに、本誌は何處からお求めになつても投稿は御自由てす(記者)○しず子さんに、華族様のお邸に御奉公のお身とやら、それで能く御投稿なさいます、御兩親もおありなさらない不幸の御身の上を承りまして同情いたします(記者)

繪葉書を好む

左の諸孃は特に繪葉書を好まれるさうて、美麗な繪葉書や、意味のある繪葉書の交換を望まれました、特に注文のある分は書添えて置きました(記者)

○福岡縣三池郡大牟田本町五丁目、福竹靜枝(三池名所澤山あり他の名所と交換す)
○茨城縣稻敷郡大須賀村幸田、田口きよ子(肉筆の洋畫、及び無色の風景等あり)
○岐阜縣土岐郡多治見町南小路町、中西百合子(名所を送つた方には雜誌で御禮)
○伊勢飯南郡射和、三二一、中瀬方、福永芳枝(風景を乞ふ)
○茨城縣稻敷郡牛久村田宮、池邊澄枝子(名所)
○京都市五條通油小路東入大島裁縫所内、神田花子(風景を乞ふ、京名所送る)
○神戸市布引元丸山茶畑、梶常子(紀念スタンプ付未使用のもの三四枚宛封筒入にて乞交換)
○渡島松前郡福山町、平田宮子(當地名所にて返禮)
○岩代伊達郡伊達崎村大字上郡古寺六番地内、朽木藤重子(名所交換)
○石川縣皆月、藤木春枝
○沼津新町、金子千代世(名所交換)

個人消息

○あの麻布の和久井蘆久子樣、おなつかしうございます。少女世界ではよくお目にかゝつて居りましたわネ、私誰ですか貴女御存じないでせう、ちぐさよホ、、、、おわかり遊ばして？私もあなたと同時に女子文壇の誌友となりましたから、どうぞお親しく誌上のお交り遊ばして頂戴（柳水の里、ちぐさ）○失禮で御座いますが直江津の木島磯巾蒔樣高田町の根岸光子樣、ほんとうにつまらぬ者で御座いますがおまじわり下さいませ御住所をどうぞ尙直江津高田御近在のお方で一時的でなくおまじわり下さる方はありませんでせうか（信濃上田町三、二、五、入田村あい子）○北見の今村りせ子樣お懐しゆ御座います御差支えなくば何卒永久に御文通下さいな北見は私にとつて懐かしい處で御座います何卒御手紙下さい伏してお願申上升（渡島國龜田郡七飯村字鳴川伊東小百合）○二月號で小路女を御書きなすつたとよ子さんはもしや熊本の方ではございませんか？なぜつて牛肉を草葉町から買つたとしてありましたので加茂川の事ではないかと急にお懐はしくなりました。若し異つて居たら御免下さいませ、私の推察どほり熊本の方でしたら以後紙上で御交際下さいませ、私も家は熊本にありまして昨年の四月から當方に參つてますので熊本の方と聞けばなつかしくつて堪りませんゆゑ何卒次號にお答へ下さいませ（大分原田秀子）○山形市山内靜子樣一向御便りがありませんが御病氣でなくつて（近江田川優子）○麴町なでしこ樣あなたもし三年前に御別れした姉さまではなくつて妾はあまりの懇しさに御ひますちがいましたら御許し下さいなもしそうなれば御住居御通知下さいませ…（神奈川なでしこ）○神奈川の木村はる子樣その後御病氣は如何？長く御無沙汰致しましたわれ都合があつて私皆樣と御交際が出來ませんのはる子さま私は岡山縣下の靜ですよ（備中、紅蕾姬）○岡山の矢木武子樣、其後御變りもございませんか。お贈り下さいました編物指南、毎日樂しみに種々こしらへて居りますの、本當に有り難うございました。此方から御贈り申ました編物全書、御受け取り遊ばしたでせうれ、念の爲め誌上でお尋ね申上ます。（高山米子）

持つてゐる書物　讀みたい物

○詩集と歌集　皆樣の內に萬葉集、金穗集、晶子さんの佐保姬、露風氏の廢園、白秋氏の邪宗門、等の詩集歌集及うき草、藤村集、要、獨步集等お持ちの方は私のあめりか物語、風葉氏の天才、秋聲氏の凋落等及文學雜誌と換へて下さい又お玉串給葉書のお交りをもして下さいまし。（大阪市西區阿波堀通四入江方、草村きみ子）

○以前の本誌　妾は四十二年の九月より女子文壇の愛讀致して居りますが其れ以前の女子文壇が一度見たくてなりませぬ故四十二年八月發行から以前のなれば何れ程古くとも女子文壇であればよろしく故是非〳〵御惠み被下ませ妾よりも其かはりとして手許にある古雜誌なれ共文章世界又は婦人畫報にて早速御返し致しますのよ御なさけあれば是非〳〵御送り被下ませすぐと御返事申ます（岐阜縣加茂郡三和村古屋三五・柴田なか子）

○貸す本　私の手許に紅葉全集、金色夜叉、不如歸、不如歸の歌、筆子、ハイカラ夫婦ハイカラ令孃、夏子、思出の記、田舍教師、寶風戀風、裾野、みだれ髮、靑春、少女の戀、行雲、多情多恨、乳姉妹、等不用ですから、どんな雜誌でも書籍でもよろしいから送られた御方には何冊でもかして上げます、（攝津國川邊郡長尾村口谷嵐翠子）

○雜誌と書物　諸孃樣の內で女學世界增刊嫁に行く人。家庭日記。紀念號。失戀。想夫憐。あゝ靑春。富子夫人。文章組立法等御不用の方何卒妾の左の書と御交換下さいな裁縫と編物。結婚の卷。衣裳かゞみ。よつちやんの觀察。少女世界。少女界、婦人世界、花瓶敷。枝折。押繪。家政學教本。英語文典。等と御願ひ致します（兵庫縣多紀郡城南字士各務富美子）

○二千五百年史あり　誌友の皆樣私の手許に竹越先生の二千五百年史の中古がありますから三宅先生の水彩畫手引の特製御持の方は御交換を爲て下さい、御本が着いたら妾のもすぐ御送致します　尙內缺水彩畫繪葉書の交換を願ます（千葉縣山武郡喰滿村白幡、藤田かつ子）

○故蘆坡の詩集　皆樣の內に大阪の小詩人故筒井蘆坡さんの詩集で名は一寸忘れましたが東天紅かと思ひますが御不用の本御座いましたら。私の持てゐる細井花紅著「影」（但し口繪木版無し）武島羽衣著「霓裳微吟」（口繪木版摺付き）詩的俗謠「江戶むらさき」何れても御意に入

りし本とお取換へ下さい思召し御座いましたら直接御報下さい妾より先きに送本仕ります（越後津川横町、春木靜枝）

○教育雜誌　私は一人の弟と淋しく暮して居りますどなた樣にても一時てきてなく水魚の御交りをして下さい御願いたします只今手許に敎育雜誌が澤山有りますから御玉章被下ました御方には一册づゝ進上いたします（山城乙訓郡久瀨村長岡濟子）

○御禮　本誌上にて「家庭日記」を所望しましたところ四方の皆々樣御送り下すつて有がたう御座いました併し私とて然う何册も入用てはありませんから失禮とは思ひましたが先着者東京府下の三ヶ島芳子樣のを戴いてあとは皆御返し申ました何卒惡からず（群馬縣、大墳十代子）

○露營の夢　皆樣の內で露營の夢（唱歌）お持ちてしたら御惠送下さいませんか、御禮にはハーモニカか私の手製の造花をお上げ申ます、然し餘り多數になりますと困りますから必ず前以てはがきて一度御照會を願ひます（兵庫縣三原郡賀集村加藤香菊）

○紫子樣、あなたは男の方だらうと思ひますから御返事も出さずにおきました。光子樣、浪子樣、しげ子樣、みよ子樣、たづる子樣折角てすが、御望みの猫は、先着の歸美子樣に御送りいたしましたから不惡。かつ子樣、しげ子樣、光子樣、みよ子樣、みさを子樣、芳尾樣御本を御送り下さつてありがたうよ。又御送りいたしましたが御受取下すつたゞらうと思ひます。其の他皆々樣の、四十二年、宴、花袋集、鳳葉集、それから、ハイ子の詩及他の詩集、歌集と左記の本と交換して下さいませ。文話詩話、美文作法、美文斷片、作文辭典、詩人、新詩辭典、國語辭典、和歌辭典、名家小品、戀のエハカキ、不如歸、？、小女の戀、富と愛全部、片戀、ハイカラ令孃、水彩畫手引、血笑記、作文部叢、他に琴歌四册等。本年女子文壇新年號を御送り下さつた方には右の內どれても一部差上げます（滋賀縣神崎郡御園村今田居志賀小なみ）○私の手許には左の不用書がございます、コプシ、魔風戀風、笹子、思出の記、金色夜叉の歌、乳姉妹の歌等ございます、皆樣の御手許に小說卷、青春、伯爵夫人其他何に本ても御座いますなら送つて頂戴、私も相當の本を必ずお送りいたします又お寫眞を惠み下さつた方には書物てお返しいたします（岩代國河沼郡飯谷村字藤、笠間松江）○なつかしき皆さんの中て、小說本御不用のお方あらば、何卒送つて頂戴ねーお禮には絹ハンカチにて又は其他色々にて：：男子の方ても宜しくあります、但し先着三名迄は私の寫眞差し上げます（若松市中六日町宮原一枝）○私の手元に女子文壇女學世界婦人世界婦人くらぶ婦人畫報毛筆畫鉛筆畫手本梅が香俳句の雜誌尺八獨習案內百人一首の譯旅のしろべ習字帖新潮新聲等澤山ありますが、どなたても三宅さんの水彩畫手本盆栽の畫物言海等と御交換下さいませんか御望みにより何册ても御送りします、ひじつき、しほり等（絹製）御送り下された方にも尙雜誌や編物の交換も希望てす（近江伊香郡片岡村東野田川優子）○妾は德富蘆花先生著の思ひ出の記を一度讀みたく思居りますが御姉上樣方の中にて御持合せの御方は何とぞ少々の中妾に御貸し下さいませんか御禮には名所繪葉書一組づゝ差上ますからどうぞ御願致しますわ（上野國長野原局下、茂木よしゑ子）○己が罪全部お持の方は少しの間お貸し下さいませんか、決して不正な事はいたしません（宮城縣柴田郡大河原新田町、太田せん子）○誌友の諸姉樣にお願ひ申します、私の手元に少女之友、少女世界、各一卷一號より少女、少女界、女學世界、婦人世界及本誌などありますから古くてもかまひませんから詩集和歌集と交換して下さいませんか（久留米市櫛原町三丁目田中方、桃子）○私の手許には四十一年からの女子文壇と婦人世界と十册ばかりの女學世界と文藝倶樂部と新小說二册と婦人畫報十册ばかりとムラサキ三册と婦人くらぶ二册と其外種々の雜誌澤山ありますから若し皆樣の御手許に名媛と筆讀女殿下ありますなら何卒御惠み下さいますなら前記の中何づれても差上げますからどうぞ御願ひ升（秋田縣山本郡淺內村、野呂田富子）○諸兄樣の御許に本年二月の中學世界御不用の方は何卒御惠み下さいませぬか御禮は當地名所繪葉書て致します博覽會に御出の時は御寄り下さいませおまち申します（福岡縣博多竪町六番地ノ二、中野さかゑ）

○諸姉樣私は古い女學世界が澤山手許に御座ます故何卒御望の方は何本とても御取かへ致ましよう（日本橋區車町一ノ十四、荏司方高橋照子）

○お懷かしき姉樣方の御許に魔風戀風、金色夜叉、笹子、己が罪、コプシが御在ましたら何れかと、妾の上等幻燈器とお取り替へ下さいませんか又古郵便、收入切手（內外）、古雜誌及び古

新聞紙をお送り下されば拙いのですが絹製の寫眞掛かM入か栞等を御返し致します、又紀念スタンプ付繪ハガキか風俗寫眞か山水のかを御恵み下されば妾の醜姿のコロタイプか寫眞かヒシツキか造花かで必ず御禮いたします。それから「命の親」とも云ふべき最も有益な草種澤山あります本誌友に限り郵税一錢封入あれば早速御送り致します（長野縣信濃延德局内、花島君子）

〇洋畫講義錄全部（十二册）讓りたし、お望みのお方は返信料添へて御紹介下さい（福井縣武生町旭、山本方白崎萍）〇諸姉樣の中に不如歸、强き戀、春雨集、ハイカラ令孃、小猫等お持の方は私の許に景色美人繪葉書及雜誌小說澤山あります故御交換願ます御送の前御一報下さい（備前長岡局區内富山村圓山一九九　小川大同子）

〇寫眞器械（附屬付）ラケツド上等右二品何れでも御ゆずり致します、食道樂、夏子、乳姉妹、にせ紫、新夫人、南北綠葉集、紅葉全集、花鳥集、忘れがたみなどと交換して下さい（岐阜縣加茂郡黑川村梄スエ）〇博愛賢明なる本誌愛讀諸姉よ、妾は山にも近い海にも遠からざる岡山の片田舍に住める賤女なるがもし誌友姉さんの御内に不如歸、思出の記、夏小袖、己が罪、演藝畫報か其他小說類と妾が内に藏する一葉全集獨步集一、熱血、喜劇集一つ袈裟と盛遠、脚本金色夜叉杞行文すみれ集演藝畫報一月號がありますから小說脚本と御交換下さい（備前國上道郡三蟠村大字藤崎、北村久吉内芳子）

追加

〇選者の評を評して見やう、第一に小說水野先生の、平凡な物だ、次は河井先生の詩何とも云ひ樣ない懷しい、私は此評は何日も惹きつけられて了ふ、美文何誰だか知らぬが詩の評によく似ている、日記の横瀨先生嬉しい實に嬉しい評、本誌中では誰よりか好き……夜雨先生のは三度の食事よりも……否其れ以上に好き、論文、何誰だか平凡、短文の嬉しい、書簡文、嫁だ、無暗に褒めて計り居て、矢張り凡なる物だ。（常陸、木村桂月子）

〇二月號の表紙、こういふ後姿大すきければなぜか前號の方がよい、口繪はみなよい誌友の片岡樣は元下谷小學校へいらしつた方でしよう私は片岡樣より一級上の者です、本欄夢二さんの繪はどれより一番すき記事では「浪子の墓」一番先によみました待ちにまつてゐたのですもの、散文では「朝の光」私こういふ作は大好「色紙」はなんだか昨年江森樣の「夕星の美」といふので當賞なすつたのとものはちがひますが書きぶりが同じですれ、和歌この節は皆新派ばかりですが何故か私は舊派がすき、日記文の「つゆ草」樣御同情いたします私も同年ですやはり屑揚の下しぎわが苦になつてしやうがありません俳句「傘なくて木かげを走る時雨哉」がよいと思ひます短文「常陸なてしこ」樣の「これでは讀みたいのです」私も同感です。（東京、てる子）

〇第二號の浪子さんの墓おもしろくはい見致してよ私小說中一番興味を持つて居るのはお馴染の不如歸浪子さんよですから先日學友の御方と御一所に浪子樣の御墓へわざわざ參詣にまゐりましたのほんとにそこへ參りますと小說以上の哀愁の思が胸にひしひしと迫りますわねゝゝ、ゝ貴さいよまあ皆樣いらつして御らん遊せ。（深川、鈴木美喜子）

〇不肖ですが、私も永ちく本誌の御厄介になつて居ますけれど、御友達がないので本當に淋しう御座います、これから誌友くらぶへ御仲間入を願ひます、御投書遊ばす方は御交際を……（本鄕區千駄木町五十九加藤笹子）

〇伊勢の夕潮樣との御名にてはるばる御端書給はつた方に山々御禮申上升。御住所も御本名も承知致しませぬ故失禮ながら此欄を拜借させて頂いて取あへず。御保養中との仰せ－御不快でおはし升ので御座い升か。御大事に遊ばしませ。（小石川にてつゆ草）

〇女子文壇愛讀の諸嬢樣のお手元に袋物の形紙が御座いましたら何卒おゆづり下さいませ私は袋物が大すきです形紙も十數種持つて居りますが猶珍らしいのが欲しいので御座います何とぞ御送り下さいませお禮には雜誌かゑはがきで必ず致します私の形紙と交換いたしても宜しうございます若しおゆづり下さるお好意の方がございましたらお手數ながら前以て一寸種類形の名をお知らせ下さい重復になるといけませんから直に紙入の類を望みますこの外のでも宜しいのですなるべく十日までにお申込下さいませ但し男子は堅くお斷り（東京市淺草區北淸島町七十九番地星野照子）

編輯通信

○次の增刊　第一增刊の『若き婦人』は近來の渴望を以て迎えられ、發行即日賣切となつて了つたが、次の第二增刊『都會の婦人』は別項の廣告にもある通り、都會の婦人界の現狀を發表することは勿論、特に都會思想と云つたやうな近來の新しい都會的色調を帶びた文學的作物を多く掲載しやうと云ふ企てです。ですから現今の文士諸家の都會觀察なども澤山に載せる積りで既に準備中てす。從來有りふれた東京案内的に編輯された婦人ものとは全然趣を變へて、新しい思想と、刺戟的な印象と、驚くべき好奇心と、詩人の情調とに充實した新時代の都會を紹介しやうと思ふのです、那邊にまて進歩した雜誌が出來上るか、待つて頂きたい。猶それから投稿家諸孃も右の趣意を含んで大熱心を以て、好い作を送つて下さい、投稿欄は一部は都會的のものを採り、一部は廣く一般の投稿を載せることになつてゐますから、何でも題材に頓着せず、誠實なる創作を寄せて下さい、

○豫告。前號に豫告して本號に載せ得なかつた秋田雨雀氏、寺木定芳氏等の寄稿を初め、其他の諸篇は次號以後に發表します、又河井醉茗の『落潮』續きは四月號か遲くも五月號に出したいと思ふてゐます。

○表紙。例の通り次號から又本誌の表紙が變る、執筆は石川寅治氏。

○誌友小集。在京の誌友の中、二三名の熱心なる小集主唱者があつて、編輯まて問合せがあつた、簡易にして趣味ある小集なら記者も贊成する處です、或は成立するかも知れません、若し儲ふやうなことになつたら次號の紙上で具體的に發表しませう。

○『少女』本誌の姉妹雜誌『少女』は此の三月にはもう創刊から七册日が出ます、東京の少女諸孃の間では、ハイカラて面白く外の少女雜誌とはまた一風變つてゐるから見ないて居られないと云ふ評判が方々に聞えます。

○寫眞。十三四位の方は『少女』の方へ、十五六歲以上の諸孃は本誌に寫眞をお貸し下さい誌友は日を逐ふて增加してゆきます、また御存知ない方もあらうかと思ひますから注意いたします、寫眞は紙上に掲載したあとてお返しすることになつてゐます。

○寄贈雜誌。二月號寄贈の雜誌は左の通り

△趣味△スバル△無名通信△新文林△ハガキ文學△少年の友△秀才文壇△フラウ△新文藝(初號)△臺灣愛國婦人△婦人畫報△婦人新聞△婦人くらぶ△家庭

餘興の新課題

全國各地 文壇通信

餘興の課題としては少しく眞面目な問題てす、成るべく全國各地方を通じて、其通信を載せたいと思ひますから大小の都會に住する諸孃は勿論、殊に僻遠の地方に在る誌友諸孃に於ても御一報を煩したいものてす、委細は左の各項を御覽下さい。

學界——と云ふのが餘り漠然としてゐるなら——讀書界及び文學に對する人氣の一般を指すと云つても宜しい▲先づ其地方の人には如何なる文學書類が最も多く讀まれるか、何う云ふ雜誌を見てゐる人が多いか、或は文學に對して冷淡てあるか、熱心てあるか、▲其地方で發行する新聞（其つゞき物又は文學欄の一般）及び雜誌の名目▲其地方の和歌の會とか俳句の會とか、川柳の會とか云ふ如き文學的小會合の種類と方法▲和歌、俳句は新派が行はれるが、舊派の勢力は何んなものか▲女學校と文學の關係▲書店に於ける觀察、或は話の聞書▲貸本屋の有無、及び其現狀▲其地方出身の文士の噂▲男女何れにても投書家の現狀▲其他地方文壇に關することなら何にても可なり▲東京は文壇の中心たること云ふまでもありませんが東京の方は通信を寄せるに及びません、東京以外の各地方の模樣を報じたいのが此擧の目的てす▲原稿は十六字詰十行乃至二十行が制限としますが記事の都合てそれより伸びて差支ありません▲報酬は豫定の通りてすが此の如き公共的記事は報酬の奈何に拘はらず多數者の寄稿を望みます

（締切本月十五日）

注意　都會の婦人原稿締切は本月三十一日なり都會を題材としたもの其他の創作も併せて歡迎す

雑報

獨身の文士

獨身の文士と、妻帶して家庭を持つてゐる文士との作を比較してみるに、其處に一種の相異がある、悉く皆然りと云はぬが、獨身の文士の作には熱があり、憧憬はあるが、一方に餘裕に乏しく、又ひがみがあるやうに思ふ、家庭を持つた文士の作には、ひがみは少い代り何うかすると時代に後れて行く影が見える、此處には其の比較評を試みる餘地もないが、只名ある作家の中で、未だ獨身の人達を擧げて見やう、勿論エンゲーヂメント又は戀人の有無は記者の與り知らぬことて、只現在獨身てゐる文士は略左の通りだ。

小山内薫。若山牧水。服部嘉香。加藤介春。片上天弦。横瀬夜雨。吉井勇。中村星湖。永井荷風。生方敏郎。安成貞雄。前田夕暮。眞山靑果。福田夕咲。兒玉花外。正宗白鳥。秋田雨雀。北原白秋。白柳秀湖。人見東明。森田草平。三木露風。

其外學生時代の人は省いて置く。因にいふ、右の内片上天弦、中村星湖二氏は近々に結婚すると云ふ噂てある。

外輪線に立ちて

太鼓と鐘が鳴る、夢の中で聞くやうな黄ッぽい透った女の聲が、薄い窓硝子と錯雜した木の葉とを通り越して窒素の多い大氣の中を流れて來る、そして夫れが水の中に消えて了ふと、思ひ出したやうにツプツプと反應的な弱い泡が立つ。

酸毒、肺病、窒扶斯、赤痢、癩病、脚氣病などのバチルスが、赤い靑い白い黃ッぽい色々の上衣を着て、ダンスをやるのが見える。人の凡ての官能を挑發するやうに活動寫眞の樂隊が囃し立てる。見い！ ニコチンを含んだ有毒瓦斯が十二階を取卷いて黑々と上つて行くのを。あゝ其中に息づく人のざわめき。强いアルコールを含んだ濁つた水蒸氣と脂肪と垢のにほひ、さうして疊つた眼と臭い噯氣の女にふさはしいペンキ塗の低い家よ、其家の白絹にうつる様々の繪姿。

放浪の旅に上る路すがらに、戀を買はうとするフイニシヤの若者と、傳來的の濁つた血を尙濁さうとするマラゾンの少女とが、何の反抗もなしにする無意味な契のやうに、他愛ない道行の相手をまぎ歩りくあはれな戀の流人よ、そして生肉と金に飢えた蒼い顔の盡きざる悶えよ。

あゝ黑い火を吐く暗闇の洞に生命の蠢めき！

淺草の繪は面白い。

文界消息

△前田夕暮氏の第一の歌集『收穫』は今春三月頃易風社から出版することゝなつた。

△中村春雨氏の新社會劇『牧師の家』は東京朝日に連載中てある、氏は此脚本を以て自家の懐抱を明かにすると云ふことだ。

△『中央公論』の二月號と、『白然と印象』の第九集は發賣禁止された。

△豫てニイチエのザラチエストラを飜譯してゐた生田長江氏は他事を避けて專心譯文に苦心してゐたが過日殆んと其全部を完成した。

△『新文林』は三木露風氏が編輯することゝなつた。

△自由劇場の第二回興行にはエーッの劇を上場する筈て小山内氏は目下其飜譯中。

△『秀才文壇』は四月の增刊を『陽春號』と名つけて發行する筈て目下投稿募集中。

△又同誌の東京誌友發起者となり三月六日上野韻松亭に文藝同好會を開く筈。

△竹久夢二氏は四五月頃近畿を漫遊したいと言つてゐる『夢二畫集』春の卷は三版に上つた。

△窪田空穗氏の短歌が久々て『文章世界』に發表された。

△與謝野寬氏の歌集『相聞』はいよ〳〵三月中に明治書院から出版する。

△水野仙子は二月上旬郷里岩代に歸省した。

△早稻田大學から『近松傑作集』五卷が出版される。

△御歌所寄人中村秋香氏と、文學博士藤岡作太郎氏を喪ふたのは文界の恨事であつた。

文壇の新傾向

物極れば變ず、一時さしも自然主義に興奮したわが日本文壇も、漸く自覺の態度に歸り、西洋殊に獨逸などのそれの如く、自然主義の洗禮

を受けたる後の新文藝が起るべき機運に向いて來た、然しながら機運は容易に熟するものではない、四年五年乃至は十年もかゝつて思潮が一變するのである。自然主義を標榜してゐる作家も、最近の作には眼を發てゝ見るやうなものがない、評論家の側に於ても、必ずしも自然主義に反對すると云ふわけではないが、更に何主義と云ふやうなことなく藝術本位に立脚した評論に聽くべきものが多くなつた。斯くて文壇は新しい潮に乘じてますく好い作を出さうとする競爭が烈しくなつてゆけば、賀すべきことだ。潜に想ふに散文全盛に次いて、本年は詩歌の聲が高くなり、劇、脚本などに新しい方面が開展されてゆくのではなからうか、所謂平面描寫式の小說にはだいぶ作家も讀者も疲れ氣味である、此際、意氣込を新にして文壇の新傾向をつくりたいものである。

都會の研究

都會の印象を觀察し研究すると云ふことは一種の流行のやうになつた、永井荷風氏が其作物に於て、西洋の都會の趣味を描寫しだしてから、若手の文士間には東京の或る場所がフランスに似てゐるとか、何處の西洋料理屋は誰かの作にあるやうだとか、然う云ふ噂が擴がつて、東京市中を歩き廻る文士が多くなつた。殊に山の手趣味は田舍趣味であつて、眞個の都會趣味は下町でなければならぬと思はれるやうになつた、是は近頃の面白い現象だと思ふ。

夜雨の旅行

橫瀨夜雨氏は遽に思ひ立つて信越地方へ旅行した、歸りには東京に來た、東京にも永くは留まらなかつた。僅に二夜泊りて去る廿一日歸鄉した、病軀を抱いて嚴寒の地を旅して歩くと云ふのは、一つの苦痛であらうと想像されるが、同氏は又思ひ立ちたる旅衣、日もうらくと長閑な空を待つてゐられないて出掛たものらしい。

西洋婦人新聞

▲女醫採用　伯林ではこれ迄瘋狂院に限つて女醫を採用する事が出來るのであつたが、此度Moabitの病院にも助手に女醫を採用し得といふ決議になつた。

▲女優議師となる　維也納の女優 Olga Lewinski-Brecheisen は彼地の大學雄辯學講師にせられた。(十月十三日維也納通信)

▲珍らしい自殺法　Alessandria て女優 Fong は鏈つた自殺をした。帽子を止める針を旨く心の藏に刺したのである。

▲トルストイの同胞　Kaluga 附近の Schamordowski 尼寺にゐる Leo Tolstoj の女きやうだいの尼は强盜に押し入られて、持つてゐた現金全部を取られた。(彼得堡十月十四日通信)

▲女文士輕氣球に乘る　米人 Charles J. Glidden は Helen Keller を輕氣球に載せ ろさうだ。聾啞の女文士が空中を飛行してどう感じるか知らん。

▲妃の駈落　伊太利人 Sachsen 國儲の妃たる身でありながら。伊太利人 Enrico Toselli と駈落をした Luise 女王は甚しい悲境に陷いつてゐる。夫の一家は女王が受ける年金四萬マルクを使つて暮してゐる。夫は女王を打擲する、女王は餘り苦しくなると、友達の英人 Miss Zimmern といふものゝ處か、又はホテルへ逃げるが、すぐに夫に引き戾される。女王が故鄉に殘した、Morica は、今 Anna と改名して王宮に養はれてゐるが、頗る國王になついて暮してゐる。

▲一ヶ年の化粧料　羅馬時代には美人が顏に皺をよらせないために、夜顏に油を塗つて、其上に麪の假面を被つて寢た。今の巴里の女はゴムの假面を被つて寢る。近頃は化粧にいろくの藥や器械がいるので、費用が頗る大きい。贅澤な女は一年に千八百圓位化粧に使ふ。某貴婦人の化粧料の年額は左の通である。

お白い、クリーム、にほひ物	二〇〇、〇圓
沐浴及揩拭用香水	一〇〇、〇
電氣按摩	一二〇、〇
髮結	二八〇、〇
手足の手入	一四〇、〇
蒸氣浴、器械類其他	三六〇、〇
計	一二〇〇、〇圓

▲犬嫁ひ　New Henven(米國)て死んだ女の遺言の中に十萬圓の利子を二年間犬を飼はずにゐた市民に分配せよと書いてあつた。その金が

ほしさに犬を殺した人が多い。それから泥坊が殖えた。
▲嫉妬　Antwerpen の Scala 劇場の飲食室て、一貴婦人が空手の女に拳銃を打ち掛けて殺した。嫉妬てある。
▲笑ひ死　Birmingham の劇場て、滑稽家の藝を見て、六十一歳になる老婦人が笑つてゐたが、笑ひながら死んだ。
▲女詩人　一八五九年十一月二十二日タイマルに生れた女詩人 Al Ruschid Bey 夫人は Helene Boehlau と處女時代の名を名告つてゐるのであるが、十一月十二日に五十年の誕辰を祝した。
▲嬉し死　Livro の某家の女中は親類が米國て死んて數百萬の遺産を貰ふことになつた電報を讀んて即死した。
▲身投　十九歳の娘が戀のために羅馬の Ponte の上から Arno 川に飛び込むと、七十歳の職工 Henry（英人）が續いて飛び込んて救ひ上げた。

（『スバル』椋鳥通信より）

ダヌンチオの本籍調べ

澳匈國公使伯爵 Lutzow と一しよに自動車に乘つてあまり速度を出し過ぎたので Gabriele d' Annunzio は Sion の法庭へ呼び出された。判事はダヌンチオといふ男は何ものだか知らないので Pescara の本籍へ問合せた。其回答に曰く。「本人は一八六三年八月三十一日生の男子にして Francesco d' Annunzio と Bennediti 氏 Luigia とを父母とす。兵役義務は羅馬の騎兵聯隊に於て果したり。Gallese 公爵の女を娶りて、四子を設け、尋いて、離別す。虹彩膜青く、頭に毛なし、品行順良にして人と爭はず、財産なし、女子と犬と馬を愛す。職業は詩人なり。前科は決鬪一回、自動車の速度過大なりしこと二回。」

本屋の廣告

巴里の本屋が妙な廣告を發明したさうだ自分の店から新らしい小說が出るとすぐ翌朝の新聞へ「聰明にして平凡ならざる男子と結婚したし。希望者は精神的にも肉體的にも何々氏の最近の小說何々の主人公に活き寫しなる事を要す。亞米利加人ミス、パール、巴里に六ケ月滯在の積り、今年二十七歲。二千三百萬圓の財產あり云々」と廣告するさうだ。是て五十版も賣れなけりや買はない人間が馱目なのださうだ。

女教師無用

東京音樂學校は昨年秋幸田教授（延子）を退職せしめ爾來湯原校長の理想を實現せんと務めつゝありしが其第一着步として從來入學生の女百に對し男五十なりしを今年よりは男百に對し女五十となし行々は女子の音樂敎育は全く爲さぬ考へなりと云ふ今湯原校長の申分なりと云ふを聞くに『一體音樂敎師としては女子が尤も適任の樣に思はれぬにあられど仔細に考ふれば決して左にあらず女子には婚嫁姙娠其他の障りあり て到底永く敎育界の人たる能はざる事情あり、甚だしきは官費を以て一と通りの修業はしながら學校を出てゝ敎育に從事する未だ一年ならずして身を敎育界より退くもの決して少からず、斯くては折角敎育界の爲め女敎師を養成するも結局何の役にも立たず徒らに費用を要するのみなれば假令拙くとも一生を敎育に捧げて悉く顧みざる男敎育家を養成する方學校の爲めにも敎育の爲にもなるなり』と云ふにありて近頃は此意見意外の邊まで波及し文部省の少壯官吏中には女敎育家濫造の本元たる女子高等師範廢止說さへ唱ふるに至り今や女敎師養成に就ては其前途に容易ならぬ障碍幾つも橫はり居るを認むるに至れり

留學生の昔話

我が國第一回の女子留學生として、明治五年米國に行かれた今の大山公爵夫人、瓜生中將夫人、津田梅子女史等一行五人は、當時の公使森有禮氏の周旋て、家庭敎師と女中とを一人づゝ雇ひ入れ、語學を勉强するやうにと示されたが、何をいつても最年長者の大山夫人が十二、津田女史が七歲といふ子供てあるから、いづれもお母樣が戀しくてたまらず、夜になるのを待ち兼ねて、二階の寢室に入り、種々な手匣を並べてそれぞれ故鄕の自宅に象どり、紙て人形を拵へて、姉さまごとして遊んて漸く氣を紛らして居られたが、其の時五人中の誰やらが、米國よりも日本の方が好いと斷定した理由が面白

い、曰く『米國の紙では姉さまが出來ませんものねえ』

英國の女學生

先づ英國の大學試驗を一寸申上ますれば、ロンドン市とか、ケンブリッチとか、オクスフォルドとか申す所には澤山の大學がありますが、まづケムブリッヂについて申しますれば、多くの幾つかの大學が集つて、一つのケムブリッチ、ユニーバーシティー、となつて居るので、つまり、各カレージは、このユニバーシティー、に附屬して居ります。其カレージの内には女子のカレージもあります、そして其各カレーヂを卒業したからと申しましても、すぐ學士となることは出來ません。それにはユニヘーシテイーの役員からなりたつた會から、試驗問題を出して學士の檢定試驗―があります、故に各カレーヂの男女學生は勿論、どこのカレージにも屬せず獨學者でもこの相當の資格ある試驗に及第したるものは、この學士の試驗に應じられるのであります。それには文學士、理學士、工學士等の試驗がありますから、學力さへあれば、女でも、男でもこの試驗に應じられるのであります。時には數學などは女史が第一席をしむることがままあるのであります、學士にはロンドン大學の文學士とか、ケムブリッチ大學の文學士、あるはオクスフォルドや、各其特長をもち世に立つて居ります日本の大學のやうに、帝國大學を出たものでなければ學士になれぬと申やうなのとは少しちがひます。其故女子でもなか／＼まじめて一生懸命に勉强いたします、決してうかうかして居りません、それはよく勉强して居るのでございます、そういふ女學生は私は生意氣かと思ひましたら決してそんなことはなく實に品がよくて、衣服なども質素てかのコーセット、をはめて白粉をつけたり何かして、人の歡心を買ふやうないやしき事などはなく、如何にも尊敬すべき學者風で人格がいゝのでございます、其等の人は啻に學問許りではなく、實に品格が高いのでございます、歐洲大陸は存知ませんが、英國の女學生には墮落して居るやうなものはなく、華美に裝つて人の目につくやうな事も致しません、ちやんと品位をもつてそれは實にしつかりしてなります（宮川壽美子氏談）

京の女學生

心の融けるやうな温い四月の太陽が照つて居た。清いスヰートな春の調子が柔らかに流れて若い胸の芽が二つ葉に開く。わたしは京の御苑の中で女學生の通るのを見て居た。

第一といふのか第二と云ふのか、そんな事は知らうとも思はぬ、只物やさしいクラシカルな京の娘に紫の袴をふさはしいと見た。

女學生にして白粉をして居るのは東京だけである、紅脂賣る家の暖簾を耻しげに顔赧めて潜る優さ男はあつても、天眞の色の白さを可惜ら鉛や硫黄に汚して倫理の講堂に入る京の子はない。東のチャームは眼である。西のチャームは姿である。姿は冷たいが眼は熱い。されど冷たいものは美しい。（京都より）

女學校消息

▲女子美術學校　年々生徒數の增加しつゝある日本女子美術學校にては、本年度の新學期にも若干の入學を許す由なり同校には完全なる寄宿舍の設けもあり、各講師も熱心に教授する由にて和洋畫は勿論、各種の女子技藝を修めんとするものには最も適當なる學校なるべし。

▲女子技藝學校　本校は三十三年の創立にして現今の如く日本女子技藝學校と改稱したるは昨年の事なり、學科は造花修身國語數學家事理科繪畫等にして專ら女子の技藝を修得せんとする者に、適切なる學科を授くる由なり。

▲立敎高等女學校　築地明石町に在る本校も新に生徒を募集中なり、寄宿舍あり、

▲麴町高等女學校　三年前文部省より認定せられたる高等女學校なるが、校風極めて着實質素なり、校長は岩淵理學士校主は大築理學士教頭は本誌に昨年迄日記と短文の選者たりし中村文學士なり、その外林、松田、村上、と校醫の岩淵醫學士あり、現今二百名の生徒に對してこの七學士を有するは校長校主の學士なる故なるべきか、校友會を若菜會と云ひ生徒の和樂親睦を計ると共に卒業生との聯絡を保ち又中村文學士主幹の下に文藝雜誌「そのゝわか草」を年三回發刊して文藻を練り校風涵養に資せりとぞ、本校も目下生徒募集中なり

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小說と詩と短文には振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は同字詰三十行以內、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以內、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大きさにて薄き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る▲投稿は每月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小說、散文）

天賞金參圓。 地賞金壹圓五拾錢。 人賞金七拾錢。

▲乙種（家庭日記、新論文、書簡文、詩）

天賞金貳圓。 地賞金八拾錢。 人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）

天賞金壹圓。 地賞金五拾錢。 人賞金貳拾錢。

◉各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の吳服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

○定期發行分

- 一册（一回分） 定價金拾五錢：郵税一錢五厘 計金拾六錢五厘
- 三册（三月分） 同前金四拾三錢五厘：同四錢五厘 計金四拾八錢
- 六册（半年分） 同前金八拾四錢：同九錢 計金九拾三錢
- 十二册（壹年分） 同前金壹圓五拾六錢：同拾八錢 計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分

- 一册（一回分） 定價金貳拾錢：郵税一錢五厘 計金貳拾一錢五厘
- 二册（半年分） 同前金三拾八錢：同三錢 計金四拾壹錢
- 四册（壹年分） 同前金七拾貳錢：同六錢 計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部

- 四册（三月分） 定價金六拾三錢五厘：郵税六錢 計金六拾九錢五厘
- 八册（半年分） 同前金壹圓二拾三錢：同拾貳錢 計金壹圓三拾四錢
- 十六册（壹年分） 同前金貳圓三拾八錢：同二拾四錢 計金貳圓六拾二錢

▲每月一回（一日定期發行）

▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

▲全部——十六回

▼申込注意

振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絶）、凡て前金拂込に限る

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

服部製本

明治四十三年二月廿六日印刷
明治四十三年三月一日發行

定價金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話（本局六〇七番） 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇 定價金拾五錢 郵稅壹錢五厘

【東京　秀英舍印刷】